昭和七年三月十五日印刷
昭和七年三月二十日發行

不許複製

國譯一切經 經集部十二

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者 渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所 大東出版社
東京市芝區芝公園地七號地十番
振替東京一九四七一番
電話芝（二一一六番
三〇四〇番

製本所 兩角製本所

索　　　　引

(頁數は通頁を表はす)

——經集部十二索引終——

し。名けて寶藏とも曰ふべし。當に之れを奉持せよ』と。佛、是くの如く說きたまひしとき、文殊師利童子・闍耶末菩薩・賢者阿難・諸の天人・阿須倫・世間の人民は經を聞いて歡喜し、皆前んで佛の爲めに稽首し禮を作して退きぬ。

文殊師利現寶藏經　終

生死と無爲土と　法界も異ること無し
水種も是くの如しと爲す　及び火土も亦然り
陰と攝と法界と　眼識と諸有分と
意部と法境界と　諸分の數は悉く定まる
其れ諸の有爲種も　亦幷びに無爲界も
法に二有りと見ず　「これを」則ち吾れ決を授くと爲す
世尊には五陰無し　四大も及び諸入も「なし」
名無く亦色も無し　亦內外も有らず
佛は音聲を以つて說いて　我れに決を授けたまふ
此に於いては悉くのものは寂寞なり　是を以つて定んで決を受くるなり
佛には意有ること無し　此くの如くにして吾れに決を授けたまふ
我れに識有ること無し　佛は爲めに我れに決を授けたまふ
此の決を誠諦と爲す　是くの如くにして則ち平等なり
法界を壞する所無ければ　即ち本の如く住すること無し
等覺も諸の天人も　正しく正法に立つ
寂然として虛空の如し　權慧善く具足すればなり

爾の時、闍耶末族姓子は、此の偈を以つて佛を讃じ已つて、遶ること三匝し却いて一面に坐しぬ。是に於いて佛、賢者阿難に告げたまはく、『是の經を受け諷誦し讃じて、廣く他人の爲めに之れを說け』。阿難、佛に白さく。『唯然り受け已りぬ。是の經をば名けて何等とか曰ひ、云何が奉行せん』。佛の言く。『是の經をば名けて文殊師利所現變化降伏衆魔化諸異學奉受正法讃說經義と曰ふべ

在世教授・其足慧行・天人師・無上士・道法御・天上天下尊・佛・天中天と曰はん。其の世界をば名けて喜見と曰はん。劫をば一寶嚴淨と號はん』。佛、阿難に告ぐ『其の喜見世界は、譬へば他化自在の第六天上の所有の如し。喜見佛の國の人民は所居處にて供養すること亦是くの如し。是の諸の人民には、六の境界の法有ること無く其の前に來至せる一切の人民は相見て皆歡喜し悉く喜樂し、慧王如來を見たてまつりて皆忻悅す。是を以つての故に彼の世界をば名けて喜見と曰ふ。彼の時に如來は教授すること一劫、爲めに佛事を作す。其の正覺の壽も亦一劫なり。是の故に其の劫を號して一寶嚴淨と曰ふ。彼の世尊は但純ら菩薩を以つて衆と爲す。九十二億の菩薩は皆不退轉なり。諸の菩薩は罣礙せらること無き慧、起光德本を逮「得」せり。其の慧王如來は般泥曰せんと欲るとき、菩薩有り、名をば師子過而行と曰はん。當に彼の決を受くべし。我が般泥曰の已後に、是の師子過而行菩薩は當に佛を得べし。亦師子過而行如來と號はん。世間に在つて教授せん。彼の如來般泥曰の已後、其の法住すること十小劫ならん。其の如來の舍利をば幷合せて倶に一塔を起てん。廣長二千四百里、高さ三千二百里ならん。皆七寶を以つて塔を作り、衆人は悉く各各其に塔を供養せん。是に於いて閣耶末族姓子は、虛空より來り下り、前んで佛足を稽首し、世尊の前に住し、法界無所壞を說き、偈を以つて佛を讚じて曰く。

我種と及び法界と　人士も亦倶に等し
是の界を慧握と爲す　此を以つて吾が決を授く
法界と及び塵勞と　空種も亦平等なり
一切法も是くの如し　我れ已至法と爲す
法握と婬欲種と　瞋怒も亦此くの如し
虛空界も同じと爲す　此を以つて吾れ記を授く

青赤黃白の色の　種種の光りは甚だ照曜たり
其の妙なる暉は口より出でて　無數恒沙の土を照し
無量の百佛國に遍じ　諸種の大さ無身に等しく
一切寂にして所見無く　佛は善く利したまへば恐懼無し
其の光明出でんと欲る時は　諸の弟子は能く及ぶもの莫く
未曾晃を得て照る　佛は亦緣覺の事を說きたまふ
今や願つて大乘行を解せん　一切智慧は最上なり
其の光炎は頂より入れり　今の至る所は無垢穢なり
善い哉快なること諸天と　及び世人の奉事する所よりも過ぎたり
願くは審諦に義を說きまたへ　佛の一言には異なり有ること無し
大會の諸の狐疑を斷じたまへ　今正覺は何に緣つてか笑ひたまふや
佛語を聞き　無數の人は歡喜し悅んで悉く踊躍せん

佛は賢者阿難に告げたまはく『汝は闍耶末族姓子を見たりや。虛空に踊在して地より去ること四丈九尺なり。空中に住して已に法忍を得、叉手して立てるが如くにして稽首し我れを禮せり。百千の諸天は來つて共に供養せり』阿難の言く『唯然なり、已に世尊を見たてまつれり』と。佛、阿難に告げたまはく『是の闍耶末族姓子は、已に七十二億の佛に奉事し、修善積德し、常に轉輪聖王と作り、悉く諸佛世尊に奉事し、佛般泥曰の已後は、皆七十二億の佛の所に於いて、淸淨なる梵行を建てゝ、皆佛の正法を護「持」せり』佛の言く『阿難よ、是の闍耶末族姓子は、後に當に五恒沙等の如來を見奉り、供養して淸淨行を教述すべし。當に無央數の菩薩を教授し、然して後に覺意の法を積累すること、無數劫なること已つて、當に佛と作ることを得て、號をば慧王如來・無所著・等正覺・

爾の時、佛、便ち笑ひたまへり。諸佛世尊の笑ひたまふときの法は、無央數不可計なる百千の光色、佛口より出でて、靑黃赤白黑なり。諸の無量の佛國に遍ぜり。還つて佛を遶ること三匝して、頂上に於いて忽然として現ぜざるなり。是に於いて賢者阿難は、衣服を整し坐より起つて、右の膝を地を著け、長跪叉手して、偈を以つて嗟歎して、佛に問ひたてまつりて曰く。

智慧の力と吉祥の明ある　導師は光せり七尺の華をもて
微妙なる相は三十二　諸の種好をもて具足せり
師子の衆中に在つて　行步威猛にして勢至なるが如し
今佛は何の緣によつて笑ひたまふや　願くは尊よ將に解說したまへ
說きたまふ所の法駛きこと電の如く　音の殊妙なること師子吼の如く
鷄の鳴くに隨ひ寶を振ふ響のごとく　其の聲は梵天よりも勝れたり
佛語は普く衆人に遍じ　其の聲は皆三千「界」に暢び
一切に於いて常に應ずるが如く　柔軟に聞えて了らざる無し
諸の弟子及び緣覺　彼れが智慧をもつて普く明むること無く
終に菩薩等と與ならず　衆の菩薩も亦及び難し
今や誰か當に慧力を得べき　願くは導師よ說いて開度したまへ
若しは天龍世間人　阿須倫揵意を發し
一切の受を脫するを以つて　心中に無所著を聞きぬ
無量の行には罣礙無く　不等を踰ゆること無數億
不可限無計數にして　平等を以つて度世を爲す
今や願つて空正慧を聞きけるに　何を以つての故に而も喜笑したまふや

つての故に、皆衆の賢の善法意平等行を具足するなり。無放逸とは戒に於いて清淨にして諸の所生を願はざるなり。二に精進とは、謂く身意を貪らず、忍辱の行をなすなり。無有放逸とは害心無くして衆生を救護するなり。三に精進とは謂く諸の功德の法を積累して厭足を知らざるなり。無有放逸とは、諸の所修の善・積德・賢良の法を以つて道意に勸むるなり。四に精進とは、謂く一心に具足して厭くこと無きなり。無放逸とは禪の不退轉を欲する所無きなり。五に精進とは謂く多く博聞を求めて彼れに於いて無放逸を施すなり。「無放逸とは」常寂靜然として聖賢の智慧を奉ずるなり。六に精進とは謂く四恩の行を習ふなり。「無放逸とは」善權の慧を以つて放逸なるものを敎授するなり。七に精進とは謂く身と意とにて行ずるなり。「無放逸とは」其の身意を亂さず心を空寂に爲すなり。八に精進とは、謂く一切の爲めの故に、諸行に於いて慈意を等しくし、法義に於いて精進するなり。無放逸とは諸法を慈めども著する所無きなり。九に精進とは、謂く他人及衆生の爲めに皆道意を發するなり。無放逸とは、諸の世間は譬へば焰幻の如しと觀ずれども道心を捨てざるなり。十に精進とは謂く所造の行をば頭然を救ふが如くして誠諦に入るなり。無放逸とは滅は盡に於いて慧を證れども施を起すこと無きなり。十一に精進とは、謂く諸の相好を具足して善本を積累して無放逸に入るなり。「無放逸とは」法身を觀じて起つ所無きなり。十二に精進とは、謂く其の佛國を嚴るなり。無放逸とは衆生の土を淨むるなり。十三に精進とは、謂く三十七道品の法を嚴淨し具足し已つて諸の滅冥より脫し、如來を喜樂せしむるは菩薩の善權方便にして、是れ皆精進に從つて之れを致すなり。是れを善權智慧と謂ふ。菩薩是れを受くれば則ち不退轉を擁護することを致し、無上正眞道に立つなり』と。是の語を說ける時、闍耶末菩薩は不起法忍を得、欣然として踊つて虛空に住せり。地を去ること四丈九尺なり。三千大千世界は則ち六反震動せり。其の大光明は普く佛國に遍じ、虛空の中に於いて天華を雨し、箜篌樂器は鼓たざるに自ら鳴れり。

切諸法は但言說を以つて而も受を爲すと。是れを貢高と謂ふ。一切を知らず、亦斷ずる所も無く、亦行ずる所も無く、亦證を作さず、是れを審諦に入ると爲す』。又文殊師利に問ふ『智慧を以つて貢高なる者は、何なる言說有りや』。答へて曰く『諍はず亦靜はざるにも非ずんば憍慢と稱せず。譬へば師子は百獸の王たり。吼ゆる時は一切皆其の音に畏るゝが如し。是くの如く善男子よ、比丘の貢高を樂はざるは、一切の音を畏れず。所以は何ん。謂く音は呼聲の響きの報應の如し。其の響きには亦心意識無し。因緣合するを用つての故に其の音響出づ。是くの如く族姓子よ。其の心意識にて審かに慧るが如く彼「響」は分別にあらず。諸の因緣によれる音聲は皆諸の響に應じて衍れるものにして起る所無きなり。彼の佛の音響も亦來無く。外異道の聲にも亦憂ふること無く。佛の音聲にも亦衆の音響を覺えず、諸の瑕疵の音に於いても亦衆の塵勞の響きを覺へず。一切の音聲は去來本末の意無し、是の印は無所樂印なり。諸の語る所は無高無下印なり。其の印を立平等印と爲す。其の相は自然印なり。一印入を以つて法界平等御印・無所壞印・審如本無住印・眞空義印・三世平等印・無起無滅印・自然現印と爲す。是の印を以つて諸法を印すれば、樂ふ所に樂ひ無く亦貢高も有ること無し。比丘是れを聞いて、狐疑せず猶豫すること無くんば、吾我を得ざるなり』と。爾の時闍耶末道士は佛に白さく『唯、天中天よ。我れは鬱闍異道人の親友に從つて、是の大乘功德を說くを聞きき。今や亦復文殊師利に從つて如講辯才を聞き、無上正眞道意を發せり。是の故に願くは世尊よ。我が爲めに應ずるが如く法を說きたまへ。吾れをして道品を具足して疾く無上正眞道最正覺を得て、不可計無央數の人を教授し開度せしめたまへ』。佛の言く『闍耶末よ、今當に汝が爲めに菩薩行を說くべし。二法有り疾く智慧を得て大乘を逮「得」せん。何等をか二と爲す。一には精進。二には無放逸なり。何をか精進と謂ふや。謂く法才を求めて一切の所有を施して惜まざるなり。「無放逸とは」其の報ひを望まずして道意に勸助するなり。一には所謂、精進とは諸の不善法を斷ずるを用

り世尊よ已に見たり』佛の言く『是の萬二千人は皆當に彌勒如來のもとに於いて鬚髮を下し沙門と作つて第一の大會に在るべし。所以は何ん。是の深法を聞くを用つての故に。薩遮尼揵子は當に彌勒如來のもとに於いて、弟子と作り知慧最尊たるべし。譬へば我が第一の弟子舍利弗の如くならん。所以は何ん。佛法を用つて貢高輕慢の意を起し、然して後に諸見を棄捐するが故に』と。是に於いて闍耶末道士、文殊師利に白さく『後の五濁惡世に多く貢高なるもの有りや』と。文殊師利答へて曰く『唯、族姓子よ。後の五濁惡世の衆生、下劣卑賤の子等は喜んで貢高す。所以は何ん。具さに四禪を得て自ら大なることを用ゆる能はざるが故に、五濁惡世に墮落する時、復比丘衆に供養せず。是の諸の比丘は意に定立することを得ず。何に況んや第四禪を致さんをや。彼の後の世には諸の瑕穢有るを用つて、五濁惡世に多く喜んで自大憍慢を爲す。是に於いて族姓子よ。諸の善男子、二事有るが爲めに憍慢を造る。何をか二と爲す。一には自見の智慧を以つて貢高す。二には衣食供養を以用て、已が持戒智慧功德を現じて、便ち自ら其の有に墮落す「智慧貢高のものは」貢高して如來の法を誹謗して當に地獄餓鬼畜生に墮すべし』。又文殊師利に問ふ『何に緣つてか而も他人に貢高の意有ることを知るや』答へて曰く『凡夫の士が意亂れて不定ならば阿羅漢と謂はずとせん。假使し是の說を聞いて恐畏する者は、則ち貢高なる凡夫の士たることを知る。如來を見ることは得れども阿羅漢は見ずと。設使し此の語を聞いて恐畏する者は、則ち貢高なる凡夫の士たることを知る。衆祐の爲めには當に之れを施與すべし。當に羅漢に惠むべからずと。假使し此れを聞いて恐畏する者は則ち貢高たることを知る。如來は凡夫の士を讃歎したまへども、阿羅漢を擧げたまはずと。設使し此の言を聞いて恐畏する者は、則ち貢高たることを知る。其れ諸の塵勞より出でざること有らば、是れを無所著となす。此れを謂つて世間に於ける最厚と爲す。假使し塵勞より出づること有らば、是れ則ち著と爲す。是れ世間の衆祐に非ず。若し此に於いて行を作す者有らば則ち貢高と爲す。一

得る無れ。是の故に無利の義を得るを用つて、長夜に安隱なることを得ず、當に勤苦なる惡道に趣くべければなり。尼揵子よ且らく聽け。今譬喩を說かんと欲す。譬へば愚癡なる人の、醍醐を得んと欲して行いて酥を求め、水を持つて瓶の中に著け、其の瓶を搖動すれども、終に竟に疲勞し厭極して、亦醍醐を得ること能はざらん。是く如し尼揵子よ。諸の異外道の所行も亦爾なり。學道を行ずと雖も邪行を斷ずること能はず。譬へば大瓶中の水より醍醐を出すこと能はざるが如く、如來の上妙なる法と律との行を奉けずんば死して地獄に墮せん。譬へば尼揵よ、智者の人有つて黠慧明哲にして、醍醐を得んと欲して而も行いて酥を求めんに、彼れは乳酪を以つて持して瓶中に著け、而して之れを動搖して便ち醍醐を生ぜん。乳酪を用ゆるが故に則ち醍醐を成ずるが如し。是くの如く尼揵よ。其れ如來の法の中に有つて、若は白衣及び出家、學道して至心に佛法を信じ精進を行ぜば、即ち疾く賢聖の解脫を得ん。乳酪より醍醐を致すが如くならん。譬へば尼揵よ、人有つて他の家より百千の瓦器を借りて而して之れを破壞し、便ち寶器を以つて其の主に償ひたりとせん。主は寧ろ恚り罵るや』。答へて曰く。『不なり』。曰く。『是くの如し尼揵よ、諸の外異道の弟子は譬へば瓦器を以故に之れを破るが如し。如來の所に於いて更に法の寶器を造くられ。當に瞋恨罵詈すべからず。譬へば尼揵よ。衆の人に導師有れども、善權方便無からん。大衆の賈人を將ゐて邪惡惡道に詣らん。若し導師有つて善權方便を爲して悉く衆の賈人を將ゐて邪惡道を出し正道に詣り著かしむるが如し。是くの如く尼揵よ。卿等諸師は、邪徑を以つてして道義を了せずして、無數の人を將ゐて惡道に墮す。如來無所著等正覺は、道を知り義を解すれば、無量の人を將ゐて惡道より出でて正路に著かしむ。是に於いて尼揵よ。自ら卿衆を將ゐて去れ』と。彼の時、萬二千人と尼揵子とは俱に去れり。其の餘の者は皆神通を得たり。世尊は悉く鬚髮を下して比丘と爲せり。爾の時、佛、闍耶末に告げたまはく。『汝は此の萬二千人と諸惡と俱に去れる者を見たりや不や』。闍耶末の曰く。『唯、然

と倶會することを爲す。是れを癡に從つて身を長養することを得と謂ふ。愚癡已に盡くれば其の行便滅す。其の行已に盡くれば諸識便ち滅す。諸識已に盡くれば名色便ち滅す。名色已に盡くれば六入便ち滅す。六入已に盡くれば其の習便ち滅す。所習已に盡くれば痛痒便ち滅す。痛痒已に盡くれば恩愛便ち滅す。恩愛已に盡くれば所受便ち滅す。其の受以に盡くれば所有便ち滅す。其の有已に盡くれば起生便ち滅す。老病死愁悒不可意悉く盡く。是くの如くにして其の大苦惱卽ち除く。平等を得る爲めに無爲を逮「得」す。合會無ければ寂寞を得、彼の過去亦滅せず。過去の無點亦滅せず。當來無點亦盡きず。現在の無點は念を用ゆるが爲めなり。淸淨寂なること無ければ卽ち無點を立つ。所念靜點ならば無點は則ち立たず。已に立つこと有ること無ければ則ち永寂と爲す。是れを無點盡くと謂ふ。彼れ念靜盡を以つて四大の身を觀ずる、是れを愚癡の身と爲す。譬へば草木の如き、假使し意有り心有り識有りや。色無きも亦見るべからず、聲有ること無きも亦言說無し。譬へば幻の若く亦內も無く、亦外も無く、亦二つの中間無きも亦得ゝこと無し。比丘よ、此の靜寂念を作す者は一切法に於いて無所起と爲す。已に起有ること無ければ、彼れ則ち眞の空の義と爲す』と。是の語を說きたまへる時、其の二百の比丘は餘漏を起すこと無く盡くして意解を得たり。

爾の時、薩遮尼揵子は、其の衆の弟子と五百の眷屬とを俱に失ひ、祇樹迦梨羅講堂の上に往き到り、佛の所に詣で世尊と揖讓し談語し佛に白して言さく。『我れ數數、沙門瞿曇は幻蠱道を以つて轉、他の弟子を迷亂すと聞けり。今や乃ち自ら文殊師利が我が衆會を壞り、沙門瞿曇の弟子を增益せるを覩見せり。是くの如し世尊よ。邪行を用ゐて受取を爲したれば、復來詣して教勅を受けんとせず、亦諷誦せず。吾が語言を用ゐず。亦受命しても心に著けず』と。彼の時、道人有り。闍耶末と名く。衆會の中に在つて坐せり。是の薩遮尼揵は親厚に道中に於いて、尼揵子に謂つて曰く。『且らく止みね。佛に無淨意を起すことを得る無れ。亦佛と諸の弟子と及び文殊師利とに心に亂意を懷くことを

諸の比丘衆賢は、去つて何れの所に至り、何なる所より來れるや』と。諸の比丘答へて曰く。『唯、仁者よ、吾等は阿羅漢を得たるを以つて、諸の漏は爲めに盡き、所作は已に辦じて、一心を得、神足度無極を逮「得」せるものなり。此の文殊師利に從つて法を亂すことを說くを聞けるが故に坐より起つて捨去せり。吾等は適ゝ行いて佛國中を見るに皆火に滿ち、亦大火を度ることを得る能はず。我等はかるが故に還つて世尊に問ひたてまつる。何なるをか羅漢盡漏の地と謂ふや』と。爾の時、佛邠耨に告げて曰く。『若し火に供事すること自在ならずして、火を度ることを得んと欲する者は、此れ則ち過ぐることを得ず。見網に墮在して鐵網を度らんと欲すともこれを度ることを得ず』。『愛欲沒溺の行に立在つて、大水を度ることを得んと欲すとも、此れ越過することを得べからず。所以は何ん。邠耨よ、此の諸の比丘は未だ婬怒癡の火より脫せざるが故に、豈に能く大火を度らんや。見網に墮在しながら豈に能く鐵網を度らんや。恩愛沒溺の中に在つて、寧ろ能く大水を度らんや。』佛、邠耨に告げたまはく。『其れ水火鐵網は從來する所無く亦至る所無し。則ち是れ文殊師利の變化を現じたまふ所なり。是くの如く邠耨よ。其れ婬怒癡及び諸見恩愛は從來する所も無く亦所至も無し。悉く想念他念に從り及び邪の行を本と爲して用つて起る。吾我及び他人等の色像も、吾れ無く我れ無く所受無きなり。彼の獨行等の行は却つて意を亂す。一心寂定を發し功德行を積み志を專にするも亦所得無く、亦所念無く亦所著無し。一心に入つて經法を起念し、何等をか法事と爲し、何をか謂つて法緣と爲すと。かくの如く審かに諦觀するに、已に癡因緣有らば便ち行起る。已に行因緣有らば便ち識起る。已に識因緣有らば便ち名色起る。已に名色因緣有らば便ち六入起る。已に六入因緣有らば便ち習起る。已に習因緣有らば便ち[五]痛痒起る。已に痛痒因緣有らば便ち恩愛起る。已に恩愛因緣有らば便ち受起る。已に受因緣有らば便ち有起る。已に有因緣有らば便ち生起る。生因緣有るを以つて便ち老病死啼泣愁憂有り。其の苦惱不可意を生と曰ふ。是くの如く大苦惱

【五】痛痒とは受なり。

此の法を講說して、一切世間を亂すことを爲せり。所以は何ん。唯。邠耨よ、世間の本は謂く身は五陰・四大・六入に著するなり。生死を畏れて願つて無爲を求むれども、以つて生死の爲めに受取する所たることを知らず、亦無爲に柔順することを得ずして愁憂なるが如くなるなり。生死の中に於いて樂ふ所無く、亦泥洹も無し。其れ忍を畏れざれば亂さるることも無く、四諦にも住せず。若し著する所有らば便ち爲めに迷亂す。亦空諦も無く、四事に住することも無し。道に於いて諍亂すること無ければ經に著す。道を得んと欲すれば則ち二と爲る。二有るを以つて則亂と爲る。是に於いて平等とは一切法が則ち正なるなり。假使し二無くば二無きを以つて則ち亂無くして行有り。是の我所を求むれば則ち憍慢貢高と爲す。已に貢高なること有らば則ち亂を爲す。設使し著する所有らずんば、所作有るに非ず、亦等造無く、亦邪作無く、亦作さず、亦作さざるに非ず。亦度を樂はず亦度を樂はざるに非ず。是を無亂と爲す。無亂を以つてのゆゑに則ち無二なり。而して世尊の言して曰さく。我は世間と諍はず。世間と吾と諍ふなり。所以は何ん。如來は諍亂の本を斷ずるを以つてなり。何をか諍亂の本と謂ふや。是誠信、此れ欺詐なり、故に世尊の曰く。誠諦の語に何なる言有りや。欺詐の語とは何なる說と爲すや。其れ有無平等ならば偏邪無からん。彼れ何なる言說有りや。謂く淸淨なること有ればなり。

爾の時、文殊師利は亡げ去れる二百の比丘の前に於いて、中道に化して、大火を作れり。皆彼の佛土に遍滿せり諸の比丘の越え度らんと欲する所は皆火にて滿たされたるを見、亦火を超ゆること能はず。神足を以つて飛行して虛空を過ぎんと欲すれば、空中には普く鐵網有るを見る。亦復大水の十方に遍ぜるを見る。恐懼して衣毛爲めに竪つ。遙かに祇樹の道徑には、遍く靑蓮華・白蓮華・黃蓮華・紅蓮華を布けるを見、及び衆人大會せるを視る。卽ち自ら廻つて佛所に還至し、法を聽受せんと欲し祇樹に入り、迦梨羅講堂に到り、佛所に詣つて佛の足を稽首し、却つて一面に住しぬ。邠耨問ふ。『此の

くの如く三界は皆平等なればなり。吾等は亦所習無きに非ず。如也とならば、樂も無く亦等見ならざればなり。我等は亦閑居すること無し。一切の三界は閑居を行ずること有ること無ければなり。吾等は亦空を行ぜず。亦所無し。如也とならば舉爲らるるも亦空なればなり。吾等は亦乞丐せず。如也とならば諸想を除くを以つてのゆゑに。我等は亦生死の畏れ無し。如也とならば、審諦平等の見なればなり。吾我は亦婬怒癡せず、亦誹謗すること無し。如也とならば亦想念せず亦無想せざるがゆゑなり。吾等は亦塵勞を斷ずる行をせず。悉く著する所無く自然に應ぜるが爲めなり。我等は亦身有ることも無く亦「身より」出づる所も無し。如也とならば是の身は非身なればなり。吾等は亦往見を親ぜず亦無し。如也とならば繚發相なればなり。我等は亦諸の瑕穢を除かず。平等なる非常・苦樂・清淨・吾我は自然解脫なればなり。吾等は亦使水を度らず。是くの如し我が輩は此際と彼岸とを見ざればなり。我等は亦他を斷ぜず亦等度を求めず。如也とならば、空言解脫無念なればなり。我等は處を受けず。起る所無く、求むる所無し。其の本際を欲ふに起住する所無し。亦猶豫を除かず。亦寂志を疑はず。我等は亦正心・無きにあらず。嫉妬は以つて信より脫すればなり。亦言說を斷ずるを欲せず。如也とならば、過去を脫するを以つて亦想念無ければなり。唯、世尊よ、吾等は亦無爲に度ることを欲せず。一切諸法は皆寂にして無爲なればなり。是の語を說ける時、二百の比丘は無起を得、餘漏無き意解けたり。二百の比丘は坐より起ちぬ。皆四禪を得たるものなり避易して亡げ去りぬ。最後得のもの諸の未得のものは、是の言を說けり。『一切世間悉く亂用して、此の法を說くが故に。吾等は本より柔軟にして應に講ぜらるべきものを聞けり。今の所說の法は律行に入らず、亦是れ世尊の教化せらるる所にもあらず』と。是に於いて邠耨文陀尼子は文殊師利に白さく、『唯、文殊師利よ。此の二百の比丘は坐より起つて避易して亡げ去りて、是の言を說けり。乃し是の法を講じて一世間を亂すことを爲せり』と。文殊師利の曰く。唯、邠耨よ、是の緣有つて

て正覺に上り、佛を遶ること三匝して却つて一面に住しぬ。五百の化人は、文殊師利の德を承け前んで佛に白して言さく『唯、世尊よ、我等は佛を見ることを欲せず。如來とは法身なり。我等は法を聞くことを欲せず。法とは不可得なり。我等は亦衆僧の功德を用ゐず。世尊賢聖の衆に合會の行無し。我も亦佛の功德を用ゐず。其れ法界は德御有ること無し。我等は世尊の妙御を用ゐず。一切諸法は永寂無御なり。我等は如來土地の義を用ゐず。其れ解脫する者は已に華葉實を離る。我等は知苦の義を欲はず。其れ願に二つ無し。我等は斷習せんと欲はず。一切諸法は眞に習有ること無し。我等は行道せんと欲はず。其れ道は行非行を離るるを以つてのゆゑなり。我等は盡證せんことを用ゐず。諸法は皆永寂爲り。亦止意することを用ゐず。一切諸法は無所住に住すればなり。平等なることを用ゐず。德非德を斷ずるは非常の爲めに生死して衆行を致せはなり。我等は亦神足を用ゐず。猶豫の行も無く亦狐疑も無く、往來も起生も無ければなり。我等は諸根を用ゐず。信に諸根を得することは失義爲り。我等は力を用ゐず。一切の諸有も萬物も無力にして悉く羸劣なればなり。我等は亦覺意を用ゐず。諸有は永く空にして覺する所無ければなり。我等は亦道を用ゐず。數も無く世も無く亦求も無く利にも非ざればなり。我等は亦寂滅を用ゐず。亦憺泊ならじ。我等は亦度世の智慧の見有らず。我等は亦義を識ることを求めず。是くの如くにして常に解脫の義有つて法界も縛すること無しと爲す。我等は亦沙門の義を用ゐず。寂志なる者は諸の六所の礙を超ゆるを以つてのゆゑに。我等は亦梵志の色像を斷ぜず。是くの如くなるを梵志と爲す。亦誹謗を斷ぜず。我等は亦比丘たることを用ゐず。其れ自然は壞する所無ければなり。我等は亦諸の度無極を用ゐず。是くの如き六入は滅盡爲ればなり。我等は止足を用ゐず。何となれば行に止足無ければなり。吾は亦欲する所無く、我は亦厭足する所無し。如也とならば法に於いて受くる所無ければなり。言に於いて亦言ふところ無し。如也とならば、有身も無く意も無く說も無ければなり。我等は亦無住に非ず。是

於いて無敗信を得るなり。又上も亦善とは他の音聲に從はざるなり。中も亦善とは念寂靜なり。竟も亦善とは聖賢爲りとも平等に見るなり。又上も亦善とは苦を斷じ集を除くことを爲すなり。中も亦善とは八「正」道を奉行するなり。竟も亦善とは滅を盡して證を取るなり。是れを諸の弟子の上も亦善、中も亦善、竟も亦善と爲すなり』。文殊師利の曰く、『諸の菩薩の上も亦善とは大道の意に遊ぶが爲めなり。中も亦善とは小道の意を樂はざるなり。竟も亦善とは一切智を勸助するなり。又上も亦善とは諸の衆生に於いて等意の慈を發するなり。中も亦善とは一切人をもつての故に大悲を厭はざるなり。竟も亦善とは喜悅して等意の行を護るなり。又上も亦善とは諸の犯戒を攝るが爲め、諸の貢高無行の人をして正義を進奉せしめ、其の亂性の者には平等行を得せしめ、邪惡の智を除くことを爲さしむるなり。中も亦善とは施戒忍精忍一心智慧を謂ふなり。竟も亦善とは以つて六[四]度無極を承けて一切智を勸むるなり。又上も亦善とは四恩の教へを行じて衆人を攝むるなり。中も亦善とは身命を惜まずして法を救護するなり。竟も亦善とは諸冥の滅盡に墮せざるなり。又上も亦善とは心を持することは地の如くにして菩薩行を奉じ而も合會すること無きなり。中も亦善とは慧に於いて則ち動搖せず不退轉に立つなり。竟も亦善とは心無所著にして一生補處を得るたり。是れを諸菩薩の上も亦善、中も亦善、竟も亦善と爲すなり』と。

是に於いて文殊師利は、諸の異道の爲めに應ぜる法を說き、五百人をして遠塵離垢して法眼淨を得せしむ。八千人は無上正眞道意を發せり。地に於いて五心して自らを歸して聲を擧げて言く。『南無佛、歸命覺』と。諸の異道の人も亦復諸の化人に効つて地に於いて五心して自らを歸して言く。『南無佛、歸命覺』と。天帝釋は尋いで時に心華を雨して曰く。『汝等は此の華を持して世尊を供養せよ』と。是に於いて文殊師利、大衆と俱に眷屬に圍遶せられて、迦梨維講堂の上に往詣し、佛所に到り佛の足を稽首して却つて一面に住しぬ。諸の外異道及び衆の弟子は、此の衆華を以つて用つ

【四】度無極とは波羅蜜の譯。

通同して行を爲せ、轉じて法化等を相ひ受け共に經義を學せよ。假使ひ此の五百人所說有らんも、卿等は便ち當に諦受すべし、善く之れを思念せよ』と。爾の時、文殊師利、五百の學志等の輩と、聚會に稍現じて其の審諦功德戒を行じ、遂に本を踰へて普く自ら現ぜり。其の中間に於いて三寶を讃說し、亦復審裸形子の正德の行を歎詠せり。是の因緣にて講ずる所を捨て便ち默して止まれり。時に外道の人は異日に更に會せり。文殊師利の言く。『我等が仁者が經書を諷誦し講義して說かるる如き是れを以つて之れを觀るに、沙門瞿曇には審諦の德有り。所以は何ん。大豪家に生れ種姓具足し、父母の苗裔も清淨にして帝王なる轉輪聖種なり。一相には百福の功德有り。我れ聞き初始めて生れたまへる時、釋梵は奉敬して皆天地を動ぜり。三千世界には受け取るもの無かりき。地に墮ちて行くこと七步に至れるとき、手を擧げて言く。『我れは天上にも天下にも最尊爲り。當に衆庶の爲めに生老病死を斷ずべし』と。龍王は水を吐き釋梵は共に浴したてまつれり。諸天人民は莖鼓伎樂し大光明を放ち衆の惡道は休息しぬ。一切の諸根は皆具足せり。其の本より不具足なる者にも及べり。皆群生をして塵勞恚を去らしめ悉く安隱ならしめたり。相師梵志は豫め瑞應を說く、若し家に在らば轉輪聖王と作り、假使し出家せば便ち當に佛を得て、則ち法王と爲りて法輪を轉ぜん。然して後に國を棄て王「位」を捐て佛樹下に在りて、億百千の魔及官屬を降伏して、正覺を得ることを致して便ち法輪を轉ずるに能く當る者無けん。諸の沙門・梵志・天・龍・鬼神・梵天・及び世間の人民の爲めに經を說き義を講ぜんに、上も中も亦善く其の竟も亦善からん。所謂上も亦善とは、身行善・口言善・心念善なり。中も亦善とは、其の意甚だ諦に戒禁具足し衆智に超踰するなり。竟も亦善とは以つて空・無想・無願の法門に得脫するなり。又上も亦善とは信寂にして無放逸するなり。中も亦善とは意に定を得て等一なるなり。竟も亦善とは以つて正智を見て慧を了するなり。又上亦善とは佛に於いて無壞信を得るなり。中も亦善とは法に於いて無亂淨を得るなり。竟も亦善とは衆僧に

十二の德鎧を信受すること有らん者は、四大をして異なり有らしむ可し。其の菩薩は終に無上正眞道に於いて動轉す可らざるなり』。迦葉又問ふ。『文殊師利よ、諸の弟子は是の德鎧に於いて一つも有ること無きや』と。文殊師利の曰く。『是の故を以つて唯、迦葉よ、諸の弟子は大德鎧を被ることを得ず。迦葉よ意に於いて云何。其の勇猛大力の人の被る所の鎧をば、下劣不肖の子も亦是の鎧を被るや』。迦葉の曰く。『不なり』。文殊師利の曰く。『唯、迦葉よ、菩薩は大德の鎧を被らる。一切の弟子緣覺は彼の德鎧を被ることを得ること能はざるなり』と。是の諸菩薩の德鎧を說ける時、三萬二千の諸の天人は、皆無上正眞道意を發せり』。迦葉は舍利弗に謂へらく。『唯、賢者よ、文殊師利童子の神通變化說法を現ず所乃し是くの如し。我れの自ら親たる所なり』と。

爾の時、尊者[一]邠耨文陀尼弗は舍利弗に謂へらく。『唯、仁者よ、我れも亦文殊師利の現じたる所の變化を見たり。憶念するに昔者、佛、維耶離に遊びたまひし時、六萬の比丘と圍遶して佛を供養せり。是の時、我れ定意正受して諸の異道を觀じて、無數百千人の當に度脫を得べしと見たり。我れ便ち諸の異道の所に詣りて說法せり。吾が講ずる所を聞いて受行せず、意に念著せず、誹謗し形笑し罵詈し恚怒せり。彼に在ること三月なりしが、一人をも敎授し開解する能はざりき。厭ひて捨退せり。時に文殊師は五百の異道の人に化作し、自らは以つて師と作り、五百の眷屬と俱なりき。[二]薩遮尼犍弗の所に詣り、前んで稽首し禮して一面に立ち、白して言さく。『我れ聞く大師の功名は遠く稱へらるると。吾れこの故に他方の大國より維耶離に來詣せり。今や大師は是れ我が世尊なり。當に和上と爲すべし。願くは勅敎見られよ。當に其命を頂受し親ること瞿曇の如くにすべし。吾れ未だ曾つて[三]大沙門が柔順妙法を說きたまふを聞かず』と。彼の時、稀裸形子の曰く。『善い哉、仁者は久しからずして當に我が法律の行を了るべし。所以は何。至心なるを用つての故に』と。是に於いて稀裸形子は自ら其の衆に告ぐ。『汝等は當に此の五百の學志と俱に悅んで和合し

[一] 邠耨文陀尼弗とは富樓那尊者、滿慈子。滿願子等といふ。十大弟子の一、說法第一。

[二] 薩遮尼犍弗とは尼乾子外道なり。この外道は殊に裸形塗炭等の苦行を修す。

[三] 大沙門とは佛のこと。

正法を以つて諸の異道を化する德鎧なり。若しは有、若しは無を了に十二緣に入るる無根本相なり。八には一切の所有を施して惜まざる德鎧なり。願つて一切勾跡に入つて共に相ひ習樂するの相なり。九には一切衆生の爲めに戒忍の功德を積累する德鎧なり。所造無き相なり。十には普く弘めて所至有る德鎧なり。無所到相と爲す。十一には大精進力の德鎧なり。身意空寂相なり。十二には一切にして而も一心と爲す法身定意德鎧なり。一切の諸の著相を除く。十三には罣礙する所無き智慧度無極の德鎧なり。諸の無黠と所有る恩愛とを清淨の相と爲すなり。十四には大善權方便の德鎧なり。普く一切の行を現ずる相なり。十五には大慈の德鎧なり。傷害する所無き相なり。十六には大悲を行ずる德鎧なり。五道を視ること虛空の如くなるを得る相なり。十七には大喜悅の德鎧なり。厭足有ること無き相なり。十八には大護の德鎧なり。苦樂に於いて動轉せざる相なり。十九には諸願を具足する德鎧なり。脫を觀ずること掌の如くにして疑ふ所無き相なり。二十には一切薺を思はざる德鎧なり。諸冥は跡有ること無き相なり。二十一には四大五陰の起す所の德鎧なり。幻法の如く好妙相を化現するなり。二十二には四種の供をば毒蛇を視るが如くなる德鎧なり。法界を平等と爲す相なり。二十三には諸入は空聚の如しとする德鎧なり。諸身に復罣礙無き相なり。二十四には三界所有の德鎧なり。有念を起さざる相なり。二十五には審諦に諸有を受くる德鎧なり。所起無き相なり。二十六には大勇猛なる德鎧なり。退轉せざる相と爲す。二十七には大通達の德鎧なり。一切の人の行に隨つて施藥する相なり。二十八には大導師の德鎧なり。皆諸佛の慧を現じて化し普く義を示す相なり。二十九には一切諸法は受くる所も無く生ずる所も無き德鎧なり。不起法忍を得る相なり。三十一には動轉すること無き地に住すること得る德鎧なり。皆弟子緣覺を降伏し過す相なり。三十二には道場を莊嚴する德鎧なり。一心に平等なる智慧を行ずることを爲して、一切諸法に於いて如審かに正覺する相なり。唯、迦葉よ、是れを菩薩三十二の大德鎧を行ずと爲す。若し是の三

ること有つて謂つて言く。此の人は鬼神病を得たりと。便ち良醫有り。來つて病人に湯藥を飲ましめんに、其の疾ひ卽ち愈えて、復讇言囈語せざらんが如し。迦葉よ意に於いて云何、寧ろ鬼神及び天有つて、其の人の身中より出づるや不や』。答へて曰く『不なり、湯藥をを飲めるを以つての故に其の病ひ愈ゆることを得たるなり』。文殊師利の曰く『是くの如し、迦葉よ、世間の人欺詐を意ぶ者は則ち熱病なりと爲す。貪著心を起せども我有ること無し。我想有りと謂ふて生死に流墮す。是の故に諸佛世尊は、大慈悲具足の行有つて世間に現出し、二事及び諸の想行を斷ぜんが爲めに、善權の法を以つて法門に入らしめ、爲めに我想・無他想を除き及び欺詐を斷せしめ、衆人の爲めに法を說き、爲めに一切想を除かしむ。復、吾我及び他人想に入ることを願はざらしめ、度無極を得て無爲を致めしむ。迦葉よ意に於いて云何。彼れ寧ろ吾我・人・壽命、般泥洹する者有らんや否や』。答へて曰く。『無きなり』。文殊師利の曰く。『唯、迦葉よ、當に是の義を知るべし。佛有る所以は何ん。其れ覺は常に正義を現す。起ることを以つてせざるが故に。亦律を用ゐざるが故に。覺は無に著することを度りて塵勞を審かにせんと欲する者なり』。迦葉の曰く。『甚だ及び難し、菩薩の勤行は此の如く、衆生を擁護し一切を救濟し徳鎧を捨てず、亦著する所無く亦諍亂せず、清淨自然に無爲を度し、群萌に用るが故に徳鎧を被たまふ』。文殊師利の日く。『唯然なり迦葉よ。以故に菩薩は大徳鎧を被らるるなり』。迦葉又曰く。『願くは文殊師利よ、諸の菩薩の徳鎧を說きたまへ』。文殊師利の曰く。『菩薩には三十二の徳鎧行有り。菩薩は是の徳鎧を被たまふて往來周旋せらる』。『何等をか三十二と爲すや』。

文殊師利の言く。『唯、迦葉よ一には菩薩は無量の生死に入る徳鎧なり。終始に爲す所の自然相を擁護す。二には無數の人を度する徳鎧なり。吾我の相有ること無し。三には無量の佛を供養する徳鎧なり。皆法身の相と爲す。四には諸逆徳鎧なり。呼聲の響相の如し。五には一切諸佛を護る徳鎧なり。法界平等相なり。六には一切の塵を降す徳鎧なり。諸の塵勞に於いて淸淨相と爲す。七には

て言く『卿の屬者の見る所の如くならば、十方佛國中の文殊師利は佛の邊に在りとは、文殊師利は普く諸佛の國に於いて、三月現せずして衆人を教授せるなり』。佛の言く『迦葉よ、文殊師利は此の舍衛の城中に於いて、五百の女人をして開解せしめ、和悅王の宮中の采女を教化して、無上正眞道に於いて不退轉を得せしめ、五百の童子及び五百の童女をして不退轉に立たしめ、當に無上正眞道を逮「得」せしむべく、無數の人をして聲聞及び天上に生ずることを得せしめたり』。我れ卽ち佛に問ふて言く『文殊師利は何なる法を說くことを爲し、度する所の人民乃し是くの如くなるや』と。佛、我れに告げて言く『汝、自ら文殊師利に問へ。何なる法を說くこと爲して能く爾所の人を度されたりやと』。我れ卽ち文殊師利に問ひたてまつれり。文殊師利、我れに答へて言く『唯、迦葉よ、一切人の本に隨つて而も爲めに法を說き律に入ることを得せしめたり。又戲樂を以つて衆人を教授せり。或は共行を以つて、或は遊觀を以つて供養し、或は錢財を以つて交通し、或は貧窮慳貪の中に入つて之れを誘立し、或は大清淨の行を現じ、或は神通を以つて變化を現じ、或は釋梵の色像を以つて、或は四天王の色像を以つて、或は轉輪聖王の色像を以つて、或は世尊の如き色像を現じ、或は恐懼の色像を以つて、或は麁獷を以つて、或は柔軟を以つて、或は虛を以つて、或は實を以つて、或は諸天の色像を以つてせり。所以は何ん。人の本行は若干不同なり、亦爲めに若干種の法を說いて入道することを得せしむ。唯し迦葉よ、是くの如き比丘は五種の法を說いて審諦律に入ることを得るなり』。我れ問ふて言く『法界を幾何と爲すや』。答へて曰く『虛空界の如し。諸法及び虛空界の人種も亦是く如くなり。此の人種法界と虛空界と、二つ有ること無く亦二造も無し』。我れ又文殊師利に問ふ『我れ佛有るを見ると雖も將に益する所益しと爲んや。亦教授する所有る能はずして人を度脫するや。佛法は空なりと爲すがゆゑに人無きや。何者か教ゆること有つて度脫するや』。文殊師利の曰く『唯、迦葉よ、譬へば人有つて熱病を得ん。其の人種種なる讇言囈語を作さん。或るとき人の見

や』。文殊師利、佛に白さく、『已に見たり世尊よ。我れを逐ひ出さんと欲するが故なるのみ』と。佛の言く、『文殊師利よ、仁は自ら境界をもて神通變化を現じて、迦葉をして亂意を起して仁に向はしむること無かれ』と。是に於いて文殊師利は、三昧有り名けて現一切佛及國土と曰ふ。時に應じて是の定意正受を以つて、文殊師利は三昧に適し已つて、尋いで十方恒沙の世界に、各各悉く摩訶迦葉有り、年老いたり、手に揵搥を執つて之れを撾ち、文殊師利を逐ひ出さんと欲するを見せり。佛、迦葉に告げたまはく、『汝、何の緣によつてか揵搥を撾つや』と。迦葉、佛に白して言さく『唯、世尊よ。文殊師利は夏三月を盡くして靜現せず、潜かに去つて藏匿の室に止宿せり。かるが故に揵搥を撾つて之れを逐ひ出さんと欲するなり』と。時に佛は身より皆大光を放ち遍く十方を照したまひ、我れに謂つて言く、『迦葉よ、汝且く十方を觀よ』と。時に應じて十方無央數不可計の世界を視るに、自ら其の身、年老いて十方の佛の邊に住して揵搥を撾ち、文殊師利を逐ひ出さんと欲するを見る。復、諸佛の邊には各文殊師利有つて住するを都る。佛我れに告げて言く、『大迦葉よ、汝は何なる文殊師利を逐ひ出さんと欲するや。十方無央數不可計なる佛の邊の文殊師利を出さんと欲するや。此の文殊師利を逐はんと欲するや』我れ卽ち慚愧し、便ち持てる揵搥を地に置かん欲せしが能はざるなり。神力をば盡く現じたれども、揵搥は肯へて地に隨ちず正しく住して動かず。此くの如くなることは祇樹も十方佛國も亦然なり、異なること無く審諦にして自在なり。世尊、我れに告げて言く、『自らを文殊師利に歸せよ、乃ち脫すること得んのみ』と。我れ卽ち遙かに文殊師利を禮せり。揵搥乃ち地に墮ちぬ。便ち前んで佛の足を稽首し、佛に白して言さく、『願くは世尊よ、我が犯せる所の殃咎を赦したまへ。唯天中天よ、吾れは已に文殊師利の現じたまへる所を見たり。假使へ我れ文殊師利の智慧の具足せることを講說せんと欲すとも、盡くる時有ること無けん。菩薩の境界の行には限量無ければなり。我れ無智なるを以つて、故に揵搥を撾てるなり』佛、我れに告げ

諸の不審を除くべし。魔の官屬を降さば如來の教へは興る。正法を奉受して經義を供養せよ。是れ我が教ゆる所なり』『是の語を說ける時、五千の比丘は皆身命を放つて般泥洹せり。我等は法の亂壞する時を見ることを欲せず。虛空に坐して身中より火を放ち還つて自らを闍維せり。數千の天子は共に其の骨を供養し、二百の比丘は遠塵離垢し諸の法眼を生じ、二百の比丘は無起餘漏盡意解を得、三萬二千の諸天は柔順法忍を得、釋梵四天王及び諸の眷屬は皆叉手して往いて佛に白して言さく。『唯、世尊よ、願くは佛久しく住したまふて廣く教授せられよ。我等をして法の亂壞し滅盡する時を見せしむること莫れ。若し是の經法を說くを聞くことを逮る有らば、終に懈怠せじ亦衆垢無からん。諸受に著せず意は無所住を行ぜん。亦諸の魔事を起さず。亦我有ること無く所求無けん』と。是くの如し賢者舍利弗よ。文殊師利童子の現ずる所の神通變化講說經法は其れ乃し是くの如し。我れ爾の時、自ら覩見る所なり」と。

爾の時、賢者大迦葉は舍利弗に謂つて言く。「我れも亦、文殊師利の神通變化を見たり。仁者よ且く聽きたまへ。佛、正覺を得たまふて未だ久かず、我れ初めて鬚髮を下せし時、文殊師利は此の世界に來詣せり。寶英如來の佛國より來り、世尊見たてまつり稽首作禮せんと欲せり。時に佛は舍衞の祇樹の園なる給飯孤獨精舍に在せり。文殊師利は夏三月の初めより盡して、佛の邊りに現ぜず、亦衆僧と在るを見ず。亦請會に在るを見ず。亦說戒中に在るを見ず。是に於いて文殊師利は夏三月竟つて已に說戒するに、尙は新しく時に來つて衆中に在つて現ぜり。我即ち文殊師利に問へり。『仁者は三月在らせられしや。周旋して奏かれしや』。文殊師利の曰く。『唯、迦葉よ、吾れは舍衞城の和悅王宮婇女中と及び婬女小兒の中に三月在たり』。我れ心に念言すらく』。何の緣によつて此の如き等の人と吾が清淨衆僧と共に臘を爲すや』と。吾れ即ち講堂より出でて揵搥を撾ち、文殊師利を逐ひ出さんと欲せり。時に佛、文殊師利に告げたまはく。『仁は寧ろ摩訶迦葉が揵搥を撾つを見るや不

し善權を發する敎へを佛敎と爲す、八。慈悲を以つて群生を護る敎へを佛敎と爲す、九。害意無く愍哀する敎へを佛敎と爲す、四十。諸の所有を脫ぎて德鎧を被る敎へを佛敎と爲す、一。樂しむ所も無く造る所も無く語る所も無くして敏なる敎へを佛敎と爲す、二。所作已に辦じ智慧を興す敎へを佛敎と爲す、三。貢高る諸念無く三寶を斷ぜざる敎へを佛敎と爲す、四。菩薩の意を發し一切を安じて淸淨ならしむる敎へを佛敎と爲す、五。諸有を起さゞるを用つての故に、是の語を說く時、其の諸天子の魔波旬に從ひ來れる者の五百の天子は無上正眞道意を發せり。俱に說いて曰く。『唯、世尊よ、我等も亦當に是くの如く佛法の敎へを奉ずべし』と。佛、時に便ち笑ひたまへり。賢者阿難、佛に問ふて言く。『何の因緣にて笑ひたまふや。既に笑ひたまふ當に意有らん』と。佛、阿難に告ぐ。『汝は此の諸の化せる比丘を見爲りや不や』。阿難、佛に答ふ。『已に見たり』と。佛の言く。『後の五濁弊惡の世、法盡きんと欲る時に臨んで、當に是の輩有るべし。厭足することを知らず。行ず所は不善にして、衣服も自ら正すこと能はず。其性卒暴にして安祥ならず。所以は何ん。是くの如し阿難よ。彼の時の比丘は、食飮に恭敬なること無く、袈裟を以つて掖に掛け、現在せる諸の尊長の比丘を敬はず、從ふ所のものは往來する所に迷亂を爲し、人は多く病まさる。便ち沙門と作つては安と名聞とを求め、但恭敬せらるゝことを索めて、法を念じ志さず、彼の時の世には我が法の中に於いて當に此の輩有るべし。見る所無き人は不淸淨を行ず。諸天は皆當に愁憂すべし。弊魔は悉く當に歡喜すべし』。阿難、佛に問ひたてまつる。『魔は何の故に喜ぶや』。佛の言く。『是の諸の正士が自ら魔事を起すは、魔波旬に嬈されて便を得たるに非ずや。所以は何ん。弊魔は懈怠を求めざる者に便る。其れ比丘有つて、精進修行して頭然を救ふ如くせば、波旬は此の精勤者を求めて便る。以故に阿難よ、當に勤力めて精進して懈怠有ること莫れ、當得にも未得にも、當成にも未成にも。當に明かなる諦を得て

り。惡智識に於ひて善友の想を爲す。佛行を辭し正法を誹謗して、自らを貢高にし救護する所無く、闘訟罵詈して至誠をは妄語爲りと想ひ、虚欺を誠諦爲りと想ひ、諸の婬欲を犯ずるを佳爲りと想ひ、諸有に於いて安隱爲りと想ひ、生死に於いて見を起すことを教授爲ると想ひ、泥洹の所現を壞る』。文殊師利の曰く。『波旬よ、是くの如き像法行を是れ毒なりと爲す。佛法の教へに於いては有ること無きなり。甘露教を佛教と爲す、一。安隱教を佛教と爲す、二。無放逸教を佛教と爲す。三。無怨恨教を佛教と爲す、四。無受住教を佛教と爲す、五。正法藏教を佛教と爲す、六。無諍訟教を佛教と爲す、七。無所猘教を佛教と爲す、八。彼我無執教を佛教と爲す、九。不誹謗教を佛教と爲す、十。救念擁護教を佛と爲す、一。寂寞恬然として所生無き教へを佛教と爲す、二。淨を以つて復淨むれば澹泊にして然る所無き教へを佛教と爲す、三。正懷を以つて來つて平等を明むる教へを佛教と爲す、四。無怒善立教を佛教と爲す、五。尊より復尊へ諸の善本を積むを教ゆるを佛教と爲す、六。已脫復脫教を佛教と爲す、七。諸異道を化する教へを佛教と爲す、八。一切の衆の欲慧は有ること無きなり、此の教を則ち佛教と爲す、九。無終始死生教を佛教と爲す、二十。定意教を佛教と爲す、二。意止教を佛教と爲す、三。平等斷教を佛教と爲す、四。一切諸惡を造る所無き神足の教を佛教と爲す、五。身意寂にして二根有ること無き教へを佛教と爲す、六。衆信の爲めに最も力むる教へを佛教と爲す、七。一切の塵勞現不現無しと覺意する教へを佛教と爲す、八。普く體を了覺し道を解する教を佛教と爲す、九。所行衍なること無く寂寞なる教へを佛教と爲す、三十。恬然無爭教を佛教と爲す、一。來諸解脫に來るまで審諦に教ゆるを佛教と爲す、二。無怒辯慧教を佛教と爲す、三。法義をば非常苦空愁悒に分離すること無き教へを佛教と爲す、四。罵詈を讃歎すること有らば無我をもて教ゆるを佛教と爲す、五。諸道を降伏して靜然なることを得しむる教へを佛教と爲す、六。無爲心に至るまで度無極をもて教ゆるを佛教と爲す、七。彼れを諸の岸に度

卷の下

是に於いて天魔波旬は、文殊師利の饌する所の供蓐を嬈固せんと念欲し、四萬の比丘に化作せり。弊壊裂衣を著し、垢穢臭處に破れたる鉢を持して住せり。胸も背も悉く露し、面も貌も醜惡にして跛蹇禿僂り。心に悍慄を懐きて衆の中に坐し、亦復鉢を持ちて種種の供を受けぬ。其の鉢の飯食は亦滅盡せざりき。波旬の化せる所の比丘は極めて大食なりが、鉢は缺減すること無かりき。文殊師利は威神の變を現じて、諸の化せる比丘をして鉢の食常に滿ち、摶食口に在つて噎んで咽むを得ず。手食は口に向へども手齊なへども口は止み、皆地に躃れて自ら安ずること能はざらしむ。是に於いて文殊師利・魔波旬に問ふ。『此の諸の比丘は何の故に食はざるや』。波旬答へて曰く。『今諸の比丘は將に死に欲とせり。毒を雜へたる食を以つて之れに與ふること無からんとすることを得るや』。文殊師利の曰く。『無毒の人ならば豈復毒を行はんや。身に垢穢無くんば寧ろ垢毒を以つて用ゐて人に與へんや。婬怒癡有る是れ則ち毒と爲す。菩薩に於いて懐き來れる法品律儀には此の衆毒無きなり。所謂、毒用は黠無き恩愛の著なり。是れ我所・非我所見なり。因緣罪福は名色の所行なり。不等にして而も所緣を造す。我見有る人は諸蓋をもて受住し貪身著念す。諸の種を有し諸の入を受くれば、三界に住在す。取有り受有り、卒有り暴有り、往有り來有るなり。貪身は癡と爲つて壽命有り。近く想念の清淨に著すれば瞋恚の蔽立つ。十二因緣の本を了せざれば、諸見を諍訟し自見斷ゆること無し。有念有智ならば輕慢し、淨想不淨想有らば數衆事を分つ。謂く有無及び諸業・諸恩愛を觀ずること足らば、是れ我所　無所行も空を畏る。謂く二欲有らば二想を度る。無想に於いて隨相有り。有願無ければ無想を起す。有得無くして有想を作り。行行無くして種を起し想を說く。二欲を起さば度想を作す。菩薩法品に於いては非法想を爲す。邪見の行を爲さば正法の觀想有

極を以つてすればたり』と。阿難は教へを受けて即ち揵椎を撾ち、衆の比丘を會せり。一鉢の飯なれども種種なる美味を出して、餚饌甚だ美にして甘醲なること無量なりき。譬へば衆器に各殊異なる若干の味を盛りて、皆以つて諸の比丘衆及び諸の菩薩に供養しけるに、悉く充滿するを得たれども、其の鉢の饌は故の如くにして盡きざるが如し。

文殊師利現寶藏經卷上

り。魔は自在と爲り諸の天中尊と萬二千の天と倶なり。眷屬は圍遶せり。前に在つて鉢を持ち、文殊師利の足を稽首せり。諸天、魔波旬に謂へり。『仁者は曷爲れぞ鉢を持ちて文殊師利の前に在るや。譬へば侍者の如くなり』と。波旬、諸天に答へて曰く。『當に強者と共に爭ふべからず』と。又波旬に問ふ。『仁者も亦大神通・無極の力有り。何が故ぞ堪えざるや』と。是に於いて波旬は文殊師利の聖旨を承けたるなり。尊天爲りと雖も堪ふる所無きに由ればなり。波旬、諸天に答へて曰く。『魔の力は癡と爲し、菩薩の力は智慧と爲す。魔の力は諸見を受けて住立し、菩薩の力は大空を曉解る。魔の力は欺詐なり、菩薩の力は誠實なり。魔の力は是れ我所・非我所なり、菩薩の力は大慈大悲なり。魔の力は婬怒癡門なり、菩薩の力は三脫門なり。魔の力は終始ともに生死に往來するなり、菩薩の力は不生不滅にして不起法忍なり』。天魔波旬是の語を說ける時、諸天衆中の五百の天は無上正眞道意を發し、三百の菩薩は不起法忍を得たり。爾の時、文殊師利及び魔波旬は、鉢を持ち講堂の上に置けり。賢者阿難は亦之れを察せず。飯時已に到れるに、亦文殊師利の室より出づるを見ず。時に心に念言すらく。『文殊師利は諸の比丘僧を欺くこと無きを得るや。我れは宜しく學に往いて世尊に白して言はん。『時は今や已に到れり、文殊師利は其の室より出でず』と。阿難、即ち往いて佛に白す。『文殊師利は其の室より出でたるを見ざるなり』と。時に佛、阿難に告げたまはく。『汝、寧ろ講堂の上を察するや不や』。阿難、佛に白さく。『唯然なり世尊よ、已に鉢に滿てるの食の講堂の上に在るを見たり』。佛、阿難に告げたまはく。『汝、揵椎を撾つて比丘衆を聚めよ』。我れ佛に白して言さく。『唯然なり世尊よ、大比丘衆其の數甚だ多し、一鉢の飯食にして何ぞ足る所ならんや』。佛の言く。『阿難よ、且く止みね默然として行け。假使へ三千大千世界の中に滿てらん人、百千歲共に此の飯を食するとも終に耗滅せじ。所以は何ん。文殊師利の聖旨神化なれば、此の鉢の食をして盡くる時有ること無けん。文殊師利の智慧は具足し神通をもて立つる所なれば り。布施を與造るに度無

長者梵志をして文殊師利に分衛の具を施さしむ。『此の人を惠む者は其の福最も大なり。若し三千大千世界の諸の有著の人に百千歳供養すること有らんも、文殊師利に施す福の第一にして多きには如かず』と。文殊師利適に是の願を發し尋いで所念の如くせるに、一切の門戶皆之れが爲めに開き、人は悉く自ら往いて文殊師利を迎ふ。弊れたる魔は諸の街里の家家に入り、及び四徼道にて諸の凡民・長者・梵志をして『文殊師利に供具を施與する者は其の福最も大なり。若し三千大千世界の諸著の人に百千歳の中において供じて、以つて諸安を施し其の所欲に隨はんに、善く文殊師利の分衛に與ふる其の福德の最厚なるには及ばず』と唱令せり。是に於いて文殊師利、得る所の食を化して應器に盈滿せり、種種なる甘美其の味各異なり、味味殊別にして相ひ錯り入らず。請ぜる千二百五十の比丘と萬二千の菩薩に踰へ足りて過ぎたり。鉢の中の所變は其れ是くの如くなり。爾の時、文殊師利は分衛し周り已つて、舍衛の大城より出づ。魔も卽ち侍隨せり。是の時、文殊師利は中道にして鉢を住持し地に著け、魔波旬に謂へり。『汝且く鉢を擧げて前に在つて行け』と。是に於いて波旬地より鉢を擧げんとすれども能く稱えず。文殊師利に白さく。『我れ實に此の鉢を擧搖すること能はず』と。文殊師利、波旬に告げて曰く、『卿は力勢有りて神通極り無し、大神足を以つて此の鉢を擎げ擧げよ』と。是に於いて波旬盡く神力を現じたれども了に稱ふること能はず。變化して鉢を擧げたれども鉢をして地を離るゝこと髮の如くならしむる能はざりき。彼の時、波旬は未曾有なるを得たり。文殊師利に謂ふ。『山有り名けて伊沙陀と曰ふ。意を發すの頃に、我れは能く掌を以つて虛空に跳置す。今や此の小鉢なれども稱ふること能はざるなり』と。文殊師利、魔波旬に謂ふ。『鉢を擧ぐるに稱ふる能はざる所以は、卿は每に自ら以つて諸の菩薩の大人力に比しながら此の鉢に著するが故に擧ぐること能はざるなり』。文殊師利是に於いて地より鉢を擧げ魔に授けて曰く。『波旬よ、汝此の鉢を執つて且く前行せよ』と。爾の時、波旬は甚だ自ら厭苦しつゝ、鉢を擧ぐるに纔かに勝へた

衆千二百五十と菩薩萬二千と俱たりき。時に大なる淋雨雲霧黤䨴として七日七夜に至れり。其の「とき」比丘有り大神通を得て、普く一心に解脱の門を行じ、定意[二一]正受して食を得ずと雖も、三昧三摩越を以つてして而も以つて自立せり。其の未定意なると及び正受せる者とは晝夜五日斷えて供を得ず、身體羸劣にして氣力無く佛を見たてまつるに任へず。吾れ心に念言すらく『是の諸の比丘は或は存命せざらんか』と。我れ時に佛の所に詣り白して言さく『諸の比丘衆は斷えて食を得ず。餓えてより來五日なれば羸れ頓れ虛劣にして自ら起つことすら能はざるなり』。佛、我れに告げて言く『阿難よ、汝往いて文殊師利に語つて、是の事を爲せ。比丘僧なるを用つての故に』。我れ時に教へを受け、文殊師利の室に往詣せり。時に文殊師利、釋梵四天王の爲めに說法せられたり。吾れ是の事を將つて文殊師利に告げたり『佛は我れを遣し來らしめて仁をして[二二]檀を立てしめたまふ』と。文殊師利、我れに謂つて言く『阿難よ、並びに座具を設けよ。時至らば[二三]犍槌を撾て』と。我れ即ち其の教へを受け、床座を出し敷き訖つて還つて其室に至れり。文殊師利は精舍を出づるや不やを知らんと欲へばたり。文殊師利は故のまゝに室に在つて住し更に化を作し、釋梵四天王の爲めに說法せらる。三昧有り行入諸身定意正受と名く。其の精舍より出でて舍衞城に入りて[二四]分衞せらる。時に魔波旬は即ち心に念言すらく『今、文殊師利は師子吼の爲めに城に入つて分衞せらる。我れ寧ろ文殊師利が立つる所の功德を亂す可し』と。魔即ち化して舍衞城中の長者の衆人をして迎へること無く文殊師利に逆はしめ、亦分衞に與へざらしむ。是に於いて文殊師利の之く所の家居は皆門を閉ぢ出で迎ふる者無し。時に文殊師利、即ち魔の嬈し固むるものなりと知り、[二五]梵志諸の長者と化せり。即ち誠信の願を作せり『假し我が一一の毛に所有る功德・智慧は現じ具足する所なり。恒沙の世界に其の中に滿てる魔は、吾が身の一毛の德にすら及ばず、審諦にして是くの如くにして虛ならず。魔の化せる所は即ち當に消滅すべし』と。魔をして自ら諸の街里及び四徼道に往いて告げしめ、

【二一】正受とは三昧のこと。

【二二】檀とは梵語の檀那の略。布施のこと。

【二三】犍槌(Ghaṇṭā)とは犍稚、犍地等に作る。鐘、磬、打木、聲鳴等、打つて聲をなすべき物の稱。

【二四】分衞 Piṇḍapāta とは乞食又は團墮と譯す。乞食とは比丘は行いて食を乞ふが故に。團墮とは西天の法多く食を團子に搏つて鉢中に墮壘するが故に名く。分衞とは漢語なりといふ說あり。この說によれば乞得せる食を僧尼に分與して之を衞護して道を修せしむるが故なりと。これ乞食の義なり。

【二五】梵志とは婆羅門四時期の一。又は梵天の法を志求する者。

師利と南のかた諸佛の國に遊べり。無央數百千の佛土を超えて、世界有り諸好莊飾と名く。佛をば德寶尊如來と號す。彼の佛土に詣でて、世尊を見たてまつり稽首し禮を作さんと欲せり。文殊師利、我れに謂つて言く。『唯、舍利弗よ、寧ろ此の諸所を見、共に佛國を度らんや不や』。我れ答へて曰く。『或は火に滿つる者を見、或は具足せざる者、或は自然にして虛空の如くなる者を、或は神足を以つて而も立てる「を見る」。又我れに問ふて言く。『唯、舍利弗よ、當に何以がしてか是の佛國を觀るべきや』。吾れ答へて曰く。『其の火に滿つる者は當に火に滿つと觀ずべし。其の具足せざる者は之れを視て具足せざるものなりと爲し。其の虛空の如くなる者は當に虛空の如しと視るべし。其の神足を以つて立てる者は當に神足を以つて立てりと瞻るべし』。文殊師利の曰く。『舍利弗の境界にて講說せる所の如く亦然なり』。我れ卽ち文殊師利に問ふ。『仁者よ如何が諸佛の國を觀るや』。文殊師利の曰く。『唯、舍利弗よ、一切の佛界は皆虛空の土と爲す。所以は何ん。悉く幻化の如くにして現ずる所火に滿ちて而も具足せず。虛空の如く自然にして神足を以つて立てる耳なればなり』。曷して曰く。『來起せよ此の因緣起分の行は、虛空の無緣なるがごとく常に自然にして住し、是くの如く諸の塵勞は意心に汚著して淨を立てず。譬へば恒沙の佛國は悉く皆火を被れども虛空は燒けざるが如し。是くの如く舍利弗よ、一一の人、恒沙の諸の不善を犯ずれば本より衆の殃惡を積めるなり。其の意終り已れども淸淨に立たず。若し男子女人、能く淨法界に入る者は、所住及び諸の覆蓋有ること無く亦想を作さず。能く其の意をして受住する所有らしむること無し。是れを無所受住法門と謂ふ。一門を以つて諸法を了御して皆諸法を受け、衆蓋を生ぜずして而も法意を蔽へども亦善惡無し』。是くの如く仁者須菩提よ、文殊師利は神足をもて變化して、所在に說法して吾が目に觀せられたり』。爾の時、賢者阿難、舍利弗に謂へり。『唯、仁者よ、我れも亦更に文殊師利が祇樹園に於いて現ぜられたる變化を見たり。吾れ憶念するに昔、佛、舍衞の給飯孤獨精舍に遊びたまへり。大比丘

り、文殊師利と彼の佛國を越え、然して後に第二の三千大千世界に到れり。其の刹も亦燒けて火炎甚だ廣く、佛國に周遍せり。文殊師利便ち彼に住して、我れに謂つて言く『唯、舍利弗よ、當に誰の神足を承けて彼の世界を度れりや』。吾れ答ふ『當に仁者文殊師利の神足を以つて是の佛土を度れるなり』。是に於いて文殊師利、發意の頃に、其の世界に蓮華を滿ち布かしむ。便即ち度り去つて、我れに謂つて言く『唯、舍利弗よ、神力は孰れか踰えたりや』。吾れ答へて曰く『雀と蚉蟲とを以つて、金翅鳥と鳳凰王とに比せんに、二者に至つては相ひ方ぶ可からざるなり。金翅鳥王は無數を一擧するに、我が身は譬へば蚉蟲と雀との如くなるのみ。神力相超ゆること其れ猶ほ是くの如し』。文殊師利、我れに謂つて言く『曷ぞ仁者舍利弗よ獨處して心念すらく、文殊師利の神足と及び我が神足とは等しと云へるや』。文殊師利の曰く『之れを今に効ぶるに何れか智なりとせん』。吾れ答へて曰く。『弟子の止處は其れ未斷に限つて比する所無し。自ら止處を見るに斷に限つて而も平等を逐ぐるのみなり』。文殊師利讚めて曰く『善い哉善い哉。唯、舍利弗よ、若が言ふ所の如し。昔者往世兩りの仙人有りて海邊に止り頓れり。一人をば名けて好妙法と曰ひ、一人をば名けて施信安と曰へり。其の好妙法は仙の五通を得て以用つて自ら娛めり。施信安は言說と神呪と以つて虛空を飛行せり。時に兩りの仙人は俱に海邊より、共に飛んで巨海を度り後の岸を周旋らんと欲せり。彼の施信安は心に念言すらく『其れ好妙法の神足と我れとは等し』と。然して後に復共に飛んで大海を度り女鬼界に到れり。爾の時、羅刹は鼓人妓樂せり。施信安仙人は其の樂音を聞き及び女鬼を見て、即便ち恐怖し虛空より地　墮ち、復、海邊の居處を識ること能はざりき。是に於いて好妙法は時に之れを愍傷し、右手にて之れを擧げ故の所止に還せり。文殊師利、舍利弗に謂へり『爾の時、好妙法仙人とは、則ち吾が身是れなり。施信安仙人とは、舍利弗是れなり。彼の時の耆年は誠に其の類に非ず、自ら謂つて等しと爲せり。今も亦之の如し』。舍利弗、須菩提に謂ふ『我れ復憶念するに、曾、文殊

ん。普く十方に至るまで吾我を求むるに不可得なり』。文殊師利の曰く。『是くの如し族姓子よ。其れ十方に詣つて法處を索めんと欲すること有らんも亦不可得なり。亦不可見なり。所以は何ん。彼の法に寧ろ門有りや不や』。答へて曰く。『無門の門有り』。文殊師利の曰く。『我れ是を以つての故に諸の法門は悉く寂莫なりと言ふ。一切の說く所は淡泊門なり。靜然として而も清淨たりと致す』。是の語を說ける時、八千の菩薩は[三〇]不起法忍を得たり。爾の時、文殊師利、廣く衆會の爲めに說法し、便ち坐より起つて去れり。是を用つての故に、須菩提よ、當に此れを了知すべし。弟子及び菩薩有ること無しとは、吾等は能く其の辯才に當ること莫きたり、豈に敢へて文殊師利と法談を講ずるに堪任せんや』。爾の時、賢者須菩提は舍利弗に問ふ。「仁者は復文殊師利が何に異なれる神通變化有つて、諸佛の土に往來し遊べるを見たりや」。舍利弗、須菩提に答へて曰く。「我れ憶念するに昔者曾つて文殊師利と共に諸國に遊べり。佛土有りき火起つて刹を燒けり。便ち自然なる蓮華有つて遍く布き具足せり。文殊師利は上を蹈んで行けり。或は滿てる火有り其の火柔軟なり。譬へば細靡なる衣・好食美味香の如く、栴檀をば身及び衣・臥具に塗れるが如し。其の佛國は虛空の中より、自然に梵の宮殿を化作し之れを立てて嚴飾せり。時に諸の菩薩其の中に入つて坐し定意正受せり。或は佛國有つて現に興盛し、一切の信を發し佛道を致すことを得たり。行に蔽匿の慈無く普く衆生を救ひたまふ。何をか謂つて佛道の行には蔽匿の慈無しと爲すや。一切の人に婬怒癡塵勞の火有るを以つて、若し無上正眞道最正覺を得れば、三垢已に斷じ衆の爲めに法を說き、慈哀の心を以つて定意正受す。是れを佛道の行には蔽匿の慈無しと謂ふなり。唯、須菩提よ、吾れ時に獨處して心に自ら念言すらく。『我れは爲れ是の三千大千世界に住し、神足力を以つては文殊師利と等しと』。是に於いて文殊師利は吾が念ふ所を知り來つて我れに謂つて言く。『當に賢者舍利弗の神足を用つて共に此の世界を過ぎんと』。吾れは盡く神力を現じて大火を越え度れり。晝夜に精進して行くこと七日を積め

【三〇】不起法忍とは無生法忍なり。不起は無生なり。見惑を斷じて空理を證するを無生法忍を得といふ。空理は無生無起なれば無生法とも無起法ともいふ。忍とは此の無起法を忍許決定することなり。

の謂ひぞや』。答へて曰く『億百千の魔及官屬を毀れず。一切の爲めに說法して疲厭すること無し。功を積み無量の德を累ねて毀れず。無數の慧を植えて所行に倦まざるなり』。時に彼の會の中に諸大有り、各種種なる奇異の華を持ち、用つて文殊師利の上に散じ、悉く俱に言して曰く『文殊師利の止頓る處は則ち當に等觀すべし。是れ則ち如來の正威神たればなり。文殊師利に所在にて擁護せらる。一切の德を以つて衆人を救濟し爲めに法に講說せらる』。是に於いて文殊師利は聖智燈明弟子に謂ふ。『世尊は青年と智慧とを歎詠せらる。云何が智慧は有爲なりや無爲なりや。假使し有爲ならば則ち起分なり。設使し無爲ならば彼も亦相を造するや』。文殊師利に答へて曰く。『諸の聖賢の念ずる所は但無爲なりと講ぜらる』。又問ふ。『無爲ならば寧ぞ念說すること有らんや』。答へて曰く、『無きなり』。文殊師利又問ふ。『諸の聖賢は何爲れぞ無爲の行を講說するや』。爾の時、聖智燈明弟子は、默然として以つて加報ふること無かりき、是に於いて光英如來・無所著・等正覺は文殊師利に告げたまはく、『是の衆會の爲めに法門を講說して、諸天をして其の法を聞受せしめ、衆の菩薩は聞いて不退轉に立ち無上正眞道を逮「得」せり』。文殊師利の曰く。『其の正法門は行寂莫なり。寂門に於いては言說無し。恬然たるを以つて淸淨を爲す』。時に彼の衆の中に、菩薩有り、號して法意と曰ふ。會に在つて坐せり。文殊師利に問ふ。『設使し如來、婬怒癡の事を說く時、豈に是れ寂莫法あらんや。其の恬然門は寧ろ靜泊淸淨法と爲んや』。文殊師利答へて曰く。『仁の意には云何。婬怒癡は焉れ何より起ること在るや』。曰く。『念、想を起すに從つて有り』。又問ふ『想念は何に從つて起るや』。答へて曰く。『習に從つて起る』。又問ふ。『習は何に從つて有るや』。答へて曰く。『我所と非我所に從つて有り』。又問ふ。『是の我所・非我所は何に從つて起るや』。答へて曰く。『貪身に從つて有り』。又問ふ。『貪身は復何に從つて起るや』。答へて曰く。『吾我に住するを用つての故なり』。又問ふ。『吾我は何に從つて起るや』。答へて曰く。『文殊師利よ、吾我は所住を見ず、亦處有ること無く亦處無きにも非ず。所以は何

し而も寂莫の問を作す。想念有ること無く亦法有りと見ることも無く亦寂莫法無しとも見ず。我は已に一切法に於いて寂なれば便ち默して平等問を作し迷惑問をせず。其れ問はんと欲し及問ふ者有らんに、彼れに二有ること無く度無極を求む。問ふ所において三道場を淨む。是くの如く問訊せんが爲めに如來如無去に無沈浮を問へり。言ふ所柔順なるは如來の意なるべし。諸の衆會を悅ばして他心に著せず。是く問ふ所を以つて、無數の人をして道義を立てしむ。德鎧を捨てずして佛樹に坐するに至る。是くの如く聽講して如來に問ふことを爲せるなり』。是に於いて光英如來正覺は文殊師利童子を讃じて曰く。『善い哉善い哉、仁者よ、是くの如く如來を見たてまつり稽首作禮して法義を講問することを爲せり』。是に於いて文殊師利・聖智燈明大弟子に問ふ。『尊者は云何が如來を見たてまつり稽首し禮を作すや。云何が法義を問ふや』。答へて曰く。『唯、文殊師利よ、我れは此れに及ばず亦其の類にも非ず。弟子は音を以つて解脫を得て、是の事は了せざるなり』。又問ふ『云何が賢者は意に證れる時、是れ信證にして解脫なりと言ふや』。答へて曰く。『文殊師利よ、我れは施說するのみ未だ深義を講ぜざるなり』。又問ふ。『何をか深義の平等を講暢すると謂ふや』。答へて曰く。『平等を御めず深義を導かざるなり』。又曰く、『何んが起滅も空義も深きこと無しと說いて而も空義無平等想を得るや。是くの如くなるを一審諦と爲さば則ち是れ深く誠實の義に入れるものなりや』。曰く。『新學の菩薩は此の言を聞かば恐懼すること無きことを得るや』。文殊師利の曰く。『仁者すら今已に恐懼せり、況んや新學に於いてをや』。聖智の曰く、『能く我れは恐るること無し』。答へて曰く。『向者には何爲れぞ恐懼せるや、賢者よ未だ解脫を厭はざるか』。「答へて」曰く、『恐れざるに非ず厭こと無きにも非ず。而も解脫を得るなり』。文殊師利の曰く。『賢者は本恐懼と俱に合するに用つて、以故に說いて仁は今已に恐懼せり、況や新學をやといへり』。文殊師利に問ふて曰く。『菩薩は何なる因をもて而も解脫を得るや』。「答へて」曰く。『恐懼無き致れば穢厭せざるたり』。又問ふ。『文殊師利よ此の言は何

ば隨藍大風起れる時には、有所るものは崩れ隤ちて自ら固くすること能ふもの莫きが如く、聖智燈明は時に恐怖して、衣毛も爲めに竪ち未曾有たることを得たり。光英如來の所に往詣して世尊に白して言さく『唯、[一八]天中天よ、誰ぞ比丘の佛像を爲して大音聲を出すものぞ。我れ其の音を聞いて怖れて自制せられずして卽便ち地に墮れたり。隨藍風起つては摧落せざるもの靡きが如くたり』其の佛の告げて言く『菩薩有り文殊師利と名く。不退轉を得たり。神通聖樂明慧の力を以つて此の國に來至し、如來を見たてまつり稽首作禮し諸の義を講問せんと欲せるたり。向者には形を光音天にて隱かし大洪音を擧げければ、普く三千大千世界に聞え、魔宮を震動し惡道を滅除して皆喜悅せしめたり』。其の弟子、佛に白して言さく『願くは文殊師利を見んと欲す。唯天中天よ。[一九]正士を覩るを得ば是くの如き等は則ち幸甚爲り』。時に光英佛、卽ち感應を作し、文殊師利を請ぜり。是に於いて文殊師利は諸の菩薩及び諸天と、虛空中より忽然として來下し、光英如來佛の所に往詣し、佛の足を稽首し佛を遶ること三匝し、各神力を以つて法座を化作して坐せり。爾の時、光英佛、文殊師利に問ふ『仁者よ何より與つて此の世界に到りしや。何をか觀んと欲するや』。文殊師利、佛に白さく『世尊を見たてまつり稽首致敬して法事を啓問せんと欲せしが故に此に來至せるたり』。又問ふ。『文殊師利よ、云何が如來を觀たてまつゝて而も淨見と爲すや。云何が如來を禮するや。云何が如來問訊するや、云何が講問するや。云何が如來の所說を聽受するや』。文殊師利の曰く『諸法は寂なりと觀るを淸淨見と爲す。如來は淸淨觀なりとたす、亦無身なり無意なり無心なり、無禮なり無敬なり、無卒なり無暴たり、無壞なり無作なり、常ならさるをもて空より生ずることを得、心行無きをもて常に寂寞なり。是くの如くにして如來を觀ずるに而も無我なりと爲す。等色と作さず、亦等を以つて等と爲さず、邪を以つて邪と爲さず、而も一平等たり。諸佛世尊の法身と俱に己身と爲す。亦法身に入つて見る所を見る。見無く所見無し。亦遠無く所近無し。是くの如くにして如來を禮すと爲

【一八】天中天とは佛のこと。

【一九】正士とは菩薩のこと。

の曰く、「曷爲れぞ賢者、若干の境界を說くや」。須菩提、答へて曰く、「向者には本、弟子の辯の有限有礙と菩薩の辯才の無限無礙とを說けるなり」。文殊師利の曰く、「云何が賢者よ明慧を得るや」。須菩提、答へて曰く、「是くの如くにして明慧を得たり」。文殊師利、又問ふ、「賢者よ、云何が默するも而も礙なりと言へるや」。答へて曰く、「弟子が一切の人根を了知すること能はざるを用つての故に、言說を用ゆるも礙なりと作すのみ。菩薩の辯慧は衆生の本を曉らむ、是の故に言說を以つて罣礙と爲さざるなり」。文殊師利の曰く、「世尊の辯才の慧は往來有ること無し。其の智慧想に寧ろ限り有らんや」。答へて曰く、「不なり。其の智慧は無罣礙相なり無所住相なり」。文殊師利の曰く、「假使し智慧が無罣礙相、無所住相ならば、何が故ぞ賢者よ默も礙なりと作すや」。須菩提の曰く、「尊者舍利弗は、佛に智慧が最「第一」爲りと稱歎せらる、當に此の賢に問ひまたへ、仁の爲めに解說せん」。舍利弗、須菩提に謂へらく。「我れが文殊師利の法を講ぜらるるを說くことを聞かんと欲するか。今之れを宣べんと欲す。所以は何ん。吾れ曾し聞き知れり。昔者文殊師利、無央數の百千佛の前に於いて說法し、諸の大弟子をして默して無言ならしめたり。又往時を憶ふに、吾れと文殊師利と共に出でて東のかた諸佛の國に遊べり。無央數の百千の佛土を度りて、世界有り名けて喜信淨といふ。其の佛をば光英如來無所著等正覺と號せり。今現に在して說法したまふ。大弟子有り名けて聖智燈明と曰ふ。智慧最尊たり。適、如來の閑居宴坐したまへるを見る。其の聖智燈明なる弟子、卽ち身を踊らして [一五]第七梵天に往けり。其の聲をもて遍く三千大千世界に告げ、一切の爲めに說法せり。吾れ文殊師利と倶に彼の國に至れり。及び諸の無數百千の菩薩、十萬の天は皆倶に文殊師利に侍從せり。法を聞かんと欲するが故なり。爾の時、文殊師利は便ち [一六]光音天上に往き、大聲を謦揚せり。其の音普く三千大千世界に遍じ、 [一七]魔の宮殿を動し諸の惡道を滅して悅信を得せしむ。是に於いて聖智燈明大弟子は彼の洪音を聞き卽ち大ひに恐怖し、尋いで便ち地に躄れ自ら制すること能はず。譬へ

【一五】第七梵天 Brahmadeva とは梵天は色界初禪天なり。天界の中に於て下に六欲天あり。初禪天は六欲天の上にあれば第七といふ。梵天は婬欲を離れて寂靜清淨なれば梵天の名あり。此天に梵衆天梵輔天大梵天の三天あり。常に梵天といふときは大梵天を指す。大梵天は佛の出世每に必ず最初に佛の下に來り轉法輪を請ず。

【一六】光音天は色界第二禪天なり。此天は言語を口より發せず、語らんとする時は口より淨光を發して語る故に光音といふ。

【一七】魔とは摩羅 Māra の略。能奪命、障礙、擾亂、破壞等と譯す。人命を害し、善事を障礙するもの。欲界第六天主を魔王といふ。第六天他化自在天の住處を魔の宮殿といふ。

言く、「須菩提の意に於いて云何が淨法有りや」。須菩提、佛に白して言さく。「本より已に淨なり」。佛の言く。「諸の所說を聞いて言說に著せざる是れを謂つて淨となす。無に著し審かたる者は豈に淨と謂ふ可しや」。須菩提、佛に白して言さく、「法界は自然淨と爲す而して等知有りや」。佛の言く、「云何が須菩提よ、法界を知る可しや」。須菩提の言く、「知る可きなり」。佛の言く、「假令へ法をば知ること有るとも便ち生ずれば卽ち法とは異なると爲す。彼れ法界を求むることを爲せども、其の法界も亦法を了知せざるなり」。佛の言く、「設使へ須菩提よ、餘の法界と解脫とを知ること有ること無し。其れ法界を知る者は解脫を得ず。是くの如くならば云何が法界を了知するや」。爾の時、賢者須菩提は默然として答へず。是に於いて文殊師利、須菩提に謂ふ。「云何ぞ賢者よ、世尊が教ゆること有るに默して答へざるや」。須菩提の曰く、「默する所以は、本、無上正眞道意を發さざるに用るが故なり。所以は何ん。弟子の辯は有限り有礙なるに。菩薩の辯才は無限なり無礙なればなり」。文殊師利又問ふ。「云何が須菩提よ、法界には限礙有りや不や」。答へて曰く、「法界は無限なり無礙なり」。文殊師利の曰く、「假使し法界が無限無礙ならば、賢者よ曷ぞ默して而も礙なりと言ふことを爲すや」。須菩提答へて曰く、「其れ法界を知り盡さんと欲せば、便ち言說を以つて而も罣礙なりと爲す。若し法界は無量にして盡くす可からずと」知すること有らば、其の言ふ所を聞いて則ち礙と爲さず」。又問ふ。「須菩提よ意に於いて云何。法界に至つて盡くること有りと爲すや不や」。答へて曰く。「盡くす可からざる法は普門なり。何を以つての故に、法は盡くす可からざればなり」。文殊師利の曰く、「設使し法は不可盡ならば、云何が賢者は說法して而も礙となすや」。答へて曰く、「我が弟子に限つて所講も說法も盡く礙げ有り。佛界を觀ずるに量り有ること無し。法界に講說して盡くる時無し」。文殊師利又問ふ、「云何が須菩提よ、法に寧ぞ復境界有りと說くや。其れ法に境界を作すこと有らば、法を說くに則ち分數有らん」答へて曰く、「吾れは法に境界法有りとも境界法無しとも說かず」。文殊師利

く、弟子も是くの如し。生死の難を畏れては一切に益無し。譬へば大城中央に藥樹を生ずれば一切の人を療治する所多きが如く、菩薩も是くの如し。大慈悲に入つて一切智を發し、其の寶意を以つて一切群生を饒益する所多し。譬へば天雨の水は久しく在ること能はざるが如く、弟子も是くの如し。教授し說法すれども久しく立たず。譬へば春月には大ひに流水して滅盡する時無きが如く、菩薩も是くの如し。教授し說法して久しく立つこと得。譬へば冬山中に生ぜる樹を、若し斷截すること有らば時に應じて疾ひ生ずるが如く、是くの如く文殊師利よ、佛の現作する所にて、如來は般涅槃すと雖も、「三寶の教へは猶ほ斷絕せざるがごとし」。是に於て賢者須菩提、佛に白して言さく。「未曾有なり世尊よ、是の諸菩薩の名德の行は巍巍として無量なれば能く稱すること莫し。向には如來の講說は誠諦にして功德も是れ亦及び難し。假使へ菩薩は是くの如き德義を聞くとも歡喜せず亦愁悒せじ、是れを甚だ善しと爲す」。佛の言く。「菩薩は本より清淨の致す所なれば、是の故に一切の德義を說くを聞くとも喜ばず愁へず」。須菩提、佛に問ふて言く。「何をか謂つて本淨と爲すや」。世尊の曰く、「無我の本なり。無壽命の本なり。無貪身の本なり。而して無愚癡恩愛の本なり。是れ我所非我所の本なり。是くの如く菩薩は此の諸の本に於いて而も清淨を行ずるなり」。須菩提又問ふ。「世尊よ、何をか謂つて淨と爲すや」。佛の言く、「無取と無捨と是れを謂つて淨と爲す。不起と不滅と是れを謂つて淨と爲す。無思・無想・無穢・無潔、是れを謂つて淨と爲す。無高無下是れを謂つて淨と爲す。不作と非不作と、不冥と亦不明と、無塵垢と亦無諍亂と、不脫と亦不縛と是れを謂つて淨と爲す」。須菩提、佛に白して言さく。「無生死と亦無泥洹と、彼れ何れか謂つて淨と爲すや」。佛、須菩提に告げたまはく。「是くの如くなるを淨と爲す。泥洹を念ぜず生死を遠ざけず、爾るを乃ち淨と爲す。譬へば虛空をば淨と爲せども淨き虛空有ること無きが如し。是くの如き行者を清淨と爲す。彼れ爲作有ること無くして清淨なる者は、若し此れを聞くとも恐畏せじ是れを謂つて淨と爲すなり」。佛の

是くの如く、文殊師利よ、假使へば菩薩は一切の所有を施して惜まざらん。諸佛世尊は是の菩薩を歎じて『久しからずして佛法の華實を得て諸の群生に施さん』と。譬へば其の樹は柔軟にして根も株も深固ならん。曲校を現すと雖も終に墮つることを恐れざらん。是くの如く文殊師利よ、若し菩薩有つて恭敬して一切の人を禮事せん。終に弟子緣覺の地に墮するを恐れざらん。譬へば水の地に隨つて流るゝが如し。菩薩も是くの如し、憍慢有ること無く、一切智に從つて稽首し自歸せん。譬へば大海は地の中に立つに最も始成たり。皆一切江河諸流を含受するが如し。是くの如く菩薩は無慢を用つての故に、一切佛法の頂に立つことを得。譬へば大明月珠をば名けて照明と曰はん。諸の得んと欲する所は皆中より出でん。衆明月珠は與等無けん。悉く皆諸の明月珠を照して其の明は滅せざらん。是くの如く菩薩は諸の弟子緣覺を教授して、入律することを得、彼の行を墮せざらしむ。譬へば曼陀勒華の柔軟妙好にして、其の香周匝して四十里に聞るが如く、菩薩も是くの如し、聖賢智を以つて大慈悲を發し、普遍く衆生に安隱なることを得せしめん。譬へば曼陀勒華あり、若し病ひ有らん者、此の華香を聞がば其の病ひ卽ち愈ゆるが如く、菩薩も是くの如し、大慈大悲を以つて香行遍く至り、一切塵勞の病ひを除解せん。譬へば佛有ること無き時、優曇鉢樹の華無くして實有るが如く、未だ菩薩有らずしては佛法の華は出でざるなり。譬へば[一二]阿耨達龍王の假令へば雨時に閻浮利に遍ずるが如し、是くの如く菩薩も、若し法雨を放つて皆一切人民蠕動に遍ぜん。譬へば[一三]阿耨達の大淵より四江流れ出でて、悉く海に歸して滿ずること得るが如く、是くの如く菩薩も、[一四]四恩の行を流して以つて具足して大智慧海を滿ぜん。譬へば未だ大海有らざる時、閻浮利の人は自然に小摩尼珠を得るが如く、是くの如く文殊師利よ、未だ菩薩の意を發さゞる時は、皆弟子緣覺の法寶を承用す。譬へば其の有色の像は皆四大有るが如し。菩薩も是くの如し。諸の所說の法は皆一切を度脫して法門に入らしめんと欲するが故なり。譬へば樹木の山澤の中に生じては衆人に益あるが如

【一二】阿耨達龍王とは八大龍王の一、阿耨達に住し淸冷水を出し、四大河となり閻浮提を潤す。四河とは恒河Gaṅgā 信度河Sindhu 縛芻河Vakṣu 徙多河Śītāなり次第の如く池の東南西北より流出す。

【一三】阿耨達大淵とは阿耨達池のこと。閻浮提の中心。香山の南。大雪山の北にあり。周圍八百里。金銀瑠璃頗胝その岸を飾り金沙彌漫して淸波皎鏡たり。八地の菩薩化して此池に潛宅して龍王となる。此池より四河流出す。

【一四】四恩とは心地觀經には父母恩、衆生恩、國王恩、三寶恩を出す。釋氏要覽は父母恩、師長恩、國王恩、施主恩とあり。

に益する所有るが如し。是くの如く文殊師利よ、其れ初發意及び佛樹下に坐して後に當に發意すべきもの有らん。此の二菩薩は倶に一切衆垢の塵を除き諸の勤苦を燒かん。譬へば諸の樹には種種に各各なる名有り、其の色も同じからず、枝葉も各異なり、華實も相類せざらん。此の諸樹は皆四大に因つて滋茂することを得るが如し。是くの如く菩薩も、若干の行を奉じ衆の徳本を積み、皆成道の意を用つて、悉く一切智を勸助して成就するを得ん。譬へば轉輪聖王の在す所至には七寶と四種の兵とを奉じて皆悉く之れ從ふが如し。是くの如く菩薩は善權方便智慧度無極を得て、入らざる所無く、一切の諸の道品の法皆悉く隨從せん。譬へば鵄隨の鳥王は假使へ羅網の中に墮すとも續けて哀音を出すが如し。是くの如く文殊師利よ、設使へ菩薩、樔窟に墮して、未だ佛法を了せずとも食身を壞せず三界を出でずして、續けて師子覺吼を作し、空無想不願の法を說き、無造起滅の事を講ぜん。譬へば鵄隣鳥王の山頂に在つて住し而も肯へて鳴かざらんも、其の輩類を得れば乃ち鸞音を闡くが如し。是くの如く文殊師利よ。若し菩薩有らんに諸の弟子の中に入つては、不可思議なる佛音を講ぜざれども、諸の菩薩の中に在つては乃ち菩薩の事を說き、佛不可思議の音を講ぜん。譬へば[一]隨藍の風には地は固より閻浮利及び樹木・講堂・舍宅も持すること能はざるが如く、是くの如く文殊師利よ、一切の弟子緣覺は無思議なる佛法の名字及び佛の神通清淨變化に堪忍すること能はず。信有つて疑無き者は、自の功德の致す所に非ず、皆佛の威神によつて信を得せしむるなり。譬へば日の光明の淨不淨を照せども、亦喜悅も無く亦憎惡も無く、日月の殿舍は冥沒するの時無きが如し。是くの如く菩薩も、智慧善權の光明を放ち、弟子緣覺諸の凡夫の士と共に周旋して從事すれども、弟子の中に在ることを用つてせずして歡喜し、以つて凡夫の士の在らざるを愁悒と爲し、亦菩薩の權慧の場を失はざるなり。譬へば忉利天上における晝度樹に初めて葉の生ずる時、諸天之れを見て皆悉く歡喜し、心に念言すらく、『晝度樹は久しからずして當に華實有つて成就するを得べし』と。

【一】隨藍風とは毘嵐毘藍婆と同じ、迅猛風、暴風のこと。

開解せしめん。譬へば大[八]摩尼珍寶をば名けて釋迦惟羅迦と曰はん。[九]天帝釋此の寶を著せん時は、其の衣服・婇女・舍宅・講堂・宮殿を照して、一切皆清淨なる光明を見ん、大明月寶も亦無念なるが如く、是くの如く菩薩明慧の果は清淨解脫にして明月寶の如く、普く諸義を現じて永く想念無けん」。佛の言はく。「文殊師利よ、譬へば大明月寶をば名けて施一切願と曰はん。衆の所欲に隨つて、皆具足して饒に所るゝことを得せしめ、諸の願寶を施すとも亦無念なるが如く、其れ菩薩も亦想念無けん。譬へば虛空の中にして、大火起り復大雨を放つこと有らんに、其れ虛空に於いて寒からず熱ならざるが如く、是くの如く菩薩は三界の火中に處して、若しくは寂莫無爲の界に在つても無寒無熱ならん。譬へば彼の虛空の中に、毒樹を生じ復藥樹を生ぜしめんに、其の毒樹も虛空を害せず。其藥樹も除淨する所無きが如く、是くの如く菩薩は、善權方便を以つて、諸の毒樹に入つて成就することを得せしめ、藥樹・莖・節を以つて諸の根本を護れば衆垢塵勞は菩薩に著せず、諸根を除淨すれども亦淨むる所無く、倶に二事に入つて沾汚せらるゝこと無し。譬へば穿漏するの器をば但一處をのみ補ひて漏るゝことを得ざらしめ、餘をば捨てゝ補はずんば皆穿漏するが如く、是くの如く菩薩は住する所常に定まり大神通を具して異漏有ること無し、住する所有らば便ち別異の漏を現じて示現して出生し一切の本に隨つて而も爲めに法を說く。譬へば[一〇]騏驥の高足なる强くして勢ひ有り、馬畜を守護して己を貪衛せざるが如く、是くの如く菩薩も大慈悲を立てゝ强くして而も勢ひ有り、諸力に超越し衆人を救護して自ら身を念ぜざるなり。譬へば猛き師子は百獸の王にして懼るゝ所無きたり。唯大火のみを畏るゝが如く、是くの如く菩薩も亦畏るゝ所無く、弟子緣覺の地に墮つ。譬へば伊羅漫龍王は、畜獸の爲めに皆能く示現して清淨變化すと雖も、悉く是れ帝釋の本德の致す所なるが如し。是くの如く菩薩は、假使へ畜獸の中に墮すれば、則ち能く現じて諸の清淨法を說き、其の本行に隨つて之れを開導す。譬へば木を鑽つて火を出し明珠光りを放ち、其の二者に於いて倶

【八】 摩尼とは Mani 無垢・離垢、如意珠等と譯す寶。珠の名。龍王の腦中より出で隨意に寶を出生す。又帝釋天が所有せる金剛にして修羅と戰へる時碎けて地上に落ち變じて此寶珠となるといふ。

【九】 天帝釋とは釋提桓因又は釋迦提因陀羅 Sakradevendra 天は Deva 帝は Indra 釋は Sakra 故に梵漢並擧の名稱なり。須彌山頂の忉利天の天主。善見城に居し、四天王、及び他の三十二天を領し、佛法に歸依し、佛法を信ずる者を守護し、阿修羅の軍を征服す。印度神話の因陀羅なり。

【一〇】 騏驥とは勝れたるよき馬、

いて畏れず、亦怖懅すること無し」。須菩薩問ふ。「文殊師利よ、假使へば菩薩寂を了「解」して貪身せずして云何が得道するや」。文殊師利答へて曰く、「唯、須菩提よ、菩薩は得道すると見ずして貪と身とを知る。設使へば菩薩得道を見て貪と身とを知る者は、是の故に得道せず」。須菩提の曰く、「唯、文殊師利よ、菩薩は大[七]善權用を行ずることを爲すや、菩薩は貪と身とを見て得道せざるや」。文殊師利の曰く、「唯、須菩提よ、菩薩は智慧をもて善權を蒙らす。是れを菩薩聖性と爲す。以故へに菩薩は貪と身とを知つて得道せざるなり。譬へば大利斧を取つて大樹を斷截し、段段に之れを解し故の處に還著し、續いて復故の如くせんに地に墮れざるが如し、是くの如く菩薩に智慧善權有るを聖性と爲す。以故へに菩薩は貪と身とを知つて得道せざるなり。或時天より大雨あらんに樹は茂盛と生るが故に、莖節枝葉華實有り、一切に益有らん。是くの如く菩薩が大悲慈を行じて貪と身とを知らば、現に三界の種種なる形類に生れ、其の色貌に隨つて以つて衆生を益す。又須菩提よ、或は暴雨疾風を作つて其の樹を吹き墮さんがごとし。菩薩は大智慧を以つて、柔軟なる大雨を放ち、佛樹の下に在つて便ち復墮を現ず」。爾の時、世尊は文殊師利を讃じて曰く。「善い哉善い哉、文殊師利よ快く諸の菩薩の智慧と善權とを說き、而も聖性と爲せず乃ち是くの如くなるをや。爲めに大慈大悲の法行を說けるなり。今文殊師利よ、且く復我が言ふ所を聽け。譬へば國有り旣に强且つ大なり。雲霧四に起り、大熱石を放ち其の國を焚かんと欲、所有る草木皆當に燒かるべし、復雨ふりて洪水となれり滯り車軸の如し。諸の草木をして普く皆生長するを得せしめんが如し。是くの如く文殊師利よ。菩薩は智慧善權を雨ふらし、方便示現して一切の愚癡凡夫の士に入り、諸の其現の賢聖行を教授し、生死しつゝ奉律する人の爲めに義を示して悅ばしむ、譬へば香樹有らん其の根香・莖香・枝香・葉香・華香・實香各各別異なるが如し。是くの如く菩薩は智慧の事自然の性を以つて、一切の人の欲する所に隨ひ、其の本行に從つて而も爲めに法を說き、各をして其の心に歡喜し不捨大悲の本を

【七】善權とは方便のこと。佛が機に隨つて應ずる敎へを設くること。善巧方便。

義を求めずして義を得と、誰の爲めに是の章句を說きたまへるや」。文殊師利答へて曰く。「唯、須菩提よ、其の利義は得ること有ること無し。彼れ若し義を得んと求欲すること有らば、義に於いて則ち利無し。是れ義の爲めには利義を得ざるなり。佛の言へるが如し曰く、義を求めずして義を得、義を求むる者は反つて義を得ずと」。須菩提、又問ふ。「文殊師利よ、世尊は譬喩經に說いて言へり。奚爲ぞ佛は一切法は悉く法に非ずと言ふや」。文殊師利、答へて曰く、「唯然なり須菩提よ、當に所欲法を除斷すべし、況や非法に於いてをや。假使へば斷ずる者は其の法をば卽ち非法にあらずと爲すの謂ひたりと」。須菩提、又問ふ。「云何んが文殊師利よ、佛法が寧ろ復是れ非法なりや」。答へて曰く。「不なり。佛法は興盛無し。其れ興盛せざる是れを謂つて法と爲す。佛の言へるが如し曰く、一法諸法は皆非法と爲すと」。須菩提の曰く、「未曾有なり甚だ及び難し。文殊師利よ、新學の菩薩は是の說を聞いて恐畏せざらんや」。文殊師利の曰く。「唯、須菩提よ、四事有り。師子の子は師子吼を聞けども、怖懼せず衣毛竪たず。何等をか四と爲すや。一には其の種姓眞なり。二には師子の生む所たり。三には姝者のために育まるゝことを蒙り、四には諸有に著せず、是れを四と爲す。是くの如き行者を如來の種と爲す誠諦に菩薩なり。如來の生む所なれば法の爲めに進ませられ、弟子緣覺の上に過ぎたり、則ち其の類に非ざるなり。彼れは一切法を說くを聞けども終に恐懼せず。講說せられ一切語らるゝ所に在つて畏懅すること無く衣毛も竪たず、心懈怠せず亦疑怯無し。又須菩提よ、鳥子の飛行して虛空に在らんに寧ろ恐れ有らんや」。答へて曰く。「無きなり」。文殊師利の曰く、「是くの如し須菩提よ、菩薩は空界に住したまふ。彼れは諸法を聞けども恐懼せず。一切法に於いても亦畏懅すること無く疑難する所無し。諸法を了ずるを用つての故に。諸の所說を聞きて恐れず懅れず畏怖も無し」。文殊師利、須菩提に謂つていはく。「何に從つてか畏るゝことを致すや」。答へて曰く。「貪を用つて身を見るが故に恐畏有り」。文殊師利の曰く、「菩薩は貪と身とを知るを以つて、一切法の所說に於

れ若し所住無ければ便ち普遍く至る。是の賢聖行は行に於いて行有り、行無き者は是れ賢聖行に非ず」。須菩提又問ふ。「文殊師利よ。何をか謂つて賢聖と爲すや」。答へて曰く。「賢聖とは謂く空を御して而も跡無きなり」。又問ふ。「文殊師利よ。一切法は寧ろ復是れ無垢なり空等を御するや不や」。答へて曰く。「然り」。須菩提又問ふ。「何なる緣をもて爾るや」。文殊師利の曰く。「譬へば衆水の大海に歸し合して一味と爲るが如し。是くの如く須菩提よ。無垢空等は諸法を御するを以つて、皆一味と作り用つて衆生を脫せしむ」。又問ふ。「文殊師利よ、何んが解脫を說くや」。曰く。「云何が須菩提、何なる緣か礙有るや」。「日に用ゐて智無きが故に礙有るなり」。答へて曰く。「是くの如し須菩提よ。用度ゐて智無きが故に解脫を說く」。又問ふ。「文殊師利よ、一切の說法に無と有と異なれり。何によりてか是の有智無智の說を得るや」。答へて曰く。「譬へば夏月の熱時に水を說き、冬日の寒冷にも亦復水を說く。其の水に異なり無きが如く。是くの如く須菩提よ。用想清白ならざれば塵垢有り、塵垢有るを以つて便ち無智有りと說き、淨想を作せば著有ること無し、以故に智有りと說く。彼の諸の正士には、有智無智の中間を說くこと無し」。須菩提又問ふ。「文殊師利よ、其の義は遠行なりや」。答へて曰く。「二行有るを用つての故に」。須菩提の曰く。「文殊師利よ、義は見難きや」。答へて曰く。「智慧の眼を離るればなり」。須菩提の曰く。「義は受持し難きや」。文殊師利答へて曰く。「得取すべからず」。須菩提の曰く。「其の義は知り難きや」。答へて曰く。「解せざるを用つての故に」。須菩提の曰く。「義は了じ難きや」。答へて曰く。「已に諸の覺意を離るゝが故に」。須菩提の曰く。「義は說き難きや」。答へて曰く。「空等の爲めの故に」。須菩提の曰く。「義は無思なりや」。答へて曰く。「無想行を用ゐよ」。須菩提の曰く。「義は無念なりや」。答へて曰く。「是の故に無言說なり」。須菩提の曰く。「義は無賢聖なりや」。答へて曰く。「是の故に離想願なり」。須菩提の曰く。「黠とは現智の義なりや」。答へて曰く。「是の故に自見せざるなり」。須菩提、又問ふ。「文殊師利よ、如來の曰ふ若きは、利義を求むるに義を得ず、利

須菩提よ、譬へば虛空は是れ一切の藥草樹木萬物「を入るゝ」の器に非ざるが如く、是くの如く須菩提よ。菩薩は淸淨等の意を發し、[五]智慧度無極を承けて而も長育することを得るなり」。又問ふ。「文殊師利よ、云何が菩薩は長育することを得るや」。答へて曰く。「譬へば虛空が長育する所の如く、菩薩も亦然り、虛空及び菩薩は終に增益も無く亦損耗も無し」。又問ふ。「文殊師利よ、是れ何なる謂を語れるものなりや」。答へて曰く。「塵垢を增さず、佛法を損ぜざるなり」。又問ふ。「文殊師利よ、塵と佛法と何なる異なり有りや」。答へて曰く。「譬へば須彌山に近づけば、光明同じく照して一貌に現じて皆金色たらしむるが如く、菩薩も是くの如し。智慧の光明を以つて諸の塵垢を消し、同じく其の貌をして佛法の色爲らしむ。唯、須菩提よ是の故に諸塵は皆是れ佛法なり。智慧明らかなる者は當に是の觀を作して異なり有ること無し。一切諸法をば是くて佛法たりと謂ふなり」。又問ふ。「曷ぞ一切諸法は皆佛法と爲すと云ふや」。答へて曰く。「所作の如は諸佛の爲したまふ所なればなり」。又問ふ。「云何が文殊師利よ、如は佛の爲したまふ所なりや」。答へて曰く。「如は本も末も亦然なり。其の如は不增不減なり。是れを謂つて如と爲す」。又問ふ。「文殊師利よ、何をか謂つて本と爲し云何が末と爲すや」。答へて曰く。「本とは空なり末とは寂なり。是れを本末と謂ふ」。又問ふ。「文殊師利よ、空と寂と何なる異なり有るや」。答へて曰く。「譬へば金と寶との如き寧ろ異なり有りや無しや」。須菩提の曰く。「其れ物は一等なり、但、名の異なるのみなり」。答へて曰く。「是くの如し、空は寂寞たるを以つて但名異なる耳。智者は字數に著せざるなり」。又問ふ。「文殊師利よ。何をか癡相と謂ふや云何が[六]黠相なりや」。答へて曰く。「佛の敎へらるゝが如く、因緣を癡相と爲し、法義を黠相と爲す」。又問ふ。「文殊師利よ、何なる所をか因緣相と爲すや」。答へて曰く。「十二因緣相をば則ち須菩提よ、因緣相と爲すなり。彼れ若し念造有らば便ち想知有り。假使へば念造無く想無ければ則ち現知せず。彼の癡者は念起有り。是れ等は卷ち言說有りと知る。黠者は念造無ければ則ち言說無しと知る。彼

【五】　智慧度無極とは般若波羅蜜。

【六】　黠相とは智相のこと。

の法器に非ずと爲す。設し當來を御するに未だ行ぜざること數千劫、三界に周旋して恐畏無く、[二]三垢に於いて而も無心にて生死を欲樂す。譬へば園囿の講堂に遊觀して一切に歡悅し、所有る往來に六事有ること無きが如し。是れを謂つて佛法器と爲す。又須菩提よ。菩薩は現在に愛樂あれども而も欲樂無し。瞋怒を示現すれども而も恚害無し。愚癡を示現すれども而も闇冥無し。殑弊剛强なる[三]屠魁を示現すれども而も塵垢無し。現在の三界の諸の無御者をば正しく導くことを爲す。憒亂の中に於いて順ずれども而も荒まず。貢高なる者に於いて謙卑して禮を爲す。諸の群生の爲めに其の重擔を除き、一切を敎授して三寶をして絕えざらしむ。[四]三達智を得て而も普く示現す。此れを謂つて是れ諸佛の法器と爲す」。是に於いて須菩提は文殊師利に問ふ。「諸法は等しきのみ、倶に共に同擧するに本際は一なり」。「是れ器なり非器なりと何んが知るを得るや」。文殊師利答へて曰く。「譬へば陶家の泥土は一等にして種種の器を作つて、皆共に一處に合して之れ燒けども、或ものは醍醐を受け、或ものは麻油を受け、或ものは甘露蜜を受け、或ものは不淨を受く。其の泥は一等にして若干なること無きが如くなり。是くの如く須菩提よ、諸法は同等にして倶に共に一なり其の本際は一なり。緣起に從つて行ずれば則ち差特有り。彼の醍醐と油器とは弟子と緣覺とを喩へ、甘露蜜器は諸菩薩を謂ふ。不淨器は方に下賤凡夫の士の如くなり」。又問ふ。「文殊師利よ、諸有る器をば非器爲らしむ可しや不や」答へて曰く。「非器たらしむ可きのみ」。須菩提の曰く。「何の因緣を以つてなりや」。答へて曰く。「唯、須菩提よ、其れ一切の欲塵を受くるの器の中に有つて住在す。若し復能く諸の欲塵を斷ずること有らば、是れ悉く佛法の器爲るに非ず」。又問ふ。「文殊師利よ、器には何なる高下有りや」。答へて曰く。「唯、須菩提よ、器には高も無く下も無し」。又問ふ。「云何が文殊師利よ、器に高下無きや」。答へて曰く。「寶には高きも無く下きも無し。用法にも所住にも高下無きが故に、則ち牢堅の器と爲し、假使ひ高下有つて行ゆとも、則ち知んぬ。是れ破壞の器爲ることを。唯、

【二】三垢とは貪瞋癡の三毒煩惱。

【三】屠魁とは屠殺するものの首領。

【四】三達智と三明。阿羅漢果の聖者の有する三種の智。過去現在未來に通達する智なり。宿住智證明、漏盡智證明、死生智證明。

佛說文殊師利現寶藏經

卷の上

西晉　月氏三藏竺法護譯

聞けること是くの如し。一時、佛、舍衞の祇樹給孤獨精舍に遊びたまひ、大比丘衆と倶なりき。比丘は千二百五十、菩薩は萬人なり。爾の時、佛、迦利羅講堂に於いて坐に上りたまひ、無央數百千の衆とともに周匝圍遶せられ爲めに說を說く。是に於いて文殊師利と五百の菩薩及び諸天釋梵四天王の眷屬と倶に佛の所に詣り、佛の足を稽首し、佛を遶ること三匝して却つて一面に坐しぬ。

文殊師利、佛に言して白さく。「向者には世尊よ、何なる法を說かれしや。願くは天中天よ、講ぜられし所をば尊崇せん」と。賢者須菩提は佛の威神を承け、文殊師利に白さく。「向者には世尊は弟子の事を說きたまへり。願くは今、上人よ菩薩の行を說きたまへ」。文殊師利、須菩提に答ふ。「一切の弟子と緣覺との所行は菩薩の器に非ず。譬んぞ用つて問ふことを爲んや」と。曰く。「願くは審かに是の器なる者を解說したまへ當に之れを聽受すべし」と。文殊師利、答へて曰く。「尊者須菩提よ。爲れ何者か是れ器、云何が非器なるを知るや」。須菩提の曰く。「其れ諸の弟子は每に聲音を以つて解脫することを得たり。我等豈に是れ器なり非器なりと知らんや。今之れを請問す、願ひ樂つて聞かんと欲す」。文殊師利答へて曰く。「唯、須菩提よ、其れ冥より出づること有る者は皆佛法の器に非ず。假使へ冥より照明を現ずることを爲すも亦冥に墮せず。衆生を救護して冥と合せず、一切所有るものをもて佛法の器と造す。又須菩提よ。限を得て而も學び學法已に成じて、一切の人を視、見て與取せず。其の意恐懼して心之れを厭穢し、諸の三界を畏れて以つて喜樂せず、則ち是れ諸佛

【一】須菩提 Subhuti 善吉と譯す。十六弟子の一、解空第一。

佛說文殊師利現寶藏經解題

本經は出三藏記卷三（正藏五五ノ一九頁）によると涼土譯出となつてゐるから、長安や洛陽で譯されたのではない。西域に近い涼州に於て西晋の竺法護が太始六年（晋武帝泰始西紀二七〇）十月に譯出したのが初出。二卷からなつてゐる、然るに內典錄は二卷と三卷三十三紙とを兩處に別出してゐるが恐く三は二の誤りであらう。此經の同本異譯は靜泰錄に本經と失譯の大方廣寶篋經とを擧げ、內典錄には文殊師利現寶藏經二卷西晋安法欽譯を出し、又同名の經を西晋支法度譯として法護譯と大同小異であるといふ。これによつてみると本經には西晋に安法欽譯と竺法護譯と支法度譯との三本があつたことになる。が譯經は法護譯が實際にあつたものと考へられる。他の二本は果して譯經の事實があつたのが疑はしい。

本經は文殊と佛弟子須菩提・舍利弗・阿難・大迦葉・富樓那・尼乾子等と菩薩の大道に就いて問答し、眞の佛教は無我・緣起・三解脫等なることを說いて如來の寶藏を開說してゐる。特に佛教に關して四十五種の佛教を說き、菩薩に三十二の德鎧を述ぶるが如き、又は文殊が夏安居に於て安居せずして城中に入り婇女等を化度せるが如き、又像法末法の佛教を豫言せるが如き、此等は皆本經の成立時代及當時の教團事情を物語れる記錄なりと認むべし。要するに本經は文殊を中心とせる西域地方の佛教の一面をみる上に藥師經等と共に注意すべき重要なる經典である。

昭和七年三月　　　　譯者　田島德音識

し」。「若し菩薩、此の五逆に住して、疾く無上正眞の道を逮といはば、何を謂つて五と爲すや。假使し菩薩慇懃に至心に大道意發して、小乘心を去つて聲聞緣覺の地に墮落せざるは、是れ第一逆なり。發心して廣く一切の所有を施して愛惜する所無く、慳貪と共に合會せざるは、是れ第二逆なり。而も慈心を發し一切衆生をば吾れは當に之れを度すべし中ばにて懈廢せざるは、是れ第三逆なり。一切法を見るに所從生無し、尋いで便ち無所從生法忍を逮得して、復中ばにて六十二の疑邪見と俱に合せざるは、是れ第四逆なり。當に知見すべき所、當に斷除すべき所、當に須宜すべき所、當に成覺すべき所をば、發意の頃に悉く知り見に覺り、逹せざる所靡くして而も住する所無く、一切智を成じて三界に著せざるをば是れを五逆と爲す」。文殊師利の謂く。「其れ天子よ、菩薩は已に是の五逆に住して、爾乃ち疾く無上正眞の道を成ず。爲れ最正覺なり」。天子又問ふ。「所說のごとくは何ぞ逆は逆と成らず、順は順と成らずと謂ふや」。答へて曰く。「紫磨金及び如意珠の如き、不淨に墮せりと雖も俱に合せりと爲すや」。答へて曰く。「合せず。所以は何ん。其の物は眞なるが故に僞と合せざるなり」。文殊告げて曰く。「人心は本淨なり。縱ひ穢濁に處しても則ち瑕疵無し。猶ほ日は明にして冥と合せざるが如し。亦蓮花は泥塵の爲めに沾汚せられざるが如し。譬へば虛空は能く汚す者無きが如く、學法を行ぜんと欲して菩薩の心を發し、諸の逆に住しても亦動搖せず、諸逆を開化するをば則ち名けて、其れ心は本に順ずるに淨と穢と合せずと曰ふ。所以は何ん、設使し合すれば復別なる可からず、水及び泥土は尙ほ俱に合せず、況や心本清淨なるに于てをや。無形と形と合せんや」。

佛說文殊師利淨律經　終

彼岸門に順度するが故に、六度は極り無し六欲を攝し所處を無からしむ、大乘門爲るが故に。空を觀求するに三界は化の如く終始夢の如し、智慧明門の故に、一切諸法は皆本より無法無生法忍爲り。明達すること自然にして所として了せざるは無し。其の慧は他人に依つて明らめざるが故なり」。

天子又問ふ。「文殊師利よ、何をか法界の門と謂ふや」。答へて曰く。「其れ法界とは則ち普門を曰ふなり」。又問ふ。「其れ法界とは何れの所を界と爲すや」。答へて曰く。「一切衆生の界とする所をば名けて法界と曰ふ」。又問ふ。「其れ法界は豈に分際有らんや」。文殊答へて曰く。「虚空の界に寧ろ分際有らんや」。報へて曰く。「不なり文殊よ」。答へて曰く。「猶ほ虚空の如く分際有ること無し。法界も是くの如く亦分際無し」。天子又問ふて曰く。「豈に法界を分別す可しや」。答へて曰く。「其れ法界は分別す可からず」。天子又問ふ。「仁者、何に因つて諸法を解明して、乃し能く曉了して斯くの如き辯才あるや」。文殊告げて曰く。「天子よ意の所趣に於いて云何。其れ呼響すれば音の出づること有り、何を以つてか法を解するや」。天子報へて曰く。「其れ呼響は諸法を解せず。緣合成するを以つて乃し響出づ矣」。答へて曰く。「是くの如し天子よ。菩薩は皆衆生緣に因つての故に所說有るなり」。天子又問ふ。「仁者、何所に住して而も所說有るや」。答へて曰く。「如來の化住するところにて講[說]する所有るなり。吾が住する所、演ぶる所は斯くの若し。問ふて曰く。「如來の化法は住する所無くして而も說く所有りや」。答ふ。「如來の化の如きは無所住にして而所說有り、吾が宣る所も亦復是くの如し。設使し文殊よ、一切法に於いて住立する所無くして而も所說有らば、仁は何なる所に住して、無上正眞の道を成じ最正覺を爲すや」。答へて曰く。「吾れは五逆に住して乃し無上正眞の道を成ず」。又問ふ。「文殊よ、其れ五逆は何なる所に住することを爲すや」。答へて曰く。「其れ五逆は根本有ること無く亦住する所も無し」。又問ふ。「如來說いて言く。其れ逆を作る者は無間は避く可くとも地獄は離れざるたり」。答へて曰く。「是くの如し天子よ。佛の所說の如く、其れ逆を作る者は當に地獄に墮つべ

道門品第四

天子又問ふ。「一切諸法は何を以つて門の元首と爲すや」。答へて曰く。「無順の念を以つて門首と爲す。生死に周旋する斷義の念をば泥洹と爲す。精進を行ぜざるをば罣礙門と爲す。精進の行をば道品門と爲す。狐疑の行を陰蓋門と爲す。勤修して解脫するは無罣礙門たり。諸の著を思想するは塵勞門と爲す。想念する所無く虛妄有ること無きは無恩愛門なり。諸亂多念なるは衆妄想門たり。寂然の行をば恬怕門と爲す。六十二見をば憍慢門と爲す。空無を修するは無自大門なり。惡しき親友に隨ふをば惡罪門と爲す。善き親友に從ふをば善法門と爲す。衆の邪見の事をば癡患門と爲す。正見の義をば安隱門と爲す。慳貪の事をば貧賤門と爲す。布施の義をば大富門と爲す。戒を毀犯する者は便ち常に諸の惡道門に歸趣すべし。禁戒を奉修するものは常に一切生善處門に歸すべし。諍訟を喜ぶ者は法門を遠失せん。若し忍辱の者は殊特超異の門に歸することを得ん。懈怠爲る者は心垢穢門なり。遵行精進するものは無垢門と爲す。放逸の事は亂意門と爲す。一心の事は定意門と爲す。惡習の行と擬冥の惑は牛羊門の如し。智慧を修する者は三十七品をば道法本師子の門と爲す。悉く慈心の行を具足する者は無所唐門なり。悲哀して行ずる者は志和雅門なり。性として和柔を以つてするものは無諛諂門なり。喜悅を行ずるものは樂法樂門なり。修行して護る者は無所適莫無增減門なり。四意止を行じて宿德を失はざるは諸所福門なり。四意斷は順平等門なり。四神足は心身輕門なり。五根行は篤信の義を元首門と爲す。五力行は塵勞及び諸の愛欲の爲めに沾汚せられざるの門なり。七覺意は悉く已に平等慧を曉了するの門たり。八道行は一切の衆邪異徑迷惑を棄捐するの門なり。復次に天子よ。菩薩を計するに諸の佛法元首の門爲り諸法を將護するは法自在門なるが故に。善權方便は處處無處の門を曉了するが故に。智度は極り無し通じて一切衆生の心念所念を知り

勞恩愛の本を曉了せりと爲す」。天子又問ふ。「塵勞をば云何がして度脫を蒙るや。實とや爲ん虛とや爲ん」。答へて曰く。「猶ほ人有つて臥して夢中に出でて毒蛇之れを螫したりとせん。其の人苦痛して堪任すること能はず、尋いで時に便ち除毒の藥を服して、其の毒卽ち滅し痛惱休息せるが如し。天子の意に於いて所趣云何、其の人審に毒蛇に螫されたりと爲んや、虛事なりと爲んや」。答へて曰く。「虛たりと爲す實なりと言ふ可からず」。又問ふ。「設使し虛ならば、何の故に毒せられて藥にて除くことを蒙るや」。答へて曰く。「虛妄なること夢の如し。夢は虛にして不實なれども而も毒を被る。毒の除かるるも亦然なり亦除く所無し」。文殊答へて曰く。「衆聖、空を解して、一切の塵勞恩愛を開化することも亦復是くの如し。天子の何をか塵勞恩愛を開化すると謂ふや、實と爲んや虛と爲んやと問へる如き、此の義を了せんと欲せば、我が身の如き計するに身有ること無し、恩愛塵勞實に恩愛無きことも亦復斯くの如し。設使し我が身是れ實身ならば恩愛塵勞も亦當に常に存すべし所以は塵勞なればなり。塵勞無くんば我が已身を用つてするも身有ること無きが故に。是れに由るが故に、能く塵勞を開化することを得ること有る無し。所以は何ん。一切諸法は皆爲れ寂寞にして無生なるが故に、諸法は惔怕にして受持す可からざるが故に。諸法は靜默にして歸趣無きが故に。諸法は皆盡く積聚無きが故に。諸法は無盡にして所生無きが故に。諸法は不生にして所成無きが故に。諸法は無成なり無造を用つての故に。諸法は無作なり所爲無きが故に。諸法は無爲なり無我を用つての故に。諸法は無我なり無主を用つての故に。諸法は無主なり虛空の如くなるが故に。諸法は無來なり所著無きが故に。諸法は無來たり無住に從るが故に。諸法は無住なり所受無きが故に。諸法は無受なり所著無きが故に。是の故に天子よ。究竟じて化を蒙り、成じて法律と爲せども亦化せらるること無きなり」。

とやせん。若しは菩薩律とやせん」。文殊答へて曰く。「天子よ意の所志に於いて云何。其れ大海は、何なる水を受け何なる水を捨置するとやせん」。答へて曰く。「其れ大海は水として受けざるは無し」。報へて曰く。「是くの如し天子よ。菩薩の律は猶ほ大海の汚穢を逆けず。十方の諸律之れに歸せざるは靡し。聲聞緣覺、一切衆生をば行律をもて開化して普く之れに遊ぶなり」。天子又問ふ。「文殊師利よ、言ふ所の律とは爲れ何をか謂ふや」。答へて曰く。「言ふ所の律とは恩愛塵勞を開導し教化するが故に曰つて律と爲す。貪欲を曉了するが故に曰つて律と爲す」。天子又問ふ。「何をか恩愛塵勞を開導すると謂ひ、何をか貪欲を曉了すると謂ふや」。答へて曰く。「衆念思想にて吾我有りと計し、諸見に處して顚倒を棄てず、愚癡の本を捨てず明めず、二事を行じて塵勞を興發す。此れを分別するを、是れを貪欲を曉了すと謂ふなり。彼れ若し修行して貪思想無く、淨導隨順して吾我を計せず、諸見に住せず顚倒を損捨し無明愚癡の冥を棄捨して、二行を爲さず塵勞を興さず亦諍亂無し。諍亂無く已りなば究竟じて永く安し。是れを開化塵勞の律と謂ふ。譬へば天子に其れ術師有らん。明識にして能く毒虺の種類を知り、便ち呪術を以つて害毒を除去するが如し。學者斯くの如く、設し能く塵勞の本末に根源有ること無しと分別すれば、則ち能く塵勞恩愛を消滅す」。天子、又問ふ。「何をか塵勞開化する本末の律と謂ふや」。答へて曰く。「衆の想念に於ける本末の所行には、想念有ること無ければ則ち諍ひを興さざるなり。已に諍ひを興さざれば則ち著する所無し。已に著する所無ければ則ち倚る所無し。已に倚る所無ければ則ち住する所無し。已に住する所無ければ則ち惱熱無し。已に惱熱無ければ究竟じて教へ被れて度脫を蒙る。此れを謂つて律と爲す。設使し天子よ、賢聖の慧玄妙の智を以つて、塵勞恩愛の本を曉了するに、虛妄にして空無なり、無所にして是に在り、常主有ること無く亦所屬も無し、從來する所も無く從去する所も無し、處所有ること無く亦方面も無し、內無く外無く亦兩間ならず、亦積聚にもあらず、色無く像無く形貌有ること無し。是れを塵

士の滅を現ずるは深慧なる法身なれば、永く存して朽ちず増さず減ぜず三界に續現す、是れ菩薩律なり。大火にて山林樹木を燒くときは、燔燎せざるは莫く禽獸は馳せ竄るるが若く、小志のものは玆の如く、三界の難を畏れて泥洹に藏隱る、是れ聲聞律なり。生死を樂み三界に獨歩して意に怯弱なること無く、欣心して道法の樂を娛樂し衆生を勸化し、亦苑囿、遊觀の園の花實茂盛して悅豫する所多きが如きは是れ菩薩律なり。罣礙盤結の難を斷除すること能はず、而も處所有るは是れ聲聞律なり。一切蔽蓋の患ひを磨滅して、永く止處無きは是れ菩薩律なり。要を取つて之れを言はば而も限節有り。自ら身を繫縛して以て德に限有つて、而も見に戒定慧解度知見の事を成就しても無極の大道を具足すること能はざるは是れ聲聞律なり。接する所は玄邈にして志は虛空の如く功勳無量なれば、戒定慧解度知見の品は稱げて載す可からず、是れ菩薩律なり」と。爾の時、世尊、文殊師利を嘆じて曰く。「善い哉、善い哉、快く說きて此の諸の菩薩律を解せり。文殊よ聽け、吾れ喩へを引いて重ねて解き、是の義の歸するところをして廣く普く究竟ぜしめん。猶ほ二人ありて、一人は牛跡の水を嘆譽し、一人は起立して大海積水の功を咨嗟するが如き、意に於いて云何。其の人の牛跡の水を歎譽して能く久しく如らんや」。答へて曰く。「牛跡の水は甚だ少少爲り稱譽するに足らず」。佛の言く。「文殊よ、聲聞の律の所見の威神も亦復玆の若し。牛跡の水の稱譽するに足らざるが如し。彼の人の起立して大海を嗟嘆するは能く如何ぞや」。答へて曰く。「甚だ多し甚だ多し、天中の天よ。其れ大海とは邊際有ること無く、齊限すべからず深廣なること計り難し」。佛の言く。「菩薩の律も當に是く觀ずることを作すべし。猶ほ江海は訾量す可からざるが如しと」。佛、是く說きたまへる時、二萬二千人は無所從生法忍を逮得し、異口同音に皆歎じて曰く。「我等は世尊よ、當に斯の菩薩の律を學し、無央數人を開導し發起すべし」と。

寂律音天子は復文殊師利に問ふ。「文殊よ、何なる律をか學ぶことを爲んや。聲聞緣覺の律を修す

「我等願くは彼の寶英佛の土に生れて、聲聞たることを得ん」と。文殊答へて曰く。「諸の族姓子よ、聲聞の心を懐くことを以つてしては彼の佛土には生る可からず。汝等、當に大道の心發して乃ち彼の土に至るべし」と。時に應じて教へを受け、皆無上正眞道意を發せり。佛は悉くに記して當に彼の土に生るべしと說きたまへり。

解律品第三

寂順律音天子、復、文殊に問ふ。「何たるをか聲聞律と謂ひ、何なるをか菩薩律と謂ふや」。答へて曰く。「教へを受けて三界の難を畏れ瘡の如く厭患する者は聲聞の律なり。無量の生死を護つて周旋し、一切人民・蚑行・喘息・蠕動の類を勸安し、三界を開導して其の疑網衆想の著を決するは、是れ菩薩律なり。惡を厭ひ德を積み以つて慳を用つて廢して自ら進むこと能はざるは是れ聲聞律なり。功を興して德と爲し諸行を厭はず、以つて衆生を益し因つて濟ふことを得るは、是れ菩薩律なり。一切塵勞の欲と己身にて惡とする所を滅除するは、是れ聲聞律なり。一切衆生塵勞恩愛の著を政伐するは、是れ菩薩律なり。諸天の心行の所念所志の不同を覩ざるは、是れ聲聞律なり。自ら三千大千の佛國土の根と心との歸する所を見るは、是れ菩薩律たり。但し己心の所行を察するは是れ聲聞律なり。普く十方諸佛の處行と衆生の心念とを見るは是れ菩薩律なり。唯、己身の志性の所趣を照すものは是れ聲聞律なり。一切人民の行、蜎飛蠕動の心念を光し、三界の居に各本と末と有りと思惟するは是れ菩薩律なり。以ふに一切衆魔に將護せられ難きは是れ聲聞律なり。一切三千大千世界の諸魔官屬を降化し、衆の魔の行を壞つて能く正法を受くるは是れ菩薩律なり。瓦石の器を破碎すれば還合す可からざるが如く、小志の德にて滅度し、是くの如く正進に進まざるは是れ聲聞律なり。猶し金器は破敗れ爲りと雖も終に遺棄せずして、即ち還合せ以つて寶器と爲す可きが若く、大

り。則ち天眼を以つて五趣に生死往來し周旋する人民、蜎蜚蠕動蚑行喘息形物の類の生を歸する所を觀る。則ち慧眼を以つて一切衆生の疇の心行所念を察知す。則ち法眼を以つて三世・三界・群萠の一切の人民の行く可き所をば視見る。則ち佛眼を以つて皆明かに一切諸法を觀ずるに、法藏祕典を用つてす、聖燿の照す所なり。則ち天耳を以つて遙かに諸佛の宣べたまふ所の經法を聞く。念慧念知無くして過去無央數劫、更歷する所を以つて、而も神足を以つて無量なる諸の佛國に遊び、土として周遍せざること靡く、諸漏を盡せども無餘修解脫に至らず。其の形を現ずれども色身有ること無く、講說する所有れども文字を演べず、思惟する所有れども心想に著無く、顏貌姿艷端正を示し、相の莊校なると衆好若干とを以つて、而も功德を以つて自ら其の體を嚴る。威神殊絕なれば能く當る者無し。名稱は普く流り功勳は聞き布き、三世に通じて薇礙せらるゝこと無し。咨嗟せらるゝ慧を以つて而も馨香と爲して自ら其の身を熏ず。則ち世法に於いて著する所無し。塵勞の爲めに染汚せられず、惡口麁辭も之れを毀つこと能はず。則ち神通を以つて自ら娛樂し、博聞して厭くこと無く辯才を頒宣して師子吼を爲し、智慧の光りを以つて所として聖明の達を照さざる靡く、而も爲めに雷震を爲し幽隱の愚を滅除し閉塞す。所說は無盡にして總持を通解し、佛の觀察したまふ所は聲聞緣覺の知らざる處に所るなり。常に諸佛覺意を見ること海の如く、三昧の定は猶、須彌山のごとし。忍辱柔和等は地の如く、勇猛の力は魔の官屬を降し、諸の外道を棄てゝ安樂自在なることは天帝釋の如し。喩へば梵天の若きは心に由を得れば儔匹有る無く、比を求むるに比し難く等倫無し、亦虛空の如く喩へと爲すべからず、所として周ねからざるは靡く所として入らざるは無し。天子よ、寶英如來、所生の國土における聲聞の衆の其の功德の勳を知らんと欲はゞ、復此れよりも超えたり。吾が歎ずる所如く計量すべからず」と。文殊師利、是の語を說ける時、五百の比丘、五百の比丘尼、五百の優婆塞、五百の優婆夷、五千の天子は未だ道證を得ず、發心して佛世尊に白さく。

の欲をば降伏すること能はず。猶し天子の細軟なる妙衣の其の價百千なるに、天の殊特珍寶諸華を以つて、百千萬歳此の好衣に熏じたるに、其の衣は常に香ひ香氣普く流れ、巍巍たる芬馥は未だ曾つて歇むこと有らず、諸天世人より皆愛樂せらるゝが如く、菩薩も是くの如し。無數劫より諸法香を行じて、所願を具せずんば中ばにて滅度せず、而も常に佛の無上道、戒・定・慧、解度、知見の聲を演出し、罣礙塵勞の欲を降伏し、天上に遊び及び人間・天龍鬼神・諸阿須倫　君子・庶民に至るまで奉敬せざるは莫し。而も見んと欲する者をば恒に弘く濟度す」と。寂順律音天子、復、文殊に問ふ。「其の寶英如來至眞の佛土には、聲聞の衆をば如何が爲すや」。文殊答へて曰く。「篤信をもて御せず他の敎へにも從はず、法を行ぜず法界を毀たず。亦八等ならずして八邪を離る。須陀洹にあらざれば皆一切の恐懼する惡趣を度し、斯陀含に非ざれば來つて衆生を化し、阿那含に非ざれば一切法に於いて往來する所無く、阿羅漢に非ずして而も皆三千世界の供養の利を受く。欲を離れざれども亦欲を以つて瘡患なりと見ず。瞋恚を離れざれども怨恨を以つて燋然なりと見ず。衆生に於いて害心を懷かず亦憂ふる所無し。癡を離れざれども愚騃を以つて危難と爲ず、窈冥と及び一切法とを滅除す。塵勞を離れざれども懇懃に精進す。一切衆生の愛欲を化し去つて高節を逮得し、生に從ふ所無くして而も現生に遊び、諸の想念に於いて衆生を開化し、吾我と及び人、壽とを計せざれば、悉く受くる所も無く亦捨する所も無し。淨なるをもて必ず一切人民のために衆祐の德を施す所たり。無意無念にして以つて意止を修し、四意を奉じて不起不滅を斷じ、四神足を行じて身意寂然たり。五根に遊つて一切衆生の本源を曉了し、五力を行じて塵勞を降伏し、覺意を念じて平等慧を解し、淨く道敎を修して邪經を棄損し、道訓を證すれども無爲を得ず、寂莫に遊趣して而も本際を行じ、所觀を觀じて疾法界に入る。無明を滅して愚癡を盡くし、聖慧無上正眞を興して而も三解脫の品を除く。則ち肉眼を以つて皆衆生を見る、「衆生とは」一切佛土の諸佛世尊によつて化せらるゝ人民な

空にして若干有ること無し。二と言ふ可からず。是くの如く天子よ、愛欲の空と及び諍訟顚倒の空と上道空に至るまで、彼れ則ち倶に空にして若干有ること無ければ、二と名く可からざるなり。天子又問ふ。「何をか菩薩聖諦を修行すると謂ふや」。文殊答へて曰く。「假使へば菩薩眞諦を行ぜずんば、何に因つてか當に聲聞の爲めに說法すべきや。所以は何ん、菩薩、諦を行ずるに察護する所多けれども、聲聞には護ること無し、菩薩、諦を行ずるに廣大にして限り難けれども、聲聞は偏局なり。菩薩、諦を行ずるに衆生を將護すれども、而も本際に於いては造證する所無し。菩薩諦を行ずるに善權方便をもつてして生死泥洹の門を捨てず。菩薩、諦を行ずるに普く一切諸佛の法を觀ずること猶し天子に一士夫有つて、竊かに大師を捨てゝ馳逸し[一九]犇走して、獨り身にて侶無く心に恐懼を懷き、曠路を渡つて敢へて復還らざるが如く、聲聞も是くの如く意に[二〇]惶懅を懷き、生死を怖畏して衆生を護らず、一切の終始の患ひに堪任し遊び渡ること能はず、獨り自ら諦を行じて佛法を護らず、權方便を離れて慧侶有ること無し。亦然らざらんや。猶し天子の如し、謂く彼の大師多く盈利を獲、無量の寶琦異珍を齎し、衆の賈人に賜ひ曠嶮を超越するが如し。菩薩も是くの如し。亦大師の如きは、行を積むこと無量、道寶無限にして、大慈無極の哀を修し、眞諦聖慧をもて一切を饒益し、無數の辯智を以つて儆富と爲し、一佛國に遊び復一國に遊び、六度極り無く、攝行四恩以つて危厄を濟ひ衆生を矜救し、還つて生死に入り、善權方便をもて聖諦を修行し、諸の未だ度せざるものを度し、諸の未だ解せざるものを解せしめ、三界に周旋して獨歩無侶、未だ聞かざるものを開化して大乘に入らしむ。

猶し天子の垢穢弊衣にて、[二一]思夷華、黃白の[二二]須曼を以つて用つて之を熏ずるに、香氣久しからずして尋いで便ち歇み盡くるが如く、聲聞、緣覺の諦を行ずること薄尠なることも亦復是くの如し。便ち中ばにて滅度して所願を修せず、佛に至らず、戒・定・慧・解度・知見・事度脫の香も亦復罣礙塵勞

空門又は三々昧ともいふ。解脫をうる三種の方法。

[一九] 犇は牛が驚き奔ること。
[二〇] 惶懅とはおそれあわたゞしきこと。

[二一] 思夷華とは未詳。
[二二] 須曼とは須曼那Sumanā悅意花、又は相思と譯す。其形色倶に媚にして其香甚佳なり、

皆亦化の如く自然の行なり。如來の解する所は成就する所も無く亦住する所も無し。是れを以つての故に。宜べたまふ所の講法は不誠なり不欺なり無二に歸するなり」。又問ふ。「何をか如來は眞諦の義を說きたまふと謂ふや」。文殊答へて曰く。「眞諦の義とは、講說すべからざるなり。所以は何ん、其の義趣は言無く說無く亦不可得たり」と。是の眞諦の義を說きたまへる時、五百の比丘は[一〇]漏盡き意解け、無數千人は[一一]遠塵離垢し諸法に於いて[一二]法眼淨となり、萬二千の菩薩は[一三]無所從生法忍を逮得せり。

聖諦品第二

寂順律音、文殊師利に問ふ。「其の眞諦の義は甚だ解し難しと爲す」と。文殊答へて曰く。「是くの如し天子よ。其れ懈怠なる者には眞諦の義は甚だ解し難しと爲す」と。又問ふ。「何をか比丘の精進と謂ふや」。答へて曰く。「斷滅する所も無く亦除く所も無く、修行もせず亦證りも取らず。是れを比丘の奉行正義と爲す。所以は何ん、其れ自ら念言すらく斷滅せり、是くの如く除去せりと。此くの若く修行し取證せば則ち爲れ懷想して顚倒し放逸にして衆行と俱に合せるものなり。又斯く計する者は正精進に非ざるなり」。又問ふ。「何をか正精進と謂ふや」。答へて曰く。「其れ等は本も及び法界等も無なり、五逆も亦復是くの如し。如等く本も及び法界も無ければ[一四]六十二見も亦凡夫の法の如し。[一五]學法も[一六]不學聲聞の法も[一七]緣一覺法も佛法も亦如如にして佛法と等し。生死の法は其れ泥洹の法なり。愛欲・塵勞・諍訟・顚倒も亦復是くの如し。比丘玆の若く精進行する者は乃ち正精進なり」。又問ふ。「何をか所行平等にして如等佛法と謂ひ、及び愛欲塵勞の義も亦諍訟の事と等しといふや」。文殊答へて曰く。「[一八]空・無相・無願等を用ゆるが故なり。所以は何ん、空とは別に無なる所若干あるにあらず。猶し天子の坏瓦器の內空たると及び寶器の內空たるとの如く、倶に同じく等しく

【一〇】漏とは漏泄、煩惱のこと。
【一一】遠塵離垢とは煩惱を斷滅せること。
【一二】法眼淨とは小乘にては空智を得たる位、大乘にては無生法忍を得たる位。
【一三】無所從生法忍とは無明を斷じ中道を證したる位、初地以上の位に登る。
【一四】六十二見とは外見が五蘊に各四見—一、色大我小なり、我は色の中にあり。二、我大色小なり、色は我の中にあり、三、色を離れて我あり、四、色に卽して我あり—を起し、二十見を成ず、過現去の三世に各二十見あるが故に六十見となる、この六十見は斷見と常見との二見を以て根本とするが故に合して六十二見と稱す。見とは迷理の見解なり。
【一五】學法とは有學なり、有學とは初果より三果までの聖者、
【一六】不學とは無學なり。無學と學ぶべきものは巳に學び終り更に學ぶべきなきをいふ。阿羅漢果の聖者なり。
【一七】緣一覺とは辟支佛又は緣覺のことなり。緣覺は一向一果を行位と立つるが故に緣覺といふ。
【一八】空、無相、無願とは三解脫門なり。三解脫門とは三

を以つて、大蓮華を作り自ら其の上に處せり。寂順律音天子、佛に白さく。「願くは聖教を發し、文殊師利をして道化を敷演したまへ。衆會は踊躍として訓誨を聞かんと欲す」と。佛、天子に告げたまはく。「自ら汝の心に咨ひ便ち稽問すべし」と。寂順律音、則ち文殊に白さく。「寶英佛土に何の奇特超異の德有つて、仁者をして遊居して彼を樂ましむるに至るや」と。文殊告げて曰く。「貪欲を興さず亦之れを滅せず、瞋恚を起さず亦盡す所無し、愚癡を建てず亦除く所無し、[七]塵勞を造らず亦壞る所無し。所以は何ん、生法なる所無く亦盡くる所無ければなり」と。又問ふ。「其の佛の說法は何をか興爲せられ何をか滅除せらるゝや」。答へて曰く。「其の本淨とは、無を以つて起滅して生盡を以つてせず。所以は何ん、彼の土の衆生は、眞諦の義を了じて以つて元首と爲し、緣合を以つて第一と爲さざるなり」。又問ふ。「何をか眞諦は元首なりと謂ふや。何をか緣合を以つて第一と爲すと謂ふや」。答へて曰く。「義に於いては起も無く亦壞する所も無く、有相處も無く亦無相にもあらず、亦一相にも非ず亦離相にもあらず亦顯相にもあらず。彼れ視ること無しとは亦視ること無きにもあらず亦諦かに視るにもあらず、亦有盡にも無能盡にもあらず、已に盡す所無ければ盡すべからざるなり。是れを眞諦の義と曰ふ。義とは天子よ、無心を謂ふ、本心無しとは他人を教て此に於いて除かざらしめず、彼岸に度らず、中流に在らず、是れ眞諦の義なり。義とは天子よ。謂く文字無し乃ち爲れ聖諦なり。所以は何ん、佛の言ふが如くんば曰く、一切の音聲は皆爲れ虛僞なり」と。天子又問ふ。「如來の說きたまへる所も將して欺る無からんや」と。文殊答へて曰く。「如來の所說は無誠たり無欺なり。所以は何ん、如來は二心に於いて住する所無し、而も[八]有爲無爲の法に於いて言辭有ること無し。是れに由るが故に無誠なり無欺なり。天子の意に於いて所趣云何。如來の化設は說きたまふ所有りや、實とや爲ん虛とや爲ん」。答へて曰く。「不誠なり不欺なり、所以は何ん、如來の化は[九]四大に有るにあらず亦誠實も無し」と。文殊答へて曰く。「是くの如し天子よ。一切諸法も

【七】塵勞とは塵の如き無量無數の煩勞。煩惱。

【八】有爲無爲とは爲作造作することあるを有爲といひ、爲作造作することなきを無爲といふ。故に生滅するものは有爲 生滅なきは無爲なり。
【九】四大とは地水火風をいふ。

如き者有らざるなり」と。

是に於いて世尊は寂順律普天子の啓白する所を見て、一切の爲めの故に則ち大哀を發し、兩眉間の毛相の光りを演べたまふ。其の明は普照して諸の三千大千の佛土を照し、一萬の佛土に通達周徹し、大光は寶氏世界を照燿せり。時に彼の佛土の諸の菩薩衆は、前んで其の佛に問ふ。「是れ何なる感應によつてか先づ此の瑞を現じたまふや」と。寶英如來、諸の菩薩に告げたまはく。「西方に此れより去ること萬の佛刹を過ぎて世界有り[三]忍と名く。其の佛號をば[四]能仁如來至眞等正覺と曰ひ、今現に在して法を講じ眉間より光を演べ、萬の佛土を照し普く此の刹を耀したまふなり」と。菩薩問ふて曰く。「唯然り世尊よ、何の故に光りを放ちたまふや」と。佛の言く。「無央數億百千の菩薩、彼の佛土に會し、釋梵持世及び四部の衆は皆共に文殊師利を傾望し、覲奉り經法を咨講することを得んと欲して悉く倶に佛に白し、斯の光明を奮つて遙かに文殊を請ぜるなり」と。寶英如來、文殊に告げて曰はく、「汝、彼の土に往け、能仁如來は延企して相待ちたまひ、衆會は遲しと想はざるは無し、相ひ見て稽首し思聞し欲聽し稟受せよ」と。文殊、佛に白さく。「吾れも亦此の光りの[五]瑞應を諦知せるなり」と。時に文殊と萬の菩薩とは寶英佛を禮し右に遶ること三匝せり。猶し壯士の臂を屈申するが如き頃に、寶氏の刹に忽然として現ぜずして、忍土に立ち、虚空の中に在つて其の身を現ぜず、僉、天花を雨し、大衆の會に遍ぜり。花は膝に至りぬ。時に諸の會者は未曾有なりと怪しみ、皆佛に白して言さく。「此れ何なる先瑞にて天花を雨すや」と。佛、諸の[六]族姓子に告げたまはく。「此れ文殊師利と萬の菩薩とは命に應じて倶に來り、虚空に在して衆花を雨し以つて佛の衆會に供養したてまつれるなり」と。僉曰く。「願くは文殊及び諸の菩薩とを見たてまつらん。若し能く是くの如き正士に親覲せんは、甚だ欣慶と爲す値ひ難く遇ひ難し」と。是く說くこと未だ竟らざるに、文殊師利と萬の菩薩とは、便卽ち身を現じて佛足を稽首し右に遶ぐること七匝し、各威力・神足・變化

【三】忍とは忍土にて娑婆世界なり。穢土ともいふ。娑婆世界は諸事皆忍ぶべきが故に忍土といふ。

【四】能仁は釋迦牟尼の翻名。

【五】瑞應とはめでたきしるしの現ること。

【六】族姓子とは印度の四姓の中の大族をいふ。族の長者を指す。

佛說文殊師利淨律經

西晉　月氏國三藏　竺法護　譯

眞諦義品第一

聞けること是くの如し。一時、佛、羅閱祇[國]の耆闍掘山の中に遊びたまへり。大比丘衆と俱なりき。比丘は千二百五十、菩薩は三萬二千なりき。彼の時、世尊は無央數百千の衆なる眷屬の與に圍遶せられ說經を爲したまへり。時に天子有り名けて寂順律音と曰ふ。會に在つて坐せり、卽ち坐より起つて更に衣服を整へ、長跪し叉手して世尊に白して曰さく。「文殊師利、今所在せらる、一切諸會の四部の衆、天龍鬼神・釋梵四王、皆共に渴仰して、正士を覩て妙辯を咨講し經義を聽受せんと欲せり」と。佛の言さく。「東方に此より去ること萬の佛國にして世界あり寶氏と名く。佛をば寶英如來無所著等正覺と號す。今現に在して道教を演說したまふ。文殊は彼に在す。諸の菩薩大士の倫の爲めに宣示するに及ばず」と。天子は佛に白さく。「惟、願くは大聖よ哀れみを加へ威を垂れて、文殊師利をして自ら屈して斯に到らしめたまへ。所以は何ん。文殊師利の說かるゝ所の經法は結礙を開發して燿然たらざるは靡く、聲聞緣覺の上に踰過たまふ。文殊師利、設し大法を說きたまへば、一切の衆魔は皆降伏し、諸の邪なるものは迷惑して人の便りを得ること無く、諸の外異道は歸命せざるは莫く、其の貢高なる者も自大を懷かず、未だ發意せざる者は皆道心を發し、已に道心を發せるものは不退轉に立ち、當に受くべき所の者は[一]稽顙せざるは無く、當に執御すべき所のものは攬持せざるは靡し。如來至眞も皆亦勸讚したまふ。此れに因つて聖教は乃ち正法をして長く久存することを得せしむ。自ら如來を捨て、未だ他尊の智慧辯才をもて[二]典誥を頒宣すること文殊の

【一】稽顙とは顙は額なり、稽は稽なり。留なり。額を地につくること。ぬかづく義なり。

【二】典誥とは典とは古の五帝の經典の意、五帝の書は法則として後人の守るべき經典なれば、典を法則の義とす。誥とは上より下に對して敎へ曉すこと。君のおほせの意。故に典誥は法則として遵守すべき勅命の意、

本經から資料を得たとも考へられる。且く記して後考を待つ。讀者幸ひに指敎せられんことを。

昭和七年三月

譯者　田島德音　識

佛說文殊師利淨律經解題

本經の同本異譯あることは、隋の法經錄、唐の靜泰錄、內典錄以下の各經錄に皆記してゐる。今法經錄卷五（正藏五五ノ一三九頁）によつてみると、

大乘毘尼藏錄　第三

(1)文殊師利淨律一卷　晉世　竺法護譯

(2)清淨毘尼方廣經一卷　晉世　竺法護譯

(3)寂調音所問經一卷　（宋）沙門法海譯

右三戒經同本異譯

とある。靜泰錄第二（正藏五五ノ一九三頁）には(1)は十三紙、(2)は十七紙、(3)は十八紙と經の紙數まで數へてゐる。開元錄の說によれば四譯ありといふ。初出は法護譯。第二出は經題卷數は法護と同一であるが、譯者を西晉の聶道眞としてゐる。第三出は(2)經題卷數が同じで姚秦鳩摩羅什譯とし、第四出は(3)と同一で劉宋法海譯としてゐる。そして四譯一闕とするのが開元錄の說である。法經錄等の疑しいのは(1)と(2)とを同一譯者とすることである。異譯說を述べる開元錄の說が正しいやうに考へられる、現に清淨毘尼方廣經は羅什譯として正藏（二四ノ一〇七五頁）に揭げてある。因みに寂調音所問經も正藏(二四ノ一〇八一頁)にある。この二經を律部に收めながら本經を經集部に載錄したのは正藏編者の千慮の一失で、本經も大乘律部とすべきである。

次に本經の譯者と譯出年代及び譯場は各經錄が共通してゐるから疑ふことはないが、出三藏記卷七の文によると西國より渡來せる寂志なる者が本經を暗誦して傳へたのであるが忘失した爲めに本經の後に尙數品を脫してゐるといふことが記されてゐる。この文によつて法護譯の闕脫は認められるが、然らば後に譯出した羅什や法海譯に脫逸を補充されてゐなければならないのである。果して什譯にも海譯にも本經の忘失が補はれてゐる。(國譯一切經律部十二參照)

本經の內容は國譯一切經律部十二所載の淸淨毘尼方廣經解題と同一といつてよい位であるから、それを一讀せられよ。但一つ注意すべきは有名なる碧巖錄第一則の聖諦第一義は從來僧肇の肇論の文に暗示されたものであると云はれてゐたが、余の推考によれば肇論は恐く本經の眞諦品第一及び聖諦品第二に示唆されゐるのではあるまいか。更に强調すれば碧巖の第一則は本經を換骨奪胎したのではあるまいか。達磨と武帝との問答は恐く

光如來の恩德を報せんと念はば、常に應に是くの如く一切の有情を利益し安樂にすべし」と。

爾の時、阿難、佛に白して言さく。「世尊よ、當に何とか此の法門に名け、我等云何が奉持すべき」。佛、阿難に告げたまはく。「此の法門をば說藥師琉璃光如來本願功德と名け、亦は說十二神將饒益有情結願神呪と名け。亦は拔除一切業障と名く。應に是くの如く持つべし」と。時に薄伽梵、是の語を說き已るに、諸の菩薩摩訶薩及び大聲聞・國王・大臣・婆羅門・居士・天・龍・藥叉・揵達縛・阿素洛・揭路荼・緊捺洛・莫呼洛伽・人・非人等、一切の大衆は佛の所說を聞いて、皆大いに歡喜して信受し奉行しき。

藥師琉璃光如來本願功德經　終

る。五には横に水に溺らさる。六には横に種種の惡獸に噉はる。七には横に山崖より墮つ。八には横に毒藥と厭禱呪咀と起屍鬼等に中害せらる。九には飢渇に困しめられゝ飲食を得ずして便ち横死す。是れを如來、略して横死に此の九種有りとせらる。其の餘にも復無量の諸横有り。具さに說く可きこと難し。

復次に阿難よ。彼の琰魔王は世間の名籍の記を主領せり。若し諸の有情、不孝五逆をなし、三寶を破辱し、君臣の法を壞り、信戒を毀たん。琰魔法王は罪の輕重に隨つて考へて之れを罰す。是の故に我れ今諸の有情を勸めて、燈を然し幡を造り、放生修福して、苦厄を度し衆難に遭はざらしむ。

爾の時、衆中に十二の藥叉大將有つて、倶に會に在つて坐せり。所謂宮毘羅大將・伐折羅大將・迷企羅大將・安底羅大將・頞儞羅大將・珊底羅大將・因達羅大將・波夷羅大將・摩虎羅大將・眞達羅大將・招杜羅大將・毘羯羅大將

此の十二の藥叉大將には一一に各七千の藥叉有り以つて眷屬と爲す。同時に聲を擧げて、佛に白して言さく。「世尊よ、我等、今、佛の威力を蒙つて、世尊、藥師琉璃光如來の名號を聞くことを得たり。復更に惡趣の怖れ有らず。我等相ひ率ゐて皆同じく一心に乃至盡形、佛法僧に歸して、誓つて當に一切有情を荷負して義利を作し饒益し安樂にすべし。隨つて何等の村城國邑、空閑林中においても、若し此の經を流布すること有らん、或は復藥師琉璃光如來の名號を受持し恭敬し供養せん者をば、我等眷屬は是の人を衞護して、皆一切の苦難を解脱せしめん。諸の有る願求をば悉く滿足せしめん。或は疾厄有つて度脱を求めば亦應に此の經を讀誦し五色の縷を以つて、我が名字を結び、願の如くなることを得已つて然して後に結びを解くべし」と。

爾の時、世尊、諸の藥叉大將を讚めて言く。「善き哉、善き哉、大藥叉將よ、汝等、世尊藥師琉璃

復次に阿難よ、若しは刹帝離・灌頂王等、災難起る時あらん。所謂、人衆疾疫難・他國侵逼難・自界叛逆難・星宿變怪難・日月薄蝕時・非時風雨難・過時不雨難なり。彼の刹帝利・灌頂王等は爾の時、應に一切有情に於いて慈悲心を起し、諸の繫閉を赦し、前きに說ける所の供養の法に依つて彼の世尊藥師琉璃光如來を供養したてまつるべし。此の善根及び彼の如來の本願力に由るが故に、其の國界をして卽ち安隱なることを得せしめん。風雨は時に順じ、穀稼は成熟し、一切有情は無病歡樂ならん。其の國の中に於いては、暴虐なる藥叉等の神の有情を惱ます者有ること無く、一切の惡相は皆卽ち隱沒して、刹帝利・灌頂王等は壽命色力、無病自在にして皆增益することを得ん。阿難よ、若しは帝・后・妃主・儲君・王子・大臣・輔相・中宮・綵女・百官・黎庶、病に苦しめられ及び餘の厄難あらんにも亦應に五色の神旛を造立し燈を然し明を續け、諸の生命を放ち、雜色華を散じ、衆の名香を燒くべし。病は除愈ることを得、衆難は解脫せん」と。

爾の時、阿難、救脫菩薩に問ふて言く。「善男子、云何が已盡の命を增益す可きや」と。救脫菩薩の言く。「大德よ、汝豈に如來、九橫の死有りと說きたまへるを聞ずや。是の故に續命の幡燈を造つて諸の福德を修せよと勸む。福を修するを以つての故に其の壽命を盡すまで苦患を經ず」と。阿難問ふて曰く。「九橫とは云何」。救脫菩薩の言く。「諸の有情有つて、病を得ること輕しと雖も然も醫藥及び看病の者無く、設ひ復、醫に遇ふとも授くるに非藥を以つてすれば、實に死す應からざれども便ち橫死す。又世間の邪魔外道、妖孽の師、妄りに禍福を說くを信じ、便ち恐動を生じ、心自ら正しからず、卜問して禍を覓め、種種の衆生を殺し、神明に解奏し、諸の魍魎を呼び、福祐を請乞し、延命を欲冀すれども、終に得ること能はず、愚癡迷惑にして邪倒の見を信じ、遂に橫死して地獄に入り、出期有ること無からしむ。是れを初橫と名く。二には橫に王法に誅戮せらる。三には畋獵嬉戲し、婬に耽けり酒を嗜み、放逸度無ければ、橫に非人に其の精氣を奪はる。四には橫に火に焚か

【三四】人衆疾疫難以下を藥師經の七難といふ。

の衆生有つて、種種の患に困厄せられ、長病に羸れ痩て、飮食すること能はず、喉脣乾燥き、諸方を見るに暗くして、死相現前し、父母・親屬・朋友・知識、啼泣して圍遶す。然れども彼れ自身は本處に臥在して、琰魔の使、其の神識を引いて、〔一二〕琰魔法王の前に至るを見る。然れども諸の有情には〔一三〕俱生神有つて其の所作に隨つて若しは罪、若しは福、皆具さに之れを書して、盡く持して琰魔法王に授與す、爾の時、彼の王は其の人に推問して所作を計算し、其の罪福に隨つて之れを處斷す。時に彼の病人の親屬・知識、若し能く彼れが爲めに、世尊藥師琉璃光如來に歸依し、諸の衆僧を請じて、此の經を轉經せしめ、七層の燈を然し、五色の續命神旛を懸け著けよ。或は是の處に彼の識還ることを得ること有り。夢中に在るが如く明了に自ら見ん。或は七日、或は二十一日、或は三十五日、或は四十九日を經て、彼の識還る時、夢より覺むるが如く、皆自ら善不善の業、所得の果報を憶知せん。自ら業と果報とを證見するに由るが故に、乃至命難までに諸惡の業を造作せじ。是の故に淨信の善男子、善女人等は皆應に藥師琉璃光如來の名號を受持して力の能ふ所に隨つて恭敬し供養したてまつるべし」と。

爾の時に、阿難、救脫菩薩に問ふて曰く。「善男子、應に云何が彼の世尊藥師琉璃光如來を恭敬し供養したてまつるべき、また續命幡燈をば云何が造るべきや」と。救脫菩薩の言く。「大德よ、若し病人有つて、病苦を脫せんと欲せば當に其の人の爲めに七日七夜、八分齋戒を受持すべし。應に飮食及び餘の資具とを以つて、力の辦ずる所に隨つて苾芻僧を供養すべし。晝夜六時に彼の世尊藥師琉璃光如來を禮拜し供養したてまつるべし。此の經を讀誦すること四十九遍、四十九燈を然し、彼の如來の形像七軀を造り、一一の像の前に各七燈を置け、一一の燈の量は大さ車輪の如くせよ。乃至四十九日光明絕さざれ。五色の綵幡を造り長さ四十九傑手にせよ。應に雜類の衆生を放つこと四十九に至るべし。危厄の難を過度し諸横惡鬼の爲めに持せられざることを得べし。

【一二】琰魔法王とは閻摩王、閻摩羅、炎魔王と記す、梵名 Yamarāja 雙王、雙世王、遮止王、靜息王と譯す。十王の一、地獄の主、衆生の罪を監視し惡の恐るべきを知らしむる冥土の王。吠陀神話の俱生神說と相似し、又支那の道教にいふ泰山府君とも相近き說なり。恐くは支那の神ならんか。

【一三】俱生神とは一切衆生の兩肩にありて日夜休まず善惡の作業を記錄する二種の神をいふ。男神を同名神といひ左肩にありて善業を記し、女神を同生神と名け、右肩にありて惡業を記す。

り、所生の子は身分具足し、形色端正にして見ん者歡喜し、利根聰明安隱少病にして、非人其の精氣を奪ふこと有ること無けん」と。

爾の時、世尊、阿難に告げて言く。「我が彼の世尊藥師琉璃光如來、所有の功德を稱揚するが如き、此は是れ諸佛甚深の行處なり。解了すべきこと難し。汝信を爲すや不や」と。阿難白して言さく、「大德世尊よ。我れ如來所說の契經に於いて疑惑を生ぜず。所以は何ん。一切如來の身語意業は清淨ならざること無し。世尊よ、此の日月輪をば墮落せしむ可く、〔二〇〕妙高山王をば傾動せしむ可くとも、諸佛の言ふ所は異なること有ること無し。世尊よ。諸の衆生有り信根具せず、諸佛の甚深の行處說くを聞いて是の思惟を作さく。云何ぞ但、藥師琉璃光如來の一佛の名號をのみ念じて便ち爾所の功德勝利を獲んと。此の不信に由つて、反つて誹謗を生じ、彼は長夜に於いて大利樂を失し、諸の惡趣に墮して流轉窮り無らん」と。佛、阿難に告げたまはく。「是の諸の有情、若し世尊藥師琉璃光如來の名號を聞いて、至心に受持し疑惑を生ぜずして惡趣に墮すといはゞ是の處有ること無けん。阿難よ、此れは是れ諸佛、甚深の所行なり。信解すべきこと難し。汝今能く受く。當に知るべし皆是れ如來の威力なりと。阿難よ、一切聲聞、獨覺及び〔二一〕未登地の諸の菩薩等は皆悉く如實に信解すること能はず。唯、一生所繫の菩薩を除く。阿難よ、人身は得ること難し。三寶の中に於いて信敬し尊重すること亦難し。世尊藥師琉璃光如來の名號を聞くことを得可きこと復是れよりも難し。阿難よ、彼の藥師琉璃光如來の無量の菩薩の行、無量の善巧方便、無量廣大の願、我れ若しは一劫、若しは一劫餘、而も廣く說かば、劫は速かに盡くすべし。彼の佛の行願、善巧方便は盡くること有ること無けん」と。

爾の時、衆の中に一りの菩薩摩訶薩有り。名けて救脫と曰ふ。卽ち座より起つて偏へに右の肩を袒ぎ、右の膝を地に著け、躬を曲げ掌を合せて、佛に白して言く。「大德世尊よ。像法轉ずる時、諸

〔二〇〕妙高山王とは須彌山王のこと。

〔二一〕未登地の菩薩とは未だ初地の不退位に登らざる菩薩をいふ。

の處、復、横死無く、亦復諸の惡鬼神に其の精氣を奪れじ。設ひ已に奪はるゝ者も還故の如く身心安樂なることを得せしめん」と。

佛、曼殊室利に告げたまはく。「是くの如し、是くの如し、汝が說く所の如し。曼殊室利よ、若し淨信の善男子、善女人等有つて、彼の世尊藥師琉璃光如來を供養せんと欲せば、應に先づ彼の佛の形像を造立し清淨の座を敷き之れを安處すべし。種種の花を散じ種種の香を燒き、種種の幢幡を以つて其の處を莊嚴し、七日七夜、八分齋戒を受持し、清淨の食を食し、澡浴香潔し、新淨の衣を著して應に無垢濁心、無怒害心を生じて一切有情に於いて利益安樂・慈悲喜捨・平等の心を起すべし。鼓樂歌讃して佛像を右に遶ぐり、復、應に彼の如來の本願功德を念じて此の經を讀誦し、其の義を思惟し演說し開示すべし。樂求する所に隨つて一切皆遂げん。長壽を求むれば長壽を得、富饒を求むれば富饒を得、官位を求むれば官位を得、男女を求むれば男女を得ん。若し復、人有つて忽ちに惡夢を得、諸の惡相を見、或は怪鳥來集し、或は住處に於いて百怪出現せん。此の人若し衆妙の資具を以つて、彼の世尊藥師琉璃光如來を恭敬し供養せば、惡夢惡相諸の不吉祥、皆悉く隱沒して患ひを爲すこと能はじ。或は水火刀毒、懸嶮・惡象・師子・虎・狼・熊・羆・毒蛇・惡蠍・蜈蚣・蚰蜒・蚊・虻等の怖れ有んに若し能く至心に彼の佛を憶念して恭敬し供養せば、一切の怖畏皆解脫することを得ん。若し他國より侵擾し盜賊反亂せんに、彼の如來を憶念し恭敬せば、亦皆解脫せん。

復次に曼殊室利よ。若し淨信の善男子、善女人等有つて、乃至形を盡くすまで餘天に事へず、惟當に一心に佛法僧に歸し禁戒を受持すべし。若しは五戒・十戒、菩薩の四百戒、苾芻の二百五十戒、苾芻尼の五百戒ならん。所受の中に於いて、或は毀犯すること有り、惡趣に墮せんことを怖れんに、若し能く彼の佛の名號を專念して恭敬し供養せば必定して三惡趣の生を受けじ。或は女人有つて產すべき時に臨んで極苦を受けんに、若し能く至心に彼の如來を稱名・禮讃・恭敬・供養せば衆苦皆除こ

復次に曼殊室利よ。若し四衆の苾芻・苾芻尼・鄔波索迦・鄔波斯迦及び餘の淨信の善男子・善女人等有つて、能く八分齋戒を受持すること、或は一年を經、或は復三月、學處を受持すること有らん。此の善根を以つて西方極樂世界無量壽佛の所に生じて正法を聽聞せんことを願つて而も未だ定らざる者、若し世尊藥師琉璃光如來の名號を聞かば、命終の時に臨んで、八大菩薩有り、其の名を文殊師利菩薩・觀世音菩薩・得大勢菩薩・無盡意菩薩・寶檀華菩薩・藥王菩薩・藥上菩薩・彌勒菩薩と曰ふ。八大菩薩は空に乘じて來つて其の道路を示し、卽ち彼の界、種種の雜色、衆寶華の中に於いて自然に化生せん。或は此れに因つて天上に生ずること有らん。天中に生ずと雖も而も本の善根亦未だ窮盡せず、復更に諸餘の惡趣に生ぜず。天上の壽盡きて還人間に生れ、或は輪王と爲つて四洲を統攝し威德自在にして、無量百千の有情を十善道に安立し、或は刹帝利・婆羅門・居士大家に生じ、多く饒かなる財寶倉庫に盈溢し、形相端嚴にして眷屬具足し、聰明にして智慧あり、勇健にして威猛あり、大力士の如くならん。若し是の女人、世尊、藥師琉璃光如來の名號を聞くことを得て、至心に受持せば、後に於いて復更に女身を受けじ」と。

爾の時、曼殊室利童子、佛に白して言さく。「世尊、我れ當に誓つて像法轉時に於いて種種の方便を以つて、諸の淨信の善男子、善女人等をして世尊藥師琉璃光如來の名號を聞くことを得せしめ、乃至睡中にも亦、佛の名を以つて其の耳を覺悟せしむべし。世尊よ、若し此の經に於いて受持し讀誦し、或は復他の爲めに演說し開示し、若しは自らも書し若しは他を教て書かしめ、恭敬尊重し種種の花香・塗香・末香・燒香・花鬘・瓔珞・幡蓋・伎樂を以つて供養を爲し、五色の綵を以つて囊を作りて之れを盛れ、淨處を掃灑して高座を敷設して用つて安處せば、爾の時、四大天王は其の眷屬及び餘の無量百千の天衆と、皆其の所に詣り供養し守護すれば、世尊よ、若し此の經寶流行の處、能く受持すること有らば、彼の世尊藥師琉璃光如來の本願功德及び名號を聞くを以つて、當に知るべし是

べし。若し此の藥師琉璃光如來の名號を聞くことを得ば、便ち惡行を捨て諸の善法を修して惡趣に墮ちじ。設し諸の惡行を捨て善法を修行すること能はずして惡趣に墮する者有るとも、彼の如來の本願の威力を以つて、其れをして現前に暫く名號を聞かしめ。彼より命終して還つて人趣に生れて、正見精進を得、善く意樂を調へ、便ち能く家を捨てゝ非家に趣き如來の法の中にして學處を受持し毀犯有ること無く、正見多聞にして甚深の義を解り、增上慢を離れ正法を謗らず魔の伴と爲らず、漸次に諸の菩薩の行を修行して速かに圓滿することを得せしめん。

復次に曼殊室利よ。若し諸の有情、慳貪嫉妬にして自讃毀他して、當に三惡趣の中に墮して無量千歲、諸の劇苦を受け、劇苦を受け已つて、彼より命終して人間に來生せんに、牛馬駝驢と作り恒に鞭撻せられて飢渴に逼惱し、又常に重きを負ふて路に隨つて行き、或は人と爲ることを得ては下賤に生居し、人の奴婢と作つて他の驅役を受け、恒に自在ならず、若し昔、人中にして曾つて世尊藥師琉璃光如來の名號を聞きたらば、此の善因に由つて今復、憶念して至心に歸依すれば佛の神力を以つて、衆苦より解脫し、諸根聰利に智慧多聞あつて恒に勝法を求め、常に善友に遇ひ、永く魔羂を斷ち、無明の殼を破し、煩惱の河を竭し、一切の生老病死憂愁苦惱を解脫せん。

復次に曼殊室利よ。若し諸の有情、好憙で乖離し、更に相ひ鬪訟して自他を惱亂し、身語意を以つて種種の惡業を造作し增長し、展轉して常に不饒益の事を爲し、互に相ひ謀害し、山林樹塚等の神に告召して、諸の衆生を殺し其の血肉を取つて藥叉、羅刹婆等を祭祀し、怨人の名を書き、其の形像を作り惡呪術を以つて之れを呪咀し、魘魅し蠱道し屍鬼を呪起して、彼の命を斷ち及び其の身を壞らしめん。是の諸の有情、若し此の藥師琉璃光如來の名號を聞くことを得ば、彼の諸の惡事悉く害すること能はず、一切展轉して皆慈心を起し利益し安樂して損惱の意及び嫌恨の心無く、各各歡悅して自の所受に於いて、喜足を生じ相ひ侵凌せず、互に饒益を爲さん。

して差別無し。其の國の中に於いて二りの菩薩摩訶薩有り、一りをば日光遍照と名け、二りをば月光遍照と名く。是れ彼の無量無數の菩薩衆の上首なり。悉く能く彼の世尊、藥師琉璃光如來の正法寶藏を持てり。是の故に曼殊室利よ、諸の信心有る善男子善女人等は應當に彼の佛の世界に生れんと願ふべし」と。

爾の時、世尊、復、曼殊師利童子に告げて言く。「曼殊室利よ、諸の衆生、善惡を識らず唯貪悋を懷いて布施及び施の果報を知らず、愚癡無知にして信根を闕き、多く財寶を聚め勤めて守護を加へ、乞者の來るを見ては其の心喜ばず、設ひ已むを獲ずして施しを行ふ時には身肉を割くが如く深く痛惜を生ずること有り。復、無量の慳貪なる有情有り。資財を積集して其れを自身に於いてすら尙ほ受用せず、何に況や父母・妻子・奴婢・作使及び來乞者に與へんや。彼の諸の有情は此より命終して、餓鬼界或は傍生趣に生ぜん。昔、人間にして曾つて暫く藥師琉璃光如來の名を聞くことを得たるに由るが故に、今惡趣に在っても暫く彼の如來の名を憶念することを得ん、卽ち念ずる時に於いて彼の處より沒して還つて人中に生じて宿命念を得、惡趣の苦を畏れ欲樂を樂はず、好んで惠施を行ひ施者を讚歎して、一切の所有をば悉く貪惜すること無く、漸次に尙ほ能く頭目手足血肉身分を以つて來求者に施さん。況や餘の財物をや。

復次に曼殊室利よ。若し諸の有情、如來に於いて諸の學處を受くと雖も尸羅を破らん。尸羅を破らずと雖も軌則を破ること有らん。尸羅軌則に於いて壞らざることを得ると雖も然も正見を毀ること有らん。正見を毀らずと雖も多聞を棄て佛の所說の契經の深義に於いて解了すること能はざること有らん。多聞と雖も增上慢なること有つて、增上慢にて心を覆蔽するに由るが故に、自らを是とし他を非とす。正法を嫌謗して魔の伴黨とならん。是くの如く愚人は自ら邪見を行じ、復、無量倶胝の有情をして大險坑に墮せしめん。此の諸の有情は應に地獄・傍生・鬼趣に於いて流轉窮り無かる

【一六】 黠慧は敏捷なる智慧。

【一七】 稠林とは樹木が澤山繁茂せる林。

【一八】 城闕とは城の門。宮城の門。城は都邑を防備し、市民の生活を安全ならしむるために築造せる城廓なり。宮とは人の住居の義なりしが秦以後王の住家、皇居、王城の義又は神社の義となる。闕とは高き樓觀の義、タカドノ。

【一九】 羅網とはウスモノにて作れるアミ。

に極めて厭離を生じ女身を捨せんと願はんに、我が名を聞き已らば一切皆女を轉じて男と成り丈夫の相を具することを得ん。乃至無上菩提を證得せん。

第九の大願とは、願くは我れ來世に菩提を得ん時、諸の有情をして魔の羂網を出し一切の外道の纒縛を解脱せしめん。若し種種なる惡見の稠林に墮せば、皆當に引攝して正見に置き漸く諸の菩薩の行を修習せしめ速かに無上正等菩提を證せしめん。

第十の大願とは、願くは我れ來世に菩提を得ん時、若し諸の有情、王法に錄せられ、縲縛鞭撻し牢獄に繋閉せられ、或は刑戮に當り及び餘の無量の災難に凌辱せられ悲愁煎迫して、身心に苦を受けんに、若し我が名を聞かば我が福德威神力を以つての故に、皆一切の憂苦を解脱することを得ん。

第十一の大願とは、願くは我れ來世に菩提を得ん時、若し諸の有情の飢渴に惱まされ食を求めんが爲めの故に諸の惡業を造らんにも、我が名を聞くことを得て專念に受持せば、我れ當に先づ上妙の飮食を以つて其の身を飽足せしめ、後に法味を以つて畢竟じて安樂にして之れを建立すべし。

第十二の大願とは、願くは我れ來世に菩提を得ん時、若しも諸の有情、貧しくして衣服無く、蚊虻寒熱、晝夜逼惱せんに。若し我が名を聞き專念に受持せば、其の好む所の如く卽ち種種たる上妙の衣服を得、亦一切寶莊嚴の具、華鬘・塗香・鼓樂・衆伎を得、心の所翫に隨つて皆滿足せしめん。

曼殊室利よ。是れを彼の世尊、藥師琉璃光如來、應、正等覺が菩薩の道を行ぜし時、發したまひし所の十二微妙の上願と爲す。

復次に曼殊室利よ。彼の世尊、藥師琉璃光如來が菩薩の道を行じたまひし時、發せし所の大願及び彼の佛土の功德莊嚴をば、我れ若しは一劫、若しは一劫の餘り說くとも盡すこと能はじ。然も彼の佛土は一向清淨にして女人有ること無く、亦惡趣及び苦の音聲も無く、琉璃を地と爲し、金繩をもて道を界ひ、城闕宮閣・軒窓・羅網、皆七寶をもて成ぜり。亦西方極樂世界の如く功德莊嚴等しく

て生れたるによるか。可考。

【九】 淨琉璃とは清淨なる琉璃 Vaidūrya(舊譯)吠瑠璃耶(新譯)七寶の一。紺青色の寶石。遠山寶と譯す。遠山は須彌山なり。須彌山より產出する寶石。

【一〇】 藥師琉璃光如來とは大醫王佛、醫王善逝、ともいふ。梵名は鞞殺社窶嚕 Bhaiṣajya-guru 東方淨琉璃國の敎主。十二の大願を發して衆生の病疾を治し、無明煩惑の痼疾を癒す法藥を與ふ。蓮花の上に住し、左手に藥壺を持し、右手に施無畏の印を結ぶ。

【一一】 三聚戒とは攝善法戒(作善)攝律儀戒(止惡)攝衆生戒(度生)の三聚戒なり。

【一二】 醜陋頑愚とは醜惡陋賤—みにくゝいやしい—身の下劣を示し。頑迷愚鈍—わからずで馬鹿、—意の下劣を示す。

【一三】 盲聾瘖瘂とは盲目。聾はツンボ。瘖瘂はオシ啞者。

【一四】 攣躄とは手足の曲る病氣—ヒツツリ。躄は兩足の立たざること—キザリ。背僂はセムシ、背の曲る病。

【一五】 白癩は惡瘡を生じて全身腐敗し白粉をつけたるが如き病狀。癲狂は精神統一を失へる病氣—キチガヒ。盲聾より白癩までは眼耳舌身の根不具を說き癲狂は意根の不具を

第一の大願とは、願くは我れ來世に阿耨多羅三藐三菩提を得ん時、自身の光明熾然として無量無數無邊の世界を照曜し、三十二大丈夫の相、八十隨好を以つて其の身を莊嚴し、一切の有情をして我が如く異なること無からしめん。

第二の大願とは。願くは我れ來世に菩提を得ん時、身は琉璃の如くにして內外明徹し、淨くして瑕穢無く、光明廣大に功德巍巍として、身善く安住し焰網莊嚴すること日月よりも過ぎたり。幽冥の衆生は悉く開曉を蒙つて、意の所趣に隨つて諸の事業を作さん。

第三の大願とは、願くは我れ來世に菩提を得ん時、無量無邊の智慧方便を以つて、諸の有情をして皆無盡なる所受用物を得せしめ、衆生をして乏少なる所有らしむること莫けん。

第四の大願とは、願くは我れ來世に菩提を得ん時、若し諸の有情の邪道を行ずる者をば悉く菩提道の中に安住せしめん。若し聲聞、獨覺乘を行ずる者をば皆大乘を以つて之れを安立せん。

第五の大願とは、願くは我れ來世に菩提を得ん時、若し無量無邊の有情の我が法の中に於いて梵行を修行すること有らんに、一切皆不缺戒を得、三聚戒を具すること得せしめん。設ひ毀犯すること有らんも我が名を聞き已らば、還つて清淨なることを得て惡趣に墮せじ。

第六の大願とは、願くは我れ來世に菩提を得ん時、若し諸の有情の其身下劣にして諸根不具・醜陋頑愚・盲聾瘖瘂・攣躄背僂・白癩顚狂、種種の病苦あらん。我が名を聞き已らば一切皆端正黠慧にして諸根完具し諸の疾苦無きことを得ん。

第七の大願とは、願くは我れ來世に菩提を得ん時、若し諸の有情に衆病逼切して救ひ無く歸する無く醫無く藥無く親無く家無く貧窮多苦ならんに、我が名號一たび其の耳に經れんに、衆經悉く除こり身心安樂にして、家屬資具悉く皆豐足し、乃至無上菩提を證得せん。

第八の大願とは、願くは我れ來世に菩提を得ん時、若し女人有つて女の百惡に逼惱せらるゝ爲め

じて如來の左に侍し、普賢は理を表して右に居す。常途の左理右智とするに背けるは密教の理智融通を示せるものなり。

【六】法王子とは文殊を獨り法王子と稱し、他の菩薩を法王子といはざるは、文殊は佛左面の弟子にして菩薩の最上首たればなり。他の王子（菩薩）の上首たればなり。

【七】像法轉時とは大集經に六種の堅固を說く。一は法身得住堅固。二は解脫得住堅固。三は禪定得住堅固。四は多聞得住堅固。五は福德得住堅固。六は鬪諍得住堅固、此中第一は佛在世の時にして後の五は佛滅後なり。各五百年宛なり。總じて云へば三時なり。滅後の初の二は正法。次の二は像法。最後の一は末法なり。像とは似なり。正法を類似せるが故に名く。正法には教行證の三具足す。像法には教行の二ありて證果の人なし。末法は教のみありて行證ともになし。今は佛滅千年の後の像法の有情を利樂せんがために文殊はこの問ひを發せるなり。

【八】童子。文殊を童子と稱することは大日經一に文殊は童子形に畫くとあるによれるか。或は文殊師利般涅槃經は說く梵德婆羅門の家の子とし

藥師琉璃光如來本願功德經

（大正藏經 NoS. 449. 451, 灌頂經卷第十二 No. 1331）

大唐三藏法師玄奘奉　詔譯

是くの如く我れ聞きぬ。一時、[一]薄伽梵、諸國に遊化して[二]廣嚴城に至り[三]樂音樹下に住しき。[四]大苾芻衆八千人と倶なりき。菩薩摩訶薩は三萬六千あり、及び國王・大臣・婆羅門・居士・天・龍・藥叉・人・非人等と無量の大衆とに恭敬し圍遶せられて爲めに說法したまふ。

爾の時、[五]曼殊室利[六]法王子は佛の威神を承け、座より起つて偏へに一肩を袒ぎ、右膝を地に著け、薄伽梵に向つて曲躬合掌して白して言さく。「世尊よ、惟願くは是くの如きの相類の諸佛の名號と及び本の大願と殊勝の功德とを演說したまへ。諸の聞く者をして業障を銷除せしめたまへ。[七]像法轉時の諸の有情を利樂せんと欲するを爲つて故に」と。

爾の時、世尊、曼殊室利[八]童子を讃めて言く。「善き哉、善き哉、曼殊室利よ。汝大悲を以つて我れに諸佛の名號、本願、功德を說けと勸請せり。業障に纏はるゝ有情を拔き、像法轉の諸の有情を利益し安樂せしめんが爲めの故に。汝、今諦らかに聽き極めて善く思惟せよ。當に汝が爲めに說くべし」。曼殊室利の言く。「唯然り、願くは說きたまへ。我等聞かんと樂ふ」。

佛、曼殊室利に告げたまはく。「東方に此より去ること十殑伽沙等の佛土を過ぎて、世界有り[九]淨琉璃と名く。佛をば[一〇]藥師琉璃光如來・應・正等覺・明行圓滿・善逝・世間解・無上調御丈夫・天人師・佛・薄伽梵と號す。曼殊室利よ、彼の佛世尊、藥師琉璃光如來、本、菩薩の道を行ぜし時、十二の大願を發し、諸の有情をして求むる所をば皆得せしめたり。

【一】薄伽梵、又は婆伽婆とも云ふ Bhagavat の音譯、世尊の原語。

【二】廣嚴城、とは毘舍離（舊譯）吠舍釐（新譯）Vaiśālī の譯、中印度にあり、本經の說處たる以外に、淨名居士の住處たり。又佛滅一百年に七百賢聖の第二結集をなせる地たり。所謂跋闍子比丘の十事非法による律の規定解釋爭議に基く。此の地の住民を離車族又は跋闍子といふ。毘舍離即ち廣嚴城と云はる所以は此城を樂造せる始祖離車が三度擴張し莊嚴せるが故に名く。

【三】樂音樹とは此樹に微風經るれは枝葉動じて宮商の雅音從つて出づるが故に名く。此樹下に住するは一會の人々に皆樂みを生ぜしむるが故なり。

【四】大苾芻以下は一會の衆を擧ぐ。苾芻は聲聞衆。菩薩は菩薩衆、國王以下は世間衆なり。

【五】曼殊室利 Mañjuśrī は新譯、文殊師利は舊譯、新舊六譯あり。無量壽經、涅槃經は妙德。無行經は妙首。觀察三昧經は普首。普超經は濡首。無量門微密經は敬首。大日經は妙吉祥と譯せるがその例なり。文殊は普賢と共に釋迦如來の兩狹士にして文殊は智表

に於て臨終と斷罪の琰魔王と俱生神と交涉を明し、三に死者の苦患を脫するために藥師供養を說き續命神幡、七層の燈明、四十九日の供養を明し(救脫章)、また阿難に對し帝王の治國の七難を脫し七福を生ずるために供佛を說く。次に阿難と救脫との問益となりて九種の横死あるが皆供佛によつて脫るといひ(救脫章)、次に會中の十二神將が佛に白して誓つて藥師の佛名を護持せんと發起し神呪を以つて藥師佛名を聞持する者を益せんと誓ふ(神將章)、以上が經意の大略である。玄奘譯には神呪を八菩薩の名を脫してゐる。後人が大灌頂經卷十二から本經に八菩薩名を添入し、義淨譯から神呪を添入したのである。

昭和七年三月

譯者　田島德音　識

灌頂經とは第一灌頂七萬二十神王護比丘呪經。第二灌頂十二萬神王護比丘尼呪經。第三灌頂三歸五戒帶佩護身呪經。第四灌頂百結神王護身呪經。第五灌頂宮宅神王守護左右呪經。第六灌頂塚墓因緣四方神呪經。第七灌頂伏魔封印大神呪經。第八灌頂摩尼羅亶大神呪經。第九灌頂召五方龍王攝疫毒神呪經なり。十二卷灌頂經はこれに第十佛說灌頂梵天神策經。第十一佛說灌頂隨願往生十方淨土經。第十二佛說灌頂拔除過罪生死得度經の三卷を帛尸利蜜多羅の後に後人が增加せるものなり。而して十二卷灌頂經は開元錄に記さるゝを以て此開元時代頃に集成されたるものと認むべきか。

本經の疑僞說

藥師經は早く僧祐が出三藏記卷五新集僞撰雜錄第三に「灌頂經一卷、一名藥師琉璃光經、或名灌頂拔除過罪生死得度經、右一部宋孝武帝大明元年秣陵鹿野寺比丘慧簡依經抄撰」と記して疑僞經とせり。慧簡の抄撰と東晉の帛尸利蜜多羅譯佛說大灌頂神呪經第十二拔除過罪生死得度經とが同一なるが故に本經も亦疑僞經とせらる。實觀師は內容よりみて疑僞に非ずとすれどもその論據正しからず。たゞ疑僞經なりとせば何地方の製作なるか。義淨、玄奘が譯せることは印度の南方にも或は又西域、或は北印度地方にも傳はれるに非ざるなきか。思ふに積命思想によれる製作なること明瞭なるが故に西域地方に於いて本經が作られたるか。可考。

本經の內容

佛、毘舍離國廣嚴城樂音樹下に住し說法せられた。その時に文殊菩薩は諸佛の名號とその大願功德とを演說して、聞者をして業障を消除せしめ、像法の時の有情を利樂せしめたまへと請問した。世尊之れを許された。（以上序分）佛、文殊に告げたまはく。東方此から去ること十殑伽沙の佛土に淨琉璃世界あり藥師琉璃光如來在す。佛本菩薩道を行じた時に十二の大願を發し有情を利樂した（本誓利益——十二大願章——を明す）次に藥師の佛國及機類を上げ、佛土は彌陀の極樂と同じといひ。眷屬に日光月光を上首として無量の菩薩ありといふ。（果德章）次に種種の功德を明して佛名を稱ふることにより て戒波羅蜜の益を得（戒度章）、次に忍辱波羅蜜の益を得（忍度章）、次は精進（進度章）、禪定智慧（定慧章）を得、次に文殊は誓願して像法時代に藥師の名號を稱聞せしめん、經を受持せしめん。その處には四天王守護し、諸怖畏障難を除かんといふ（文殊章）。次に佛は阿難に此經を信ずるやと問ふ。阿難答へて疑はずと誓ひ（阿難章）、次に一會の中に救脫菩薩あり、佛に問ふ。初めに病相、二は死相、死相

藥師琉璃光如來本願功德經解題

同本異譯に就いて

本經の譯出經四譯若しくは五譯あり。（藥師經義疏說）貫觀の義疏は四譯說をとり、一は宋孝武帝の大明元年（西紀四五七）丁酉、沙門釋慧簡が秣陵（江蘇、江寧縣）の鹿野寺に於て譯し、藥師瑠璃光經と名け、亦は灌頂拔除過罪生死得度經といふ。大灌頂經（西藏二一ノ四九五頁）に出づ、僧祐錄には慧簡が經によつて抄して撰せるものとなす。費長房紀には破して云く。祐錄には注として疑となせども房勘ふるに婆羅門今梵本あり。神言少しく異るのみ。南山（道宣）亦云く未だ廣く尋ねざる者は多く疑僞となす云云 二は大業十一年（隋煬帝、西紀六一五）南印度羅囉國——此れ開元貞元の二錄に據る。內典錄翻經圖紀は並に北天竺烏場國と云ふは非なり——沙門達笈多、隋に法密といひ、又は法藏といふ。幷に翻經沙門法行・明則・長須・海馭等と東都（洛陽）洛水南上林園翻經館に於て重譯。藥師如來本願經と名く。三は唐三藏玄奘、京師（長安）大慈恩寺翻經院に於て譯す。乃ち今の本なり。若し內典錄及周刊定錄に據れば貞觀の年に譯すとし、開元貞元二錄によれば永徽元年五月五日譯。沙門慧立筆受とせり。而して秋篠（善珠著藥師經鈔上）は貞觀二年譯といふ。秋篠の說を長谷の亮汰破す。亮沙の破は當らず。若し秋篠を破せんとならば貞觀二十二年に慈恩寺は方に成る。二年には未だ造られず、豈に彼の寺に於て譯さんや。四は沙門義淨、和帝（唐中宗）の神龍三年（西紀七〇七。この年九月景龍と改元）丁未に及んで帝召して內に入れしめ、幷に翻經沙門と同じく、九旬夏を度り、○中略 更に翻譯せしむ。佛光內寺に於て藥師瑠璃光七佛本願功德經二卷を譯す。帝法延に御し手自ら筆受せらる。秋篠鈔によるに上卷は總じて東方七佛淨土を明し、下卷は別して瑠璃光佛の淨土及び本願功を明す。多く牂の唐本と同じ。前後の本を勘ふるに文辭雜糅、或繁或約、之を傳ふるの徒、多く疑慮を生ず。たゞ牂法師譯のみは史を去り野を去り、繁に非ず約に非ず故に今に其譯本を擇びとる。又九卷灌頂經とは晉の時の元帝の世（西紀三一七——三二二）に帛尸利蜜多の翻ずる所なり。また灌頂隨願往生十方淨土經一卷あり。是れは漢（後漢靈帝）の光和年中（西紀一七八——一八三）支讖の翻譯。また佛說灌頂梵天神策經一卷。灌頂招魂經一卷あり。右二經は疑僞錄にあり。實觀の義疏によるに九卷

巍巍たり十方の佛　國土甚だ淸明　七寶をもて莊嚴せり　妙香栴檀馨り　悉く純ら諸菩薩のみにして　二乘の名有ること無く　惟不退轉なる　般若道の英を說く

巍巍たり十方の佛　三世道の珍　其れ聞いて信樂する者は　疾く無上なる眞を成じ　菩薩の道に遊んで　不退還に堅住し　生ずる所には常に佛を見たてまつり　諸天尊に遭値せん

巍巍たり十方の佛　三界の導師よ　至心に恭敬を懷き　信樂して狐疑すること無くんば　生るゝ所にて常に端正　顏容も甚だ花のごとく曄き　辯才も慧も獨り達して　願つて天人師を禮したてまつる

「[一]麟嘉六年六月二十日、[二]龜茲國金華祠に於て、此の經を演出す。梵音を譯して晋言と爲す。[三]曇摩跋檀なる者は阿毘曇に通じ、諸の經義を暢ぶ。又加ふるに摩訶衍の事を究盡し、深決を辯說す。龜茲國に於て博解第一といはる。[四]林は卽ち請して此の經を「譯」出せしむ。檀は手に自ら梵本を執り、衍く龜茲語の經と爲す。是くの如きの時に當つて、道俗歡喜し未曾有なりと歎じ、競つて共に諷誦し、其の功德を美しくせり。沙門[五]慧海は、龜茲語に通じ善く晋音を解せり。林復命して龜茲語を譯して晋音と爲さしむ。林は自ら筆受たり。章句鄙拙にして辭として雅ならざるは、本を存するを貴ぶがゆゑのみ。其れ此の經を聞き、歡喜信樂して一心に恭敬し、諸佛の名字を受持し諷誦して、如來の功德を興顯し讚揚して、廣く加ふるに宜しく傳へて不退轉を得、疾く無上正眞の道を成ずべし。無數の天魔も無上道心を毀壞すること能はじ。所生の處にて佛刹を嚴かにし、常に諸佛世尊に値遇することを得て、端正殊妙にして顏容に光澤あり、常に能く無量の智慧を解了して無礙辯を得ん。常に衆生の爲めに大法を闡揚して大衆の中に於て最も上首たらん。後に成佛の時には刹土淸淨にして諸の佛國に於て最尊第一ならん。願くは十方の無量の衆生をして普く諷持せしめ、如來無礙の慧を解了して功德巍巍たらん。亦當に此の諸佛世尊の如くなるべし。(了)

【一】麟嘉なる年號は支那にはなし。思ふに西域地方の年號ならんか。

【二】龜茲國 Kucina とは現今の庫車 Kucha 地方を指すと雖も、北魏時代には姑墨 Aksu 溫宿 Ush 尉頭 Sufi-bai? まで勢力を擴張し、鐵の產地として有名なる地方なり。其位置は東トルキスタンの北部の中央に位し、北は天山山脈に境し、南はタリム Tarim 河を隔てタクラマカン Taklamakan 沙漠に臨み、東は阿耆尼(焉耆 Karashar)に接し、西は跋祿迦(姑墨 Ak-su)に及ぶ。東西千餘里、南北六百餘里に涉る地方なり。龜茲は天山南道に於ける于闐國 Khotan の如く、天山北道に於ける要衝の地なり。

【三】曇摩跋檀とは法花經傳記卷六に出づる達摩跋陀のことか、若し然りとせば羅什と同時代の人にして、羅什の師須梨耶蘇摩、若しくは蘇摩の兄たる須梨耶跋陀の敎化を蒙り、小乘を捨して大乘に歸したものである。

【四】林とは氏名不明。

【五】慧海とは其傳未考。

眞卷と白擧とにて外には淸きが如くする　斯の衆は此の經を聞くに任へじ

無數の天人は時に唱へて言ふ　巍巍たる正覺無上尊よ

快(こゝろよ)き哉妙法は甚だ聞くこと難し　當に無比道の珍を聽くべし

諸の如來の名號を聞く中に　所得は盈利にして數(しばく)陳べ叵(がた)し

諸天は上の虛空の中に在つて　花香を散じ樂音を鼓す

諸天の妙香は遍く薰じ　大千世界をば香雲にて結し

光明は普く諸の十方を照し　一切刹土は六反に震ふ

爾の時、世尊、諸の如來の名號を說きたまへる時、諸の在會の者は悉く座上にして、遙かに此れ等諸佛世尊の各其の國の大衆の中に在(いま)して經法を說きたまふを見る。悉く坐より起つて諸の世尊を禮し、歡喜踊躍すること無量ならざるは莫し。時に會の中に於ける無數千人は已に得道せるものと未得道の者と有れども悉く無上正眞道意を發せり。十方世界の諸の菩薩の各恒沙の如くなるは、皆來詣して此の釋迦文「佛」を禮す、其の會の中に於ける一億の比丘は阿羅漢を得、比丘、比丘尼も復十萬人有つて[二二]法眼淨を得、復十萬人有つて悉く[二三]法忍を得、五百の優婆塞、四百の優婆夷は同時に坐より起つて衣服を整へ如來を供養して、盡く[二四]無上正眞道意を發せり。是に於いて舍利弗は長跪叉手し、前んで佛に白して言さく。「此れをば何經(なにきやう)と名け、云何が奉持するや」と。佛の言く。「此の經をば名けて稱揚功德法品と曰へ、亦復名けて集諸佛花と曰へ。當に之れを奉行せよ」と。

爾の時、世尊、此の經を說き竟つて、舍利弗及び諸の比丘、諸の天・人民・龍・阿須倫・一切の大會は皆大ひに歡喜し、前んで佛の爲めに禮を作して去りぬ。

佛說稱揚諸佛功德經終

【二二】法眼淨とは分明に緣生差別の法を觀察する智眼の開けたるをいふ。即ち分明に眞諦の理を見るをいふ。小乘にありては初果を得て四眞諦の理を見るを法眼淨といひ、大乘にありては初地に初めて一品の無明を一分の中道を證して無生法忍を得るをいふ。

【二三】法忍とは忍とは違順の二境に對して共に動轉せらるることなきことなり。眞諦の理に安住して非理のために動轉することなき心なり。法忍とは無生の理に安住して心の動ぜざる境界をいふ。

【二四】無上正眞道意とは上佛道を求め下一切衆生を濟度する大菩提心。

其れ最後に諸の名を聞くこと有つて
當に如來を狐疑すべからず
汝當に知るべし是の舍利弗は
若し諸佛を供養すること有らば
此れ等の諸の尊經を聞くことを得て
諸佛大智の所遊の路には
是の法の中に於いて成ずる所多し
若し妙珠なる無疑寶に値ふとも
貧者は猶豫して意に未だ了らじ
是の法は等正覺を出生す
智慧淺き者は慧眼無し
其れ富有る者は衆寶を積み
歎譽すること甚だ多くして衆寶を蓄し
其れ福慧有つて合集する者は
鄭重に讃歎して聞くことを得んと欲し
行惡の法にて惡を求むる者は
福德智德薄少なる者は
短促と倒覆と及び愚癡と
貪と婬と瞋恚とに惑亂する者は
學尠く懈と慢と惰と自輕と

大歡喜を興し恭敬を懷いて
至誠に奉信して無しと言ふこと莫かれ
斯れ等は先世に已に我れを供せるなり
其の人は最後の恐怖の世に
一心に信樂して疑を生ずること無けん
無比最上慧あつて通達し
云何が中に於いて此經を疑ふや
愚者は識らずして嫌つて好まじ
既に無重價なる此の寶を致せども
此れ皆大士の聞く所なり
斯れ等は何に從つてか能く信ぜん
如意珠を聞いて大ひに歡喜し
我れ當に買ひ取つて自ら莊嚴すべし
諸の佛名を聞いて大ひに歡喜し
正覺珠を得て自ら莊嚴せん
其れ諛諂と及び反戾と有り
終に此の法を聞くに堪任せじ
慳悋と甚だ多ければ穢意を成す
此の輩は此の法を聞くに任へじ
弊惡なる親友とは意未だ成ぜず

を得、最正覺を成ずべし。五十劫生死の罪を却けん」と。是に於いて世尊、歎じて頌して曰く。

上方に界あり日月英と名く　其の佛號をば賢幢王と曰ふ
法王大仙は其の刹に在す　相好盛明にして滿月の如し
其れ此の尊の名を聞くことを得ること有らば　生死の路に遊んで諸根明らかなり
諸法の中に於いて常に增長し　審かに諦かに如來種に住することを得
至心に佛を念じて敬禮し　五十劫生死の罪を却く

復次に迦葉よ。上方に刹有り名けて寶種と曰ふ。其の國に佛有り、一切寶織色持如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。其の刹をば何の故に名けて寶種と曰ふや。當に知るべし、迦葉よ。其の佛の世界の一切衆生は悉く無上正眞の道を求む。其の國の菩薩は神足勇猛にして、無數の菩薩は倶に共に同時に彈指の頃の如きに、神足力を以つて十方に飛到して、無量恒沙の諸佛を供養し、悉く皆周遍して悉く能く一切衆生を成就せん。是の諸佛の功德を說く處と時とにて、若し聞く者有らば則ち爲めに此の諸佛の國に到り已る、誰れか能く大精進行を發起するや。菩薩摩訶薩有つて、其れ此の名號を捉持すること有らん者は、其の名を師子戲菩薩・師子奮迅菩薩・師子幡菩薩・師子作菩薩・堅勇精進菩薩・鞞金剛慧菩薩と曰ふ。其の一切寶織色持如來の名號及び諸菩薩大士の名を聞くことを得る者有らば、皆悉く當に如來の十力・十八不共・特異の法を得、常に能く不退の法輪を轉じ、六十劫生死の罪を却けん」と。是に於いて世尊、歎じて頌して曰く。

我れ今已に諸の法王のことを說けり　今悉く現に在して康常なる者なり
無師自覺せる大導師は　泥洹の樂を得て最尊たり
如來の名號は性淸淨なり　諸法の威儀と行とは淸淨なり

界を審諦分と名くるやとならば、常に知るべし迦葉よ。其れ彼の世界は皆八分と爲る。(1)衆花分、(2)栴檀樹分、(3)金多羅樹寶織分なり。(4)其の佛の刹土より衆の名香を出し其の世界に遍ず、(5)彼の刹土に於いて虚空の中に在り、(6)成じて香蓋と爲つて普く佛刹を覆ふ。(7)其の佛如來法座に趣けば大會を莊嚴す。(8)其の一切衆德成如來の名を聞くことを得る者有らば、六情端政にして常に清淨なることを得、諸佛妙法の分を解了して、八十劫生死の罪を却けん。是に於いて世尊、歎じて頌して曰く。

審諦世界に八種有り　多羅寶樹香をもて莊嚴し
妙なる名香を出して其の刹に遍じ　普く虚空を覆ふて香は雲蓋たり
大智正覺其の刹に在して　名聲は普く達して衆德と號し
色像は端嚴にして甚だ姝妙なり　法王は獨歩にして畏懼無し
其れ此の尊の名を聞くことを得ること有らば　端正奇妙にして功德を成じ
節解圓滿にして方正　之れを視るに厭くこと無く敬はざるは莫し
功德は極めて尊くして與等無く　歡喜踊躍して諸刹に遊び
精進勇猛にして甚だ超越し　八十劫生死の罪を却けん
正覺道に於いて終に「退」轉せず　廣く能く佛尊の法を演說して
一切諸の快樂を逮得し　後生の處は常に尊貴なり
清淨無差特を逮得し　如來の衆の功德を思念し
智慧は諸の法義を思惟し　功德を增進し諸智を成ず

復次に迦葉よ。上方に刹有り日月英と名く。其の國に佛有り、賢幡幢王如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。其の賢幡幢王如來の名を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し持し諷誦し念ぜば、其の人は常に不退轉に立つこと

爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。其の法空鐙如來の名を聞くことを得る者有つて歡喜信樂し持し諷誦し念ぜば、六十劫生死の罪を卻け、最正覺に於いて不退轉を得、當に諸佛と共に會することを得、現世には其の佛世尊を見たてまつることを得、亦夢中に於いても此の如來を見ん。當に知るべし迦葉よ、其人今世に五體投地して一心に恭敬して如來に向はゞ、其の人は則ち無量の功德を種ゑ、諸の善根を栽ゑ悉く具滿することを得ん。常に當に諸の善知識に値ふことを得、常に諸人と共に相ひ敬愛すべし。是くの如く迦葉よ。是れを現世に諸の善報を獲ると爲す。其の佛如來は一切の功德を普集すること是くの如し」と。是に於いて世尊、歎じて頌して曰く。

虛空織大世界有り　其の佛號をば法空鐙と名く
名稱普く達せる其の世尊は　光明極大にして虛空よりも踰へたり
其れ此の尊の名を聞くことを得ること有らば　六十劫生死の罪を超え
必ず當に諸佛に遭値ふて見え　如來の前にして妙法を講ぜん
精進して現世に諸佛に見え　當に五體をもて其の如來を禮し
夢中にも其の世尊を見るを得べし　其の佛導師は光り闡遠せり
其の如來を念ずれば斯る德を致し　常に當に諸の大哀を見ることを得
生れては常に諸の法王に値ふことを得べし　其の人は現世に諸佛に見えん
其の佛導師の德は無量たり　智慧普達して法王爲り
其れ衆の德を勸求する有らん者は　盡心に敬意して其の佛を禮せよ

復次に迦葉よ。上方に刹有り寂諦分と名く。其の國に佛有り、一切衆德成如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。何の故に此の

其の人快く當に供養を受け　用つて諸佛大法王を禮すべし
此れ等は當に我が言を疑はざれ　必ず當に成佛して德無邊なるべし
常に當に諸の妙法會を共にし　後に正覺を成じて慧獨達すべし

復次に迦葉よ。上方に刹有り名けて寶鐙と曰ふ。其の國に佛有り、淨寶興豐如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。其れ淨寶興豐如來の名を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し持し諷誦し念ぜば、其の人は七覺意寶を得て、三十劫生死の罪を卻けん」と。是に於いて世尊歎じて頌して曰く。

上方に界有り寶明と號し　淨寶最尊は其の刹に在す
其れ名號を聞くことを得ること有らん者は　斯れ等は當に七覺禪を得べし
三十大劫生死の苦　過去より超越して因縁無く
無比力を得て不動に住し　常に當に諸天尊に遭値ふべし

復次に迦葉よ。上方に刹有り名けて電光と曰ふ。其の國に佛有り、電鐙幡王如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。其れ電鐙幡王如來の名を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し持し諷誦し念ぜば、斯の其の人等は悉く當に八難の處より遠離して、終に復下劣なる家には生れじ」と。是に於いて世尊、歎じて頌して曰く。

上方に界有り電光と名く　大尊をば號して電鐙王と曰ふ
其れ此の快士の名を聞くこと有らば　八難永く斷じて復生ぜじ
智慧は生死の根を解了し　種種なる功德も隨次に成じ
道を興隆し衆生を化度し　智慧獨達して無比聖ならん

復次に迦葉よ。上方に刹有り虛空緻と名く。其の國に佛有り、法空鐙如來・至眞・等正覺・明行成・

諸佛の名を持すれば功徳を成じ
其れ此の尊經に値ふことを得ること難し
若し信行有つて供養せば
諸法を解了するに量り有ること無く
正覺の法は甚深にして微なれば
當に善く諸の導師を信奉すべし

能く諸刹を淨めて肅清と爲す
少なる衆生有つて其の名を聞かんに
大智慧を得て勇力强からん
當に一切正覺王と成るべし
當に中に於いて狐疑を起すべからず
歡喜敬禮して愼んで疑ふこと莫かれ

復次に迦葉よ。上方に刹有り寶蓮花莊嚴と名く。其の國に佛有り蓮華尊豐如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。其れ蓮花尊豐如來の名を聞くことを得る者有らば、三惡の道は爲めに已に閉塞し、爲めに已に如來の花を成ずることを得ん。諸の正覺一切法の中に於いて、便ち爲めに無上道花を成ずることを得て、生死の罪を三十六劫却けん」と。是に於いて世尊、歎じて頌して曰く、

上方に刹有り寶莊嚴といふ
光色は晃昱として甚だ觀るべし
蓮花尊佛は其の刹に在す
光りは普く大千界を照燿し
若し女人有つて其の名を聞かば
三十劫生死の罪を却け
身の洞なるを見ず道へば淸淨なり
諸佛を緣念し善友を得て
當に此の諸佛を普禮すべし

衆花茂盛して大千に普く
譬へば天上の（三）難檀桓の如し
說法は無比にして慧は通達し
衆相の端嚴なるは聖中にても最たり
惡道を斷絕して諸聖に遭ひ
必ず正覺を成じて退轉せじ
世世に智慧と功德とを成じて
怨家は消滅し罪苦は除かれん
今悉く現在に異刹に於いて

【三】難檀桓とは難檀槃那 Nandana のことか。難檀槃那は歌舞、歡喜と譯す。忉利天の八園の一。名聲ある・利天の住み家、アサラスに圍繞せらるる難陀林を見ざるものは樂しみを知らず。といはるる程に歡喜極まりなき樂園なり。天人は此處に天樂に耽る。

復次に迦葉よ。上方に刹有り娛樂人と名く。其の國に佛有り、淨輪幡如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。今現に在して說法したまふ。

復次に迦葉よ。上方に刹有り栴檀香と名く。其の國に佛有り、琉璃光最豐如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。今現に在して說法したまふ。

復次に迦葉よ。上方に刹有り名けて星宿と曰ふ。其の國に佛有り、寶德步如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。今現に在して說法したまふ。

復次に迦葉よ。上方に刹有り無量德豐と名く。其の國に佛有り、最淸淨德寶住如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。今現に在して說法したまふ。

復次に迦葉よ。上方に刹有り名けて聲所不至と曰ふ。其の國に佛有り、度寶光明塔如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。今現に在して說法したまふ。

復次に迦葉よ。上方に刹有り無際限と名く。其の國に佛有り、無量慚愧金最豐如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。今現に在して說法したまふ」と。是に於いて世尊、歎じて頌して曰く。

德は月の滿ちたるが如き其の如來　　諸天の最上にして尊雄たり
此れ諸の大尊德中の王なれば　　能く衆生の爲めに諸の殃を除く

成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。今現に在して說法したまふ。

復次に迦葉よ。上方に刹有り名けて說法と曰ふ。其の國に佛有り、無量光豐如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。今現に在して說法したまふ。

復次に迦葉よ。上方に刹有り寶豐首盡と名く。其の國に佛有り、逆空光明如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。今現に在して說法したまふ。

復次に迦葉よ。上方に刹有り名けて好集と曰ふ。其の國に佛有り、最清淨無量幡如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。今現に在して說法したまふ。

復次に迦葉よ。上方に刹有り名けて殊勝と曰ふ。其の國に佛有り、好諦住唯王如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。今現に在して說法したまふ。

復次に迦葉よ。上方に刹有り生精進と名く。其の國に佛有り、成就一切諸利豐如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。今現に在して說法したまふ。

復次に迦葉よ。上方に刹有り名けて願力と曰ふ。其の國に佛有り、淨慧德豐如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。今現に在して說法したまふ。

在して說法したまふ。

復次に迦葉よ。上方に世界有り象步樓と名く。其の國に佛有り、無量尊豐如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。今現に在して說法したまふ。

復次に迦葉よ。上方に世界有り天玉女と名く。其の國に佛有り、無量尊離垢王如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。今現に在して說法したまふ。

復次に迦葉よ。上方に刹有り須彌幡と名く。其の國に佛有り、號して德手如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰ひ、また號して衆祐度人無量と曰はん。今現に在して說法したまふ。

復次に迦葉よ。上方に刹有り尊衆勘意と名く。其の國に佛有り、無數精進興豐如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。今現に在して說法したまふ。

復次に迦葉よ。上方に刹有り名けて無受と曰ふ。其の國に佛有り、無言勝如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。今現に在して說法したまふ。

復次に迦葉よ。上方に刹有り淨觀莊嚴と名く。其の國に佛有り、無愚豐如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。今現に在して說法したまふ。

復次に迦葉よ。上方に刹有り名けて日光と曰ふ。其の國に佛有り、月英豐如來・至眞・等正覺・明行

若し深妙の法を聞くことを得て　諸の若干微妙の義を說かしめんに
斯の輩は終に狐疑を起さず　佛の深法をば能く毀ること無けん
所說の諸の法義に安住し　思集意信普智を以つて
其の意を堅固にして我が說を聽き　念じて此の尊法を忘失すること莫れ
終に復更に法と諍はず　諸佛の名を聞いて能く奉行し
有念にも無念にも猶豫せず　其の法の中にして差別無し
不可思議にして極めて廣大なれば　終に大智を猶豫すること無し
其れ此の法を求むる深慧者は　深義に解達し諸啓すること無けん
無疑にして諸の深法を勸求する　此れ等は下劣の業を喜ばず
當に知るべし此の人は求むる所無く　法の中に於いて極めて大勇猛ならん
佛の說きたまふ所の法にして信ぜられざるは莫し　其れ衆生有つて先世に於いて
衆善に合偶すれば福報を受け　違諍する所無ければ乃ち「佛名を」聞くことを得ん
諸の如來の大智德を顯して　皆十方の佛を讃歎することを爲す
其れ諸の「佛」名を諷持すること有らん者は　諸佛は遙かに其の人の德を讃めん
大衆の中にして其の名を歎ずれば　常に當に諸佛の聲を聞くを得て
疾く能く大智の法の　極大清淨なる無生業を解了すべし
大光明を放ちて日月よりも超へ　廣く衆生の爲めに妙法を演べ
後の會には當に最正覺を成じ　普く諸の佛刹を照耀すべし

復次に迦葉よ。上方に世界有り名けて寶月と曰ふ。其の國に佛有り、金寶光明如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。今現に

諍ひ、廣く罪報を受けん。其の意を增益して斯の經法を毀る此の衆生の輩は常に愚癡にして、諸佛正覺は常に世間の爲めに大明と作る。我れ重ねて慇懃に誡めて汝等に囑す。諸の比丘及び比丘尼、淸信士、淸信女よ、其れ經法を謗毀し罵ること有らん者は實に重罪を受けん。諸佛世尊は現に十方に在して、無量世界の爲めに法師と作る。所說の經法は實に聞くことを得ること難し。如來は慈愍をもて重ねて汝等を誡しむ。若し諸佛の名號功德の法を信樂すること有らん者は、諸の善法に於いて自然に合偶せん。其れ學し持し諷誦し念ずること有らん者は、其の人は疾く諸の如來を見るを得、智慧轉た增し無礙なる慧を得ん。其れ人に勸めて諸佛の名を讀ましむること有らば、所生の處より四方の域に遊び、獨言隻步して畏るゝ所無からん。其れ好樂して盡心に此の諸佛の名を敬奉することと有らば、當に知るべし其の人は正覺道に去つて終に復遠からじ。其れ諸佛の功德を好憙することと有つて、加益人に勸めて斯の佛の名を學せしめんに、其の人は所在にて諸の如來の遊行する所の處に於いて、諸欲の中に於いて畏難する所無けん。當に知るべし迦葉よ。若し比丘有つて四事の法を具して乃ち能く此の諸佛尊の名を信ぜん。何等をか四と爲す。過去世の時、諸の所に於いて深法を聞くことを得て喜樂し。靜寞淸淨の處にして世世、諸の善知識に値遇し、法の中にして危難の行を作さず。當に知るべし迦葉よ。是れを四事と爲す。若し比丘有つて以つて能く此れを具せば、諸如來の正覺法の中に於いて疑難無きなり。其の人如來の功德を聞くを得て、爾して乃ち一心に能く之れを信樂せん」と。是に於いて世尊、歎じて頌して曰く。

過去にして諸佛尊を供養したてまつる　此の功德に緣つて其の「佛の」名を聞かん
最後の惡世に其れ聞かん者は　普く是の號を用つて衆德を增さん
其れ過去にて諸佛を見　如來深妙の義を聞くこと得ること有らば
往世の淨德によつて法と諍はず　斯の輩は乃ち能く信じて奉行せん

不可得なりと解せよ、不可得の中には徑路有ること無し。若し男子及び女人の中に於いて、當に其の中に於いて、當に其の處所を觀ぜよ。男女の相貌亦不可得なり。若し二事亦不可得にして處所無しと了せば、當に其の中に於いて願つて清淨を得ん。若し清淨を以つてせば則ち取捨無し。無取捨を以つて便ち識心無し。諦かに之れを推覓するも亦不可得にして處所有ること無し。意に自ら思惟するに、無處所中に男子を求めて女人と成ることをせんや。諦かに之れを求索するに意不可得なり。若し意性を解すれば了に男女無く不可見なりとは、爾らば乃ち如來の道に近づくことを得たるなり。其れ發心せんと欲し、疾く女人の身を除去せんと欲して、諦かに男子と女人との身を觀じ、了に異同と增減との二無し。當に女人を受け女人の形と作り、其の所說の如く理を以つて之れを推すに、〔二〇〕六性分の中に亦不可得にして男有り女有るなり。其れ是くの如くならば則ち如來の道を求索すると爲す。其れ此くの如き事を解せんと欲求せば、復、諦かに此の法を了知するもの有り。是二りの輩人は過去佛の時、曾つて此の諸佛の名號を聞くことを得たるならん。當に知るべし其の人過去世の時、諸佛の所に於いて大功德を造り、今乃ち此の諸佛の名號を聞き、世に依仰せられ自在者と爲らん。其れ此の諸の尊號を奉持する者は無量の福を獲ん。其れ聞くこと有らん者若しは有學の者をば、我れ普く之れを見る。欲有つて急に求めん。此の經を得ん者は斯れ等は已に我れを見ると異なること無しと爲す。若し其の人の說言を輕慢すること有つて此れ佛語に非らずと是の言を作す者は此れ等は便ち謗佛毀經と爲す。斯の經を謗らば已に大惡を造ると爲す。此の惡行に緣つて當に地獄に入り衆の苦報を受くること無央數劫なるべし。地獄の罪畢つて所生の處、常に當に聾瘂となつて言語すること能はず、諸情は閉塞して常に完具ならざるべし。常に愚癡にして癲狂有るべし。其れ固く諸の菩薩を嬈る者有らば、薄德醜陋にして言に威勢なく、常に下賤に生れ常に惡道に生れ、所生の處にて常に如來正覺の所說の經法をば聞法せず、終に深妙の義をば解說すること能はず、愚癡の人と經に與りて共に

【二〇】 六性分とは六根のことか。六根を六生ともいふ。六根とは眼耳鼻舌身意の六なり。

復次に迦葉よ。北方に此を去る八千の佛刹にして、世界有り名けて現入と曰ふ。其の國に佛有り、寶蓮華步如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また、號して衆祐度人無量と曰はん。若し族姓子、族姓女にして、其の寶蓮花步如來の名を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し持し諷誦し念ぜば、後生の處には顏貌端正、殊妙無比にして衆と共に敬愛せられ、自ら宿命の無數劫中の事を識り、皆悉く生所にて從來より作せる所の善惡を了知し、悉く皆其の所生の處を識知し、所說の言教は一切に信奉せられて承用せられざること莫けん。迦葉よ。若しは族姓子、族姓女にして、斯れ等の諸如來尊正覺の名號功德の行を聞くことを得ても、若し女人の身を愛樂すること有る者は是くの如き女人は女の中に在つて未だ解脫を得ず。若し女人の身を厭ひ貪樂せざる者にして諸佛の名を持し諷誦し念ずる者は盡く斯れ等德を得べし」。迦葉、佛に白さく。「當に復云何が此の功德を得るや」。佛の言く。「諸の名色を絕し諸の欲垢を盡くさば、斯れ等は疾く無量の功德を逮「得」せん。當に疾く女人の身を遠離すべし。當に具さに男子の形を受くることを得べし。女たることを求むる者は所生の處に續いて女人の身を受け、都て悉く一切の世界を汚穢すべし。是の故に當に女人の身を棄つべし。當に無比の諸の善知識を得、功德は日に生じ、亦自ら福を受け、復他人を利して饒益する所多く、一切の男女をば衆苦の中に於いて疾く拔濟すること得べし。譬へば毒樹所在の處に蔓莚生長して傷害せらるゝこと多からんに、若し能く諸の毒樹を斷截せば、爾らば一切をして普く快樂を得せしむるが若し。女人の身は譬へば毒樹の若し。諸欲を增長し精神を毒害して、諸の惡行を廣くし無量の苦を受くることは皆女人に由る。若し能く女人の身を斷棄すれば則ち衆生の無量なる諸苦を斷絕し、衆の惡行を壞り[一八]三塗を閉絕し[一九]泥洹の門を開くことをせん。普く一切をして快樂を得せしめん。斯れ等は疾く諸佛の徑路に入らん」。迦葉、佛に白さく。「云何が女人の身を除くこと得るや」。佛の言く。「當に自ら身を觀じ他人の身を觀じて、此の二事は俱に

【一八】三塗とは塗は途の義、一は火途、地獄は猛火に燒かるる所なればなり。二は血途、畜生は血肉相ひ食むが故なり、三は刀途、餓鬼は刀劍杖によつて常に逼迫せらるればなり。三惡趣、三惡道と同じ。

【一九】泥洹とは涅槃等とも記す。寂滅、圓寂等と譯す。佛のさとり。小乘にては阿羅漢のさとりをいふ。

審諦かに是くの如く分別する者は　其の人は則ち大智に近づけりと爲す
慧ある者は無依句を聞くことを得て　終に復狐疑して計すること無けん
其の人是くの如く解了せば　世に於いて獨り無所[一六]諸に達せん
是くの如き大智慧に暢達して　號して特尊無上士と曰はれん」

復次に迦葉よ。北方に此より去ること六萬佛刹にして、世界有り長歡樂と名く。其の國に佛有り、號して賢最如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰ひ、また、號して衆祐度人無量と曰はん。其の賢最如來の名號を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し持し諷誦し念ぜば、所生の處には當に一切の爲めに敬愛せられ、哀見し信用せれらん。其の言ふ所の教へは承奉せられざるは莫く、其の人は皆當に斯の功德を獲、無礙辯を得べし。所説の經法を衆生にして聞く者は、歡喜し信解して履行せざるは莫けん」と。是に於いて世尊は歎じて頌して曰く。

六萬の諸佛刹を度り　界有り名けて長歡樂と曰ふ
慈哀度法したまふ賢最尊は　其れ大導師として世界に在す
最尊無比にして與に等しきは無し　世世に諸の衆生を濟度したまふ
其れ名を聞く者は法師と作り　言を奉じ信用して歡ばざるは莫し
此の一切智なる大法王は　無量の[一七]黎庶に斯く依仰せらる
若し女人有つて其の名を聞かば　疾く女人の形を捨離することを得ん
穢惡甚深にして崖際無き「ところに」は　世を離るゝに非ずんば入ること能はず
其れ無所有にして入るべき所なり　是れを審諦・諦不諦と爲す
此の二事倶に無性なりと了「達」すれば　其れ已に無有の性を寂滅せるなり
其の盡くること有る者を以つて滅と爲す　甫めて當に興る者も亦無性なり

【一六】諸を宮内省本は害に作る。

【一七】黎庶とは黎民・黎元、黎首、庶民等と同義語。人民の意。

其の國に佛有り寶月と號す
其れ此の尊の名を聞くこと得ること有らば
後生の處には則ち禪を得
名聲普く達し光り聞遠せり
諸の衆生の爲めに廣く
一切の諸事は堅固なること無く
普く當に一切を慈哀すべし
已に能く是くの如きの意を發行し
審諦かに吾我無しと解了す
諦かに諸事を了「解」すれば無所得なり
是くの如き法は無所住なり
此の二は倶に空にして亦無性なり
無表識とは是れ空の義なり
表識は了「解」すべし了「解」すべからずとは
諦かに觀ずるに此の二は倶に清淨なり
所說の法は猗る所無し
譬へば月の空中を行くが如し
此くの如くして妙法は是の間に興る
菩薩法の中には依る所無し
此の法を解了して人の爲めに說く

方明晃昱として甚だ巍巍たり
便ち已に所依仰を得るとなす
精進智慧は中止すること無し
其の人は佛の刹土に在して
諸佛導師の所說の法を興演するを見る
諸法の中を觀ずるに所起も無し
諸禪の中に於いて自在を得
都べて三塗を了じて恚忿無く
無所有とは非無有なり
此の中間に於いて興る所の法
表識と無表識とを求了すれば
是くの如き無我の法を興顯す
當に審諦かに此の妙法を說く
此の二は倶に癡慧に轉ぜらるればなり
亦復諸法の垢を見ず
都べて了すれば波羅蜜も依るところ無し
其の所說の法は猗る所無し
三界の中に於いて著する所無く
是くの如く解する者は一切智なり
若し能く無猗法を解達し

し諷誦し念ぜば、一切の諸欲は皆疾く消散すべし。一切の聲聞、辟支佛の心の褊狹なる意も皆悉く消滅して、疾く正覺の道を成就することを得ん。是の故に號して金剛堅强消伏壞散如來と曰ふなり。其の佛世尊は一切の衆願を共さに滿ずること是くの如し。

復次に阿逸よ、北方に此より去つて十萬億の諸佛の刹土を度り、世界有り摩尼光と名く。其の國に佛有り、號して寶火如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士 道法御・天人師と曰ひ、また號して衆祐度人無量と曰はん。其の寶火如來の名號を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し持し諷誦し念ぜんに、其の未だ泥洹界に入らざる者有らば斯れ等は一切皆當に不退轉地に立つこと得、疾く無上正眞の道を成ずべし。其の佛の刹土の一切の人民にして寶火如來を供養する者は、悉く一大乘にして度脫することを得しめん。聲聞緣覺の名有ること無けん」と。

佛、長老大迦葉に告げたまはく、「當に知るべし、諸佛如來の德は不可思議なり、北方に此より去ること五十萬の佛刹にして、世界有り阿竭流香と名く。其の國に佛有り、寶月光明如來・至眞・等正覺 明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また、號して衆祐度人無量と曰はん。迦葉よ、若しは族姓子、族姓女にして、其れ寶月光明如來の名を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し持し諷誦し念ぜん。此れ等は後世所生の處にて三昧正定に中止せざること得ん、若し三昧の時には自ら諸佛の尊き法輪を轉ずるを見て、悉く能く諸佛の法を總持せん。所生の處に在つては常に衆生の爲めに大法を闡揚し、辯才は衆の特尊よりも淸妙にして、諸の欲求する所は願ひに從つて悉く得ん。所以は何ん。其の佛世尊は本道を求めし時、此の誓願を興せり『吾れ正覺を成ぜば我が名を聞く者をして此の三昧定意を得せしめん。初發意より成道に至るまで、其の中間に於いて常に此の定を得て未だ曾つて中にして失せじ』」と。是に於いて世尊は歎じて頌しく曰く。

五十萬の諸の佛刹を度り　　世界有り阿竭流と名く

に圍遶せられて而も爲めに說法せり。我れは此の坐よりして遙かに肉眼を用つて其の如來の大衆の中に於いて廣く經法を說くを見る、彼の佛世尊は彼の刹土に於いて高座の上に在まして、亦肉眼を用つて此の世界を觀、亦復我れが座上に在つて大衆の中に於いて經法を說くを見る。阿逸よ當に知るべし。若し衆生有つて諸の如來の肉眼の所見を信じて歡喜する者は、此れ必ず正覺の道を成就すべし。斯れ等は皆諸佛如來のために護持せられ、信樂して狐疑せざらしめん。斯れ等は皆當に如來深妙の慧を提持し、最正覺に於てい不退轉を得べし。是の故に阿逸よ。其れ此の大福を欲求すること有らん者は、若し三千大千世界をして其の中に火を滿たしめんとも、故ゑに當に中に入つて斯の佛名と智慧の法とを聽くべし」と、阿逸菩薩、復、佛に白して言さく。「寧んぞ一法のみ有つて不退轉を得て、疾く無上正眞道を成ずるや不や」。佛の言く。「有り。阿逸よ。北方に此より去つて不可計數の諸佛の刹土にして、世界有り名けて金剛堅固と曰ふ。其の國に佛有り、金剛堅强消伏壞散如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。其の金剛堅强消伏壞散如來の名を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し持し諷誦し念じて盡心に供養せん。斯れ等は皆當に不退轉に住し、疾く無上正眞の道を成ずべし、十萬億[一五]那術劫生死の罪を却けて、超然として後に在かん。其の佛如來の功德と無量の弘誓とは乃し爾り。我れ過去無數劫の前より、錠光如來は世に興出せり。彼の佛の所に於いて此の金剛堅强消伏壞散如來の名號を聞くこと得て、十萬億那術劫生死の罪を超ゆること得たり。阿逸よ當に知るべし。若し我れ錠光「佛」に從つて斯の佛の名を聞かずんば、我れ今故未だ正覺を成ずることを得じ。其の佛は何の故にか名けて金剛堅强消伏壞散と曰ふとならば、譬へば金剛の在る所の墮處は、若しは山にもあれ、若しは崖・瓦石・土壘・牆壁、樹木にもあれ、若しは遙かに向はんと擬する所墮の處にもあれ、消滅し破碎し壞散せざるは莫きが如し。是くの如く阿逸よ。其れ此の佛の名を聞くことを得る者有つて、持

【一五】那術劫とは那由陀劫と同じ。那由陀とは印度の數の目なり。億に當る。劫とは劫波。長時と譯す。數へきれぬ程の長き時間のこと。

には生ぜざるなり。乃し泥曰に至るまで悉く能く衆欲の縛を除壞せん。其の人の六情、眼耳鼻[一〇]口及び身意に於いて終に疾有ることなけん。乃し泥曰に至るまで初めより未だ曾つて無佛の處に生ぜざるなり。大尊法を聽いて未だ曾つて礙げ有らざるなり。聽くことを得ざる時も未だ曾つて礙げ有らざるなり。僧を見ざる時も亦復[一一]八難の處に生れざるなり。戒常に具足して缺くること有ること無き時、識心清淨にして忩亂すること有ること無き時にも、當に知るべし阿逸よ。其れ此の佛の名を聞くことを得る者有つて、淨心に最正覺を信樂して、渴に飲むことを欲するが如く、信敬の心を發し如來に向はゞ、此れ等は阿逸よ。悉く能く諸佛世界の最特の利を捉持せるなり。其の人は皆當に殊妙奇特なる功德を獲べし。是の故に阿逸よ。並に當に專精に此の佛名を持すべし。若しは族姓子、族姓女、殊特妙淨の刹を得んと欲せば、當に急ぎて此の諸尊佛名を聽き其の名號を稱すべし。當に作禮して自ら是の言を作せ。「我れ今、德內豐嚴王如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師・號曰衆祐度人無量を禮したてまつる』と」。阿逸、佛に白して言く。「惟、天中中よ。其の佛の刹土は何れの所に在るとやせん、此を去ること遠きや近きや。成佛してより以來幾くの時「を經たり」とやせん」と。佛、阿逸に告げたまはく。「設使へば縱廣百[一二]由延の中に一大[一三]埠沙「あらん」、一沙を取つて一佛刹に著けん。是くの如くして悉く諸佛の刹中に著けて悉く沙を盡さしめん。是くの如きの沙の數の諸佛の刹土に悉くして沙を中に滿たさん。復、諸佛の刹土の沙を取り、復、一沙を以つて一佛刹に著けん。是くの如くにして諸の國刹の中の沙をば、悉く此の沙數を盡くして取らしめん。諸佛の刹土を悉く破つて塵となし、復、一塵を取つて一佛刹に著け悉く塵を盡くさしめん。是の諸の佛國の塵數の刹土も猶尙ほ未だ至らざる餘の未到の者は此の百倍よりも過ぎたり。其の佛の刹土は此を去ること極めて遠くして稱げて量るべからず。其の佛世尊は彼の豐嚴刹土の中に在して今現在して無央數の諸の[一四]開士等と稱げて計ふべからざる諸の比丘衆とに、前後

【一〇】口を三本・宮內省本は舌に作る。

【一一】八難とは如來の出佛に値はず佛法を聞くこと能はざるもの八種即ち地獄、餓鬼、畜生、無想天、盲聾瘖瘂、世智辨聰、北瞿耶尼の人、及び佛前佛後の人を難といふ。

【一二】由延とは由旬のこと。

【一三】埠沙とは沙の丘のこと。

【一四】開士とは大士ともいひ、菩薩のことなり。

佛有り、號して殊勝如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰ひ、また號して衆祐度人無量と曰はん。其の殊勝如來の名號を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し持し諷誦し念ぜば、此れ等は皆能く衆魔を降伏し、羅網を裂壞し、六十劫生死の罪を却けん。

復次に舍利弗よ。西方に此より去ること十萬の佛刹にして、世界有り名けて伏一切魔と曰ふ。其の國に佛有り、號して集音如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰ひ、また號して衆祐度人無量と曰はん。其の集音如來の名號を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し持し諷誦し念ぜば、其の人は當に一切如來諸佛の音聲を得、大衆の中に於いて廣く說法する處にして中に於いて特尊なるべし。衆魔を退却せしめ之れを降すに德を以つてせん。八十劫生死の罪を却けん」と。

是に於いて[四]阿逸菩薩、長跪し叉手して前んで佛に白して言さく。「寧ぞ一事のみ有つて菩薩摩訶薩、此の事の中に於いて大乘の願を共し不退轉に住し、疾く無上正眞道を成ずるや不や。」と。佛の言へること有り。「阿逸よ、北方に世界有り名けて豐嚴と曰ふ。其の國に佛有り、德內豐嚴王如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰はん。其れ斯の佛の名を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し持し諷誦し念じて而も作禮爲ん。其の人は皆當に不退轉を得、疾く無上正眞の道を成ずべし。一[五]億劫生死の罪を却けん。其れ五千の佛を供養すること有らん者は、此の輩は阿逸よ。爾、乃し德內豐嚴王如來の名號を聞くことを得たるなり。其の聞名の者は、是れより以後所生の處、常に[六]天眼を得、未だ曾つて天眼を得ざるの時あらざるなり。常に能く徹聽して未だ曾つて[七]天耳を得ざるの時あらざるなり。常に能く飛行して神足を得ざるの時有ること無きなり。乃し泥曰に至るまで常に端[八]政なることを得て、未だ曾つて醜惡の形を受けざるなり。乃し泥曰に至るまで、常に當に尊貴なるべく、未だ曾つて下劣の[九]處

【四】阿逸とは阿逸多と同一なり。彌勒のこと。
【五】億は三本宮內省本には無し。
【六】天眼とは五眼の一。禪定の力によりて得る智眼。明瞭に能く三千世界乃至十方法界を見る。これを得るものに修禪得と果報得と咒得との三種あり。
【七】天耳とは六神通の一。自在に一切の言語音聲を聞くことを得るをいふ。
【八】政を三本・宮內省本は正に作る。以下同じ。
【九】處を三本・宮內省本は家に作る。

卷の下

復次に舍利弗よ。西方に此より去つて十萬億の佛刹を度り、世界有り名けて安樂と曰ふ。其の國に佛有り、[一]阿彌陀如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、また號して衆祐度人無量と曰ふ。若し無量壽如來の名を聞くことを得る者有つて、一心に信樂し持し諷誦し念ぜば、當に廣遠にして無量なる歡喜を起し其の意を安立すべし。眞諦なる十萬億の信心をして斯の如來を念ぜしめん。其の人は當に無量の福を得、永く當に三塗の厄を離るべし。命終の後は皆當に彼の佛の刹土に往生すべし。命終らんと欲るの時一心に信樂して、阿彌陀佛を忘捨せずして念ぜば、諸[二]衆僧を將ゐて其の人の[三]前に住せん。魔は終に斯れ等の正覺の心を毀壞すること能はざらん。所以は何ん。其の佛世尊は大悲を興立し、誓つて一切無量の衆生を度し、亦復十方世界の一切衆生を護持したまへばなり。其れ安樂世界に生ずることを得ること有らば、當に其の中に於いて具さに如來正覺の慧を滿ぜん。舍利弗よ。其の佛世尊本誓願を求めたり。其れ第一の乘を求むる有らば其の世界に於いて具さに如來諸佛の法を滿じ、正覺分を具せん。聲聞乘を彼の佛刹に於いて求むれば阿羅漢たることを得ん。其れ彼の佛刹に往生すること有らん者は、其の所願の大小の乘に從つて彼れに於いて畢滿せん。其れ最後に阿彌陀如來の名號を聞くこと有つて之れを讚說する者、信じて狐疑せず、當に敬心至意を起し之れを念ずること父母を念ずるが如く、是くの如きの意を作すべし。斯れ等は普く當に彼の佛國に於いて具さに衆願を滿ずべし。其の阿彌陀佛の名號功德を讚歎し稱揚するを信ぜずして謗毀すること有らん者は、五劫の中當に地獄に墮して具さに衆苦を受くべし。

復次に舍利弗よ。西方に此より去ること十萬の佛刹にして、世界有り破一切魔と名く。其の國に

【一】阿彌陀とは無量壽、無量光等と譯す。
【二】衆を三本・宮內省本は比丘に作る。
【三】前住とは念佛の人の前面に來現し住在するの意。來迎と相似たれども意少しく異なり。

れ。況や惡意を持して諸の快士に向はんをや。癡盜に覆はれて慚愧なき者の中に於いて誹毀せば、谷、地獄の諸の罪の行を卒うせん。舍利弗よ。諸佛の世に興ることは甚だ難く甚だ難し。百億の數に意を發して道を求むとも、時至ることを得る者は若は一り若しは兩りなり。當に知るべし舍利弗よ。如來の世に興ることは優曇花の如し、時時に乃し有つて見るべからざるなり。其れ大乘を求め弘誓の願を發せよ。已に發せる者も有り。甫めて當に發する者もあり、今現に發する者もあり。勇猛の意を起し疑ひに沈まざる者もあり。當に所願の如く疾く成じて久しからざれ。廣く法食を施して正覺道を具せよ。是くの如きの南方の諸佛の等は稱げて計ふべからず。今現に康常にして廣く經法を說きたまふ。其れ聞くこと有らん者は如來の無量の功德を廣演し興顯し歎揚して、當に南方に向つて五體投地して、諸の如來を念じ其の名號を稱して而も作禮すべし。其の人福を得ること計量すべからず。

佛說稱揚諸佛功德經卷中

たまふに、天上世間乃至非人の一切の伎樂の及ぶこと能はざる所なればなり。其の佛の住壽在世の時に說法敎化して泥曰に至るまで、其の佛の國土の伎樂の音聲は續いて笑しく暢べ、十方二十佛刹に震へり。是を以つての故に無量音と號するなり。

復次に舍利弗よ。南方に此の一切伎樂震動世界より去つて、三百億の佛刹を度り、世界有り集光明と名く。其の國に佛有り、號して錠光如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰ひ號して衆祐度人無量と曰はん。舍利弗よ。其の如來尊は光明を停住して他の佛國を照したまへば、十萬億の刹は常に以つて大ひに明かなり。是を以つての故に名けて錠光と曰ふ。其れ斯の佛の名を聞くこと得る者有つて、一心に信樂し歡喜踊躍して諛諂の意無からん。斯れ等は當に如來の光明の護持する所と爲らん。

復次に舍利弗よ。南方に此の集光明世界より去つて、八萬の佛刹を度り、世界有り一切香と名く。其の國に佛有り、寶光明如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其れ寶光明如來の名を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し持し諷誦し念ぜん。斯れ等は皆當に世間に於いて大珍寶と作ることをせん。正眞道に於いて不退轉に住し、所生の處には常に佛世に値はん。初めより曾つて無佛の處に生ぜじ。菩薩に遊べる徑路の時、五十劫生死の罪を却けん。是の故に舍利弗よ。當に瞋恚忿亂を起さざれ。諸の菩薩及び諸弟子に向つては、恒當に大慈の心を興立して之れを奉敬すべし。當に如來の微妙の慧を求め、弘誓の願を發し大乘に趣至すべし。舍利弗よ。是くの如くにして其の人は疾く無上正眞の道に近づき、廣く如來の深妙の法を演べん。若し人有つて未だ泥洹に入らずして菩薩の境界に在る者をして、佛法を信ぜず、亦有行の菩薩道を信ぜず、佛道は得ること難しと言はん。是くの如きの人は、千歲を滿じて地獄の中に在つて具さに衆罪を受けん。是の故に舍利弗よ。當に[二二]虫蠡に向つても瞋恚の意を起さざ

【二二】蠡を三本・宮内省本とは螺に作る。

はん。其の國に佛有り、最踊躍如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の最踊躍如來の名を聞くことを得る者有つて、歡喜踊躍し持し諷誦し念じて、長跪し叉手して而も爲めに禮を作さん。當に是の言を作すべし。『我れ今最踊躍如來至眞等正覺を禮したてまつる』と。此れ等の衆生は當に最特殊妙なる大乘の爲めに提持せられ、亦能く一切衆生を饒益して、三塗八難をば悉く永く除くことを爲ん。

復次に舍利弗よ。南方に此の天世界より去つて、八千の佛刹を度り、世界有り梅檀光と名く。其の國に佛有り、號して自在王如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰ひ、號して衆祐度人無量と曰はん。其れ自在王如來の名を聞くことを得る者有つて、益、信樂を加へ、若し更に此の佛の名を相ひ勸持せば、斯れ[等は]皆當に無量の福を得べし。舍利弗よ。若し此の如來の名を說くこと有らん時、若しは天、若しは人、龍及び閱叉、一切の非人、其れ此の如來の名を聞くこと有らん者は、此れ等は皆當に正眞道に於いて不退轉を得べし。

復次に舍利弗よ。南方に此の梅檀光世界より去つて、二十億の佛刹を度り、世界有り一切伎樂震動と名く。其の國に佛有り、無量音如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の無量音如來の名を聞くことを得る者有つて、歡喜して如來の功德を信樂し、當に此の願を發すべし。『此の功德を以つて我れをして如來の智慧を解了せしめよ』と。斯れによつて皆當に不退轉地に住して必ず無上正眞の道を成ずべし。所以は何ん。此の如來尊は菩薩たりし時に大弘誓を興して此の願を立てたるが故なり。若し不信誹謗の者有らば、地獄の中に於いて長く衆苦を受けん。罪畢つて出づることを得ても所生の處は、常に諸佛の世の遇値せざらん。舍利弗よ。其の佛の世界をば何の故に名けて伎樂震動と曰ふとならば、無量音佛は本[一二〇]兜術より神を降したまふ時、始めて一切伎樂の音聲を發し、普く震動して其の樂音聲を揚げ

【一二〇】兜術 Jusita 覩史多、兜率と記し知足、妙足、喜樂住等と譯す。布施の功德事を成就したるものこの天に生る。この天は人間の四百歲を一晝夜となし壽命四千歲なり。一生補處の薩埵この天に住す。この天に生るるもの菩薩の說法を常に聽聞することを得。

切をして各快樂を得せしめよ。願つて此の衆德をもて無上正眞道の中に著せよ。舍利弗、其れ斯の佛の名を聞くことを得る者有り、及び諸の如來の功德と名號と、加ふるに廣く宣傳し稱揚して說かん時、若し不信謗毀の者有らば、四十億歲のあひだ[一九]加羅秀領泥犂の中に在つて具さに衆苦を受けん。

復次に舍利弗よ。南方に此の花香世界より去つて、六千の佛刹を度り、世界有り名けて喜起と曰はん。其の國に佛有り、號して無憂如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰ひ號して衆祐度人無量と曰はん。其の無憂如來の名號を聞くことを得る者有つて、歡喜の心を發し信樂し諷誦せば、斯の諸人等は衆欲の中に於いて汚染せらるゝこと無く、諸欲の爲めに拘礙せられざらん。心は蓮花の塵水に著せざるが如く、不退轉を得て、悉く能く一切衆生を安隱ならしめ、後に正覺を成ぜん。若し衆生有つて其の名號を聞き、至心に諷誦し歡喜信樂せば、若しは存在世にあれ、若しは泥曰の後にあれ、斯れ等も亦最特なる妙乘を得て、世の導師と爲り、皆當に無量なる功德によつて生ずる所の處を逮得すべし。其の人は未だ曾つて佛に値はざる時あらざらん。

復次に舍利弗よ。南方に此の喜起世界 り去つて、二萬の佛刹を度り、世界有り名けて哀色と曰はん。其の國に佛有り、地力持踊如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の地力持踊如來の名を聞くことを得る者有つて、淨心に歡喜し持し諷誦し念じて、五體を地に投じて而も爲めに禮を作さん。其の如來を念ずること一日一夜ならん。斯の人は當に不退轉に立つことを得て動じ難きこと地の如くなるべし。一切の衆魔も其の人の道心を毀壞すること能はず、無量の慧を得て猶若し大海のごとくならん。生死の路を斷じて二十劫生死の罪を却けん。

復次に舍利弗よ。南方に此の哀色世界より去つて、十四の佛刹を度り、世界有り名けて爲天と曰

【一九】加羅秀領泥犂 Kalasutra-Niraya とは八大地獄の一・黑繩地獄と譯す。

し諷誦し念じて、若し夢中に於いて斯の佛の名を聞かん。其の人は皆能く三毒を破壞し諸欲を消散し、諸の佛法に於いて不退轉を得ん。

復次に舍利弗よ。南方に此の金剛衆世界より去つて、千億の佛刹を度り、世界有り名けて恐明珠と曰はん。其の國に佛有り、度一切禪絕衆疑如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の度一切禪絕衆疑如來の名を聞くこと得る者有つて、歡喜信樂し至心に其の如來を諷誦し念ぜん。若し復人有つて斯の佛の名を說かん。其れ有聽者は當に質直を以つて諛諂する意無く、之れを宣傳する者は眞正に之れを說くべし。斯れ等は皆能く衆賊兵及び諸の外道倒見の徒を壞り、悉く能く一切の疑結を決散し、必ず正覺の道を成就することを得ん。

復次に舍利弗よ。南方に此の恐明珠世界より去つて、千八百の佛刹を度り、世界有り名けて花香と曰はん。其の國に佛有り、寶火侍從如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。舍利弗よ。若し寶火侍從如來の名を聞くこと得る者有つて、歡喜踊躍し一心に信樂し持し諷誦し念ぜば、斯の諸人等は能く世間の爲めに大[一七]珍寶と作り、當に無上正法の輪を轉ずべし。是くの如く舍利弗よ。斯の佛の名を聞き信樂する者は、大利益功德を得ること乃ち爾り。其れ生死の難を畏れ惡むこと有つて、其の心意を傾け聲聞緣覺の道に著し在かん。此れ等の徒類は小擇淺智にして志は下劣に存すれば、尊妙の道に堪任すること能はず、如來廣大の慧を放捨せん。斯の等輩は此の深妙の義を信解すること能はず。其れ衆生有つて廣妙なる慧を求め、衆德に傾け最特なる妙乘に著し、此の法の中に於いて、但當に無盡の藏を求索し、慳心・褊狹・局意を除去し、無[一八]蓋哀を發すべし。但衆生の願を充滿せんと欲し、其の施與を作し、如來一切に於いて無盡の報を得よ。會ず當に正覺の無盡を解了し、能く財寶を以つて衆生に施與すべし。一

【一七】珍寶を三本・宮內省本・聖語藏本には寶明に作る。

【一八】蓋を聖語藏本には盍に作る。

と。法音を聲揚するに三千に遍ぜり。無量なる衆生の類を化度し、五十劫生死の罪を却けん。

復次に舍利弗よ。南方に此の蓮花世界より去つて、萬の佛刹を度り、世界有り名けて明星と曰はん。其の國に佛有り、師子音如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の師子音如來の名を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し持し諷誦し念ぜん。斯の諸人等は後生の處、無量の音を得、及び如來淨光の音を得ん。所以は何ん。若し花香を虛空の中に散じて、南無佛と稱せば福を得ること無量ならん。況や靈廟にして如來の形像を覩んをや。至心に禮敬し花香を散ぜん者は、斯れ等は世に在つては猶し好花の若く、鮮澤せざること莫けん。

復次に舍利弗よ。南方に此の明星世界より去つて、萬五千の佛刹を度り、世界有り名けて無憂と曰はん。其の國に佛有り、精進軍如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の精進軍如來の名を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し持し諷誦し念じて、一心に無憂刹土を信じ奉り、清淨心を以つて誠を盡し此の如來を敬信せん。斯れ等は皆當に等正覺を成じ、能く衆生の爲めに廣く法輪を轉ずべし。所以は何ん。其の如來尊は本道を求めける時、此の誓願を興せばなり。『吾れ正覺を成ぜば、一切衆生にして我が名を聞かん者、其の人は皆當に我が刹土に生れ、悉く當に如來の慧を具滿すべし』と。舍利弗よ。若し謗毀し輕慢し不信にして更に相ひ調戲して持用し笑ふことを作すこと有らば、此の輩は億歲、地獄の中に在つて具さに罪報を受けん。

復次に舍利弗よ。南方に此の無憂世界より去つて、萬の佛刹を度り、世界有り金剛聚と名く、其の國に佛有り、金剛踊躍如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の金剛踊躍如來の名を聞くことを得る者有つて、一心に信樂し持

號し、號して衆祐度人無量と曰はん　舍利弗よ。此の如來尊は、何の故に名けて蓮花響と號するやと曰ふに、初め道場に昇り蓮花の上に坐して最正覺を成じたまひしとき、無數の諸天は虛空の中に在つて、異口同音に共に唱聲して言く。『蓮花響佛今世に出でたまへり。其の音遍く大千刹土に聞ゆ』と。是を以つての故に蓮花響と號するなり。其れ斯の佛の名を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し長跪叉手して、自ら是の言を作さん。『我れ今、蓮花響如來至眞等正覺を禮したてまつる』と。斯れ等は終に惡道に墮ちじ、諸の恐しき難に遊ぶとも疾く解脫を得ん。惟五逆惡罪を行へる者をば除く。

　復次に舍利弗よ。南方に此の月光世界より去つて、三萬の佛刹を度り、世界有り天自在と名く。其の國に佛有り、號して多寶如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰ひ號して衆祐度人無量と曰はん。舍利弗よ。其の佛世尊は何の故に名けて多寶となすやと曰ふに、本菩薩に遊べる徑路の時、異口同音に共に是の言を作せり。『斯の正士は乃し能く此の深妙の法寶有り、因つて名をば號して多寶と爲すと曰ふなり』と。若し族姓子、族姓女あつて、其れ斯の佛の名を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し長跪叉手して三反稱言せん。『我れ今、多寶如來・至眞・等正覺を禮したてまつる』と。其の人の生るゝ所は諸の佛刹に在つて、心常に一切の諸法を解了せん。所以は何ん。斯の佛世尊は菩薩たりし時、是の誓願を發せり。『此くの如き人は自ら法寶を成じ、(法)寶を以つて[一六]徒從と爲さん』と。

　復次に舍利弗よ。南方に此の天自在界より去つて、二萬の佛刹を度り、世界有り名けて蓮花と曰はん。其の國に佛有り、師子吼如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の師子吼如來の名を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し長跪叉手して、三たび聲を擧げて言はん。『我れ今、此の師子吼如來至眞等正覺を禮したてまつる』

【一六】徒を三本・宮內省本は侍に作る。

し持し諷誦し念ぜん。其の人は爲めに世間の最尊たる天龍鬼神のために敬仰せらるゝことを得て、二十劫生死の罪を却けん。

復次に舍利弗よ。南方に此の衆聚世界より去つて、十萬の佛剎を度り、世界有り名けて勝戰[一五]超度無極と曰はん。其の國に佛有り、光明尊如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の光明尊如來の名を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し持し諷誦し念ぜんに、若しは天、若しは人、閱叉・鬼神・斯れ等の衆生、此の功德に因つて、會ず正覺の道を成就すること得て、三十劫生死の罪を却けん。若し輕謗して信ぜざる者有らば八萬歲を滿じて大泥犁に在つて具さに衆苦を受けん。

復次に舍利弗よ。南方に此の勝戰超度無極世界より去り、五千の佛剎を度りて、世界有り一切音響と名く。其の國に佛有り、蓮花軍如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の蓮花軍如來の名を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し持し諷誦し念ぜん。若し人有つて大千の剎土の中に滿てる珍寶を持用し布施せしめんに、其の人福を得ること寧ろ多しとせんや不や」。舍利弗の言く。「甚だ多し、甚だ多し。世尊よ。稱げて量るべからざるなり」。佛の言く。「人有つて蓮花軍如來の名を持し諷誦し念ぜん者には如かず。所得の功德は布施功德者の上に過ぎだり。常に諸佛世尊と共に會せん。卿舍利弗よ。汝曹、都盡て此の功德を聽くに堪任すること能はじ。斯の佛世尊は久しきより已來、諸の禪の中に於いて諸の德を具したまへり。其れ此の佛の名を信持すること有らん者は其の人は皆當に三界を超過すべきこと、猶ほし蓮花の水より踊出するが若けん。

復次に舍利弗よ。南方に此の音響世界より去つて、二萬の佛剎を度り、世界有り名けて月光と曰はん。其の國に佛有り、蓮花響如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と

【一五】超を三本・宮內省本は越に作る。下これに同じ。

作すること得、疾く無上正眞の道を成じ、亦此れ等をして國土と無上道田とを成立し所願を具足せしむべし。亦當に我が衆願の如きも悉く滿ずべし』と。舍利弗よ。若し月光明如來の名を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し持し諷誦し念ぜん。此れ等の衆生も亦當に具さに無上道願を滿じて此の世尊の如くなるべし。

復次に舍利弗よ。南方に此の日世界より去つて萬八千の佛刹を度り、世界有り名けて金珠光明と曰はん。其の國に佛有り、號して火光如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰ひ、號して衆祐度人無量と曰はん。其の火光如來の名號を聞くことを得る者有つて信樂歡喜し持し諷誦し念ぜん。斯れ等は已に智慧の炬を持ち、一切生死の海を越度せり。當に各精進し一心に信行すべし。晝夜に常に念じて疑懈することを得ること莫れ。當に廣く宣化して法施を設くべし。一切の魔王は其の人の道心を毀壞すること能はじ、況や外道に於いて能く毀呰せんや。

復次に舍利弗よ。南方に此の金珠光明世界より去つて、萬六千の佛刹を度り、世界有り名けて衆色像[一三]道鏡と曰はん。其の國に佛有り、號して集音如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰ひ號して衆祐度人無量と曰はん。其れ衆生有つて彼の佛刹に生れ、甫めて當に生るべき者、現に已に生れたる者、此れ等の正士は一切の人天の像貌よりも過逾して、衆相巍容端正姝妙にして光明巍巍たらん。天世人の所受の體のごときには非じ。其の集音如來の名號聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し持し諷誦し念ぜば、後生の處は常に端[一四]政にして顏容妙好なることを得、心常に歡喜して諸佛を信樂せん。

復次に舍利弗よ。南方に此の衆色像界より去つて、萬三千の佛刹を度り、世界有り名けて衆聚と曰はん。其の國に佛有り、最威儀如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の最威儀如來の名を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂

【一三】道を三本・宮内省本は達に作る。

【一四】政を三本・宮内省本・聖語藏本は正に作る。

師と曰ひ、號して衆祐度人無量と曰はん。其れ開光如來の名號を聞くことを得ること有らん者歡喜信樂し持し諷誦せん者は、魔王兵衆も其の人の[二]道心を毀壞すること能はざるなり。

復次に舍利弗よ。南方に此の堅固世界より去つて、二千五百の佛刹を度り、世界有り名けて馬瑙と曰はん。其の國に佛有り、月燈光如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其れ斯の佛の名を聞くことを得る者有つて、持し諷誦し念ぜん。斯れ等は皆當に世の[三]作導と爲らん。應に世の供養を受くることを得べし。其れ斯の人等は天上の牢杖を持つことを爲ん。當に知るべし舍利弗よ。此の諸佛の名は郡縣丘聚村落諸の國邑に在つて則ち神塔たるなり、所以は何ん。舍利弗よ。最後の末世に斯の諸快士と、正覺の名には甚だ値ふことを得ること難し。其れ聞くこと有らん者は皆當に歡喜し一心に信樂せん。

復次に舍利弗よ。南方に此の馬瑙世界より去つて、世界有り名けて妙香と曰はん。其の國に佛有り、日月光如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の月光如來の名號を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し持し諷誦し念じて、若しは夢中に於いて、若しは聞き若しは說き展轉して相ひ語らん。此の輩は皆當に歡喜踊躍して、當に無量なる功德の報を得、道心堅固にして須彌山の傾動すべからざるが如く、一切の魔王も毀壞し能はざるべし。

復次に舍利弗よ。南方に此の妙香世界より去つて、萬の佛刹を度り、世界有り名けて爲日と曰はん。其の國に佛有り、日月光明如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の佛の國土には四路有ること無し。何等をか四路となすや。地獄と餓鬼と畜生と貧窮下賤と有ること無ければなり。其の佛世尊、本求道せる時、是の誓願を作せり。『設し我れ成佛し若しは泥洹の後に、其れ衆生有つて我が名を聞かん者は、皆當に不退轉地に

【二】道心　上卷の註三〇を參照。

【三】作導を三本・宮內省本は導首に作る。

復次に舍利弗よ。南方に此の正眞世界より去つて、八千の佛刹を度り、世界有り名けて廣博と曰はん。其の國に佛有り、光香明如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の香光明如來の名號を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し持し諷誦し念ぜんに、斯れ等は皆當に不退轉を得て最正覺を成ずべし。所以は何ん、香光明如來は本、菩薩の徑路に遊びし時、是の誓願を作せり。『我れ佛と作らん時、一切衆生にして我が名を聞かん者は、不退轉を得て疾く正覺を成じて、三塗に在つて恐怖の中にも疾く解脫することを得せしめん。

復次に舍利弗よ。南方に此の廣博世界より去つて、二萬の佛刹を度り、世界有り名けて廣遠と曰はん。其の國に佛有り、號して火光如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰はん、號して衆祐度人無量と曰はん。其の火光如來の名號を聞くことを得ること有らん者、歡喜信樂し持し諷誦せん者は、斯れ等は皆無限の福を得ん。其れ謗毀すること有つて信ぜざる者は無量の罪を獲ん。

復次に舍利弗よ。南方に此の廣遠世界より去つて、萬五千の佛刹を度り、世界有り名けて無崖際と曰はん。其の國に佛有り、無量光如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の無量光如來の名を聞くことを得る者有つて、盡心に意を淨め歡喜信樂せん。斯れ等の衆生は、此の如來の光明威神の爲めに護持せられ、生死の罪を却けて十劫の後に在らん。其の謗毀すること有つて信ぜざる者は、當に二十劫、波多畔泥犁[10]の中に在らん。

復次に舍利弗よ。南方に此の無崖際界より去つて、二萬の佛刹を度り、世界有り名けて堅固と曰はん。其の國に佛有り、號して開光如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人

【一〇】　波多畔泥犁 Padma-Niraya? 鉢曇摩、鉢頭摩？八寒地獄の一、紅蓮花地獄と譯す。

の中にして乃ち一たび頭を擧げて、孔に値はんと欲せり。斯れも亦甚だ難きなり。人身を求索するも甚だ難し甚だ難し。此に於いて八難の患を除去すること得んと欲して、若し斯の經法を聞くことを得ること有らん者は、衆難惡道を皆悉く永絶せん。是を以つての故に、當に大願を發し、最尊無比の法を解することを求めよ。若し一たび意を如來に發す者は、喜心信樂せん。斯れ等は疾く正覺の道に近づき、二十劫生死の罪を却けん。

復次に舍利弗よ。南方に此の法界より去つて、五萬五千の佛刹を度り、世界有り名けて星自在王と曰はん。其の國に佛有り、香自在王如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の香自在王如來の名を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し持し諷誦し念じて、長跪し叉手して自ら是の言を作さん。『我れ今、香自在王如來至眞等正覺を禮したてまつりて、當に大慈を發し功德聚を持して、諸の如來及び諸の弟子をして長く天樂を受け亦法樂を受けしめん。一切衆生も皆亦是くの如くせん。若使へ人有つて泥洹を慕はざらんも、斯れ等をして皆當に不退轉に住し疾く正覺を成ぜしむべし』と。三千世界の中に滿てる七寶を持用して布施すること千歲の中に滿てんに、得る所の功德寧ろ多しとせんや不や」。舍利弗の言く。「甚だ多し、世尊よ」。佛の言く。「人有つて斯の佛の名を持ち、大慈心を發して福を得るの甚だ多きには如かじ。施德を比ぶるに上の百倍よりも過ぎたり。三十劫生死の罪を却けん。

復次に舍利弗よ。南方に此の星自在王世界より去つて、萬の佛刹を度り、世界有り名けて正眞と曰はん。其の國に佛有り、大集如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の大集如來の名號を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し持し諷誦し念ぜん。此くの如き人等と諸佛の法と常に共に合偶せん。亦意樂を起して泥洹に入らざらん。

樂し持し諷誦し念じて、彈指の頃に大慈心を發さん。其の人至心に斯の佛を慕樂し已つて、自ら是の言を作す。「今我れ斯の佛の名號を聞くことを得て、彈指の頃に大慈心を發して、此の功德を持したり。願くば十方一切衆生をして如來微妙の慧を解することを得せしめん」と。當に知るべし舍利弗よ。斯れ等の衆生は弘誓の願を發したり。中に於いて所得の功德の福は恒邊沙の如くなり。諸佛の國土の中に滿てる七寶を持用して布施せんに其の所得の福寧ろ多しとせんや不や」。舍利弗の言く。「甚だ多し、甚だ多し、世尊よ。稱げて量るべからず」。佛の言く。「人有つて淨光如來の名を誦持せん者の歡喜踊躍し、彈指の頃に大慈心を發し、弘誓の願を興さんものの得る所の功德には如かず。布施に比するに百倍も過上せり。諸の正士等布施せんと欲する時には當に法施を作すべし。斯の功德は疾く正覺の道を成就することを得て、八十劫生死の罪を却けん。

復次に舍利弗よ。南方に此の雲厚無垢光界より去つて、萬の佛刹を度り、世界有り名けて法界と曰はん。其の國に佛有り、號して法最如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰ひ號して衆祐度人無量と曰はん。其の法最如來の名號を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し持し諷誦し念じて、長跪し叉手して頭面に禮を作さん。斯れ等は皆當に能く諸佛の法を護持すべし。佛法の中に於いて得る所、大利あつて目のあたり是くの如きを見ん。是を以つての故に皆當に信樂して斯の佛の名を持すべし。加みならず廣く宣傳して佛德を稱揚し尊の覺意を發して、當に心を起して輕慢の行を作さざれ。如來に向つて之れを敬信する者は、悉く能く三塗の苦を滅除せん、皆斯の德に由ればなり。諸佛世尊は無數劫の中にて衆の德本を聚め如來の行を具す、實に[八]謙苦を爲せること久遠にして量り難し、乃し如來の法身を成就し正覺を暢達すること得たり。一切の智は實に甚だ難しとなす。是を以つての故に當に慢を生ぜざれ。皆當に敬信の心を興立し如來に向ふべし。一切世界に設し水を中に滿てん、水の上に板有り、板には孔有らん。一つの[九]盲龜有り、百歲

【八】謙苦を三本、宮本は勤苦に作る。
【九】盲龜浮木の譬は雜阿含十六、法華經八、涅槃經二に出づ。而して雜阿と今經は人身難値を譬ふれども法花と涅槃とは値佛世難を譬ふ。

ることを得ん。我が名を聞かん者は、斯れ等は一切作佛を成ぜん時、我れは諸の毛孔より亦斯の香を出し無量の國に遍ぜん。三曼陀揵提如來も亦自ら一切の諸願を滿具せん。若し人有つて如來の名德を讃歎し廣說せしめんに、若しは族姓子、族姓女、七月の中、飢しても食を獲らざらん。故に當に往いて如來功德の法を歎說するを聽くべし。所以は何ん。斯の佛の名を聞かば得る所の功德は限量るべかず」と。舍利弗言く。「是くの如し世尊よ。其れ三曼陀揵提如來の名を聞くことを得ること有らば、所得の功德は稱げて量るべからず甚だ多きこと乃ち爾り。最後世の時、若し族姓子、族姓女が斯の功德を聞き歡喜踊躍し、及び復諸佛の名號功德の法を聞くこと得る者は、魔王も其の人の無上道心を毀壞すること能はず。所以は何ん。諸佛世尊は皆共に此れ等の衆生を擁護せん。是の故に魔王は其の人の道心を壞ることを得ること能はず」と。佛の言く。「設し我れ斯の佛を讃歎せば、衆生聞く者、或は能く惑亂せん。爾る所以は、此等の類は福德淺薄にして無黠の致す所なれば信持すること能はざるなり。若し信有る者は、舍利弗よ、皆當に歡喜踊躍し自ら慶ばん。此れ等は必ず當に最正覺を成ずべし、此の中に於いて得る所の功德を、我れ當に汝の爲めに少しく譬喩を引くべし。諸佛は大慈をもつて皆人をして其の法の中に入らしめんと欲せり。十方世界の中に滿てる七寶を持用して布施せんに、所得の功德寧ろ多しとせんや不や」。舍利弗の言く。「甚だ多し、甚だ多し。天中天よ」。佛の言く。「人有つて三曼陀揵提如來の名を聞くことを得る者の福を得るの甚だ多きには如かず。上の施よりも過出すること百倍有餘なり。加ならず復五體を地に投じて作禮せんをや。其の福德を得ること不可思議なり。生死の罪を卻けて百劫の後に在ん。

復次に舍利弗よ。南方に此の得勇力[七]界より去つて、十億の佛刹を度り、世界有り名けて雲厚無垢光と曰はん。其の國に佛有り、號して淨光如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰ひ號して衆祐度人無量と曰はん。其れ淨光如來の名號を聞くことを得る者有つて歡喜信

【七】界は恐く世界に作るべきか。下皆同じ。

し持し諷誦し念じて、膝を以つて地に著け長跪叉手して而も作禮せん。斯くの如き人等は當に智慧を稱ること猶ほし大海の若くなるべし。悉く能く諸佛の法を奉持して、疾く正覺の道を成就することを得ん。

復次に舍利弗よ。南方に此の色像光世界より去つて、萬八千の佛刹を度り、世界有り過珠光と名けん。其の國に佛有り、號して香像如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰ひ、號して衆祐度人無量と曰はん。其の香像如來の名號を聞くことを得る者有つて、彈指の頃にも恭敬して意を淨め、斯の如來を念ぜんに所得の功德は、假令へ人有つて閻浮檀金を持つて、三千大千世界に布き、悉く彌滿せしめ持用して布施せん。其の人の福を得ること寧ろ多しとせんや不や」と。舍利弗の言く。「甚だ多し、甚だ多し。天中天よ」。佛の言く。「人有つて口中にて香像如來の名號を諷誦せん者の彈指の頃の如きの功德の殊特なるに如かず。上の施しよりも過出すること百倍有餘なり。所以は何ん、一反唱聲して斯の佛の名を稱せば大益利を獲ん。何に況や目あたり如來の色像を視て禮を作し恭敬し及び[五]泥曰の後、廟寺に入り、形像を瞻觀し禮拜虔恭せんに、所得の功德寧ろ稱すべけんや。

復次に舍利弗よ、南方に此の珠光世界　り去つて、無數千の佛刹を度り、世界有り名けて得勇力と曰はん。其の國に佛有り、三曼陀颰提(晉には周徧と言ふ)[六]香熏如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。舍利弗よ。其の佛如來、本大乘を求め、菩薩たりし時に是の誓願を作せり。我れ先世において諸佛を供養し、及び復、彌嘉揵尼如來正覺を供養し、名好香丸の芥子の如くたるを燒いて自ら誓願して言さく、『願くば我れ今日此の功德を持つて、作佛を成ぜん時、身の諸の毛孔より悉く妙香を出し、遍く十方恒沙の世界に熏じて猶ほ雲の起るが若くせん。皆他方の佛國、無量の世界に彌滿せしめん。一切衆生は戒香を具す

【五】泥曰を三本、宮本は泥洹に作る。涅槃のこと、滅と譯す。

【六】香熏を周徧と共に三本、宮内省本は夾と註せり。

上道心を毀壞すること能はじ。猶ほし須彌山の堅住にして不動なるがごとし。功德甚だ多く日日に增益して限量るべからず。（裁光世界、丹本戒光）

復次に舍利弗よ、南方に此の裁光世界より去つて、萬四千の佛刹を度り、世界有り名けて音響と曰はん。其の國に佛有り、大須彌如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の大須彌如來の名を聞くことを得ること有つて、盡心に信樂し持し諷誦し念ぜん。若しは夢中に至るまで。斯れ等の人は終に更に恚亂の意を起して諸の快士に向はざらん。不退轉を得て當に正覺を成ずべし。斯の諸の正士は當に妙慧を解し、一切法を了ずること猶ほし夢の如くならん。八十劫の生死の罪を却けん。

復次に舍利弗よ。南方に此の音響世界より去つて、五千の佛刹を度り、世界有り紫磨金と名けん。其の國に佛有り、阿提彌留（普言超出）須彌如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の阿提彌留如來の名を聞くことを得る者有つて、盡心に信樂し持し諷誦し念ぜん。所得の功德は、設使ひ人有つて[四]閻浮檀金を持つて、三千大千世界に布き、悉く彌滿せしめ持用して布施せん。其の人福を得ること寧ろ多しとせんや不や」。舍利弗の言く。「甚だ多し、甚だ多し。天中天よ」と。佛の言く。「人有つて阿提彌留如來の名を持し諷誦し念ぜん者の淨心に信樂して得る所の功德には如じ。施の上に過出すること百倍有餘にして以つて比ぶることを爲すこと無けん。若し常に此の如來の名を念ずること有らば、生死の罪を却けて十劫の後に在ん。

復次に舍利弗よ。南方に此の紫磨金世界より去つて、二萬の佛刹を度り、世界有り色像光と名けん。其の國に佛有り、喩如須彌如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の喩如須彌如來の名を聞くこと得る者有つて、淨心に信樂

【四】閻浮提金 Jambunada-suvarṇa とは炎浮檀金・閻浮那提金等と記す。其色赤黃にして紫焰氣を帶ぶ。閻浮河の川底より出づる沙金なり。

信樂して之れを諷誦する者も亦復少しく有らん。百萬の中にて若しは一り若しは兩りならん」。舍利弗の言く。「設し斯の經を聽受し信ぜん者の所得の功德は爲れ幾許ぞや」と。佛の言く。「諸の如來は無數劫に於いて五道[二]に遊び、衆生の三塗の厄を濟し、一切弘誓の願を滿具して世に興出し、廣く衆生の爲めに妙法を敷陳したまふ。實に値ひたてまつることは難しと爲す。用つて正法を說くが故に、利益する所多く、一切衆生にして其れを聞くこと有らん者は歡喜信樂せん。斯れ等は皆當に疾く能く我が智慧を解了して、生死の罪を却くること百劫の後に在かん。其れ此の法を聞いて信樂せざる者、斯れ等の輩も我れは悉く之れを見る」と。舍利弗の言く。「惟、天中天よ。幾所の人が有つて斯の經を誹毀するや。所得の罪報は幾くの時のあひだ苦を受くるや」と。佛の言く。「斯の衆生の輩は六十億歲、地獄の中に於いて具さに衆罪を受けん。爲れ諸の如來等正覺の法を誹毀するを以つての故なり。舍利弗よ。斯の法は幾く時の間に興盛せん。在所の處にて愚癡の人は、中に於いて地獄の行を造立せん、諸佛如來を謗るを用つての故に。是の故に舍利弗よ、夫れ黠慧の者、若しは族姓子、族姓女にして最後の末世に此の妙法を聞いて信じて誹謗せず、宜しく當に自ら慶び歡喜踊躍して、是の思惟を作すべし。我れ等は如來の法を謗らず。身に受けし所の惡行苦報は吾れ已に脫することを得たり」と。佛、舍利弗に告げたまはく。「最後世の時に大千世界の中に滿てし七寶を持用して布施せんこと、猶尙ほ得ること易し。斯の衆の功德を讚歎すること有るを聞くことは實に値ふこと得ること難し。此の法に値ふ者は皆如來の爲めに護持せらる。

復次に舍利弗よ。南方に此の眞珠世界より去つて、萬の佛刹を度り、世界有り裁光[三]と名けん。其の國に佛有り、號して須彌如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰ひ、號して衆祐度人無量と曰はん。其の須彌如來の名號を聞くことを得る者有つて、持し諷誦し念じて歡喜信樂し、長跪し叉手して當に作禮せば、當に無比の功德の報を得べし。魔王も其の人の無

【二】五道とは五趣ともいふ。一に地獄道、二に餓鬼道、三に畜生道、四に人道、五に天道を五道と云ふ。衆生が煩惱業によりて生死往來する所なるが故に五道といふ。趣とは衆生が趣き住む所なるが故なり。

【三】裁光を三本、宮本、聖本は戒光に作る。下皆同じ。

復次に舍利弗よ。南方に此を去つて十萬億の佛刹を度り、世界有り名けて眞珠と曰はん。其の國に佛有り、日月燈明如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御 天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其れ日月燈明如來の名を聞くことを得る者有つて、持し諷誦し念じて歡喜踊躍して、至心に信樂して疑ふこと有ること無けん。如來の言敎は實に爲れ快善なり。無數千人は淨心に敬信して、悲喜の情踊つて之れが爲めに淚を雨らさん。此の衆生の輩は自ら當に吾れ等は住昔曾つて此の諸佛に値見し已りぬと憶知すべし。若し女人有つて、其の日月燈明如來の名を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂せん、是れより已後所生の處には止更に女人の身を受けざらん。十方世界に其れ斯の佛の名を聞くことを得る者有らば、皆當に不退轉地に立ち必ず正覺を成ずることを得べし。諸欲の中に於いて意常に清淨にして、欲垢の爲めに纒縛せられざらん。此の佛刹の人と及び他方諸の衆生の類にして、此の如來の名號を聞かん者は、其功德を計るに限量るべかず。言辭を以つて稱說すべき所あらんも能く其の德を盡さじ。魔王官屬も終に其の人の無上道心を毀壞するに堪任せじ」と。佛、舍利弗に語りたまはく。「魔王は常に此の經の便りを索めんと欲し、之れを斷絕せんと欲せり。所以は何、諸欲衆のために纒縛せらるればなり。然りと雖も舍利弗よ。斯の伴黨は最後の世の時に會して、當に斯の尊き經法を信樂すべし。而も其の信樂する者を謗毀せざらん。斯の正士は優曇花の如し、世間に在つて宜しく一切三界の供養を受くべし」と。舍利弗の言く。「惟天中天よ。最後の末世は兇愚暴惡なり、幾所の衆生か能く日月燈明如來の名を信持すること有る者ぞ、及び諸の世尊如來の名號を歡喜して信ずる者ぞや」と。佛の言く。「我れ今現在に諦に之れ觀察す。比丘僧の中には終に有るを見ざるなり。白衣を被る者の最後末世も亦復是くの如し。斯の經を

【一】天中天とは佛のことなり。

祐度人無量と曰はん。現に在して說法したまふ。

復次に舍利弗よ。東方に此の金光世界を過ぎて、刹土有り名けて清淨と曰はん。其の國に佛有り、轉不退轉法輪寶普集豐盈如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。諸の菩薩の無央數の衆と前後に圍遶せられて、不退轉に無上の法輪を轉じたまふ。

復次に舍利弗よ。東方に此の淸淨世界を過ぎて、世界有り名けて淨住と曰はん。其の國に佛有り、圍遶特尊[七]得淨如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。斯の諸の如來・至眞・等正覺は現に東方に在す。其れ諸の如來の名を宣揚すること有つて廣く分別して說き、人をして受持せしめん　復、餘の者の不可計數なる有らん。今悉く現に在して無上の法を說きたまはん。其れ斯の諸佛の名を聞くことを得ること有つて盡心に信樂し、膝を以つて地に著け長跪し叉手して、普く東方の諸佛の爲めに禮を作し、諸佛の名を持すること三たびして是の言を作さん『我れ今普く東方の一切の諸佛世尊を禮したてまつる』と、其の人は福を得ること限量すべからざらん」と。

佛說稱揚諸佛功德經卷上

[七] 得淨を三本と宮內省本とは淸淨に作る。

復次に舍利弗よ。東方に此の闇遠世界より去つて、剎土有り名けて度覺と曰はん。其の國に佛有り、常滅度如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。而も今現に在して不退轉に無上の法輪を轉じたまふ。

復次に舍利弗よ。東方に此の度覺世界より去つて、剎土有り須彌脇と名けん。其の國に佛有り。號して淨覺如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰ひ、號して衆祐度人無量と曰はん。而も今現に在して廣く經法を說きたまふ。

復次に舍利弗よ。東方に此れより去つて須彌脇世界を過ぎて、剎土有り名けて名稱と曰はん。其の國に佛有り、無量寶花光明如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん、而も今現に在して廣く妙法を說きたまふ。

復次に舍利弗よ。東方に此の名稱世界を過ぎて剎土有り、名けて妙軟と曰はん。其の國に佛有り。須彌步如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。而も今現に大衆の中に在して廣く經法を說きたまふ。

復次に舍利弗よ。東方に此の妙軟世界を過ぎて剎土有り、名けて豐養と曰はん。其の國に佛有り。寶蓮花如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。現に大衆中に在して廣く經法を說きたまふ。

復次に舍利弗よ、東方に此の豐養世界を過ぎて、剎土有り蓮花踊出と名けん。其の國に佛有り。一切衆寶普集如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。現に在して說法したまふ。

復次に舍利弗よ。東方に此の蓮花踊出世界を去つて、剎土有り名けて金光と曰はん。其の國に佛有り、樹王豐長如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆

復次に舍利弗よ。東方に此の栴檀世界より去つて、二十億の佛刹を度り、世界有り名けて善住と曰はん。其の國に佛有り、世燈明如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん、其の世燈明如來の名を聞くことを得る者有つて、盡心に信樂し持し諷誦し念ぜん。斯れ等は皆當に三塗の[七〇]厄を脫すべし。唯逆罪と瞋恚を起して諸の快士に向ふことを除く。其れ此の如來の名を持すること有らん者は、爲めに此の尊の妙法の寶を得て、二十劫の生死の罪を却けん。

復次に舍利弗よ。東方に此の善住世界より去つて、八十億の佛刹を度り、世界有り名けて光明と曰はん。其の國に佛有り。休多易寧如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。世界を光明と名くる所以は、其の國の佛土は地平かにして掌の如く、衆蓮花を以つて世界に布き滿てり。其の土の如來は光明晃晃たり。猶ほし大光の晝夜常に照すが若し。其の佛國土は光明巍巍として最尊第一なり。常に大衆に於いて尊法輪を轉ず。若し有人をして三千世界に金を以つて地に布かしめ、復妙衣を以つて其の地を莊飾し、悉く三千世界に彌滿せしめ持用して布施せんに、其の功德を得ること寧ろ多しとせんや不や」。舍利弗の言く。「甚だ多し、甚だ多し、天中天よ」。佛の言く、「一人有つて休多易寧如來の名を聞かん者の、盡心に信樂し持し諷誦し念ぜんには如かず。其の人の福を得ることは布施の功德者に過出すること上に數百千倍せん。斯れ等の衆生は自ら恣に發願して意の如くに之れを得て、六十劫生死の罪を却けん。後に無上正眞道を成ぜん時、其の佛の國土は嚴淨快樂にして尊貴なること無比ならん。

復次に舍利弗よ。東方に此の光明世界より去つて、復刹土有り闍邃月と名けん。其の國に佛有り、號して寶輪如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰ひ、號して衆祐度人無量と曰はん。今現に在して說法したまふ。

【七〇】厄を三本と宮內省本とは厄難に作る。

して自ら是の言を作さん。『我れ今、鼓音王如來・至眞・等正覺を禮したてまつる』と。この所得の功德は三千大千一切世界の中に滿てる珍寶を持用して布施すると、其の功德を得ること寧ろ多しと爲んや不や」。舍利弗の言く。「甚だ多し、甚だ多し。天中天よ」。佛の言く。「人あつて此の佛の名を持する功德の甚だ多きには如かじ、上みの施より過出することは百千萬倍なりと。

復次に舍利佛よ。東方に此の光明世界より去つて、百五十の佛刹を度り、世界有り衆望德と名けん。其の國に佛有り、號して月英如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰ひ、號して衆祐度人無量と曰はん。其の月英如來の名を聞くことを得る者有つて、盡心に信樂し、若しは天若しは人、龍及び非人をして此の佛の名を聞いて持し諷誦し念ぜしめん。斯れ等は皆當に淸淨に入ることを得べし。猶ほし蓮花の塵水に著かざるが若くならん。衆惡の中に於いて悉く犯かさるること無けん。若し女人有つて月英如來の名を聞くことを得る者は、淨心に信樂して訕謟すること有ること無けん。是より以後は、更に女人の身を受けざらん。若し信ぜずして輕慢し謗毀すること有らば、當に二十劫のあひだ阿鼻大泥犂の中に在つて具さに衆苦を受くべし。若し有人をして盡心に信樂し大恭敬を懷かしめば、二十一劫の生死の罪を却けん。

復次に舍利弗よ。東方に此の衆德世界より去つて、十萬億の佛刹を度り、世界有り住栴檀地と名けん。其の國に佛有り、超出衆花如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん」。佛、舍利弗に告げたまはく。「其の佛、本菩薩の道を行ぜし時、自ら是の言を作さく。『我れ正覺を成じて世に興出せん時、其の刹土の中に〔六八〕八難有ること無けん』と。是の誓願を用つて自ら佛國を淨めたりき。若し超出衆花如來の名を聞くことを得る者有つて、盡心に信樂し持し諷誦し念ぜん。斯れ等の大士は諸の世間に於いて、利益する所多きこと〔六九〕大藥王の如くならん。

〔六八〕八難とは一に地獄・二に餓鬼・三に畜生・四に北鬱單越・五に長壽天・六に盲聾瘖瘂・七に世智辯聰・八に佛前佛後の八種は見佛聞法せざるが故に八難といふ。
〔六九〕大藥王とは藥樹王或は藥王樹のことならんか。耆域がこの樹を獲て萬病を治癒したるが故に草木の中にて最尊なる樹なりとして藥樹王といふ。

ん。其の國に佛有り、師子響如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の師子響如來の名を聞くことを得ること有らん者は、持し諷誦し讀み、一心に信樂して念じ、戒行に於て、斯れ等は皆當に不退轉に立ち、最正覺を成じて[六七]衆德輪を作し、自淨法に入り中に於いて旋轉して世より過出せしむべし。二十劫の生死の罪を卻けん。若しは族姓子、族姓女、若しは人と非人と其の諸の厄難にも疾く解脫することを得ん。現在世に於いて斯の佛の名を聞くことを得ること有らん者は、諸の世間に於いて猶ほし塔の若くせよ。

復次に舍利弗よ。東方に此の龍珠觀世界より去つて、三十の佛剎を度り、世界有り名けて修行と曰はん。其の國に佛有り、大强精進勇力如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の大强精進勇力如來の名を聞くことを得る者有つて、盡心に信樂し持し諷誦し念じて、右膝を地に著け叉手して禮を作し、自ら是の誓を作さん。『我れ今大强精進勇力如來・至眞・等正覺を禮したてまつる』と。斯の人等は生死の中に遊んで饒益する所多からん。大戰力を得て衆魔を退卻せしめ諸の外道を伏し、二十五劫の生死の罪を卻けん。

復次に舍利弗よ。東方に此の修行世界より去つて、四千の佛剎を度り、世界有り、名けて堅住と曰はん。其の國に佛有り、過出堅住如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の過出堅住如來の名を聞くことを得る者有つて、淨心に信樂し持し諷誦し念ぜん。此等は皆當に大乘に堅住し、諸の尊法に於いて堅固なる財を得べし。加ならず大福を得て晝夜日日に功德を增益せん。

復次に舍利弗よ、東方に此の堅住世界より去つて、三十六の佛剎を度り、世界有り名けて光明と曰はん。其の國に佛有り、鼓音王如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の鼓音王如來の名を聞くことを得る者有つて、長跪し叉手

【六七】衆德輪とは如來の轉法輪のこと。

德の致す所に因つて其の後願の如く三乘の中に於いて滅度を取らん。當に知るべし舍利弗よ、衆罪の行は愼みて造作すること莫れ。我れ此の經の中の上章に說く所の如し。[六四]焦柱に向つて恚りを起すべからず。何に況や惡を懷いて衆生に向はんをや。已に信心を立て成道に向はん者においてをや。況やまた諸の如來、[六五]無量慧等に向つて、瞋恚を起し誹謗を懷かんをや。此くの如きの人は無數劫に於いて地獄の中に在つて、具さに無量の苦惱の罪を受けん。爾して乃ち出づることを得ん。我れは斯れ等の大乘の信解を求むる者の爲めに斯の法を說く。其れ大乘法を毀壞すること有らん者は、實に當に具さに無量の大苦を受くべし。信樂の者は自ら果して當に不退轉地に立ちて必ず正覺を成ずべし。

復次に舍利弗よ。東方に此の豐饒世界より去つて、八十の佛刹を度り、世界有り最香熏と名けん。其の國に佛有り、無量香光明如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其れ無量香光明如來の名を聞くことを得ること有らん者は、持し諷誦し念じて、一心に信樂し最後に之れを念ぜん。斯れ等は皆當に不退轉地を得て最正覺を成ずべし。正覺を成じ已つて、諸の毛孔の中より衆の妙香を出し、遍く十方に至ること猶ほし雲の起るが若くならん。是れ下劣少智の士、淺法を學べる者は斯の經を解するところに非らざるなり。吾も亦[六六]道眼をもて斯れ等の諸の衆生の類を觀視る。其れ斯の經法を信樂すること有らん者は、過去の世間、無數劫の中にして、諸佛の集むる所の諸の慧法に於いて衆の德本を造らん。今乃ち此の尊妙の法を聞くことを得て、最後の末世に斯典を聞き教信して奉持し、未だ曾つて意を生じて誹謗を懷かじ、初めより未だ曾つて法を解せざる時有らず、四十劫の生死の罪を卻けん。其の人の功德は月の滿たんと欲するが如く、世間の爲めに快士と作らん。應當に一切に恭敬を受け、衆生の爲めに良福田と作ることを得べし。

復次に舍利弗よ。東方に此の香熏世界より去つて、五十の佛刹を度り、世界有り龍珠觀と名け

【六四】焦柱を明藏は焦炷に作る。

【六五】無量慧とは佛の德號。

【六六】道眼とは邪正を分別して平等の理を證悟せる智慧。

諸佛は普く一切を利益し、一人も捨てたまはずして而も滅度を取りたまふ。諸佛は大慈をもて普く衆生を愍み法雨を雨したまふ。其れ此の如來の名を持することを得ること有らん者は歡喜信樂せん。所得の功德をば我れ當に汝が爲めに少しく譬喩を取るべし。[59]恒邊沙の如き諸佛の國土に、中滿てて七寶を持用して布施せん、所得の功德、寧ろ多しとせんや不や」。舍利弗の言く。「甚だ多し、甚だ多し。不可思議なり」。佛の言く。「大海の水の一滴を分つて一分と爲せん、布施の功德は猶ほし一滴の若し。佛の名を持する者の所得の功德は、大海の水の如し、喩へと爲すべからず。少功德の人は斯の經典を聽くことに堪任すること能はず。若し有人をして久しく德本を殖ゑ、斯の法を聞くことを得て信じて疑はざらん。若し地獄、畜生、餓鬼及び長壽天をして此の經を聞かしめん者は尙ほ大福を得ん。況や復、人有つて已に德本を種ゑて斯の經法を聞かんに、所得の功德は寧ろ喩ふ可けんや。

復次に舍利弗よ。東方に此の佛土より去つて、二十の佛刹を度り、世界有り名けて豐饒と曰はん其の國に佛有り、內豐珠光如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の內豐珠光如來の名を聞くことを得る者有つて、一心に信樂し持し諷誦し念ぜん。斯れ等は皆當に大功德を獲、終に三塗に墮つるの難を畏れず、所發の[60]弘誓は意の如くにして大乘の願を滿ずることを得べし。若し今現在にもあれ、般泥洹の後にもあれ。其れ內豐珠光如來の名を聞くことを得ること有らん者は信樂し誦念せん。斯れ等は皆當に大乘の法樂を得て以つて自ら娛み及び天上人中の快樂を受くべし。常に當に清淨なる佛土に生ずることを得、諸の佛國に於いて其さに衆願を滿し、意の欲する所に從つて三乘の法に於いて滅度を得べし。其の中間に於いて此の佛の所に從つて、[61]功德聚を獲ること甚大弘廣ならん。恒沙劫の中にて作る所の衆罪は、悉く當に棄捨して受けざらん。唯[62]逆罪と瞋恚の意を起して諸の[63]快士に向ふをば除く。此等の類は久しき長き世に於いて、地獄の中に斯の罪を受け畢つて此の佛の名を聞くことを得たる功

【五九】 洹邊沙ヶ三本及宮內省本には恒河邊沙に作る。恒河の砂の如く無數なることを譬へたるものなり。

【六〇】 弘誓とは普く上求下化を滿足せんと自ら其心に要制する志願をいふ。

【六一】 功德聚とは佛の功德を指す。佛は功德の聚積なるが故に。福聚とも云ふ。塔を功德聚と云ふことあり。

【六二】 逆罪とは極惡の罪業は佛果菩提に逆ひ無間地獄の重苦を得るが故なり。されば無間業とも云ふ。

【六三】 快士とは菩薩のこと。

舍利弗よ。常に當に大敬信心を諸の如來に興立すべし。是くの如く諸佛は其の人を擁護して、功德を得しむること計量る可からざらしめん。若し此の諸佛の名を持すること有らん者は、其の所願に從つて之れを得ん。皆悉く當に諸佛の智慧を得、備さに滿てて不退轉を得せしむべし。長跪し叉手して自ら是の言を作さん『我れ今此の一切花香自在王如來を禮して、常に念じて忘れじ』と。十四劫の生死の罪を却けん。

復次に舍利弗よ。東方に此の喩月世界より去つて、二千一億の佛刹を度り、世界有り名けて星王と曰はん。其の國に佛有り、號して樹王如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰ひ、號して衆祐度人無量と曰はん。其れ樹王如來の名號を聞くことを得る者、歡喜信樂し持し諷誦する者有らば、斯の輩は皆當に諸の法樂を得、諸の魔兵を壞し羅網を裂破すべし。若し此の經を聞いて輕慢し誹謗して用つて相ひ調戲せば、六萬歲を滿して[58]僧迦泥犁に於いて其の罪報を受けん。若し我れは此の經を信ぜずと言ふこと有らば、七萬歲に於いて常に餓鬼に在り、飮食水穀の名を聞かざらん。

復次に舍利弗よ。東方に此の星王世界より去つて、五十五の佛刹を度り、世界有り其の國に佛有り、號して勇猛執持牢杖棄捨鬪戰如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰ひ、號して衆祐度人無量と曰はん。其れ勇猛執持牢杖棄捨鬪戰如來の名を聞くことを得る者、歡喜信樂し持し諷誦する者有つて、乃至夢中にても、此等の衆生は譬へば金剛の衆の魔兵を伏するが如く、諸の智慧を以つて諸欲を消伏せん。其れ此の佛の名號を聞くことを得て一心に信ずること有らん者は、審かに諦かに自ら我れ等の前世のことを知らん。以爲曾つて此の佛世尊が菩薩に遊びし徑路の時を見て疑はざればなり。我れ等當に弘誓の願を發し、大乘に從つて退轉することを得ること莫るべし。但當に自ら慶び歡喜踊躍して大法路に進むべし。如來の種姓名號を聞くこと得よ。

【五八】 僧迦泥犁 Saṅghāta-Niraya とは衆合地獄なり。衆多の苦具身を逼め害する地獄。

はん。其の國に佛有り、龍自在王如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の龍自在王如來の名を聞くことを得る者、盡心に信樂し持し諷誦する者有つて、若しは郡縣村落の中にして雹霜を雨らしむる時、右膝を以て地に著け叉手して禮を作し、是の言を作さん。『龍自在王如來は本菩薩の道を行ぜし時、無數の諸龍を厄難の中に於いて悉く之を度脱したまへり。此の功德に由つて自ら成佛を致せしとき、是の誓言を作さく。若し我が刹の中及び諸佛の土にして、若し我が在世にもあれ般泥洹の後にもあれ、若し諸龍有つて雷電雹霜して衆生を恐怖せしめんに、龍自在王如來の威神功德智力を以つて、至誠に誓願して口づから是の言を作し、頭面して作禮せば疾く度脱することを得せしめん』と。當に知るべし舍利弗よ。是くの如き厄難のときに疾く解脱することを得ん。唯[五六]宿罪を除く。免るることを得ること能はざればなり。一切の諸龍、若し厄難に在つて此の佛の名を聞けば、衆厄の中に於いて疾く解脱することを得ん。其れ斯の佛の名を執持する有らん者は、復他人に勸めて誦持せしめ功德を增益せしめよ。必ず當に此の佛國に[五七]往生することを得、最正覺を求め、不退轉に立ち、疾く成ずること久しからざるべし。

復次に舍利弗よ。東方に此の正覺世界より去つて、十億の佛刹を度り、世界有り名けて喩月と曰はん。其の國に佛有り、一切花香自在王如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の一切花香自在王如來の名を聞くことを得る者、淨心に信樂し持し諷誦する者有らば、斯の其人等の所生の處には、當に恒沙の戒香の具足することを得べし。一切の妙香の香氣は諸佛の刹土に熏じて衆戒具滿し、常に能く奉持して未だ曾つて缺犯せざらん」。舍利の言く。「本、何の因緣によつて乃ち能く是くの如くなるや」と。佛の言く。「其の佛、本菩薩の道を行ぜし時、是の誓願を作せり『我れ若しは在世にもあれ般泥洹の後にもあれ、若し衆生有つて我が名字を持し一心に信樂せば、皆悉く當に是くの如き戒香を得べし』と、是の故に

【五六】宿罪とは宿世の罪。過去世に造作せる罪業のこと。

【五七】往生を明藏に住生に作る。

復次に舍利弗よ。東方に此の堅固世界より去つて、十の佛刹を度り、世界有り名けて無際と曰はん。其の國に佛有り、梵自在王如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の梵自在王如來の名を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し持し諷誦し念じて、叉手し禮を作さん。其の人は必ず當に其の佛を見たてまつることを得て、轉輪王と作り不退轉に立ち、當に無上正眞の道を成ずべし。

復次に舍利弗よ。東方に此の無際世界より去つて、二千の佛刹を度り、世界有り名けて爲月と曰はん。其の國に佛有り、金光明如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の金光明如來の名を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し持し諷誦し念ぜん。此等は後生には常に衆生のために廣く經法を說かん。一切は夢の如く水中の月の如く幻化の法なりと分別することを爲し、衆生を用窮すと雖も、是れより以往は終に復惡道の中に墮ちずして、當に大德と衆聚共會して常に歡喜すべし。能く衆生をして快樂を得せしめ、後に佛と作るの時には大乘の法を以つて、世に無有の二道を興顯すべし。

復次に舍利佛よ。東方に此の月世界より去つて、千の佛刹を度り、世界有り名けて火光と曰はん。其の國に佛有り、號して金海如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰ひ、號して衆祐度人無量と曰はん。其の金海如來の名號を聞くことを得る者、盡心に信樂し持し諷誦する者有らば、不退轉を得て必ず正覺を成ぜん。ゆゑは何ん、其の佛如來本菩薩の道を行ぜし時、是の誓願を作さく『若し人有つて我が國に生ぜん者及び他方の諸佛の國土に在つて、我が名號を聞かんに、斯れ等は當に不退轉地に住し最正覺を成ずべし。我れ當に盡して如來無上の願を滿具すべし』と。

復次に舍利弗よ。東方に此の火光世界より去つて、十八の佛刹を度り、世界有り名けて正覺と曰

より湧出する如けん。五十劫の生死の罪を却くべし。

復次に舍利弗よ。東方に此の蓮花光世界より去つて、十萬億の佛刹を度り、世界有り普度衆難と名けん。其の國に佛有り、號して身尊如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰ひ、また號して衆祐度人無量と曰はん。其の身尊如來の名號を聞くことを得る者、盡心に信樂し持し諷誦する者有らば、其の人は疾く生死の海を度り、能く衆生の諸欲飢渴を除き、當に快士と作つて爲めに世間に於いて福田と作り能く三界の一切の供養を受くべし。其れ[五四]自ら此の如來を見ること有らん者は、歡喜信樂して當に世間の爲めに大法師と作るべし。金剛力を得、不退轉に立ち、當に無上正眞の道を成ずべし。其れ女人有つて此の身尊如來の名を聞かん者は、盡心に淨意にして歡喜信樂せん。無諛諂者は女身を厭汚し、是れより以後、更止して女人の身を受けず、六十劫の生死の罪を却けん。是くの如く舍利弗よ。其れ身尊如來の名號を聞くことを得る者有らば、斯れ等は爲めに無極の德を獲ん。是の故に當に正覺の道を求めて、普く一切をして衆苦を離れしむべし。

復次に舍利弗よ。東方に此の度衆難世界より去つて二十の佛刹を度り、世界有り名けて堅固と曰はん。其の國に佛有り、號して[五五]金光如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と曰ひ、號して衆祐度人無量と曰はん。其の金光如來の名號を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し持し諷誦し念ぜば、斯れ等は皆當に佛の光明の爲めに護持せられ、成佛の時、諸の如來に於いて光明廣遠にして自在を得て、悉く如來の一切の衆德を得べし。是の故に至心に普く當に諸佛の尊號を信樂して、悉く無礙辯才の慧を得べし。終に下劣の法を諮受せざれ。諸願の行を當に疾く成滿すべし。其れ此の諸の如來の名を聞くこと有らば、當に自ら勸めて尊意を發起し、金剛の志を發し無上道を求むべし。此等は皆當に十二劫の生死の罪を却くべし。

【五四】自を原本には目に作る、今三本と宮内省本とによつて改む。

【五五】金光を三本と宮内省本とは金光明に作る下これに同じ。

光と曰はん。其の國に佛有り、號して淨光如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の淨光如來の名號を聞くことを得る者有つて、其の名號を誦して歡喜し禮を作さん。若しは天、若しは龍、[五一]閱叉及び非人、此等のもの壽終らば當に天上及び人中に生るべし。未だ曾つて天人の路を失はず、常に當に法の盈利に値ふことを得べし、貪心瞋恚愚癡の意は疾く清淨なることを得ん。若し謗毀して信せざる者有らば、六萬歲の中、[五二]盧獵泥犂に於いて罪を受けん。

復次に舍利弗よ。東方に此の琉璃光世界より去つて、三百の佛刹を度り、世界有り得大豐と名けん。其の國に佛有り。日光如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其れ斯の佛の名を聞くことを得る者有つて、歡喜し信樂して其の如來を念ぜん、斯れ等の類は譬へば日輪の若くにして、皆悉く具さに白淨の法を滿じて、衆魔及び諸の外道を降伏し、四十劫の生死の罪を却けん。

復次に舍利弗よ。東方に此の大豐世界より去つて、萬の佛刹を度り、世界有り名けて得立正覺侍從と曰はん。其の國に佛有り、無量寶如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん、其の無量寶如來の名號を聞くことを得て、歡喜信樂し持し諷誦する者有らん。斯の輩は皆當に[五三]七覺寶を得、能く衆生を最寶の中に立て、衆德の聚をして日月に增長せしむべし。

復次に舍利弗よ。東方に此の立正覺世界より去つて、五千の佛刹を度り、世界有り蓮花光と名けん。其の國に佛有り、蓮花最尊如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の蓮花最尊如來の名號を聞くことを得、歡喜し信樂し持し諷誦する者有らば、猶し妙花の尊法室に在つて、功德智慧日月に增長するが若く、譬へば蓮花の水

【五一】閱叉 Yakṣa とは夜叉・藥叉・夜乞叉と記す。能噉鬼・捷疾鬼・勇健・輕捷等と譯す。

【五二】盧獵泥犂を三本及宮內省本は盧盧泥犂に作る。縮藏は盧獵泥犂に作る Rurava-Niraya 八大地獄の一、叫喚地獄と譯す。

【五三】七覺寶、二二を參照せられよ。

復次に舍利弗よ。東方に此の音響世界より去つて萬二千の佛刹を度り、世界有り名けて安隱と曰はん。其の國に佛有り。無限名稱如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の無限名稱如來の名を聞くことを得る者有つて、一心に信樂して諷誦する者は、長跪し叉手して自ら是の言を作さく。「今我れ無限名稱如來・至眞・等正覺を禮したてまつる」。と其の人の所得の功德を計るに、若し七寶を積むこと[四七]須彌山の如くし、持用し布施して百歲の中に滿てん、所得の功德寧ろ多しと爲んや不や」。舍利弗の言く。「甚だ多し、甚だ多し。天中天よ」。佛の言く。「無限名稱如來の名を聞くことを得る者の其の名號を持し、歡喜し作禮せんには如かず。其の福は甚だ多ければなり。布施に比するに百倍を過出して比ぶることを爲すこと無けん。

復次に舍利弗よ。東方に此の安隱世界より去つて、千五百の佛刹を度り、世界有り名けて[四八]爲日と曰はん。其の國に佛有り。日月光如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の日月光如來の名號を聞くことを得る者有つて、歡喜敬心し、兩膝を地に著け、長跪し叉手して、自ら是の言を作さん。「我れ今、日月光如來・至眞・等正覺を禮したてまつる」と。其の人は疾く無上正眞の道を成就することを得ん。

復次に舍利弗よ。東方に此の[四九]日世界より去つて、三十の佛刹を度り、世界有り名けて淸淨と曰はん。其の國に佛有り、無垢光如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の無垢光如來の名を聞くことを得る者有つて、若しは天、若しは人、龍及び閱叉、若しは諸の非人にても、歡喜し信樂して、一心に敬禮せん。斯れ等は皆不退轉を立て、無上最正覺道を成ずること得、終りて三塗の中に墮つることを畏れざらん。

復次に舍利弗よ。東方に此の淸淨世界より去つて、半大千の佛刹を度り、世界有り名けて、[五〇]琉璃

【四七】須彌山 Sumeru とは修迷樓・蘇彌樓・彌樓・蘇迷盧等と記す、妙高・妙光・安明・善積・善高等と譯す。一小世界の中心に高く聳ゆる山の名なり。

【四八】爲日を聖語藏本は日月に作る。

【四九】日世界を聖語藏本は日月世界に作る。

【五〇】琉璃 Vaidūrya は吠瑠璃・吠瑠璃耶・毘頭梨と記す。七寶の一、遠山寶と譯す。遠山は須彌山なり。紺碧色の寶玉なり。依つて青玉・青色寶とも譯す。琉璃光とは青玉の光り輝くこと。

ん。其の國に佛有り、大光明如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の大光明如來の名號を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し持し諷誦し讀まんに、其の人は當に如來の十力を得べし。

復次に舍利弗よ。東方に此の珠光世界より去つて、八千の佛刹を度り、世界有り名けて正直と曰はん。其の國に佛有り、正音聲如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の正音聲如來の名號を聞くこと得る者有つて、淨心に信樂し持し諷誦し讀まん。其の人は當に如來の四諦平等の法を得べし。

復次に舍利弗よ。東方に此の正直世界より去つて、一萬の佛刹を度り、世界有り光明尊と名けん。其の國に佛有り、無限淨如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其れ無限淨如來の名を聞くことを得る者、歡喜信樂し持し諷誦せん者有らん。大千世界に中に滿つる七寶を持用し布施するもの の所得の功德は寧ろ多しや不や」と。舍利弗の言く。「甚だ多し、甚だ多し、天中天よ」。佛の言く。「無限淨如來の名を捉持せん者には如かず。所得の功德は百千萬倍にして、布施功德の者の上に過出して、比ぶることを爲すこと無けん。(四六)少功德の人は此の如來の名號を聞くことを得じ、千佛の造立する所の德本に於いてのみ、乃し此の尊佛名を聞くことを得て。生死の罪の四十八劫あるを却けん。

復次に舍利弗よ。東方に此の光明尊世界より去つて、九千の佛刹を度り、世界有り名けて音響と曰はん、其の國に佛有り。月音如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其れ月音如來の名號を聞くこと得る者有つて、盡心に信樂し持し諷誦し念せん。其の人の所得の淸淨なる功德は、成具畢滿して月の盛明たるが如くにして、不退轉に立ち、當に無上正眞の道を成ずべし。

らがり集ること。

【三九】 犍陀梨國 (Gandhāri) は女聲に從へる名、男聲に從へば乾陀羅 Gandhāra 國なり。持地・香行・香遍と譯す。北印度の境にあり。カシュミールの西北、パンヂヤップの北にありし國なり。

【四〇】 罽賓とは舊譯なり。新譯は迦濕彌羅・迦葉彌羅 Kaśmīra 印度の西北境にありし國なり。

【四一】 黠慧とは敏捷なる智慧。

【四二】 一切種智とは佛智なり。佛は(一切法の總相即ち一切法の空相を知り)一切法の種々なる差別の道法則ち假相を知り一切法に通達する中道の智を有すればなり。又三智の一。三智とは一切智(空智)道種智(假智)一切種智(中智)なり。

【四三】 三達とは羅漢の三明を佛にありては三達と名く。天眼、宿命、漏盡を云ふ、この三を知ること窮達するが故に達といふ。

【四四】 閑とはトザシ、ブサグ

【四五】 泥犁、三四を參照。

【四六】 少功德の人とは如來の名號を聞持せざる人。

て持し諷誦し念ずれば、十二劫生死の罪を却けん。

復次に、舍利弗よ、東方に此の無塵垢世界より去つて二萬の佛刹を度り、世界有り莫能勝と名けん。其の國に佛有り、大名稱如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其れ大名稱如來の名を聞くことを得る者有つて、淨心信樂し諷誦して忘れず、長跪し叉手して是の言を作さん。『我れ今、大名稱如來を禮したてまつる』と。七寶をもて卓を作ること須彌山の如くし、持用のままに布施すること百歲の中に滿てん、得る所の功德寧ろ多しと爲んや不や」と。舍利弗の言く。「甚だ多し、甚だ多し。天中天よ。」佛の言く。「人有つて大名稱如來の名號を持して禮を作さん者には如かず、其の功德を得ること巨億萬倍なり。布施功德の者の上に過出することは比ぶることを爲すことを得ざるなり。

復次に舍利弗よ。東方に此の莫能勝世界より去つて、三千の佛刹を度り、世界有り光明と名けん。其の國に佛有り、寶光明如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の寶光明如來の名を聞くことを得る者の有つて、盡心に信樂し持し諷誦せん者は、當に十劫生死の罪を却け、不退轉に住し必ず無上正眞の道を成ぜん。其の誹謗すること有り、其の不信の者は、當に阿鼻大泥犁の中に在つて壽命一劫なるべし。

復次に東方に此の光明世界より去つて、萬五千の佛刹を度り、世界有り名けて多光と曰はん。其の國に佛有り。得大安隱如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の大安隱如來の名を聞くことを得る者有つて、歡喜信樂し諷誦して忘れず、當に是の念を作すべし『此の功德を持つて普く一切の無量の衆生をして安隱なることを得せしめん』と。其の人は則ち無量の功德を受け、便ち能く一切衆生を安隱たらしめん。

復次に舍利弗よ。東方に此の多光世界より去つて、七千の佛刹を度り、世界有り摩尼光と名け

上求菩提下化衆生の心念なり。無上正遍智を求むる心をいふ。

【三一】歸命とは梵語の南無Naman. Namah. Namoを譯せるなり。信心の至極をいふ。

【三二】舍利弗 Sariputraとは舍利弗多・舍利弗羅・舍利弗多羅・舍利富多羅・舍利補怛羅等を能す。舍利は母の名、弗多羅は子と譯す。舍利女の子といふなり。又舍利を身と譯す。此の時は身子と譯す。佛十大弟子の一人、智慧第一と稱さる。

【三三】師子吼とは佛の說法は決定して畏るることなるを譬へていふ。

【三四】阿鼻・Aviciとは無間と譯す。獄とは地獄。Naraka(那落伽)Niraya(泥犁)不樂・苦具・苦器等と譯す。無間地獄とは苦を受くること間斷なき牢獄の義、八大地獄の中に於て極惡人の生る最も苦む處なり。

【三五】五濁とは劫濁・見濁煩惱濁・衆生濁・命濁の五なり。濁とは滓濁不淨の義。住劫の中人壽二萬歲已下十歲に至る間に五の不淨あるをいふ。

【三六】弊惡とは壞敗害惡、あしきこと。

【三七】忍界。娑婆世界Sahāの

一切種智と 四三 三達とは 四四 無閡なり。而も我れは癡冥にして是の智有ること無し、諸佛の已成の一切智は自ら當に之れを知るべし、我れの了達せざる所なり。若し我れ了「達」せずんば、當に四句一偈を誹毀すべからず。何に況や斯の大尊經を誹毀するをや、斯の大罪衆惡行聚を造つて、無央數劫、當に阿鼻大 四五 泥犁の中に在つて彼に於いて止宿すべし。是の故に舍利弗よ、若しは族姓子、族姓女は當に是の意を作すべし。我れ今乃ち此の大尊經を聞きて誹謗せず、乃し阿鼻一劫の罪を却けん。我等は今當に自ら慶び歡喜して大踊躍を興すべし。此れに緣るが故に、無央數劫常に當に此の大法と共に倶ならん。

復次に舍利弗よ、東方に此の妙樂世界より去つて萬の佛刹を度りて、世界有り名けて無量と曰ふ。其の國に佛有り、大光明如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の大光明如來の名を聞くことを得る者有つて、執持し諷誦し歡喜信樂せん。其の人の生ずる所は未だ曾つて諸佛世尊に値ひ、不退轉に住し必ず最上正覺を成就することを得ずんばあらず。

復次に舍利弗よ、東方に此の無量世界より去つて、六萬の佛刹を度り、世界有り名けて衆華と曰ふ。其の國に佛有り、無量音如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の無量音如來の名を聞くことを得る者有つて、淨心に信樂して三反『我れ今一心に無量音如來を禮したてまつる』と稱言せん。其の人は當に無量の音聲及び如來の淨光の音を得べし。

復次に舍利弗よ、東方に此の衆華世界より去り、萬四千の佛刹を度りて、世界有り無塵垢と名く、其の國に佛有り、無量音如來・至眞・等正覺・明行成・爲善逝・世間解・無上士・道法御・天人師と號し、號して衆祐度人無量と曰はん。其の無量音如來の名を聞くことを得る者有つて、歡喜し信樂し

位此に當る。三には念不退此位は中道正念を退失せず。此位は十地位等覺位に當る。妙覺位は三不退を悉く圓滿具足す。

【二四】劫 Kalpa とは劫劫・波簸・羯臘波とも記す。長時と翻ず。長き時間のこと。拂石劫・芥子劫等の名稱あり。

【二五】五體とは兩膝兩肘頭を云ふ。この五體を地に投じて禮するを印度にては最敬禮とす。

【二六】三塗 Apāyagati（阿波那伽低）とは惡趣と翻ず。惡業によりて趣く所なり。塗は途なり道なり。三塗と三惡趣三惡道なり。一には火塗。地獄は猛火に燒かるるが故なり。二には血塗。畜生は互に食噉するが故なり。三には刀塗。餓鬼は常に刀杖によりて逼迫せらるるが故なり。

【二七】阿閦 Akṣobhya とは阿閦鞞・阿閦婆とも記す。不動・無動・無瞋恚と譯す。東方、阿比羅提國又は妙喜國・妙樂國に出現す。

【二八】波旬、梵語 Pāpīyas 又 pāpimān 巴梨語 pāpimā とは波旬踰・波卑面・波椽・波鞞とも記す。殺者・惡者と譯す。惡魔のこと。

【二九】四種の兵。

【三〇】道心とは道念ともいふ。無上道心なり。道と菩提なり。

する者有り、若し之れを呵罵誹謗する者有らば、斯の人は則ち爲れ大惡行を造れるなり。無量の罪を致したるなれば[三四]阿鼻獄に入つて具さに衆苦を受くべし。」舍利弗の言く。「經を誹謗すること有らん者は其の數幾許ぞや」と。佛の言く。「十方の諸佛、諸の衆生の爲めに廣く法を說く時に、皆先づ阿閦如來の名號の功德を讃歎したまふ。衆生、其の功德を聽聞する者、終に厭足すること無けん。若し衆生有つて如來を見、其の功德を聞くこと得ば、未だ曾つて能く此の經を謗る者有らず。諸佛如來は[三五]五濁[三六]弊惡の時に世に興出せじ、我が今の如きは此の[三七]忍界の下劣[三八]叢殘の諸の衆生の中に於いて而も佛と作れるなり。阿閦佛國のごときは嚴淨最好にして終に爾らざるなり。當に知るべし、舍利弗よ。斯の尊き法輪は隨次に丘聚國邑に分布せん。若しは族姓子若しは族姓女は一心に信行して當に廣く此の諸の經法を宣傳すべし。當に知るべし、舍利弗よ、此の經を聞く者を誹謗し輕毀せば受くる所の報ひを汝今諦かに聽け」。舍利弗の言く。「諾、當に善く聽くべし。」佛の言く。「[三九]犍陀梨國にして此の經を謗る者滿百千人あり。斯の惡行を造りしにより當に阿鼻大泥犁の中に墮つべし。次に復、北方の國にして[四〇]罽賓と名くる、其の國にて經法興盛し久住せしが、此の國中の五百千人は此の經法を謗る。此の衆生の輩は死して阿鼻大泥犁の中に墮ちたり。舍利弗、衆聚の中にして嘗つて共に此の經を謗る者有り。八萬人有り、阿鼻大泥犁の中に墮ちたり。東方に少しく斯の經を信ぜし者有りしが多く阿鼻泥犁の行を造れり。百千人有つて死して阿鼻大泥犁の中に入れり。南方に二百千人あり、嘗つて此の經を謗り死して阿鼻大泥犁の中に入れり。西方に百萬人有り、嘗つて斯の經を謗り、死して阿鼻大泥犁の中に墮ちたり。當に知るべし、舍利弗よ、緣覺の智慧にては如來の智を度量ること能はず、況や諸の聲聞及び諸の衆生の未だ道果を成ぜずして、生死の水の爲めに漂流せらるる者が如來の智慧功德を度らんと欲するとも未だ之れ有らざるなり。夫れ[四一]黠慧の者は當に自ら思惟せよ。諸佛の功德は不可限量なり、諸佛の智慧は不可思議なり。諸佛の已成の

に名く。

【二九】天人師 Sāsta-devamanuṣyānām とは佛は天と人とを敎化し利益する師なるが故に名く。

【三〇】執持とは固く執りて動轉せざること。

【三一】諷誦とは聲を揚げて讀み或は唱ふること。

【三二】七覺意 Saptabodhyaṅga をば七等覺支・七覺分・七菩提分とも云ふ。覺とは覺了覺察の義。佛敎の最勝とする所の涅槃を證る睿智をいふ。この智は心を定慧一隅に偏せしめず定慧均等ならしむ。この故に等覺と云ふ。又涅槃に趣向せしむる睿智が七に分たるるを以つて支或は分と云ふ。修道の位に於て此の智を以つて思惑を斷じ善惡眞僞を觀察し覺了する智なり。擇法覺支・精進覺支・喜覺支・除覺支・捨覺支・定捨覺・念覺支の七を七覺意と名く。

【三三】不退轉地 Avaivartika（阿鞞跋致・阿惟越地）とは既に得たる結果は決して退轉し退失せざること。小乘と大乘とによりて不退の位に相違あり。今大乘の三不退を示さば一には位不退、此位は凡夫位に退轉せず。十住位此に當る。二には行不退。此位は菩薩の行を退失せず。十行位・十回向

る者有つて、持し諷誦し讀みて歡喜信樂して、五體を地に投じて爲めに禮を作さば二十萬劫生死の罪を却けん。

復次に舍利弗よ。東方此の衆德世界より去つて、千の佛刹を度りて世界有らん、名けて妙樂と曰ふ。其の國に佛有り、號して[27]阿閦如來、至眞、正覺等、明行成、爲善逝、世間解、無上士、道法御、天人師と曰ひ、號して衆祐度人無量と曰はん。其れ阿閦如來の名號を聞くことを得る者有つて、捉持し諷誦して其の德を歎說せん。復、他人に勸めて學はしめ諷誦せしめん」と。爾の時、[28]波旬、[29]四種の兵を將ゐて來つて佛の所に詣つて是の語を作さく。「寧ろ餘の千の佛名を捉持せしめ、亦他人を勸めて之れを學ばしめんとも、阿閦佛の名をば捉持せしめざれ、其れ阿閦如來の名號を捉持する者有らば、我れは終に其の人の無上道心を毀壞すること能はず。我れは亦當に能く斯等の無上道心にために毀壞せらるべし」と。佛、魔に告げて言く。「汝は能く誰の[30]道心をば毀壞するや」。魔の言く。「其れ大乘を求め阿閦如來の名を捉持する者には、我が心則ち愁憂熱惱を生ず。我れ今日復熱惱を得るが如きは、阿閦如來の名を聞くを用つての故なり」。魔の言く。「亦復、衆生有つて其の數甚だ多く餘佛の名號を捉持する者あらん、我或は當に能く其の人の正覺道心を毀壞すべし」と。佛、魔に告げて言く。「汝、愁憂して惱結を懷くこと莫れ。汝は終に此等の無上道心を毀壞すること能はざればなり」と。魔波旬の言く。「何の因緣有つてなりや」と。佛、魔に告げて言く。「汝が爲めに諸佛に[31]歸命する功德の行を隱蔽せん。所以は何ん。阿閦如來は自ら當に觀視して其の人を擁護すべければなり」と。時に[32]舍利弗、卽ち佛に白して言く。「波旬は今日、如來の前に於いて、云何が[33]師子吼を作さんと欲し、衆生の正覺道心を破せんと欲せしや。其れ衆生有つて阿閦如來の名を捉持する者、及び餘の一切の諸佛の名號を「持たん者を」、魔は寗かに當に能く其の人の正覺心を毀壞すべしや」と。佛、舍利弗に告げ[illegible]はまく。「我れ今諸の衆生を觀視るに、其れ諸佛の名を捉持

【一三】 等正覺 Samyak-saṁbuddha（三貌三佛陀）とは正遍知とも譯す。如來は平等なる正しき眞理を覺知するが故に名く。

【一四】 明行成 Vidyā-caraṇa-sampanna とは明行足とも譯す。如來は法を證ること（智慧）明にして且つ戒定慧三學と止觀との行を修むることが圓滿に成就するが故に名く。

【一五】 爲善逝 Sugata（修伽陀）とは善逝・妙往・好去等と譯す。如來は一切智に乘じ八正道を行じて涅槃の果に逝き去つて還らざるが故に名く。如來と善逝とは佛陀の娑婆往來自在の德を有することを示せるものなり。

【一六】 世間解 Lokavito とは知世間とも譯す。如來の化他の智を顯す。二世間卽ち衆生と非衆生との一切を知解する故に名く。

【一七】 無上士 Anuttara（阿耨多羅）とは一切衆生の中に於て佛は無上なる士夫なるが故に名く。

【一八】 道法御 Puruṣa-damya-sārathi とは調御丈夫・可化丈夫調御師・丈夫調御者等ともいふ。佛は大慈悲あるが故に種々に道法を說きて衆生を調伏制御する力を有し大涅槃に入らしむる大丈夫なるが故

其の寶英如來の名號を聞くことを得る者有つて、執持し諷誦して歡喜信樂(しんげう)せん、[二五]五體を地に投じて爲めに禮を作さん。若し三千大千の佛刹に七寶をもて中に滿たしめ、持用して布施すること百歲の中に滿たしめんに、所得の功德寧ろ多しや不(いな)や。」舍利弗言さく、「甚だ多し、甚だ多し。天中天よ。」佛の言さく。「人有つて寶英如來の名號を聞くことを得て、持ち諷誦する者が作禮せる德には如かず。十萬億倍も布施せる功德者の上に過出するなり。

復次に舍利弗よ、東方此の寶集世界より去つて、八百の佛刹を度りて、世界有らん名けて寶最と曰ふ。其の國に佛有り、號して寶成如來、至眞、等正覺、明行成、爲善逝、世間解、無上士、道法御、天人師と曰ひ、號して衆祐度人無量と曰ふ。其の寶成如來の名號を聞くことを得る者有つて、執持して諷誦し淸淨心を以つて歡喜信樂せば五百劫生死の罪を却けん。

復次に舍利弗よ、東方此の寶最世界より去つて千の佛刹を度りて世界有らん、名けて光明と曰ふ。其國に佛有り、號して寶光明如來、至眞、等正覺、明行成、爲善逝、世間解、無上士、道法御、天人師といひ、號して衆祐度人無量と曰ふ。其の寶光明如來の名號を聞くことを得て、執持し諷誦して歡喜信樂すること有らば[二六]三塗の中に於いて悉く解脫することを得ん。

復次に舍利弗よ、東方此の光明世界より去つて、千五百の佛刹を度りて世界有らん、名けて、幢幡と曰ふ。其の國に佛有り、號して寶幢幡如來、至眞、等正覺、明行成、爲善逝、世間解、無上士道法御、天人師と曰ひ、號して衆祐度人無量と曰ふ。其の寶幢幡如來の名號を聞くことを得る者有つて持し諷誦し念じて歡喜信樂せば、其の人は則ち法珍寶を成することをせん。

復次に舍利弗よ。東方此の幢幡世界より去つて、二千の佛刹を度りて、世界有らん、名けて一切衆德光明と曰ふ。其の國に佛有り、號して寶光明如來、至眞、等正覺、明行成、爲善逝、世間解、無上士、道法御、天人師といひ、號して衆祐度人無量と曰ふ。其の寶光明如來の名を聞くことを得

舍利に關して二說あり。一は舍利を身或は珠と翻ず。故に身子とも珠子とも譯す。二は舍利とは鳥の名なり、鶖鷺、秋露、鴝鵒、鶖・百舌鳥と譯す。母の眼彼の鳥に似たるが故に舍利と云ふと。故に秋露子・鶖鷺子と翻ず。十大弟子の一智慧第一と云はる。

【七】天中天とは、天人の中にて最上最高の天の意、即ち最高なる神の意、佛陀の尊稱。

【八】世尊とは、薄伽梵Bhagavat. 路伽那他 Lokanātha. 世尊と翻ず。佛は萬德して世に尊重せらるるが故に。又は世間に於て最も尊き者なるが故に世尊と云ふ。佛の尊稱阿含經と成實論とは如來の十號の第十に數へ、涅槃經と大論とは十號の中に數へず。

【九】叉手とは合掌のこと。

【一〇】刹とはの意、梵語 Kṣetra 國土、塔、刹等の意。

【一一】如來 Tathāgata とは眞如の道に乘じて來れる者と云ふ意。釋尊は覺者としてまた師主としての尊嚴なることを表す語。

【一二】至眞 Arahat(阿羅漢)とは應供、應眞等と譯す。尊敬すべき人、虛俗なき人、現法の中にて肉體並に精神が淸淨となれる人。

佛說稱揚諸佛功德經

元魏天竺三藏　吉迦夜譯

卷の上

聞けること是くの如し。一時、佛、[一]羅閱祇[二]靈鷲山の中に在して、大[三]比丘衆[四]千二百五十人と倶なりき。爾の時、[五]耆年の[六]舍利弗、便ち座より起つて偏へに右の肩を袒ぬき、更に法服を整へ佛の右面に在り、右の膝を地に著け長跪し叉手して前んで佛に白して言さく。「唯[七]天中天よ、今日現に在すところの諸佛世尊の進止康常なりや、今の說法者は其數幾何なりや。」時に舍利弗は是の問を發し已りぬ。爾の時、[八]世尊、舍利弗に告ぐ。「所問甚だ快し、饒益する所多く普く一切を利せん、諦かに聽け諦かに聽け、善く心中に著けよ。吾れ當に汝が爲めに具さに分別して說くべし」と。是に於いて舍利弗、佛の許可したまふを聞き歡喜踊躍し[九]叉手して白して言さく。「諾、當に善く聽くべし、願ふて聞くことを樂欲す」と。佛、舍利弗に告げたまはく。「東方此を去ること千萬億の諸佛の[一〇]剎土にして、世界有り名けて天神と曰ふ。其の國に佛有り名けて寶海[一一]如來、[一二]至眞、[一三]等正覺、[一四]明行成、[一五]爲善逝、[一六]世間解、[一七]無上士、[一八]道法御、[一九]天人師と曰ひ。號して衆祐度人無量と曰ふ。若し族姓子族姓女にして其の寶海如來の名號を聞くことを得る者有つて、[二〇]執持し[二一]諷誦して歡喜信樂せん、其の人は當に[二二]七覺意の寶を得べし。皆當に[二三]不退轉地に立つことを得、疾く無上正眞の道を成じ、六十[二四]劫生死の罪を却くべし。

復次に舍利弗よ、東方に世界有り名けて寶集と曰ふ。其の國に佛有り、號して寶英如來、至眞、等正覺、明行成、爲善逝、世間解、無上士、道法御、天人師と曰ひ、號して衆祐度人無量と曰ふ。

【一】羅閱祇とは、羅越、羅閱祇迦羅、囉惹訖哩呬と云ふ。Rājagṛha 卽ち摩竭陀國王舍城の梵名。

【二】靈鷲山とは、耆闍崛(P.)gijjhakūṭa. 姞栗陀羅矩吒 Gṛdhrakūṭa. は梵名、鷲頭山、鷲峰、鷲臺、靈山、靈嶽等は翻譯せる名稱、山巓鷲頭に相似たるが故に名くとも、鷲鳥群居するが故に呼るとも云はる。王舍城より東北十里の地點にあり。

【三】比丘とは、苾芻とも用ゆ。Bhikṣu 乞士・破惡・怖魔等と譯す。

【四】千二百五十人とは、佛弟子の數を稱呼する時に千二百五十人と云ふ場合多し。千二百五十とは三迦葉波兄弟の師資千人と舍利弗・目犍連の師資二百人と耶舍長者等五十人となり。是れ等は皆佛成道したまひて未だ久しからざるに度脫を得て、佛の教化を被れる故に常隨衆となす。

【五】耆とはトショリ、老いたること。禮記は六十歲とし、曲禮は八十歲とす。耆年とは年長者を意味し、長老又は上座と同じ意なり。

【六】舍利弗とは舍利弗多、舍利弗羅、舍利子 Śāriputra. 舍利は母の名、弗多は子と翻ず。舍利女の子といふ意なり。

である。本經は如來の十號、舊譯の形式によつて居るから、元魏時代以前のものであると推定し得るが、吉迦夜譯か否かは斷言し難いと思ふ。兎に角、本經の内容を見るに學者の相當注意を注ぐべきものが潜んでゐることはいなめないと思ふ。

昭和七年三月

譯者　田島德音　識

が支那へ輸入したと認むべきであらう。更に考究を要す。

吉迦夜三藏の傳は明かでない。吉迦夜を晋には何事と翻ず、西域の沙門であり、宋明帝の時に支那に來り、曇曜等と共に北臺石窟寺で諸僧と諸傳經を譯した。上記だけが知られる限度でこれ以上は全く知れない。

本經の梗概

本經は佛、羅閱祇國靈鷲山中にして千二百五十人の比丘衆と倶にゐませる時、長老舍利弗が今日現にゐまして說法し給へる佛の數幾何そと問へるにより、佛はこれに對して、東方の四十八佛、南方の三十八佛、西方の三佛、北方の五佛、上方の二十七佛合計一百二十一佛が現にいまして轉法輪したまふことを述べてゐる。但し舍利弗を對告衆としたのは東南西の三方であり、北方の中、初めの二佛は阿逸菩薩即ち彌勒菩薩が佛に對して菩薩が大乘の願を具し、不退轉に住して、疾く無上正眞道を成ずるものがあるや否やと問へるに依つて、佛は佛名を聞く者、持諷誦念して作禮すれば皆不退轉を得と答へらる、次に長老大迦葉に對して佛は質問を提出しないのに諸佛如來の不可思議なる德を知るべしと云はれて北方の後の三佛及び上方の二十七佛の佛名を聞き持諷誦念すれば無量の功德を得べしと說かる。聞佛名、並に持諷誦念する者は不退轉を得べしとは舍利弗に對する場合も同一である。そしてこの說法を聞いた者は皆遙に此等九方の諸佛を見、また會の中の無數千人は悉く無上道意を發し、十方世界から來集した菩薩は各釋迦文佛を禮し、一億の比丘は阿羅漢果を得、比丘比丘尼十萬人は法眼淨を得、また十萬人あつて無生法忍を得、五百の優婆塞、四百の優婆夷は如來を供養して盡く無上道意を發したと。これを讀んだだけでも知らるるように十方諸佛の佛名を聞くことによつて不退轉を得、生死の罪障を消滅すということは、念佛三昧以上に聞佛名を强調する運動である。ここには戒行も慧解も必要を論じない。佛教修行の簡易化を主張した本經は跋語によれば羅什時代の龜茲國の佛教である。羅什が梵網戒を支那に傳へた時代に羅什の出生地たる龜茲國には聞佛行の佛教が盛行してゐたのである。この經を羅什が支那に翻譯したことはこれらの事實上から考へても實際に行はれたと思はれる。乍然羅什譯は散逸して今日は見ることが出來ないのは殘念

林復命使譯龜茲語爲晋音。林自筆受。章句鄙拙。爲辭不雅。貴存本而已。〇下略』この跋語は本經傳來史を見るには最もよき史料であるが、麟嘉なる年號も曇摩跋摩・林・慧海等の人物の傳記も全く知られないので遺憾である。從つて此等の人々と吉迦夜・曇曜との關係も不明であるから速斷はしかねるが、本經の傳來及翻譯は經錄のままを信じてよいか、否か、更に考究を要するもありといふに留めて置く。

本經の譯者を卷の首めに元魏天竺三藏吉迦夜譯を揭げてゐるが、脚註によれば聖語藏本に元魏以下十字缺くと記してある。上記の跋語が最初から記されてゐたと推定すれば譯者を直ちに吉迦夜とするのは聊か疑點がある。若し內典錄等の經錄及び宋元明の三本・宮內省本等の如く吉迦夜と曇曜との共譯と認めるとしても、跋語との矛盾を如何に會通すべきか、未だいづれに決定すべきか、何等の資料がないのである。恐く曇曜等が龜茲國に漢字譯の本經があつたから、それを元魏時代に北臺の石窟寺へ輸入し、吉迦夜三藏と再訂したものではあるまいか。但しこれは跋語に重きを置いての上の話である。もし跋語が後世の僞作であれば勿論の通りに認めなければならない。

吉迦夜三藏の翻經目錄は早く出三藏記卷二(正藏五五ノ一三頁)に「雜寶藏經十三卷闕。付法藏因緣經六卷闕。方便心論二卷闕。右三部。凡二十一卷。宋明帝時。西域三藏吉迦夜。於北國以僞延興二年。共僧正釋曇曜譯出。劉孝標筆受。此三經並未至京都」と記し、本經譯者と認めてゐない。然し羅什三藏の稱揚諸佛功德經三卷を譯出したことは認めてゐる。羅什譯以外では出三藏記卷四(正藏五五ノ二二頁)に新集撰失譯雜經錄の內に「稱揚諸佛功德一卷 抄三卷稱揚諸佛功德經」がある。失譯雜經と僧祐はいふてゐるが、この一卷本は三卷本の抄本であるから思ふに抄出者不明の意で失譯雜經錄中に收めたのであらう。三卷本とは恐く羅什譯を指したのであらう。吉迦夜譯出經錄中に數へた初めは內典錄卷四(正藏五五ノ二六八頁)である。內典錄は本經と大方廣菩薩地との二部を出三藏記の吉迦夜譯經錄に增加し、五部廿五卷と記してゐる。但し內典錄は吉迦夜三藏と曇曜とが本經を共譯したとせずに「曇曜のため」に譯出したのであるとする。これは出三藏記の說を其まま採錄したに過ぎないからである。曇曜と吉迦夜とは相當に深い關係があつたことは事實であるが、內典錄の如く二人が本經の譯出に從事したとすることは直ちに承認し難しといふのが最も妥當であると考へる。然らば譯者は誰か。余の推定に從へば恐く龜茲國地方に漢文經典として既に行れたる本經を吉迦夜等

佛說稱揚諸佛功德經解題

經題に就いて

本經の題目には異稱が多い。大唐內典錄第四(正藏五五ノ二六八頁)には「一名集華經、一現在佛名、一諸佛華」と記してゐる。此他に正藏の法寶總目錄(二五八頁)には「稱揚諸佛經、集諸佛華經」の二名を別出してゐる。此の他に題名の類似せるものは玄奘譯大般若經第四會の第四に「稱揚功德品」があるが、この品の內容は本經には何等關係がない。佛祖統紀には「本經は百七十佛名と略同じ」といふ。出三藏記卷四(正藏五五ノ二二頁)に「稱揚百七十佛名經一卷、或は百七十佛名といふ」とあるが、出三藏記は本經との同異を述べてゐない。志磐は百七十佛名經を一讀したのであらうが、百七十佛名經は現存しないから同本異出と斷定し難い。上記によつて知らるるように本經には四種の稱呼があることが知られる。此等の經題は本經の最後にある「佛言此經名曰稱揚諸佛功德法品、亦復名曰集諸佛花」の文と、本經の同本異譯たる劉宋ノ求那跋陀羅三藏が譯した「現在佛名經」(正藏五五ノ五二八、開元錄第五)とを合せたものである。若し志磐の說が正確ならば本經には稱呼五種ありといはねばならぬ。

本經の飜譯

本經は三譯あるが二缺一存。內典錄、開元錄等によると、

初　出――稱揚諸佛功德經三卷　姚秦、羅什譯

第二出――現在佛名經三卷　劉宋、求那跋陀羅譯

第三出――稱揚諸佛功德經三卷　蕭梁、吉迦夜譯

とある。初出の羅什譯は弘始七年(三本は十年)(西紀四〇五)常安に於て譯出。第二出の求那跋陀羅譯は元嘉廿九年(西紀四五二)正月七日、荊州に於て荊州刺史南譙王劉義宣のために譯出。第三出は北魏・孝文帝の延興二年、詔玄統沙門曇曜のために譯出。劉孝標筆受たり。以上は經錄によつて記したのであるが、本經の跋語によると本經を吉迦夜譯と定めることに就いて不明な點がある。跋語には『鱗嘉六年六月二十日。於龜茲國金華祠。演出此經。譯梵音爲晉言。曇摩跋檀者。通阿毘曇。暢諸經義。又加究盡摩訶衍事。辨說深法。於龜茲國博解第一。林卽請命出此經。檀手自執梵本。衍爲龜茲語經。○中略 沙門慧海者。通龜茲語。并解晉音。

威神極りなけん。經典を講說して常に放逸すること無く、無數億劫未だ曾つて忘失せず、其の曾つて見しこと有りし過去世吼は爲めに尊經を說き殊に道王に異なる。是等は末世に之れを聞いて乃ち悅ふ、宿、世尊に從つて更に已に啓發し、結網瑕穢の垢を棄損し、諸の惡行を除くことは糞の如し、不淨は貪欲より出づ、名けて有目と曰ふ、閑居を習樂して常に馳騁すること無し、其の人本維耶離城に在つて、以曾つて佛の是の經を說くを聞ける時、自ら如來に歸し及び寶網を見る、後の末世に於いて乃ち是の經を持ち、我が敎へし所の如く弟子の爲めに說く、其の行は尊妙にして功德茂盛なり、衆生を愍傷して諸流を開度す。後の末世に於いて乃ち是の經を持ち、諸佛を供養すること稱げて計ふべからず、是等の類は後の末世に於いて乃ち佛法を持ち、若しは億千劫のあひだ梵行を淨修して世間に在らん、行へることは計ふべからざるまで、功德を積累せん、後の末世に於いて、此の經を聞く者は、福彼れよりも超へて限量ことを能くするもの無けん。經典を啓受し精思して底無けん。諸佛の土に遊ぶこと計會すべからず、諸の正覺を見て無限の法を講ぜん。阿彌陀・阿閦如來を見る、其れ此の諸人をして中導離垢光燄師子月英を視んと欲せしむ。然して後の末世にして當に此の經を持つべし、若し復、彌勒如來、無垢大聖師子英如來を見んと欲せば、光明尊の如く亦復是くの如くすべし。然し後の末世にして當に佛法を持つべし、順つて是く如くして尊妙經典に比せよ。今や如來は寶網の爲めに說きたまへり。自ら後世にして當に之れを奉行せよ。放逸の地に住立することを得ること無れ。禁戒を毀らざれ。當に放逸すること無れ。後世の時に於いて常に之れを奉行せよ。仁、壽終らん時に當に速かに上方世界、無量光明最勝佛土に往生すべし。世界をば名けて爲寶君主と曰ふ。彼れ壽終つて當に久しくして逮๏で彌勒正覺を見ん」と。佛、是くの如く說きたまへり。童子寶網は四萬億の菩薩、彌勒菩薩等、六十億の阿羅漢、九十億の諸天、世人、〔一四〕阿須倫と佛の說きたまふ所を聞き、歡喜せざること莫し。禮を作して退きたりき。

佛說寶網經 終

【一四】阿須倫とは阿修羅のことなり。

佛道は限るべからず　　　譬喩をもてしても遍く數ふること難し
然して後の末世にして　　　外道異學の人は
佛の師子吼を聞き　　　必ず當に共に諍訟すべし
其の佛を奉敬すること有らば　　　世護は光明を演べ
後の將來世に於いて　　　經を聞いて甚だ謙恭ならん

佛、童子に告げたまはく「若し佛刹の中に三品の衆生有つて、共に和し同心にして佛慧を志さん。設し復人有つて此等を供養すること無央數劫にして江河沙の如くならん、貢を以つて佛に上り一心にして無二、精舍を造立すること極めて廣大にして大千界の如くならしめ、天の栴檀を以つて合して之れを成じ、一精舍の裏に講堂を興造して計るに億數有らん、一一の講堂には億千の[三三]榻を施し、一一の床上には重ねて好衣の柔軟なるを布き、百億の紫磨金寶を以つて床榻とせん、大神聖をして世間に住在せしめん、此の床榻を以つて之れを供養せん、恒沙劫を竟つて滅度の後、一一の佛の爲めに各塔廟を起つ、亦江河沙の如くにして不可計億ならん。一一の佛の爲めに起つる所の塔廟は七寶をもて合成せり、大さは三千大千世界の如し、極高にして巍巍たり、上界の三十三天を極む。一一の塔廟に供養する所の蓋は、數江河沙の如く、億百千姟の諸の眞珠をもて貫垂して四面に著く、億千の繒幡は諸の幢に跱立すること も亦江河沙の如し、衆寶をもて校飾し、諸の伎樂を鼓す。一塔廟には天上柱を竪て、諸柱の羅列すること億百千姟にして而も供養を見るに設くる所是くの如し、一佛世界に與す所の塔廟幢蓋香花、是く如きを奉事すること江河沙劫ならん、若し是の經の一偈の頌を聞き、猶豫を懷かず頌宣し咨嗟せん、一たびも名號に安住せば福は彼よりも過ぎ、并びに吾れを供養して天中天と爲し、能く持つて奉行し禁戒を毀らじ。若し明者有つて三昧の名を聞かば、諸佛を見ること得ること、江河沙の如くならん、亦能く恭敬し消息し承事せん、諸の兩足聖は

【三三】榻とは、腰掛のこと。狹く長き牀。

往世も亦是くの如く　供すること江河沙の如し
其れ此の佛經を聞き　童子寶網は
其の三昧正定を行じて　退轉せずして佛に至る
所得の功德の報ひは　稱げて限量すべからず
斯の經典を持つ者の　福は以つて喩へとすること無し
十方の諸佛の土は　尙其の數を知るべし
水火及び風種　地とは盡極して知るべし
若し此の經を持つ者は　咨歎して其の限りを說くとも
福功德の多少を　盡して究むること能はじ
比丘比丘尼　及び淸信士女
諸天 [三]摩睺勒　是の經典を聞く者は
衆生悉く集會して　能く其の德を稱すること能はじ
血脈は損耗せじ　火に入るとも火は冷とならん
七日專ら是れを惟ひ　佛道を奉修して行じ
亦菩薩を供養し　經を奉じて當に是くの如くすべし
其の欲一毛釐なるも　千世界を執持して
之れを擎くるに手掌を以つてして　億劫にも捨置せざらん
若し後の末世にして　是くの如き像經を以つて
廣く他人の爲めに說かば　疾く尊の覺道を成ぜん
能く他人の爲めに說くは　是れ未曾有なりと爲す

【三】摩睺勒とは摩睺羅伽、休勒、莫呼洛伽等と記す。八部衆の一。大蟒神なり。

紫磨金色成じ
貢上する所の寶蓋は
一一の其の寶蓋は
是くの如くなるを世尊に獻じ
黃金の衣服を以つて
佛道を莊嚴して
二萬五千人
衆の菩薩の億の黨
無央數の億姟
悉く東方より來る
北方も上下方も
一切諸の世界より
世護の諸の聖主は
世尊は彼に住し
諸の菩薩等の類は
童子寶網は
爾の集會の時に當つて
世尊は安住を勸む
諸天龍神に於いて
今の如く佛前に住して

閣は[一〇] 尼拘類[一一]の如し
周匝して眞珠を垂る
二萬有五千なり
須臾の間にして悉く辦ず
諸の菩薩に賜遺し
具足して普く周遍し
諸の億百千衆
能く計數する者無し
其の載數も是くの如し
南方も西も亦然り
四隅も亦是くの如し
目をもつて悉く遙かに之れを覩る
其の色は紫磨金なり
晃晃として光明を奮ひ
各本土より來る
此の學士を供養す
敬ふ所議るべからず
人上の世師子なればなり
人民の高位の者は
一心に敬ひ奉る

【一〇】閣とは周閣、オホキサ。
【一一】尼拘類 Nyagrodha 尼拘陀・尼拘律、尼拘類陀等と記す。榕樹のことなり。熱帶地方に生ずる大木、枝より根を生じて地上に達し、四方に伸張す。

諸の華は若干あり天の香蓋もあり　人中尊の爲めに億の幢幡あり
各百千の寶瓔珞を擁して　明月珠を散じ佛を歎じ奉る
其の歡悦して最尊を供ず　勝ること等倫なく威も無量なり
人民は具足して百千億あり　自ら最勝に歸「依」するもの量るべからず
頭面を地に著けて自ら歸依す　億姟の宿「世」のことを識ること喩へを以つてするいふもの無し
時に世光明は　則ち法鼓を扣かんが爲めに
時に應つて彼に告げたまふ　名は巨億土に聞ゆ
限り無く量るべからざる　億數の人民は會せり
佛は則ち之れを建立したまふ　尊の慧は人中の上なり
上妙にして堅固なる寶　栴檀の無能勝なる
自然に彼の床座となる　童子は踊躍を懷き
巍巍たる微妙の寶を　寶網は即ち受持せり
是の無數の千なるを化して　以つて兩足尊に奉る
一心に思惟する所は　其の價直千界なり
光明の億百千なる　出でし所は明月珠なり
一心にして悉く是の如く　寶網は威曜を演ぶ
其の明の照すべき所は　其の維耶離に遍じ
此れを以つて　世護現明主に供養し奉る
寶蓋の三萬六なるを　用つて兩足尊に上る
若干種の寶蓋には　諸佛の身形現じ

ざるが如く、其の諸佛の名は復彼れよりも過ぎて稱て載すべからず。或は吉祥と名く、善寂も亦然なり。或は月響と名く、月殿も亦然なり。或は清淨と名く、花光も亦然なり。或は過神通王なる名號あり。一名號の如く、其の若干の名も亦各是くの如し」と。對へて曰く、「已に見たてまつれり、天中の天よ、東西南北、四維上下も亦復是の如し。仁が今見る所の佛の數の如く、仁者よ、更に轉輪王は若干反數なり」。時に童子寶網は歡喜踊躍して善心を生ぜり焉。時に地大いに動じ、一切衆生は皆安隱なることを得たり。其の大光明は照さざる所なく、德本を勸發せり。無央數億百千兆姟の諸天の衆は虛空の中に住し、散花燒香して如來を供養し、釋梵諸天は各各侍從し、無數兆載の諸天は營從して、走栴檀・青芙蓉・黃白蓮花を雨し、或は諸天あつて無數の諸の寶瓔珞を遙散し、稱げて計數すべからざる億百千姟の世間の人民は自ら來つて身を投じて佛の足下に歸し、悲喜交〻集つて涙面に流れ、佛の威神を承けて無數億百千姟の宿世の所更を識念し、遙かに無底兆載の神足變化を覩る。是に於いて天人は歎じて頌つて曰く。

其れ無央數億なる　諸天は普く周遍して
柔軟にして妙なる花香を　世光明に下し散ず
億載の天帝釋は　僉虛空の中に住して
紫磨金色の花を　以つて兩足尊に奉る
億百千の梵天は　手に赤栴檀を執り
以つて光明曜に散じ　聲を擧げて咨歎せり
無數の諸天の樂は　上に在つて自ら鳴り
演ぶる所の辭は尊妙にして　離垢光明を顯す
諸天は蓮花百千を有ち　虛空に住在して導師を讃じ

佛道を疑ふことを得ることなけん　如來は不可限なり
前世に已に曾つて行じて　無數億劫のあひだ修し
施すに身手足より　耳鼻及び頭目
さては妻子も國も邑も城も　惠與して懐恨せざらん
然して後の將來の世に　此の經を聞くことを得る者は
能く他人の爲めに說き　則ち最も衆の祐ひを成ぜん
其の義を解了せんと欲するものは　諸佛の所行において
沈吟を懐くことを得ることなく　世護に教誨せられん
是の故に此の經を聞き　心を調へ止を習ふこと足り
諷誦して斯の經を學び數數當に經行すべし　常に講じて具さに精進し
滿足して三月を備さにして　轉た總持の決を得て
善く諸法を執念せん

是に於いて童子寶網は佛の宣べたまふ所の眞諦の義を聞き、心に悅豫を懐き、金縷を以つて織つて衣と成し、其の價ひ無數なるを如來に奉上す。如來は時に應じて卽ち其の如く三昧正受を像る。佛身の一切の諸有る毛孔より悉く光明を演べ、東方不可稱計無際世界を照す。其の東方の一切の佛土に在つて、皆悉く遙かに此の佛國土を見る。其れ彼の衆會は集つて道場に在り、亦復皆此の佛刹を視る。爾の時に當つて九十九億百千兆載の諸の四部の衆は皆各各諸佛世尊を見たてまつる。佛、童子寶網に告ぐ。「仁、今乃し東方此を去ること不可思議無能稱計無際世界の諸佛世尊を見る、浩浩として甚だ多く以つて喩と爲ること無けん」と。童子白して曰く。「已に世尊を見たてまつれり」。佛、童子に告ぐ。「譬へば三千大千世界の諸天人の名、一一の身の號を精進を建立して計會すべから

せん、婬怒癡は少なく身には疾病なく、憂慮すること多からず安隱無量ならん。成佛に至る已、常に不可稱計億百千姟功勳の德を逮得せん。佛、是に於いて頌して曰く。

未だ曾つて憂惑する　父母及び親屬を見ず
其のひとは諸佛の名を聞き　疑結を懷かざるが故なり
其の世は光明曜き　今現に上方に在して
威神あつて三界を照し　衆の爲めに經法を說く
若し能く名號を聞き　他人の爲めに說く者は
三十二相を以つて　常に身を莊嚴す
智慧は損耗することなく　菩薩道を修行し
諸佛に敬歸し奉る　名を宣ぶるを用つて致す所なり
所在に常に　不可議億の佛を奉敬す
其の佛道を行ずる者は　未だ曾つて著する所あらず
獲る所の功勳德は　稱揚するも盡すべからず
是の名を聞くを以つての故に　能く他人の爲めに說く
然して後の將來世にして　若し此の號に値ふことを得て
佛慧の無上蓋をば　狐疑する懷ひを得ることなく
其の見は平等覺にして　供養すること無央數ならん
然して後の將來の世に　是の經は身手に歸せん
寶網よ佛を見たてまつることを得て　菩薩は無所畏ならん
適ゞ此の經を聞き已つても　未だ曾つて猶豫を懷かず

衆生を建立して三惡なく
天人の尊として福田たり
人民これを見て喜悅を懷く
明智にして獨り閑靜なるところに逮值し
無量世に遊んで乃し佛に遇ふ
誓願を造立すること若しは百千にして
安和を以つて大覺眼を成じ
我れ錠光の所にして決を得
智者も忍を得たるときも亦斯くの如くせり
其の光明を演べ壽終に臨んで
唯外道の虛僞の術有つて
假使ひ斯の經を說くを聞くこと有つて
斯の黨は後の世にして能く受持し

生死の火を滅して水の澆ぐが如し
人中にして法をもて導くの德は殊勝なり
斯に於いて諸の八難を棄損す
人身を逮得しては常に聽聖なり
若し頒宣すること有れば名を安住す
此の世の明導に聞くこと得
亦當に柔順忍を獲致すべし
佛を見て以つて花を其の上に散ずるが如く
超異せる願と億の佛名とを說き
其の名號を聞きて宣べざること無し
以つて坐して其の人を道教をもつて騶す
親自ら如來の宣を視る所のものは
復他人の爲めに分別して說かん

佛、童子に告げたまはく。「上方、是を去ること譬喩の如きを過ぐること倍恒邊沙にして、世界あり善分別と名く。其の佛を無數精進願首如來、至眞等正覺、明行成、爲善逝、世間解、無上士、道法御、天人師、佛、世尊と號く。現に在して說法し、道教を頒宣し十方を開化して、六通と六度とをもて皆恩を蒙らしむ。唯菩薩を學せしめて佛種を斷ぜず。若し善男子及び善女人にして菩薩乘を學するものは、彼の佛名を聞いて結網を懷かず吾が道眼を信じ、世世の所生には未だ曾つて懈怠せず、貪欲を習はず父母を繼ひせず、妻子兄弟姊妹に著せず、親屬中外の種姓を慕はず、親友と交識して所知となることを貪らざらん。世世の所在の身より未だ曾つて三十二相を離さず其の體を莊嚴

佛、復童子に告げたまはく。「北方此を去ること前の譬喩の如きに復三分を加へん。彼の佛土は六十無限億百千姟、諸佛境土を越へたり。その世界をば名けて決了寶網と曰はん。其の佛をば月殿清淨如來、至眞等正覺、明行足、爲善逝、世間解、無上士、道法御、天人師、佛、世尊と號し、現に在して説法したまふ。所説の經典は上中下善にして、三界に獨歩し三世を救濟し、大道無上正眞を志さしむ。若し族姓子及び族姓女にして菩薩乘を學し、彼の佛名を聞いて心に懷疑せず、我が道眼をもて解説する所を信ずれば、所生の處にて普光三昧を得ん。壽終の時に臨んでは具足して億百千姟の佛の現に其のひとの前に住すと逮見せん。十方もまた各然なり。十方の諸佛は爲めに經典を説かん。聞いて則ち受持して抱いて心懷に在き、佛道を成ずるに至るまで未だ曾つて忽忘せず。不可計會十倍の功勳と百千姟致不可計無崖底載の諸の三昧定とを中にも失定せずして佛道を成ずるに至るまで蔽礙せらるること無けん。十方の諸佛は皆共に建立せん。新學に在つては、九十九億百千劫の生死の難を越えん、菩薩は疾く無上正眞の道に近づかん。劫數の生死を以つて礙となささらん。晃出でてより天下大に明かなるが如しと」。是に於いて世尊、此の義を觀じ已つて卽ち頌を說いて曰く。

遊世間尊上の號を聞くに　大神仙億無極と爲す
諸佛を見ることを得ること億百千にして　當に自ら斯の殊勝なるものに奉事し
以つて能く諸の如來を供養すべし　善き導師として廣く開化し
普く能く三世を照曜して　然して後に成佛して憂患なけん
一世の中に於いて承事する所は　江河沙の如く無數の尊ありて
尋いて三昧の光り遍照すること致し　然して後に成佛して憂念なけん
以つて覺意を致いて廣く厭くことなく　諸の法王の法輪を轉ずるに遇ひ

所生の百千世には
億の功勳を興發す
六十億定を逮「得」し
導師の號を奉じ
是の故に諸の勇猛なるものは
無數千人を化し
其の佛法を曉了しては
衆生の所行を喩して
其れ此の名を聞く者は
未だ曾つて（九）八難に墮せしめず
以つて諸の危厄を除く
其の人は常に自在にして
童子よ說し如來の所明の如く識解して
悉く此の衆生を照さん
他人の爲めに宣暢すべし
世護の救ふ所多し
調和して啓受し
彼は則ち佛法を護る
善く正道の因を宣べ
人の爲めに剖判するが故に

寶三昧定を服し
佛名を聞くを用つての故に
裁數にして計るべからず
奉事し供養するに因るが故に
佛の道行を遵修し
尊上道を建立す
未だ曾つて塵欲を習はず
爲めに其の名號を造す
一切の爲めに廣く說いて
易く諸閑靜に遇ふて
佛の今說きたまふべき所をもて
微妙なる佛の世に値はん
其の名號を聞く者をば
卽ち當に此の經を以つて
世正覺は若くの斯し
其れ斯の名を聞く者は
旋して他人のために說く
其れ佛法を護る者は
以つて此の經典を聞かん

【九】八難とは佛を見ず、正法を聞くを得ざるを難といふ。これに八種あり、地獄、餓鬼畜生、長壽天、北鬱單越の人、盲聾瘖瘂の人、世智辯聰の人、佛前佛後の人これなり。

其の信樂者を　是れを童子と謂ふ
清淨にして尊豪なるは　是れ王の財業なり
童子は謙卑して　佛に承事す
斯の名を聞く者は　第一に疑ふことなけん

佛、童子に告げたまはく。「西方此れより去つて前喩に過ぐること三倍の塵數にして、復、彼の刹十二阿僧祇百千億姟の佛土を越えて、世界あり、勝月明と名く。其の佛をば造王神通焰花如來、至眞等正覺、明行成、爲善逝、世間解、無上士、道法御、天人師、佛、世尊と號す。現に在して說法したまふ。若し族姓子及び族姓女にして菩薩乘を學し、彼の佛の名を聞いて狐疑を懷かず、篤く道を信じて自ら宣說する所のものは、所生の處、光明三昧正定を演ぶることを致さん。尋いで復、隨つて十阿僧祇億百千姟の諸の三昧門を逮「得」し六十不可計會億百千姟の諸の總持門、如海總持、寶藏總持に入らん。然して後、諸の定意法を失はず、壽終の時に臨んで、目に十方の各十億姟の諸佛正覺を見ん。十方諸佛に說法せらるる者は能く啓受して道教を失はず、佛道を成ずるに至つて五百劫の生死の難を越えん。斯の學に住すること是くの如く久しからずして、尋いで卽ち無上正眞の道を成じて最正覺とならん。佛、是に於いて頌して曰く。

人中尊の名を聞くに　世護聖明となす
諸の生死を棄損して　五百劫を具足せり
其の壽終に臨める時に　各百億の佛を見
輒ち稽首歸命して　所聞の法を咨受し
其の經を聽ける所の者は　億劫にも未だ曾つて忘れず
尊妙の行を奉修して　悉く如來の名を聞く

造行すべき所は
諸有ゆる臣下
來つて就いて見る者
是くの如く成就せり
諸天の來歸せるもの
世間の人民
咸く衆生となり
悉く能く更に
其の國最も安らけく
世間と當になるべし
僉其の所に至つて
始めより終りに至るまで
何れの所知者も
豈に狐疑を懐くものあらんや
法に於いて第一ならん
是の佛の所說の
惟本の前世より
疾く寂滅を致さん
但諸佛あつて
所行は敬はれ

以つて患ひとせず
一切の尊豪
以つて懈惓せず
第一の大德よ
所願は勝へ難く
及び諸の龍王
善く國界を立て
佛道處を立てん
豐熟平等なる
自然の佛
第一に奉敬せん
道に放逸なく
佛の名を聞く
知る所の愛敬は
其の威曜を布き
尊經を咨はん
佛に從つて法を受け
正行を遵修し
衆生を開導し
衆義備足せん

悉く之れを聞く。三には曰く、身能く諸の佛國に遍じて飛行すること、日の水に現ずるが如くならん。往來して現ずと雖も而も周旋すること無し。四には曰く、一切衆生の心念、善惡、好醜、有志無志、有漏無漏、有心無心、俗を慕ひ道を樂むを知る、而も悉く之れを知る。五には曰く、自ら宿命を知る。并びに衆生の無數劫の事、古世に生れし所、過去と當來と今現在の事とを見る。悉く識通せざる所靡し。佛、是に於て頌して曰く。

其れ人中大聖を　讚歎すること有つて
「佛名を」聞いて疑ひを懷かず　常に能く曉了せん
此れば則ち疾く　五通を獲逮すること致さん
是の佛の說きたまふ所の尊經を敬ふ者は　顏容は端正にして
體は紫金の如く　當に尊主
轉輪聖王となるべし　身は鉤鎖の如くならん
則ち功德をなして　威儀を建立し
而して自在を得ん　其の福は興盛にして
千子を具足し　勇猛にして英雄ならん
遊步するに勝るるもの無く　面貌も相好も飾姿も殊妙ならん
彼れの功德の動は　天の帝王の如くならん
若し國王となつては　婇女千に滿ち
身は天の金の如くにして　心性第一ならん
本所の遊居に於いても　及び當來の處に於いても
此の王を見る者は　之れを觀て厭くこと無く

四大の所變なる　音響に著することを得ることなかれ
當に色陰を解すべし　諸の想念に痛痒せらるる
生死は衆識に猶る　眞要なる者あることなし
別して五陰は是くの如し　如來の命の如く順ずれば
速かに[六]總持を得逮して　心未だ曾つて忽忘せじ
諸法は皆本より淨なれば　虛無なり無吾我なり
無諍なり無所念なり　此れ如來の教へに從れるなり

佛、童子に告ぐ、「南方に此を去ること前に譬喩としてあげたる此の數よりも過倍すること一切諸塵なる如くなるに、更に復彼れよりも七十二億百千姟不可計會の諸佛刹土を越へて倍に計ふべし。そこに復世界あり。雜種寶錦と名く。佛有す樹根花王と名く。現に在して說法したまふ。若し族姓子及び族姓女が、彼の佛の名を聞き、如來、至眞、等正覺、明行成、爲善逝、世間解、無上士、道法御、天人師、佛、世尊と爲す、所演の經法は[七]初中竟善たり。若し[八]族姓子及び族姓女、彼の佛名を聞いて疑結を懷かず、吾が道眼を信ずれば則ち現世に於いて至德具足し五法を逮受せん。何をか謂つて五となすや。一には曰く吾我をば盡く除き所生の處には常に佛の世に値はん。二には曰く極尊勢なる轉輪聖王を獲ん。三には曰く總持の法を逮「得」し、經典を執御して、百千「人」に誠信せられん。四に曰く、三十二の大人の相を成じて、佛道を至得して衆行備悉ならん。五に曰く、五通を逮得して蔽礙せらるることなし。是れを五となす。復五事あつて神通を逮得せん。何をか謂つて五となす。一には曰く、「眼能く」徹視して十方の麁細、大小、學無學の聲聞、緣覺より上は世尊に至るまで衆と超越するを見る。二には曰く、耳能く徹聽して萬億の地獄餓鬼の燒炙され飢渴すると畜生の惱みと、天上と世間との安隱苦樂と、或は惡或は好なるとを聞く。十方の諸佛の說く所の經典も皆

【六】總持とは梵語陀羅尼Dhāraṇī を譯せるもの。善を持して失はず、惡を持して起らしめざる義、菩薩の總持の德に凡らく四種を擧ぐ、一は法總持、二は義總持、三は呪總持、四は忍總持これなり。

【七】初中竟善とは初善中善後善と同じ。如來の說法は始終一貫して完備し欠漏せざること。

【八】族姓子と印度に婆羅門、刹帝利、毘舍、首陀の四姓あり。この四姓の中に大族あり。大族の男子を族姓子といひ、女子を族姓女といふ。

城郭縣邑に詣り
當に佛の教へなる
故に億喩旬に到つても
諸の天人と
諸人と及び非人とを請會して
諸の天人は歡喜して
彼に於いて衆の花を雨らし
普く諸の佛土
釋師子人尊の
人を導いて愍哀を興したまふ
億の佛土も覆はる
十方「の佛土」も亦玆の如くにて
大雄は卽ち
犁車國の人
彼に於いて世尊に侍す
佛法を疑ふことを得ることなかれ
佛眼は能く限りあることなし
佛慧は無央數にして
世尊は逵せざるもの靡し
五陰は堅固なることなしとは

當にために此の經を說くべし
平等覺吉祥に諦順すべし
是の言教を頒宣せん
諸の龍と眞陀羅と
法施を以つて飽滿せん
其心和悅し安らかなり
同音に俱に咨嗟す
法王の境界に遍し
一毛よりはなてる光りの照す所なり
世尊一たび舌を出したまへば
亦江河沙の如き
各億の佛土を照したまふ
童子寶網に告げて曰ふ
及び六十の等侶に緣つて
「世尊は」顧眄して告げて言はく
如來は量るべからず
施して安らかならしめ一切を和らぐ
普く三世に流ぐ
皆諸の經典を解す
人中導「師」の說く所なり

中に來集して栴檀香を雨し、梵天の億數なると及び童子とは、此の經名幷に如來の號を聞き、歡喜踊躍して善心を生ぜり。口に宣說する所は『無上なるかな』と咨嗟せるのみなりき。『我等は末世に當に比丘となり、志強く畏るるところなく、當に此の經を以つて郡國城郭縣邑に在つて、斯の經を頒宣し、當に佛の敎へに隨ふべし。假使、遠く億百千里に在つても當に往いて啓受し、迥邈なるを以つて患難とはなさざるべし。常に諸の天人、龍神、阿須倫、健沓惒、加留羅、眞陀羅、摩睺勒、人非人等をば經義を說き道法に飽滿せんがために請ぜん』と。諸天は悅豫して空中より花を散ず。其の墮つることは雨の如くなりき。各讃歎して言く『法王は一音をもて普く佛土に告ぐ。衆生を愍傷して無爲を總さんがために、佛土に周遍することは江河沙の如くなり。十方も亦然せられたり』と。童子寶網、諸の佛國を覆ふへり。若しひと大雄を見たてまつるに懈惓あることとなし。世尊は顧眄して分別して說かる。佛法は疑ふこと莫れ。如來は無量なり、佛眼は無限なり、普く安隱を施したまふ。佛慧は無際なり、三世を達知して通ぜざる所なし。諸法の中の王なり。輪世の五陰は堅要なることあることとなし。四大も亦然なり。著すること勿れ音響色と痛痒陰と想生死陰とに。是れを曉了する者は「堅」要あることとなしと知る。其の如來の所說を思惟することあらば、疾く總持を得て志迷荒せざらん。諸法は本より淨空にして吾我なく、悕望する所なく、疇疋することあることとなし。如來もまた是くの如し』。是に於て頌を作つて曰く。

無央數　億千の諸天は虛空に住りて
栴檀香を雨らせり　億載の梵も亦散ぜり
此寶網經を聞いて　讃じて如來を勸助せるたり
心歡喜して欣然として　口に無上の義なりと宣ぶ
我れ後の末世にだいて　勇猛なる比丘となり

然して其の後の末世にして　佛の教へを疑はざらん
その故は往古より無數劫のあひだ　諸の護世「者」を奉養したればなり
假使ひ復人有りて　此の諸佛の名を聞かんものは
正法を信樂し「隨」順せん　また諸佛の教化に從はん
斯の經法を聞く者は　當に佛の形像を作るべし
愚癡にして懷ひ闇塞ならん　是の佛名を誹謗するをもて
盲冥にし眼目無けん　億劫のあひだ此の殃ひを獲けん
若し住すること無數劫ならんに　闘亂して人より別離せられん
設し此の經を誹謗するものは　其の罪は彼に過ぎん
然して後の將來の世に　斯の義を說くを以つての故に
猶豫のこころを懷き　佛の無上慧を疑ふことを得ることなけん
名香と種種なる花と　雜香と好衣服とを
是くの如く聞ける經卷に　當に慇懃に
諸の飲食を安和して供養すべし　其の童子寶網は
柔軟にして妙なる供具を　數如來に奉上せり
爾の時諸の天人は　大音聲を聲揚し
また諸天は衆の花を雨じ　遙かに散じて此の經を聞きぬ

佛、童子寶網に告げたまはく。「此の經典は安隱ならしむる所多し。猶し疾に困しめるとき良醫に値ふことを得て其の病を療治し、風寒熱氣、除愈せざることなきが如し。菩薩も是くの如し。彼の佛の名を聞き慇懃に精進せば、婬怒癡の病をば皆消盡することを得ん。時に無央數の諸の天人衆、空

若し供養し自ら歸「依」せば　自然に
法王の所說は彼の手に歸せん　當に斯の妙卷を受け
斯の正願を建立すべし　後の世に自然に獲ん
若し一心に　不可計の諸佛を供事せんに
其れ是の經を信ずること有らんものは　功德彼よりも過ぎん
顏貌常に端正にして　功勳畏る所無く
財は富み意は堅强にして　相好自ら莊嚴あらん

佛、童子に告げたまはく。「若し族姓子及び族姓女、今此の經を聞き後の末世にして此の法に値ふことを得て、持諷し誦讀して人のために演說せん者は百千の佛の法輪を轉じたまふ所を見て咸く供養せん。然して後の末世にして道目を疑はず、前世に奉ぜる所の諸佛の佛名を聞き篤信明目にして、正法を護り諸佛の敎へに順ひ、其の名號を聞き佛の形像を造らん。愚癡闇塞の人は世尊の名を聞いて懷毒誹謗して億百千劫、盲冥無目ならん。また無數劫に於いて衆生と鬪亂せん。此の經を誹謗するものの其の罪は彼れよりも過ぎん。この故を以つて是れを說く。後の世にて値はん者は佛慧を信ぜずして疑ひを懷くことを得ることなかれ。香華雜香をもつて供養し衣服を奉上せよ。經を聞く者に從つて恭恪なれ。是くの如く安隱庠序なれ。寶網童子、衣食を如來に奉上して至眞心にして之れを離れざれ。滅度の後には諸天神靈、虛空に住して天花を雨して、此の經を聞いて好喜愛樂する者を供養して一心にして猶豫することなけん」と。佛、是に於いて頌を作つて曰く。

若し後の末世にして　此の經典を聞くことを得て
受持し諷誦して　他人のために說かん者は
百千の佛　諸の法輪を轉ずる者を供養せん

承せざらんや。惟、魔の官屬と迷惑せる外道とは能く信ぜざる耳。童子よ適に佛を見たてまつり尋いで自ら是の經法に歸命する者は末世之れに歸せん。執つて身手に在き心に思ひ口に誦して曾つて佛說の過るを見て、是の經義を尊び能く慇懃に供養する者は、斯の經卷は彼の人に歸し自然に手に在らん。法王の詠ずる所、建立する所の誓願を至誠にして後世必ず獲ん。若し一心を以つて無數の佛を奉ぜんとも此の經典の要を信ずるには如かず、福も量るべからず、諸佛を供ずるに勝る。容貌端正にして勇猛無畏なり。功德殊異にして財富無數なり。志意堅强にして三十二相の莊嚴は吉祥にして宣暢せざること莫し」。佛、是に於いて頌を作つて曰く。

佛身の諸の毛孔「より演ぶる所の」　佛名及び明曜をもつて
能く衆生を導化することを　若し人有つて聞かば
世世に所生の處において　常に佛の侍者と爲らん
阿難の吾れに侍して　法を聞き輒ち受持するが如くならん
子の爲めの親屬におけるが若くならん　菩薩道を奉修して
當に世の光明を見て　歡喜すること量り有ること無く
最勝味を見ることを得て　愛敬も稱る可らず
具足して之れを承事し　常に妙道慧に致らん
誰か導師の名を聞きて　敬承せざる者ぞ
惟魔の官屬と　外道とは篤信せず
長者の子なる寶網は　佛を覩尋いで奉養して
然して後の末世の時に　經法は彼の掌に歸せん
本佛の講說を聞きて　此の尊經を分別し

之れを省かにして疑ひを懐かずんば　當に我が今の如くなることを逮べし
其の如し時に應ずること有つて　斯の經を聞說する者は
然して後に末世の時に　人の爲めに分別して說かん
猶し江河沙の如き　士夫に所由を讃ぜられん
一光の明曜たるを以つて　若干の佛土を照さん
一切皆共に計るとも　佛土は無思議なり
中に滿つる紫磨金を　親自ら世護に奉り
若しは諸佛の名を聞きて　心中の懐ひ坦然たらんも
佛の名を歎ずるには如かず　是の福は最も無限たり
常に能く歎數　至眞等正覺を念ずるものを
能く歎じて　其の功德を究暢し計數するもの無けん
其の身より演ぶる所の光りも　寶の如くにして甚だ煌煌たり
設し諸佛の名を聞き　沈吟を造立せずんば
法忍を逮成し　口氣の香馥芬として
天の栴檀香の如くならん　これ悉く佛の名を宣べたるに由ればたり

佛、童子寶網に告げたまはく「假使へば人ありて佛の身の毛孔より演ぶる所の光明は其の曜り遠く照して、衆生を開導することを聞きて心中に悅豫せんものは、所生の處に在りて諸佛に侍することを得て側に在りて離れざること、亦、阿難の今來つて佛に侍するが如くならん。猶ほし子孫の親里、骨肉の如し。佛道を奉行して以つて世明を見、歡喜すること無量にして恭恪を致す所、稱限すべからず。諸佛を見巳つて具足して奉事せば福を獲ること是くの如くなり。孰れか佛名を聞いて敬

佛慧を信ずる者は　　此の人は吾が教に從つて
若し佛道の法を好み　　爲めに大聖の教に隨はん
設し正法を誹謗するものは　　皆是れ魔の官屬なり
五趣の衆生の如きは　　「如來の」所有ゆる體毛孔「よりの光明をもつて」
危を濟はん是くの如き「五趣の衆生の」數を　　一乘道に入らしめん

佛、童子に告げたまはく。「如來至眞は一毛孔以り江河沙等の光明威神を用演したまふ。若し此れを信ずること有れば一世の中にして億數の諸佛世尊を覩見せん。若し復、此の法王の所說を聞きて結網を懷かざるものも亦當に成佛せんこと我れの今の如くなるべし。若し復、斯の經典を講ずるを隨順し最後世にして希有の信あらん者は、江河沙數の如き士夫世界、此くの如きを悉く遍く照さん。佛土は是くの如く無思議なり。設し能く是の一切の諸數を計り、中に滿つる珍寶を如來に施し、加し佛名を聞きて心に欣豫を懷かば、當に此の慧の不可思議なるを逮ん。數數諸の導師尊を思念せんものは、其の功德の福は稱計すべからず。又佛の光明は十方を照して、其身巍巍として寶の合成せるが如し。加し佛名を聞きて狐疑を懷かずんば尋いで時に無所從生を逮得し、口氣馥芬として名香遠く聞えん、佛名を宣持するものの其の功德は是くの如く稱量すべからず」。佛、是に於いて頌を作つて曰く。

一毛孔の中より　　世吼は聖なる威神をもつて
其の光明を演出したまふ　　猶し江河沙の如し
假使へば此れを信ずること有らんものは　　諸佛の無量光によつて
一世を覺了せしめられん　　億載の佛の逮見せしめたまふ
若し斯經を聞く者は　　法王に歎詠せられ

て佛道に住せしむ。其の人設し諸佛の名を奉ずる者は爲めに應に諸佛大聖を供養すべし。幷びに吾が身を信じ、佛の教に從つて常に自ら歸命して、永く解脫することを得、地獄に趣かず、其の佛慧を信ぜば則ち吾が身を歸［命］せん。其誹謗する者は是れ魔の官眷たり。斯に五趣に在つて遊ぶ所の衆生を世尊は悉く濟はん。一乘を立てて一毛孔を以つて如來至眞は則ち能く江河沙の光明を演出して衆生を度脫せしめん」。佛、是に於いて頌を作つて曰く。

音聲句を疑はずんば　疾く三昧を逮得し
億の功勳を興暢せん　佛名を聞くがゆゑに致す所なり
後の末世の時に於いて　此の經道を奉持するものは
諸の世吼の名を聞き　其の心猶豫せず
滅度したまへる諸の正覺の　法教を頒宣するが若きもの
衆の導師の名を聞き　奉持して能く分別すれば
則ち爲めに具さに　諸佛の演べたまへる所の法を奉行し
能く致尊し嚴淨し　衆聖の宜しきに應ずる所のものは
壽終らんと欲する時に臨んで　尋いで億姟の佛に見え
趣かに能く皆　諸佛の所說の法を啓受し
已に能く行を逮立し　幷に億の衆生を化し
聞く所虛耗ならず　普く諸佛の道を建つ
則ち爲めに悉く　一切諸佛の教を奉持せん
吾が眞聖の目を信じ　亦諸佛を供養し
諸の最勝なるものに歸命し　永く諸の惡趣を度し

諸の諍訟を刈去し　生れん所は常に閑靜ならん
假使信名の者　[卽ち]世護正眞主の名を信ずる者は
其の心に結を懷かず　憒閙の事を雪棄せん
設ひ無擇罪を犯じて　殃ひを受くること若干劫ならんも
一時頭痛に遇ふのみにして　諸聾永く畢除せん
火の爲めにも災ひ所れず　風に在つても中て見られず
彼のひと如來の名を聞かんには　王も害を加ふること能はじ
未だ曾て生盲と爲らじ　聾とならず亦瘂とならじ
其れ最勝の號を奉ずるものは　手脚も缺減せじ
鬼神も揵沓和も　餓鬼も厭惡神も
若し如來の稱を聞かんひとには　人の毒呪を行はざるべし
諸魅も若しは羅刹も　諸天も若干の龍も
此の最勝の名を奉ずるものには　皆共に之れを愛敬せん

佛、復、童子に告げたまはく。「假使、彼の佛の名を聞くこと有らん者は、疾く三昧を逮、諸の狐疑を決し、音響に著せず、志所生無く、勞勳すること億千もするなり。然る所以は佛の名を聞くが故なり。若し佛の名に値ひ坦然として疑ひなく則ち能く奉持すれば無數劫を越えん。其れ末世に於いて此の法を信樂するものの功德は是くの如し。若し導師滅度の後に名を聞きて善く法訓を宣べ執持して講說せんもの、若し能く人中尊の演ぶる所の經典を誦懷して修淨し致尊し諸佛の行を備へんものは、壽終らんとする時に臨んで其の心亂れず、尋いで能く億姟の諸佛を覩見し、所說の法を聞いて皆能く受持せん。已に自ら修立して衆生を開化すれば、聞くものは短を求めず、悉く之れを化し

佛、童子に告げたまはく。「若し菩薩有つて彼の佛の名を聞くと、及び凡夫の愍念に精思して、遙かに自ら歸［依］し咸な能く供養せんものとは、悉く十方の諸佛の說きたまふ所を聞き、目にて皆視見し僉な之れを信樂せん。前世のことも宿命［ありて］曾て無央數の佛を供養せる所」をしる」。適に能く諸の如來の名を聞くことを得ん。輒く皆本所にして遊歷せることを識念し、爲めに往世の本末名號志所誓願を說き、他の衆生の根原、從來する所を見、佛道を究竟して心に悅豫を懷かんこと、且に日出づるとき永く塵翳無く視る所も極めて曉きが如し。八難闘諍の事を棄除して、其の心和雅なれば常に閑靜を懷はん。若し佛道に篤信すること有らん者は、和合にも離別にも、未だ曾て逃惕せざらん。正使往世に諸の罪釁を犯じて、應に惡趣に在りて劫數に燒炙せらるべけんも、小しく頭痛に遇ふのみにして衆殃は消除せられ、火も災ひすること能はず、風も中ること能はず、國主王者も加害する能はざらん。如來の名を聞かんものは未だ曾て生盲とならず、目、瞎を痛まず、聾とならず瘂とならじ。佛の名を聞くが故に僂とならず跛とならじ。諸の龍鬼神及び阿須倫餓鬼羅鬼人も非人も犯觸すること能はず、諸魅、暴鬼神、龍、地祇も愛樂せざるは莫し。假使、諸の佛名を執持する者の功德は是くの如く稱計すべからず」。佛、是に於いて頌を作つて曰はく。

目にて皆諸佛を見たてまつり　咸能く之れを供養し
所說を聞いて趣に受けんに　其の人は僉信樂せん
宿命にて更歷して　無數の佛を供養せし所をしり
適彼の佛の名を聞かんに　一切悉く
其の本の名號を識りて　衆人の爲めに之れを說かん
復他の衆生を視て　能く佛道を究竟し
歡喜心を興發し　諸の八難を棄捐し

其れ世吼の名を聞いては　心に狐疑を懷かず
篤く佛法の明を信じて　則ち眞に衆祐と爲る
常に轉輪王と爲つて　輒く諸佛に値ひ見たてまつる
適遇うては尋いで供養すること　無量不可思議なり
恒に梵行を遵修し　神通あつて而も獨歩す
諸の總持を執轉して　諸佛の路を覩ることを致す
常に諸佛を覩ることを得ること　猶し江河沙の如くならん
諸の生死を超越すること　億劫にして亦若干ならん
佛道を志すを以つての故に　心未だ忽忘せず
其れ世吼の名を宣べ　衆の爲めに請じて宣傳すれば
轉輪聖王と成つて　一處に立ち自由ならん
體は紫金色を致し　其の相は三十二なり
若し佛號を聞くこと有らんものは　聲音は梵天よりも踰え
八難處を棄捐せん　五體を歸して禮敬し
佛道を障塞せず　未だ曾つて瞋恨を懷かず
其れ佛の名を聞く者は　猶豫を懷かざるが故なり
若し最勝號を奉ずるものは　夙夜に七日を具せん
彼の眼は清淨と致り　無量の佛を見るに逮ばん
未だ肉眼を捨てずして　而も普く見ること清淨ならん
無數の諸佛を覩たてまつること　猶し江河沙の如くならん

擧げ移して悉く盡さしむ。童子よ、意に於いて志す所云何。寧ろ能く人有つて彼の士夫の移せる所の塵數の所著の處、遠近、多少を思惟し計數し稱量して算を下さんや」。答へて曰く、「能く知る者無けん。天中の天よ。假使、人有つて分別して識らんと欲し、此の譬喩を說き其の義を曉了すとも、尙ほ能く達すること能はじ。其の譬喩を識るとも安ぞ數を知らんや」。佛、童子に語はく。「彼の時に士夫の移せる所の諸塵を一一に著けたる處は是れ諸佛の界なり。下は水際に至り上は上界の三[五]十三天に至るなり、其の中に滿つる塵は國土に若干あり。時に復第二人有り。彼の一塵を出し取りて、前人の計ふる所の塵數よりも過ぎて若干不可稱載億百千姟の諸佛の剎土を越えて乃ち一塵を著けん」。佛言はく。「族姓子よ。是れを以つて比類するに過ぐる所の東方は長遠にして際し無きところなり。復一塵を取つて前數よりも過ぎて、復一塵を著けん。是れを以つて比類するに、其の人の越ゆる所は天も覆はず、地も載すること能はざる所の不可計量億百千姟の諸佛の剎土なり。爾くして乃ち解君世界に至ることを得。彼に佛有す、〔宮殿をば〕寶光月殿と名け、妙尊音王如來至眞等正覺明行成爲善逝世間解無上士道法御天人師佛世尊と號す。今現に在す。族姓子及び族姓女は菩薩乘を擧せり。彼の佛の名を聞いて猶豫を懷かず、佛の道眼を信ず、斯るをば名聞くとなす可し。所生の處には轉輪王と作る。若し佛、世に興りたまへば常に與に相ひ見えん。無央數の諸佛至眞に觀えて咸な之れを供養せん。梵行を淨修し、神通を獲致し、進退獨步にして總持自在ならん。如來を觀ることを得ること江河沙を視るがごとく、平等正覺を等しうせん。生死を棄捨して若干億劫を超ゆることも亦江河沙の如くならん。心常に安靜にして未だ曾て忽忘せず。恒に無上正眞の道に志して塵埃有ること無く衆塵を近づけず。自在を得るに由つて身は鉤鏁の如し。一處に住在して四事を具足し、體は紫金の如くにして三十二の大人相を以つて其身を莊嚴し、音は八部に逮び聲は梵天を踰え、八難を棄捐して常に閑靜なることを得たり。時に世尊、此の義を觀じ已つて、則ち頌を說いて曰く、

【五】三十三天とは忉利天のこと。六欲天の第二、須彌山頂にあり。城を喜見城といひ、帝釋天ここに住す。

慧は具足して心識宿命あり、貪嫉を懷かざれば妄想する所無く、所在の處に常に以つて和安なり。諸の菩薩と與に眷屬と爲り、一切の諸の聲聞衆より離れて、便ち所說の功德を啓受することを得ること不可稱計億百千姟なり。諸佛正覺の欽愛する所、衆生を飽滿せしめて久しく飢虛より遠ざけ、諸魔を驚動して咸く來つて自ら歸[依]せしめ、諸の佛國土を修治し嚴淨して衆生の心性の翳垢を雪除し、而も爲めに淸白の法を頒宣す。諸天神明は悉く共に擁護し、菩薩大士は咸な俱に之れを念ぜん。如來至眞の建立する所は未だ曾て諸佛世尊に違遠せずして、而も皆悉く諸の菩薩行を備へ、而も皆八萬四千の諸種の事業を具足せん。衆の究竟の音は其聲梵の如く普く佛界に徹して聞かざるもの莫く咸く其の命を受けん」。

時に佛、童子寶網に告げたまはく。「善い哉善い哉。問ふ所の辯才甚だ微妙なりと爲す。憂念する所多く、安隱する所多し。ゆゑは諸天及び十方の人を愍傷して能く如來に斯くの如きの義を質せるにおいてをや。童子諦かに聽け、善く之れを思念せよ。當に汝の爲めに其の義を分別すべし。童子寶網よ、諸の大衆と與に敎へを受けて聽け」と。佛、言はく。「童子よ當に知るべし、東方此を去つて佛の世界有り名けて解君と曰ふ。[この解君世界と此世界との隔りの遙かなることは]猶し族姓子よ、江河沙等の[ごとき無數の世界あり]、其の中に沙數[ほどの若干の佛土あらん。その]若干の佛土に下は水基より轉じて上界の三十三天に至るまで[の廣高なる]其の中に諸の塵埃が周遍して有らん。[その數は數へ得べからざるほどの無量無數なり]。時に一りの士夫あり。自然に彼より出でて、諸の世界の塵の[數をば]一一に數へて盡くすならん。[しかして其の數へ方は]若干億百千姟の諸佛の刹土を過越して、[その刹土に]乃ち塵の一點を著けて[遂に無量無數の塵を數へつくすがごとくするなり]。佛言はく。[童子よ、是のごとく比類して次に前數の諸佛の刹土の如きに復一塵を著けん。長遠久逈にして無限無量なれば稱げて計ふべからず。虛空にも此の諸の塵數を容れられず。稍稍に

の衆花、諸天の意花、熏花香、末香、雜擣香、其の明月珠、雜紫磨金、衆珍琦異の七寶の天華を佛の上に散じ奉り、同音に歌頌し、無央數億百千姟の伎樂を鼓して佛を樂ましめたてまつる。空中の雷音は徹して十方に聞え、天の栴檀衆寶を雨し、瓔珞を上下に校飾せり。盲者は目くことを得、聾者は聽くことを得、瘂者は能く言ひ、病者は愈ゆることを得、跛者は能く行き、狂者は正を得、亂者は定を得、僂者は申ぶることを得、其の毒を被れる者は皆消歇し、箜篌樂器は鼓せざるに自ら鳴り、婦女の珠環は相ひ振れて玲玲、飛鳥禽獸は相ひ和して悲鳴し、衆人集り觀て喜び驚かざるは莫し。時に世尊、適已に入城したまへば、諸天は上下より諸の寶蓋を虛空に在つて執れり。佛即ち童子寶網が家の前に往き到り其の舍に坐したまふ。四部の衆なる比丘比丘尼清信士女とは悉く其の中に在りて次第に坐せり。童子寶網は佛と弟子との坐する所已に定れるを見、手自ら百種の飲食、若干の種味、殊異の餚饌を斟酌し、世尊及び聖衆[三]四部の弟子を供養するに等うして差特無く、飯食し畢訖り澡水を行じ竟り、三法衣の其の價無數億百千姟なるを取りて、大聖と比丘と比丘尼とに貢ぎ上り、亦復倶に[四]三品の法衣を得たり。其の價は佛に施せると等うして差特無し。各各に清信士女にも一具體衣を賜遣せり。所以は何ん。皆是れ世尊聖恩の所化なるが故に其れをして然かせしめたるなり。童子寶網は佛を供養し竟り、別に自ら歇飢安身すること已に訖り、更に獨り座を取り佛前に於いて却つて一面に坐し佛に白して言さく。「問ひたてまつる所有らんと欲す。若し見聽されなば乃し敢へて自ら陳べんとす」。佛、寶網に告げたまはく。「諸の疑ひ有る者の問はんと欲する所在らば、如來至眞は當に結網を結き、心をして坦然たらしむべし」。童子、佛に問ひたてまつる。「唯然なり、大聖。豈に諸佛の往世に所願を修行して現在に合成せる者有らんや。菩薩道を學する諸の族姓子、族姓女の菩薩乘を學して其の名を聞くことを得て心中に開解して疑ひを懷かずんば、不退轉を成じて當に無上正眞道を得べきなり。姿體は端正にして顏色比無く、財富無窮にして戒は缺漏せず、智

【三】 四部と弟子とは比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷をいふ。

【四】 三品の法衣とは梵名の袈裟 Kaṣāya のことなり。袈裟を不正、壞、濁、染等と譯す。青黃赤白黑の五正色を避けて他の雜色を用ふれば不正色等といふ。小片に割截して綴合するが故に割截衣といひ、田畔の如くなれば田相衣といふ。其他、道服、法衣、忍辱鎧、解脫幢相等ともいふ。大中小の三衣あり。小衣を安陀會といひ、五條袈裟なり。中衣を鬱多羅僧といひ、七條袈裟なり。大衣を僧伽梨といひ、九條袈裟等なり。

國中に設くる所の欣然たる心を以つて　父母に啓す
我れは佛のもとに往詣して　至聖を請ぜんと欲す
尋いで即時に　彼の城門を出で
最勝なる　大聖人の所に行き到り
足下に稽首して　自ら德海に歸せん
童子は即ち退いて　却つて一面に住す

是に於いて童子寶網は、維耶離大城を出で佛の所に行詣し、恭肅敬意して足下に稽首し還つて一面に坐しぬ。佛、其の意を知つて則ち時宜に隨つて應ずる所を當に解して爲めに法を說き、欣然として大いに悅びたまへり。童子寶網は佛の勸助開化說法したまふを見たてまつり、益以つて踊躍せり。即ち坐より起つて偏へに右の肩を出し右の膝を地に著け、和顏悅色して前んで佛に白して言さく。「唯、願くは世尊、垂愍して明日、聖衆と請を受けたまへ」。佛、已に請を受けたまへども默然として童子に許可を應へたまはず。時に佛、寶網を愍哀せらる。寶網は佛を見たてまつりて默然たり。便ち坐より起つて佛を遶ること三匝し禮を作して去る。童子寶網と天帝釋・梵迹天王・須深天子と維耶離城に入り、百味の饌を施し、若干品の種種の美食を奉る。即ち夜時にして諸の座具を辦じ、維耶離城を莊嚴校飾し、諸の幢幡を懸け、散花燒香し、所設は已に辦じければ、佛の所に往詣して足下に稽首し却つて一面に住し、手を叉して佛に白さく、「大聖愍み見れよ。時至り食辦ぜり。尊の宜き所の從なり。」時に佛、明旦に衣を著け鉢を持し、無央百千の聖衆と虛空の中に上り地を去ること四丈九尺にして神足にて經行し、前みて維耶離城に入ることを得んと欲り。適、入城せんと欲るに、如來はその時に應つて、三千大千の諸佛の世界を六反震動し、十八無數億姟百千の衆變を顯現して、維耶離に到りたまへば、その時、無央數億百千姟の諸天悉く來りて、諸の天花、青蓮、諸の紅黃白

究竟して百千なり
以つて供養を爲し
名聞は遠く聞え
虛空の中に上り
寶繩と爲り
甚だ微にして妙好なり
其數億千なり
億姟無數なり
以つて繩と爲して連ぬ
甚だ以つて好しと爲す
維耶離城
四丈九尺
皆布の衣服をば
用つて之れを熏じ
珠瓔の瓔珞に
七萬億有り
皆左右に在り
七萬億有り
佛釋師子の
所作は此くの如し

燒香は中に滿ち
導師に奉上せり
維耶離に於いて
紫磨金を以つて
一一の寶繩は
諸の寶幢を連ぬ
彼の寶瓔[珞]を計ふるに
一一の紫金を
若し來觀する者は
諸の國中の民
下より上に去ること
維耶離城
赤栴檀香を
各其の衣を遣す
紫金をもつて雜廁せるもの
其の鈴は千種ありて
諸の香鑪を維ねて
以つて用ゐて供養せり
其の大莊嚴の
童子寶網は

其價億數なり
諸の幢幡に垂校し
上法は甚だ高く
紫金にて交絡せり
黃金を離れず
億衆千衆の
羅は後面に在り
設くる所に安定して
其の床榻の上には
紫磨金色なり周匝せる垂幡あり
水精も然り車渠の胎
阿文珍藏と
其の赤栴檀と
一一前に在りて
交絡して周匝し
其の地上に於ても
上妙の金を以つて
水精と琉璃と
及び馬瑙とは
一一の施設

而も以つて
跱竪して之れを立つ
其の幡の下尾は
其の幡は是の如く
諸樹のもとには
座を滿して安然たり
其の此の諸座は堅固殊勝にして
猶門閫の如くなり
寶蓋は光晃として
白銀と琉璃と
及び馬瑙
幷びに眞珠とあり
若干種の寶と
具足せり百千のものは
寶蓋を莊飾せり
亦微帳を設け
之れを合成せり
白銀如珍と成就車渠と
地上に在り
一一の寶瓶

童子よ我れ往かん
若し六億の
導師を供養するに
慇懃に自らを
皆天帝を随へたまへり
又梵天王は
其の導師は
諸の天子の
一切皆樂しむ
床榻具足せり
紫磨金色なり
七寳をもつて校成し
一一に部を分ち
布いて右面に在り
常に歡樂を爲す
具足して微妙なり
億の殊勝有り
各左右に在り
衆好最勝なり
卓然として周遍せり

惟命に從はん耳
精進業を修することを種ゑて
釋師子に於いてせん
最上尊の勢に歸依す
其の[天帝には]眼千有り
尊位自在なり
天魔の子と
那術億數たると
維那難に遊ぶに
億千數に滿ちて
明月珠に像り
亦甚だ巍巍たり
其數億千なり床は悉く是くの如く
幡幢を跱立して
一一の床座
其幢は超絕にして
諸の幢幡は
閣に於いても是くの如く
明月のごとき珠寶は
一一の寶珠は

南方も是くの如し西も亦然せん　宮を北方に造ることも玆くの若く爲ん
是くの如きの諸殿より照すこと巨億ならん　其の數各江河沙の如くならんも
世護の諸の毛孔より　演ぶる所の光明の曜くこと巍巍たるには比ふべくも無し
能仁の一一の諸の相好より　出づる所の暉曜は照すこと無量なり
一一の導師の威を奮つて　以つて諸の衆生を開化する所は
猶ほ復江河の數よりも越え　普く能く現に三十六を說く

是に於いて童子寶網は、夜の夢より覺め、其の父に啓白すらく、『夜、諸天人は兜術宮より下りて偈を以つて相ひ語り而も頌を歌つて曰へり。この讃佛の功德をば今、求索せんと欲す。自ら如來・至眞に歸するを見るに緣つて』。童子寶網は因つて時に頌を以つて而も讃歎して曰く。

衆生を開悟したまふ善導師　無念世に父のごとき志廣大なる
大人よ當に知るべし佛を供養したてまつる　導師の世に[出]興すること甚だ希有なり
靈瑞花には遇ふ可きこと難きが如し　其色は煥煌として軟く微妙なる
香氣は流布して耗損すること無し　是くの如き尊き花には値ふことを得ること難し
我れ身をもつて今日　大人に啓す
願くは相ひ施す　歡喜の心を以つて
其の世の護りたる　光明の教に從ひ
常に當に　眞諦の慧を現するを奉敬すべし
其の無量力は　歡悅の心を懷くなり
尋いで時に卽ち　犁車童子は
師子將軍に告げていふ　大聖を供養せよと

佛說寶網經

西晉月氏三藏　竺法護　譯

聞きしこと是くの如し。一時、佛、[一]維耶離、[二]獼猴水の邊りなる交路精舍に遊ぶ、大比丘衆と俱なりき。比丘は六萬、皆阿羅漢なり。菩薩は三十億、悉く一生補處の慈氏菩薩等と、二生補處、三生補處、四生五生十生補處、十八生二十生三十生四十生補處、五十生百生補處となり。要を擧げて之れを言はゞ、上は千生に至るまで而も佛處を補ふものなり。九十億の諸天の衆有り。欲行天人、色行天子、四天王天、帝釋梵天王、須深天子、月光天子、日光天子、勝英天子、作樂天子、此の諸天子及び餘の天人、九十九億と無勞龍王、沙竭龍王、和倫龍王、摩奈斯龍王、難頭和難祇龍王、文隣龍王、大悅龍王、燕居阿須倫王と諸の阿須倫の民と皆來つて集會し、佛の足を稽首して部を分つて坐せり。

爾の時、維耶離大城の中の師子將軍に子有り、無量力と號く。時に無量力に童子仁賢有り。號して寶網と曰ふ。曾し已に不可稱計の百千の諸佛を供養し、無量世の大庭燎と爲て法教を執持せり。厥の年八歲なり。時に適〻寢寐せり。夢の中に於いて兜率の天人は天宮より下りて其の香普を宣揚し、而も頌をもつて歎ずるを見たり。[頌に]曰く。

佛身は現在に衆生を導きたまふ　其の光りは三千界を照曜せり
顏容は殊に妙曠にして厭くこと無く　體色は紫金にして百福會せり
若干の月光に億數を加ふとも　精明なる聖智の容には比べられず
其の[月の]宮殿より光りを現ずること巨姟數なり　斯のごとき月宮をして東方に遍ぜしめ

【一】維耶離 Vaiśālī を毘舍離、毘耶離、吠舍釐と記す。譯して廣嚴といふ。中印度にあり。維摩居士は此の國に住し、佛滅一百年の第一結集も此國にて結集せり。國民の種族を離車とも跋闍子ともいふ。
【二】獼猴水とは毘舍離國菴羅聚の側に池あり、これを獼猴池といふ。佛は此地に住して經を說く。

佛說寶網經解題

飜譯に就いて

本經の飜譯は法護譯と羅什譯と二種あるが、經錄は皆一定して混亂してゐない。例せば出三藏記第二(正藏五五ノ八頁)の新集經論錄第一には

寶罔童子經一卷 舊錄云寶罔經 晋 竺法護譯

と記し、又歷代三寶紀第六（正藏四九ノ六三頁)及び同錄第八(七八頁)には

寶網童子經一卷 亦云寶網經 見聶道眞錄 西晋 竺法護譯

寶網經一卷 姚秦 羅什譯

とある。隋以後經錄は悉く上の二錄の說を用ゐて異說を記してないから、法護譯たることは少しも疑ひがない。但し開元錄第十二(正藏五五ノ六〇一頁)には「兩譯一闕」と記載してゐる。是によれば開元錄編纂當時には羅什譯の寶網經は既に散逸して傳はらなかつたと思はれる。

本經の梗概

一時、佛が維耶離國の獼猴池の邊りなる交路精舍に遊ばれた。六萬の比丘衆、三十億の大菩薩、九十億の諸天衆、九十九億の諸龍王、燕居の阿須倫王並に其の民衆とが集會し佛足を禮して各坐した。その時、維耶離大城の師子將軍の子、寶網童子年始めて八歲、夢の中で兜率天人が佛を讚歎するのを夢みた。この事を童子は父に啓し、更に城を出て佛所に詣で、供養を設けて法要を請問した。佛は童子のために六方の佛の功德を稱說された。童子は歡喜し善心を發し、一會の大衆は皆安穩なることを得て佛を禮し、天人は頌を以つて諸佛を歎じた。佛は更に又未來世に此の經を聞く者は阿彌陀佛、阿閦佛、彌勒佛、無垢大聖師子英佛を見たてまつるであらう。後の世にこの經を護持せば上方世界の無量光明最勝佛土に出生し、久しくして遂に彌勒如來を見るであらうと。此れを聞いて皆歡喜し佛を禮して退いた。

以上が本經の梗概であるが、本經が現在諸佛を說き、造寺建塔の功德と本經聞持の功德とを比較して聞持の功德を勝れたりとし、上方世界に生れて彌勒佛を見る喜びを說いてゐる點などは本經成立年代及び製作地方を知るためには好き示唆をなすものである。

昭和七年二月下旬

譯者 田島德音 識

一心に信樂せん者の　　福德も亦是くの如くならん

爾の時、諸の菩薩の颰陀和菩薩、羅憐那竭菩薩、橋日兜菩薩、那羅達菩薩、須深彌菩薩、摩訶須和薩和菩薩、因祇達菩薩、和輪調菩薩、是の八人は求道してより已來、無央數劫なり。今に於ても未だ佛を取らずして、「願つて言はく、十方の天下の人民をして皆佛道を得せしめん。若し急疾有らんに皆當に我が八人の名字を呼ぶべし。即ち解脫することを得ん。壽命の終らんと欲する時にも我が八人は便ち當に飛び往いて之れを迎逆すべし」。諸の菩薩の彌勒等と第一の四天王とは皆佛に白して言さく。「吾に當に八吉祥神呪經を持する者をば擁護すべし。我れ並びに力を與へて諸の疾病をして皆除愈することを得せしめん」。佛、經を說き已りしとき、舍利弗、彌勒菩薩及び諸の比丘・天龍鬼神・阿須倫王、皆大いに歡喜し樂聞したりき。

佛說八吉祥神呪經終

女を棄てゝ男子と爲り
八佛名を奉持するものには
刀兵水火の毒も
愛樂して是の經を奉ずるものには
鬼神も諸の官屬も
飛行して諸の刹に到らん
心意正しくして邪なること無く
生れん所には常に佛に遇ひ
一切の衆惡を除き
精進して懈怠すること無く
爲人朴直にして儒ぎ
勇猛に衆魔を降す
端正なる相好を具して
布施して慳貪すること無く
盜賊及び怨家
疾病も縣官の事も
是の八佛名を持して
是の經を奉持する者をば
第一の四天王も
所願は皆得可し

聰明にして常に黠慧ならん
出入に賊害せず
諸の邪なるものも干ること能はず
諸魔も便りを得ず
能く嬈亂する者無けん
在らん所は大豐樂ならん
佛を見たてまつりて大歡喜せん
等心にして之れに奉事せん
疾く泥洹道を得ん
諸の緣著を離れ去る
八佛名を奉持して
其の力は金剛の如くなり
一切能く當るもの無し
巨億萬の「富める」家に生る
自然にして皆消除し
烏鳴も諸の惡夢も
之れを呪すれば卽ち除愈す
彌勒菩薩等も
常に共に之れを擁護せん
踊躍して大いに歡喜せん

廣く他人の爲めに其の義を解說せん者は終に愚癡せず。口にて言ふ所に失誤有ること無く、相好具足して缺減する所無く、無央數年にも乏少しからず。是の人は終に[二]太山・地獄・餓鬼・畜生の中に墮せざるなり。是の人は終に羅漢・辟支佛道を望取して般泥洹せず。必ず當に無上平等の道を逮得すべし。常に陀隣尼に遇ひ、常に菩薩の道を行じて功德を得ること無量なり。第一に四天王は常に之れを擁護すれば縣官の爲めに拘錄せられず。盜賊の爲めに中傷せられず。天龍鬼神の爲めに觸嬈せられず。[三]閱叉鬼神・[四]蠱道鬼神若しは人も・若しは非人も皆其の便りを得て害殺すること能はず。其の宿命不請のものを除く。若し疾病・水火・[五]烏鳴・惡夢・諸魔に嬈らかされ恐怖して衣毛竪つこと有らん時は、常に當に是の八吉祥神咒經を讀みて之れを呪すべし。卽ち除愈することを得ん」。是の時、佛、偈を說いて言はく。

若し是の經と　八佛「の名と八佛の」國土の名とを持すること有らんものは
[六]三惡處に墮せずして　疾く無上道を得ん
自覺して道意を發せんものは　佛を見たてまつて卽ち開解し
中外常に歡喜し　供養し心より恭敬すること
億劫阿僧祇せば　行惡悉く消除せん
是の八吉祥を持すれば　速かに教を明解することを得ん
是の經を供事する者は　千葉の華の中に生れん
珍寶其れが爲めに出で　色像好無上ならん
人是の尊經を聞いて　尊敬し信樂せん者は
奉持し諷誦し讀み　清淨にして放逸すること無けん
女人にして是の經を信じて　敬愼し謏諂すること無けんものは

【二】太山とは泰山とも記す。太山は道家の說によれば太山の神を太山府君といふ。吾國の陰陽家はこれを素盞鳴尊とし、佛家は十王經の說により十王の第七とし、閻魔王の書記にして人の善惡を記錄する役務の王となす。

【三】閱叉 Yakṣa は夜叉、藥叉、夜乞叉と同じ。鬼道に屬す。能噉鬼、捷疾鬼、勇健等と譯す。

【四】蠱道鬼神とは梟磔者の鬼神。人を惑亂せしむる鬼神。

【五】烏鳴とは歎息。

【六】三惡處とは三惡趣、三惡道卽ち地獄、餓鬼、畜生の三道をいふ。

佛說八吉祥神呪經

呉月氏優婆塞支謙　譯

聞きしこと是くの如し。一時、佛、羅閱祇[一]の耆闍崛山の中に在しき。千二百五十の比丘と倶なりき。また菩薩も千人あり皆彌勒等なりき。佛、賢者舍利弗及び諸の比丘に告げたまはく。「皆一心にして聽け」と。佛、賢者舍利弗に告げたまはく。「東方へ是より去ること一恒沙にして佛有す。安隱囑累滿具足王如來・至眞・無所著・最正覺と名く。今現に在して說法せり。其の世界をば名けて滿所願聚と曰ふ。是より去ること二恒沙にして佛有す。紺琉璃具足王如來・無所著・最正覺と名く。今現に在して說法せり。其の世界をば名けて慈哀光明と曰ふ。是より去ること三恒沙にして佛有す。勸助衆善具足王如來・無所著・最正覺と名く。今現に在して說法せり。其の世界をば名けて歡喜快樂と曰ふ。是より去ること四恒沙にして佛有す。無憂德具足王如來・無所著・最正覺と曰ふ。今現に在して說法せり。其の世界をば名けて一切樂入と曰ふ。是より去ること五恒沙にして佛有す。藥師具足王如來・無所著・最正覺と名く。今現に在して說法せり。其の世界をば名けて滿一切珍寶法と曰ふ。是より去ること六恒沙にして佛有す。名けて蓮華具足王如來・無所著・最正覺と曰ふ。今現に在して說法せり。其の世界をば名けて滿香名聞と曰ふ。是より去ること七恒沙にして佛有す。算擇合會具足王如來・無所著・最正覺と名く。今現に在して說法せり。其の世界をば名けて一切解脫音聲遠聞と曰ふ。是より去ること八恒沙にして佛有す。解散一切縛具足王如來・無所著・最正覺と名く。今現に在して說法せり。其の世界をば名けて一切解脫と曰ふ。

佛、賢者舍利弗に告げたまはく。「此の諸佛・無所著・最正覺の其の國土は清淨にして五濁無く、愛欲無く、意垢無し。若し善男子・善女人有つて、此の八佛及び國土の名を聞き、受持・奉行・諷誦して

[一] 羅閱祇 Rājagṛha とは羅越、羅閱、囉惹訖哩呬等といふ。摩伽陀國王舍城の梵名なり。

皇年)闍那崛多譯」。を舉げてゐるが、歷代三寶紀第四(五四頁)は八佛名經を失譯とし、開元錄も後漢失譯としてゐる、所が歷代三寶紀第十二(一〇三頁)では崛多譯の八佛名號經一卷を舉げ、開元錄では八部佛名經一卷を元魏の瞿曇流支譯としてゐる。このやうに本經も亦同本異譯も頗る混雜してゐる。明の智旭は閱藏知津第五に「八吉祥經一卷　吳月支國優婆塞支謙譯。八陽神呪經一卷　西晉月支國沙門竺法護譯。八吉祥經　蕭梁扶南國沙門僧伽婆譯。三經並に同本、梁譯には舍利弗の問を缺く」と記して貞元錄の數へ方と相違してゐる。

以上は經錄によつてみたのであるが、此に問題となるのは貞元錄の五譯一缺說である。支謙譯を現存とし求那跋陀羅譯を缺本としたのは如何なる理由によるか。求那跋陀羅譯は出三藏記に後記が記されてあるから譯出は確かであらうが、支謙譯は歷代三寶紀以後の經錄に其名が初めて出て內典錄以後の經錄は皆此說を用ひてゐるが法經、彥琮、靜泰等の經錄に全く記されてゐないのは、聊か疑問を懷かざるを得ないのである。費長房が「古錄に見ゆ」と云つても、それは僧祐錄と寶唱錄である。然るに僧祐錄には支謙譯がないから、「祐錄に見ゆ」とあるの誤りであらう。寶唱錄は現存してゐないから斷定し難い。それで貞元錄の支謙と求那跋陀羅との存缺說が考へさせられるのである。恐く貞元錄は支謙譯を取つて求那跋陀羅譯を捨てたのではあるまいか。然るに支謙譯なる說は多少の疑點が存し、求那跋陀羅譯の說が相當に信じ得るとしたならば、現存せる本經は支謙譯とするよりは求那跋陀羅譯と改める方が正しいと考へられる。大方の示教を仰ぎ、支謙の譯經を明了にしたいと思ふ。

昭和七年二月下旬

譯者　田島徳音　識

所も本經に就いて記してゐない。又隋の法經錄第一（正藏五五ノ一一六）には出三藏記の記事によつてゐるが、同卷（正藏五五ノ一二一）には「衆經失譯三」の下に八吉祥神呪經一卷、八陽經一卷」を擧げてゐる。因みに云ふ。八陽經を竺法護譯と定めたのは費長房錄である。法經錄によれば八吉祥經は求那跋陀羅譯と失譯と二本あることになるが、內容に關して何等述ぶる所がないから同本を二種に數へたものか、異本が流布してゐたものか明らかでない。但し「衆經失譯三」の終りに「前一百三十四經、並是失譯、雖復遺落譯人時事、而古錄備有、且義理無違、亦爲定錄」と記してあるから、法經等は全く古錄を拔萃したに過ぎないとも云ひ兼ねるのである。次に隋の彥悰錄第二（正藏五五ノ一五七）には「八吉祥經一卷　梁三藏僧伽婆羅譯。八佛名經一卷　大隋開皇年崛多譯。右二經同本異譯」とあつて、求那跋陀羅譯がない。然しながら同錄第三（正藏五五ノ一六八）には「別生於大部內抄出別行」として吉祥呪經一卷。八陽神呪經一卷」を擧げ「生經」より別出せる一部であるとしてゐる。生經は本生譚であつて竺法護の「生經」は既に國譯一切經本緣部第十一に譯出されてゐる。

次に隋の費長房錄第五（正藏四九ノ五八）には

八吉祥經一卷 見古錄亦有呪字初出　魏文帝世、月支國優婆塞支謙譯云云

と記してある。又同錄第十（九一頁）には

八吉祥經一卷　元嘉二十九年於荊州爲司空南進王譯是第二出、與吳支謙譯出者小異、見僧祐及寶唱錄　宋求那跋陀羅（功德賢）譯

とあり、又同錄（一〇三頁）には「八佛名號一卷　隋北天竺犍達國三藏法師闍那崛多譯」を記してあるが、僧伽婆羅譯を出してない。

次に靜泰錄第二（正藏五五ノ一九二）には僧伽婆羅譯を除いて求那跋陀羅譯と崛多譯とを同本異譯として數へ、支謙譯を擧げてゐない。上記の如く本經を支謙譯と定めたのは費長房錄以後でそれを載錄したものは內典錄である。

これでみると本經を支謙譯と定めたのは隋の長房錄（歷代三寶紀）以後であつて、內典錄は歷代三寶錄を載錄したものと考へられる。貞元錄は內典錄の缺を補つて、五譯一缺說を出したものであらう。此中八陽經を竺法護譯としたのは歷代三寶紀であつて、八陽經を本經と同本異譯としたは貞元錄（第一一、［正藏五五ノ四九四］）である。同錄には

八陽神呪經一卷 亦直云八陽經第二出、與八吉祥呪經等同本、見長房錄　西晉　竺法護譯

とあるのが初めてゞある。次に八佛名經に就いては唐の靖邁の譯經圖記第四には「八佛名經一卷　東魏瞿曇般若留支譯。八佛名號經一卷　周の宇文氏の世（隋開

佛說八吉祥神呪經解題

本經の梗概

「一時佛、羅閱祇の耆闍崛山に在して、千二百五十の比丘と、千の菩薩と俱に集會したまへり。時に佛は舍利弗に對して東方の八佛の名號並に八吉祥神呪を受持讀誦する功德を說きたまふ」。是れが本經の要領である。

翻譯に就いて

本經の翻譯は貞元錄第十二に從へば五譯あつたが四譯現存一譯闕本としてある。五譯とは

八吉祥神呪經一卷
　吳、支謙譯　第一譯
八陽神呪經一卷
　西晉、竺法護譯　第二譯
（八吉祥經一卷
　劉宋、求那跋陀羅譯）第三譯（缺）
八吉祥經一卷
　梁、僧伽婆羅譯　第四譯
八佛名經一卷
　隋、闍那崛多等譯　第五譯

である。貞元錄は「右四經同本異譯、緣起大同、佛名稍異、前後五譯、一譯闕本」と記してあるが、同錄二、三、五、六、八、九、十、十二卷等を見ると少しく相違せる點がある。それは同錄十二卷に

八部佛名經一卷亦云八佛名經
　元魏、瞿曇般若流支譯

と記し、更に註解して「八部佛名經、大周錄云與八吉祥呪經等同本異譯者誤也、八數雖同、說處全異、所爲復別、故爲單本」といひ、又同第九卷には「八部佛名經、亦云八佛名經、興和四年於金華寺出、沙門曇林筆受、見長房錄」といつてゐる。長房錄（歷代三寶紀）をみるとこの八佛名經の記事の下に「開皇六年乃至隋北竺犍達國三藏法師闍那崛多譯」を出して「瞿曇般若流支」の翻譯を出さない。清邁譯經圖記第四には「八佛名經一卷、東魏、般若留支」としてゐる。これでみても貞元錄は統一が取れてゐないばかりでなく引川書に就いても編輯統一が十分でないことを暴露してゐる。

本經の第一譯を「支謙」なりと定めたのは隋の費長房錄以後であつて、それ以前の經錄には「支謙譯出」はない。梁の出三藏記第九（正藏五五ノ一七）に「八吉祥經記第二十一　出經後記」と記してあるが、これをみると「八吉祥經、宋元嘉二十九年太歲壬辰正月三日、天竺國大乘比丘釋求那跋陀羅、於荊州城內譯出、此經至其月六日竟云云」とあるのみで他には一箇

長者應に念じて　　　　　　　　宜しく時に修行せよ

時に千の居士は、復、比丘の布施を讃むるを聞き、身心歡喜し、卽ち王の所に詣り、大王に啓して言さく。『我等、今日諸の比丘より檀波羅蜜を讃說するを聞けり。唯願くは大王、我が爲めに宣令して一切の國內の貧苦の衆生に普く聞知せしめたまへよ』。

佛說千佛因緣經　終

諸佛及び賢聖は　財を視ること瘡疣の如くなり
之れを大地に損つることは　人が涕唾を棄つるが如くなり
善士は布施を修して　恒に無我を觀ず
財物及び受者「と施者と」　三法倶に空寂なり
此の莊嚴心を以てせば　乃し菩薩行に應るなり

時に千の居士は優婆塞の所說の偈義を聞き、深心に歡喜し未曾有なることを得たり。卽ち共に相隨つて僧房に到る。僧房に到り已つて諸の比丘に白さく、『此の大衆の中に誰か有智の者たる。唯願くは我が爲めに甘露の法を說きたまへ』。爾の時、衆中に一りの比丘有り。名をば淨音と曰ふ。諸の居士の爲めに廣く菩薩の檀波羅蜜を讚じて、卽ち此の偈を說きぬ。

過去に佛有しき　自在勝と號へり
彼の佛世尊は　常に此の法を說きたまへり
施は妙樂たり　報ひを受くること窮り無し
諸天と世人と　施に因つて立つことを得
是の故に智者は　應に修施を行ずべし
施は寶蓋たり　窮者を覆護す
今世にも後世にも　生るゝ處安樂なり
若し能く意を廣くして　空慧を修して心
諸有に住せずして　布施を行ずれば、
此くの如き施者は　必ず佛道を成ずべし
古昔の諸佛の　說きたまへる所の檀法を

時に千の婆羅門は此の偈を聞き已つて、身心歡喜して倍精進を加へたり。卽ち諸佛現前三昧を得て、三昧の中に於いて堅固に正受し、阿耨多羅三藐三菩提心に於いて退轉せざりき。跋陀波羅、爾の時の龍豐莊嚴比丘は久しく已に成佛せる華光國土の龍自在王佛是れなり。千の婆羅門とは豈に異人ならんや。我等賢劫の千佛是れなり。跋陀波羅、我れと賢劫千佛とは海慧如來の遺法の中に於いて、大空の偈を聞き、端坐して思惟せしが心に決了せざりしかども猶ほ無量億劫の生死の罪を超越することを得たり。是の故に汝等、應に空義に於いて思惟して取證すべし。是の時に衆會せしものは佛の所說を聞き、初果を得しものも有り、無上正眞の道を發せしものも有り、辟支佛道の因緣を種えし者も有りき。この時「集」會せる大衆は佛の所說を聞きて皆大いに歡喜せり。跋陀波羅、我れ過去の無量億世を念ずるに、彼の時に佛有しき。自在勝如來と號し十號具足せり。彼の佛世尊、世に出現したまへる時、此娑婆世界は其の地金色にして、金華の金光なる世界に充遍せり。自在勝如來は壽五十大劫なりき。正法の世に住すること三十大劫にして、像法の世に住すること百二十大劫なりき。像法の中に於いて千の居士の有りき。財寶饒かに多くして各一億を儲けたり。俗利を獲たりと雖も以つて喜悅せず。常に苦空無常の相を修せり。彼の時の世の中に一りの優婆塞有りき。聰明にして多智なり。摩訶那伽と名く。居士の所に至り高聲に偈を說いていはく。

財は主無き物なり　王と賊とのために侵し劫め所る
水にも火にも風にも吹き盡くされ　「持てども」安からず久しく居かれず
此の身は無常に屬して　恒に老と病とのために使はれ
忽忽として衆の務めを營み　死の賊の苦みを覺らずして
無常の風力に解かる　財は大毒蛇の如し
毒害は龍よりも猛し　亦爲れ世の怨と俱たり

若し能く空を解することに達すれば　願も無く作處も無く
相も無く所依も無く　必ず道を得て佛の如くならん
衆の魔怨を降伏して　諸の天人を度脱し
亦大解脱に入らん　空を知るは是れ本の報ひなり
是れを佛の說きたまへる所の　無我及び空の義と名く

此の偈を說き已りしとき、千の婆羅門は心に大に歡喜して、比丘の足を禮して各自ら還歸して、林野に端坐し無我と空とを思ふて、八千萬歲を經たれども、大空の義に於いて心に決了せざりき。空義を思へる功德力を以つての故に、卽ち空中に於いて百千佛を見ることを得、諸佛の所にして念佛三昧を得たり。卽ち三昧の中に於いて海慧佛の白毫の印の中にて甘露の偈を說くを見たてまつれり。

若し道心を發して　〔五六〕菩薩戒を修持せんと欲し
眞實空を欲求するものは　菩薩道を隨學すべし
常に當に慈心を行じて　恚害の想を除去し
一切を悲愍して　彼の身空寂なりと觀ずべし
我が身は性相無し　四大を假りて生ぜるなり
諸佛の法に隨順せよ　殺さゞれ瞋を起さゞれ
悉く諸法を堪受する　其の心は猶し地の如くなれ
常に無所著を行じ　一心を一意に住せしめよ
悉く法は平等にして　彼れも無く亦此れも無しと觀ぜよ
正心に此の義を思ふこそ　乃し菩薩行に應(あた)るなり

【五六】菩薩戒とは菩薩の受持すべき戒律、大乘戒なり、梵網經の十重禁戒四十八輕戒。瓔珞經の三聚淨戒等これなり。

を説きたまふ。跋陀波羅、是くの如き白毫大人相の中にして無量無數の恒河沙の印を現じ、或は印の中にて法無畏を演ぶる有り、或は印の中にて九十五種の外道の邪術を說く有り、或は印の中にて諸の天衆の上妙の報應を說く有り、或は印の中にて劫成と及び劫壞とを說く有り、或は印の中にて日月五星二十八宿災異變怪一切の世事を說く有り、或は印の中にて諸の神仙及び鬼神の道を說く有り。此の白毫印は普く十方を照して衆生を化度し、有緣の者に隨つて佛事を顯現す。彼の佛の壽命は十二大劫にして、正法が世に住することも亦十二劫、像法が世に住することは二十四劫なりき。像法の中に於いて千の波羅門有りき。第一の婆羅門は檀那世寄と名け、其最後のものを分若世羅と名く。千の婆羅門は聰明博智にして、各皆[五四]四毘陀論に通達せり。海慧如來の像法の中に、一りの比丘有り、名をば淨龍豐莊嚴と曰ふ。諸の婆羅門と共に相ひ難詰せり。婆羅門は毘陀論經の[五五]神我の法を說けば、沙門は復、十二部經の甚深なる空義を以つて無相「の義」を演說して其の貪著を破せり。千の婆羅門は無相の義を聞き、比丘に白して言さく。『汝は何れの處に於いてか此の無我空寂の法を得たりや』。比丘答へて言はく。『三世の諸佛の十號具足のもの共に宣說したまふ所なり。海慧如來は白毫の印の中にて常に此の偈を說きたまへり。

本性の義は不生にして　受も無く取者も無し
四大の性は幻の如く　五陰は炎電の如し
一切の諸の世間は　猶ほ旋火輪の如く
皆無明に隨つて轉ず　業力は生を莊嚴す
性相を觀ずるに無常なり　無我なり主有ること無し
智者は應に諦かに　本末因緣の義を觀ずべし
本性は實際空なるに　縛著して横に有なりと見る

【五四】四毘陀論は印度最古の聖典にして婆羅門教根本の聖典なり。西紀前千年以前に作られたる古記錄なり。一はリグ毘陀、Ṛg-veda, 二はサーマ毘陀 Sāma-veda, 三はヤジュル毘陀 Yajur-veda 四はアタルヴ毘陀 Atharva-veda なり。

【五五】神我とは自我の體は常實にして靈妙不可思議なるをいふ。神我外道は十種外道の一にして數論外道、勝論外道の如く人天には各自に常住なる神我あり、神我は萬有を主宰すと說くものこれなり。

て、驚疑、怖畏、誹謗を生ぜざるを以つて、卽ち五十億劫の生死の罪を超越することを得、身を捨てて他の世には卽ち十六億の佛に値遇することを得、諸佛の所にして念佛三昧を得、以つて心を莊嚴せり。念佛三昧をもつて心を莊嚴するが故に漸漸に空法の中に於いて心開解することを得たり。跋陀波羅、この時の千の梵志とは豈に異人ならんや。我等賢劫の千佛是れなり。空法を聞くことを得て心に疑ひ無きを以つての故に、娑婆世界に於いて次第に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり。是の故に一切衆生は應に空義に於いて心に疑惑すること無れ」。佛、此の語を說きたまへる時、時會の大衆は佛の所說を聞き、初果を得るもの有り、無上正眞道意を發せしもの有り、數甚だ衆多にして具さに說く可からず。一切の大衆は佛の所說を聞いて、皆大いに歡喜し、佛の足を頂禮したてまつれり。

佛、跋陀波羅に告げたまはく「汝今當に知るべし。我れ過去の無量無數阿僧祇劫を念ずるに、彼の世に佛有しき。海慧如來と名けられ十號具足せり。國をば淨樂と名け、七寶をもつて莊嚴せる地には寶華を生ぜり。須彌山の七寶にて合成せるが如くにして嚴顯なること愛す可し。彼の佛世尊は常に禪定に入りて默然と言はず終に說法せず、但、白毫大人相の光りを放ち、佛事を施作したまへり。或は衆生有つて白毫光を見るに十善印の如く十善義を說き、或は衆生有つて白毫の光りを見るに五戒印の如く五戒義及び五戒緣を說き、或は衆生有つて白毫の光りを見るに八戒印の如く八戒義及び八戒緣を說き、或は衆生有つて[五二]白毫の光りを見るに[五三]波羅提木叉印の如く波羅提木叉義及び波羅提木叉緣を說き、或は衆生有つて白毫の光りを見るに六波羅蜜印の如く八萬四千の諸度の義を說き、或は衆生有つて白毫の光りを見るに四諦印の如く四諦義及び三十七助菩提分法を說き、或は衆生有つて白毫の光りを見るに獨覺印の如く十二因緣義を說き、或は衆生有つて白毫の光りを見るに智相印の如く菩薩の初地の境界乃至十地を演說し、首楞嚴光印三昧を說き、金剛定不壞境界

【五二】白毫とは如來の三十二相の一、世尊の眉間に白色の毫相あり、右に旋りて宛轉せること日の中天に上るが如し之を放てば光明を放つ。故に白毫の光りといふ。

【五三】波羅提木叉Praitmokṣa とは戒律三名の一、別々解脫又處々解脫と譯す。比丘比丘尼等七衆所受の戒律は別々に身口七支の惡を解脫する義あり。故に別々解脫といふ。

本性相は空なり　歸依處は寂滅なりと了じて
常に眞如道を行ずれば　乃ち菩薩行に應る。

忍辱進の大比丘は常に此の偈を説きたりき。時に華光林の中に千の梵志有りて、四梵行、慈悲喜捨を修したりき。「梵志は」此の比丘が三寶の義の名を讃むるを聞き身心歡喜して、卽ち比丘に白さく。『何れの經の中にか此の如きの義有りや』、比丘白して言さく。『大調御師よ、大方等眞實經の中に於いて、佛法僧平等空慧は一相の中に住すと説かれたり』。時に千の梵志は佛法僧平等空慧を聞き、卽ち甚深なる大空智義を思ひ、八千歳の中にして端坐正受せしが、空法の中に於いて決了せざりき。復更に一切法空なりと思惟しけれども如實際に於いて亦決了せざりき。然れども疑を生ぜず亦誹謗もせざりき。此の思惟を作せる時に、一りの比丘有り、名をば智藏と曰へり。諸の梵志に告げらく。『汝等知るや不や。過去に佛有しき。三昧尊豐如來と名けられ十號具足せり。是の如き同字なる百千億の佛は、皆甚深なる般若波羅蜜を說きたまへり。其の經の中に「諸法は住せず、法性は皆空なり。」と說けり。是くの如くなれば梵志よ、空法の中に於いて心明了ならずんば、但、當に一心に空義に歸すべし。』時に千の梵志、此の語を聞き已つて心に大いに歡喜して比丘に白して言さく『般若波羅蜜は是れ大空智なり。我等、今無明に覆はれて空義の中に於いて解了すに由無かりしが、但、大德が說かれし法の中に於いて身心隨喜せり』と。佛、跋陀波羅に告げたまはく。「彼の二比丘の善く說法せる者とは、第一の比丘は今已に妙樂國に成佛せる歡喜莊嚴珠王佛是れなり。若し四衆有つて彼の佛の名を聞き、五體を地に投じ歸依し頂禮したてまつらば卽ち五百萬億阿僧祇劫の生死の罪を超越することを得ん。第二の比丘は久しく已に成佛して帝寶幢摩尼勝光如來と號し十號具足せり。若し四衆有つて彼の佛の名を聞き、五體を地に投じ歸依し頂禮したてまつらば、卽ち七百萬億阿僧祇劫の生死の罪を超越することを得ん。この時の千梵志は甚深なる般若波羅蜜を聞き、身心歡喜し

我今頭面に禮したてまつる　　大乘を修行する者よ

時に千の比丘は偈をもつて德を歎ずるを聞き、倍、精進を加ふ、卽ち甚深なる觀佛三昧を得たり。長者に告げて言はく『善い哉長者、我れは汝に因れるが故に菩提心を發したり。汝も亦應に佛法の海中にして出家學道すべし』。爾の時、長者は比丘の教へを受け、正法の中にして出家學道し、常に頭陀を修し備さに諸の苦行をなし、七七日を經て無上忍を得たり。跋陀波羅、汝今當に知るべし。その時の大長者にして多くの人を教化して菩提心を發さしめたる者は久しく已に成佛せり。殊勝月王佛是れなり。若し善男子、善女人有つて、是の佛の名を聞かんものは恒に佛に値ふことを得、菩提心に於いても不退轉なることを得ん。卽ち十二億劫の極重惡業を超越することを得ん。その時に千の比丘にして誓願を發せし者は我等賢劫千佛是れなり』。是の語を說きたまへる時、百千の梵王は菩提心を發して佛を思ひ、千の優婆塞等は無生法忍を得、鬱多羅の母なる善賢比丘尼等の五百の比丘尼は諸漏を受けず、心解脫を得、阿羅漢に成れり。是の語を說ける時、時の會の大衆は佛の所說を聞きて皆大いに歡喜せり。

佛、跋陀波羅に告げたまはく『汝今當に知るべし。我れ過去の無量無數阿僧祇劫を念ずるに、彼の時に佛有しき。淨音如來と號し十號具足したまへり。彼の佛出でたまへる時、此三千世界は七寶をもつて莊嚴せり。寶莊嚴國等の如くにして異なり有ること無し。佛壽は二十大劫にして、正法の世に住する四十劫なりき。像法は壽を倍して八十劫たりき。亦三乘を以つて衆生を教化せり。像法の中に於いて一りの比丘有り、一切忍と名けらる。菩薩藏を持し、菩薩法を行じて、村落を遊巡して、常に此の偈を說き。

佛は平等空に住せらる　　法の性相も亦然なり
僧は無爲に依つて會す　　三寶の義は異なること無し

し辯才も智慧も極り無く有りて邪見の論を說くこと百千歲に滿てらんに、我れは寧ろ身を碎くこと猶し微塵の如くになすとも終に「邪見の論を」信受せじ。我れ今日より乃し成佛に至るまでに、設へ衆生有りて善業を造らず、五逆罪を作らば必ず當に「その衆生を」教化して饒益することを得せしめん。我れ今日より乃し成佛に至るまで、誓願して當に五濁惡世にして苦に沒せる衆生を度すべし。我れ今日より乃し成佛に至るまで、常に當に諸の波羅蜜を修行して、其の邊際を盡し、大智の岸に到るべし。我れ今日より乃し成佛に至るまで、終に一切衆生を放捨せじ。必ず當に安慰して義を以つて饒益すべし。我れ今日より乃し成佛に至るまで、願くは普く『一切の佛事を莊嚴し、諸の淨行を修し、十種の珍寶を以つて脚足と爲し、無願解脫を以つて眼目と爲して、大空に遊び畢竟じて涅槃せん』。時に千の比丘、此の誓ひを發し已つて、五體を地に投じ、遍く諸佛を禮して偈を說いて言はく。

佛智は動ず可からず　解脫より生ずればなり
本性も相も自ら空にして　金剛心にして遊戲す
已に煩惱魔を摧き　陰蓋も永く已に除ける
清淨大慧者を　我れ今頭面に禮したてまつる

此の偈を說き已つて、遍く十方一切の諸佛を禮せり。是の時、空中に雲無くして而も雷し、諸天龍神は普く天華を雨らして以つて供養を爲して、偈を說いて言さく。

善い哉勝大士　出家して梵行を修し
淨命にして乞ふて自活し　常に四種の食より離れ
染衣をきて應器を執るもの　大數一千に滿てり
今復最上なる　微妙の菩提心を發せり
福田の中において最勝にして　過ぐるもの無き比丘僧を

無漏の智力の莊嚴する所なり　長者の寂滅慧を說けるが如く
我も今無染果を求めんと欲す　世間に超過せる諸の空相を
我れ今寂滅道に於いて求めんとす　「空相は」不縛なり不解なり不住色なり
亦復縛と解との中にも入らざるなり　生死有ること無ければ解脫相なり
此の處を名けて甘露道と爲す　我が所願の如く果を成ずることを得ん
六度を修行するに凝果無く　必定して首楞嚴「定」に住することを得ん
佛の職位と威儀の行とを具すると　佛智を滿足することとは先佛の如くならん
金剛不壞の性なる空慧は　是れ一切智にして大人の事なり
摩尼寶珠と如意王「珠とが一合相、平等性なるが如く」　我れも亦一合相
平等度意無上性を得べし

是の時、比丘は此の偈を說き已つて、長者に告げて言はく。『汝、今當に知るべし。我れ已に汝が說ける所の偈の義を解せり。我已に菩提の器爲(た)るに堪任せり。我等千の比丘は今日より乃し成佛に至るまで常に大慈を修し、普く一切を愛して、諸の衆生に於いて毀呰を生ぜじ。何(いか)に況や殺害せんをや。我れ今日より乃し菩提に至るまで常に大悲を起し、普く一切を攝して、大悲に於いて悲相を起さず、戀著を生ぜじ。我れ今日より乃し成佛するに至るまで、他の樂を得たるを見て心に欣悦を生ぜんこと猶し比丘の三禪の樂を得たるが如くし、樂觸及び樂覺の相を起さじ。我れ今日より乃し成佛に至るまで衆生及び衆生相を見じ、亦喜にも住せじ、捨の中にも入らじ。我れ今日より乃し成佛に至るまで、終に九十五種の諸の惡[五〇]律儀を造作せじ。我れ今日より乃し成佛に至るまで、終に已れが爲めに[五一]八種の不淨の物を畜養せじ。若し畜積すること有らば、「それは」必ず諸の衆生を饒益せんが爲めの故にせるなり。我れ今日より乃し成佛に至るまで、終に菩薩の法藏を毀謗せじ。若

【五〇】律儀とは梵語には尼羅又は毘尼といふ。尼羅とは淸涼、又は戒と譯す、身口意三業の罪惡は行人を熱惱せしむ。戒は能くその熱惱を消息せしむれば淸涼といふ。毘尼は佛の所說の戒律。滅又は律と譯す。戒律は諸の過非を滅するを以て滅といひ、輕重の罪を裁斷するを以て律といふ。律儀といへば佛所制の戒律を以て過非を防ぎ、三業の威儀を整正する意なり。

【五一】八種の不淨物とは比丘の畜積すべからざる物に八種あり。八種の數へ方異說あり。涅槃經疏には金、銀、奴、婢、牛羊、倉庫を畜ふること。販賣すること、耕種すること。自ら食を作つて施を受けずして喫ふこと。道を汙すこと。損妨處多き威儀を汙すこと。これを不淨といふと。又佛祖統紀四には一には田園、二には種植、三には穀帛、四には人僕を畜へ、五には禽獸を養ふ、六には錢寶、七には褥釜、八には象金飾牀及び諸の重物なり。

仁の説く所の義の如きは　無行なり無所依なり
本性相は空寂なり　我れ當に何の法をか行ずべき
我が問ふ所の大道とは　佛の覺智を知らんと欲すればなり
今説かるる法界相は　無知にして虚空の如し
此の無知の中に於いて　欲も無く所求も無し
是く如く性相が滅ならば　我れ當に何んが行ずる所をなすべきや

是の時、長者、復、偈を説いて言はく。

日光は空中に住して　普く一切を照せども
彼も亦心相無くして　諸の闇暝を破せんと欲す
光明の力をもつて照耀することは　諸の黑闇よりも超過せり
黑闇と光明と　二つながら倶に心意無し
本性として闇に住すこと無けれども　闇性は暫くも停らず
佛慧も亦是くの如し　滅も無く所生も無し
智と力と道とによつて莊嚴せられ　五眼に從つて起る
六通は蓮華の如く　世間に染著せず
戒定慧によつて莊嚴せられ　世間の相を超度す
是の故に應に　無上平等道に歸依すべし

是の時、長者此の偈を説き已つて、比丘に白して言さく『大德、汝、今無上道を求めんと欲するや不や』。日藏比丘、長者の言ふを聞き、深く義趣を解し、佛の足を頂禮して偈を説いて言さく。

佛の足を頂禮したてまつる大解脱よ　久しく涅槃に住して諸有を滅したまへり

時に彼の長者、此の偈を說き已り種種の華香を以つて、寶蓋照空佛の像を供養せり。華の供養已りしときに、千の比丘有り、講堂に來入し、大長者の華香をもつて供養し、讃佛の偈を誦するを見たりき。第一の比丘の名をば日藏と曰ふ。長者に問ふて言はく『汝、今、日日香華をもつて供養し、佛名を讃歎して、何等をか求めんと欲するや』。長者白して言さく『大德の比丘、應に一心に聽くべし。今、我が供養したてまつることは無上平等大道を求めんと欲すればなり』。比丘問ふて言はく。『云何が名けて無上大道と爲すや』。長者は答へて言はく。

無著無所依　無累心寂滅なる
本性は虛空の如し　是れを無上道と名く
大人の心の所行は　慈悲を最勝と爲す
三十七によつて滅となるは　意と覺と道と力との莊嚴たり
六度の船に乘じて　永く生死の流れを度る
彼處には心に著無し　故に無上道と名く
佛慧は須彌の如く　亦蓮華藏の若し
久しく性空を解することに達したり　故に無上道と名く。
調御は心の如を知れり　實際性も亦然なり
三界の一切の有は　皆如寂の中に入る
不調無生相は　同じく法界性に入る
此の如く無所有なるが　故に無上道と稱す

是の時、長者此の偈を說き已つて、比丘に白して言さく『唯、願くは大德、無上道を行ぜよ。』日藏比丘、復、偈を說いて曰く。

須闍提王は國を棄てて出家し無上道を成じたまひて大善寂と號けらる。淨光林にして般涅槃に入りたまへり。我等今は是れ其の弟子なり。今我が持する所のものは是れ善寂の像なり』。時に千の童子佛の因緣を聞き、各蓮華を持ちて以つて像を供養し像足を頂禮したてまつれり。跋陀波羅、汝今當に知るべし。是く佛像を供養せし因緣を以つてのゆゑに、時の諸の童子は壽の長短に隨つて各自に命終せり。命終せし後、卽ち六十億那由他の諸佛に値遇したてまつることを得て親覲し供養して、無上道に於いて不退轉を得たりき。跋陀波羅、汝今當に知るべし。彼の佛の世の中の四山の仙人の數は知るべからざる者は、今十方面に各佛と成ることを得たり。時の千の童子の華をもつて供養せし者は、豈に異人ならんや。我等賢劫の千佛是れなり。跋陀波羅、汝今當に知るべし。佛滅度の後にして、若し諸の四衆、若し一華を持ちて佛像に供養せんに二種の福を得ん。何等をか二となす。一つには常に化生することを得、二つには形色端正なり。復二つの果を得ん。一つには恒に諸佛に値遇することを得、二つには多く天上に生ぜん』。時に諸の比丘、佛の所說を聞いて皆大いに歡喜しぬ。

佛、跋陀波羅に告げたまはく『汝今當に知るべし。我れ過去の無量無數千萬億劫を念ずるに、彼の時に佛有りき、寶蓋照空如來應供と號けられ十號を具足せり。彼の佛の出でたまへる時、此の三千大千世界は金剛佛刹の如くにして等しくして異なり有ること無し。寶蓋照空如來も亦三乘を以つて衆生を敎化したまへり。佛滅度の後、像法の中に於いて一りの長者有りき。名をば月集と曰へり。聚落に遊行して衆生を敎化して、偈を以つて寶蓋照空如來の名號を讚歎せり。

寶蓋照空正遍知　無上調御天人師
久しく生死を離れたまへる釋師子　無染淸淨應慧
能く世間の良福田と爲り　普く一切を濟へることは醫王の如くなり
名を聞くものは必ず大解脫を得ん　我れ今無上勝を頂禮したてまつる

光明樹に坐して　萬億の魔を降伏し
甘露の法は已に聞き　學道も已に成就したまへり
相好は特に比ひ無く　威光は十方を照したまへば
當に大善寂と號くべし　願くば必ず我等を度したまへ
我れ今頭面に禮して　法輪を轉じたまへと勸請したてまつる

第二の仙人の名をば光藏と曰ふ。復偈を說いて言さく。

大聖は衆生を愍むがゆゑに　誓願して樹下に坐し
諸の魔軍を摧伏して　結使の海已に竭せり
願くば衆生の爲めの故に　廣く甘露の法を說きたまへ

爾の時、世尊、默然として諸の仙人の請ひを受け、光明菩提樹下に於いて妙法輪を轉じ、擧身より光りを放ち十方界を照したまへり。皆金色の如くなり。廣く四諦及び十二因緣を說きたまへり。凡そ百億偈なりき。初會において聞法せる四山の諸の仙「人」は皆無生法忍を得、百千人は無上道心を發して出家學道し、無數の四部は須陀洹道を得、有るは菩提心を發せり、その數は知るべからず。佛壽は二十五萬劫、正法の世に住すること二百萬劫、像法の世に住すること四百萬劫なりき。彼の佛世尊の滅せんと欲はるる時に、諸の比丘ありて遊行教化せり。時に一國有り、名をば電光と曰ふ。一りの長者有り、牢度跋提と名く。外道の事、梵天の法を修行せり。電光大王は千の童子を遣して彼の人を供給し天廟を灑掃せり。時に千の童子は各天華を持ち天寺に往かんと欲せり、其の中路にして諸の比丘の佛像を持して行くを見たり。童子問ふて言はく。『此れは是れ何れの神ぞや。端正にして威光巍巍として乃ち爾るや。』諸の比丘の言はく。『此れ大善寂の像なり』。童子問ふて言はく。『大善寂とは何れの種姓に生れ、何等の義をか有するや』。比丘答へて言はく。『汝知らずや、過去久遠の

王は豈異人ならんや、我等賢劫の千佛是れたり。

佛、是く說きたまへる時、一切の大衆は佛の所說を聞き皆大ひに歡喜せり。八十人は無上道心を發し、二百五十人は漏盡き意解けて阿羅漢と成れり。

　復次に跋陀波羅、乃往過去の無量無數阿僧祇劫に、此の[四六]閻浮提に大國王有り、須闍提と名け。國をば勝幡と名く。其の王の生れし時、七寶は足を承け、天よりは瑞應三十有四を降せり。地に墮ちて卽ち行くに七寶自ら至れり。四方の諸山に各一億の神仙有り、五通を具足し、殿前に飛集せり。復、百萬億恒河沙の七寶の大山有りて殿前に踊出して空中に列住し、以つて神仙と應ぜり。須闍提王は漸漸く長大して四天下に王たり。威德自在にして十善をもつて人を化せり。王の德と力との故に一切の人民は皆快樂を受くること忉利天の如くなりき。時に諸の仙人は各、[四七]仙經を持し王に授けて讀ましむ。王は經を讀み已つて、過去に佛有しき、寶華琉璃功德光照如來と號し十號具足したまへりと聞けり。王は佛の名を聞いて身心歡喜し、卽ち寶冠を脫いで四方に向つて禮し、大誓願を發せり。『我れは今日、[四八]四天下の一切の珍とする所を捨てて出家學道せん。光明菩提樹下に坐して身心を動ぜざるべし。若し阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得ずんば、我れは終に起たじ』。是の時、六欲天の王の[四九]金剛摩尼珠と名くるものと諸の魔衆の八萬億千とは、一一鬼兵となり百億の變れる狀を作し、甚だ怖畏す可し。競ひて道樹のもとに集れり。時に須闍提王は樹下に端坐し、智印慈心王三昧に入れり。三昧力の故に、時の魔の兵衆は同時に碎壞せられたり。七七日を經て阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり。時に諸の神仙は倶に來りて妙法輪を轉じたまへと勸請せり。仙人衆の中に一りの大仙有りき。名をば光果と曰へり。偈を說いて請じて曰く。

　　大德須闍提は　　四域に金輪王たり
　　今此の七寶を捨つ　　「あだかも」鳥の一毛を去つるが如くせり。

【四六】閻浮提　Jambudvipa とは舊譯なり。新譯は贍部洲といふ。須彌山の南方にある大洲の名。穢洲、穢樹城、勝金洲、好金土等と譯す。前二譯は樹の名にとり、後二譯は閻浮檀金にとりしならん、提は提鞞波の略、洲と譯す。須彌山の南方に位するを以て南閻浮提といふ。十六の大國、五百の中國、十萬の小國あり。地形は南狹北廣にして縱橫七千由旬。人壽百歲にして中天の者多し、樂は東北二洲に劣れども、佛に遇ひ法を聞くことは閻浮を第一となす。故に諸佛は必ずこの洲にのみ出現すといふ。元來は印度を指せるものなりしが、後には吾人の住する世界のこととなれり。

【四七】仙經とは仙とは生家を出で山に棲み不老長生の術を修むる人を仙人とも山人ともいふ。又俗を離れたる人、或は俗人の企て及ばざる性格、思想を具ふる者を仙人といふ。故に仙經とはかくの如き仙人が說ける經典。

【四八】四天下とは金輪聖王の領する天下。須彌山の四方にある四大洲を指していふ。

【四九】金剛摩尼珠とは堅固なる如意珠。摩尼とは珠、寶、如意等と譯す。珠の總名。

此の偈を說き已つて、夜叉の前に臥し、劍を以つて頭を刺し血をば夜叉に施せり。卽ち復、胸を破つて心を出して之れに與へぬ。是の時、天地大いに動じ、日は精光無く、雲無くして雷なれり。五つの夜叉有つて四方より來り、爭ひ取つて分け裂き競つて共に之れを食ひ、食ひ已つて大ひに叫び踊つて空中に立ち、千の聖王に告げぬ。『誰か能く施を行ずること牢度跋提の如くするものぞ。此くの如く施を行ずれは乃し成佛す可し』。時に千の聖王は驚き怖れ退沒して菩提を欲せず變悔の心を生じ、各、國へ還らんと欲へり。時に五夜叉は卽ち偈を說いて言さく。

不殺は是れ佛種なり　慈心は爲れ良藥なり
大悲は常に安隱なり　終に老死のために異ること無けん
一切の受身者は　人に殺され毒害さるゝことを畏る
是の故に諸の菩薩は　敎へて不殺戒を行ぜしめよ
汝今若し死を畏るれば　當に不殺の事を行ずべし
云何がしてか國に還らんと欲ふや　靜を捨てて憒閙を求めんとするや

時に千の聖王、此の語を聞き已つて皆默然として住せり。

佛、跋陀波羅に告げたまはく『汝今當に知るべし。第一の婆羅門にして檀波羅蜜を讚ぜる者は過去の定光明佛是れなり。牢度跋提とは過去の然燈佛是れなり。時に千の聖王は出家學道して、然燈佛を見、諸の苦行を修せしが、心に悔恨を生ぜしかば一劫の中大地獄に墮せり。地獄に墮せりと雖も、菩提の願力をもつて心を莊嚴せるが故に、火を燒くこと能はず、是れ從り已後に於いて復燈明菩薩に値ふことを得て、其れが爲めに法を說き、地獄より出でて、廣く爲めに過去の千佛の解脫稱莊嚴佛乃至最後の妙自在王佛を讚歎せり。時に千の聖王は千の佛名を聞き歡喜し敬禮せり。是の因緣を以つて九億那由陀恒河沙劫の生死の罪を超越せり。跋陀波羅、汝今當に知るべし。時の千の聖

一切悉く能く捨すれば　乃し菩薩行に應るなり

時に雪山の中に婆羅門有り、牢度跋提と名く。夜叉に白して言さく『唯、願くば大師、我が爲めに法を說け。我れ今、心と血とを惜まず』て卽ち單衣を脫ぎて敷いて高座と爲し、卽ち夜叉を請じて此の座に就かしむ。時に大夜叉、卽ち偈を說いて言はく。

無爲の道を求めんと欲はば、　身心の分を惜まざれ
割截して衆苦を受くとも　能く忍ぶこと猶し地「を割截するが」如くなれ
亦受者を見ざれ　法を求めて心に悔ひざれ
一切に悋惜すること無く　普く衆の飢渴せるものを濟へ
猶し頭然を救ふが如くせよ　乃し菩薩行に應るなり

時に牢度跋提は此の偈を聞き已つて身心歡喜し、卽ち利劍を持ち胸を刺し心を出しぬ。是の時、地神、地より踊出し、牢度跋提に白さく『唯、願くは大仙、我等及び山樹神を愍憐して、一鬼の爲めにのみ身命を捨つること莫れ。』時に牢度跋提は諸神に告げて言さく。

此の身は幻炎の如し　現するに隨つて卽ち變滅すること
猶ほし呼聲の響の如し　呼び已りて更に應ぜず
四大と五陰との力も　其の勢久しく停らず
千萬億歲に於ても　未だ曾つて法の爲めには死せざりき
我れ今法の爲めの故に　心と血とを以つて布施しぬ
愼んで固く我を遮して　我が無上慧を障ふること勿れ
此の布施の報ひを以つて　誓願して佛道を成ぜん
若し後に成佛せん時には　要ず先づ汝等を度せん

り。一一の天女には各五百の眷屬有りて以つて侍者と爲り。時に千の聖王は衆の願ひを滿し已つて、即ち國土を捨てて出家學道せり。時に王の千子及び諸の臣民は皆悉く號咷して王の後に隨從し、大王を送り奉りて雪山に至れり。時に千の聖王は諸の臣民に告げたまはく『諸行は無常なり。我が身は無主なり。性も相も皆空なり。有なる者は歸滅す。我は今にして此の義を信解せり。是を以つて國を棄てて戀著する所無きなり』。即ち婆羅門に隨つて雪山に入れり。王子、臣民は辭し退きて國に還れり。時に千の聖王は雪山の中に於いて各草菴を立て、端坐し思惟して弘誓の願を發すらく『當に一切を度して無上道を求むべし』。大施の義を思へる聖王の宿世の十善の報ひの故に、雪山の千の神は各仙果を獻じて日月に供給すれば更に食を求めざりき。時に應つて即ち五神通を得獲し虛空に飛騰せり。壽命は一劫なりき。時に雪山の中に大[四三]夜叉有りき。身の長四千里にして狗牙の上に出づること高さ八十里、面には十二の眼あり、眼より血迸り出でて光りは融けたる銅の如くなり。左の手には劍を持ち、右の手には叉を持ちて、聖王の前に住し、高聲に唱へて言へり『我れ今や飢渇して飯食する所のもの無し。唯、願くは聖王、慈悲矜愍して我れに少しく食を施したまへ』。時に千の聖王は夜叉に告げて言はく『我等は一切に施與せんと誓願せり』。各各は水を以つて夜叉の手を漱ぎ、授くるに仙果を以てして之れを食はしめたり。夜叉は果を得たれども怒り棄てて地に置き、聖王に告げて言はく『我が父の夜叉は人の精氣を噉へるものなり。我が母の[四四]羅刹は恒に人の心を噉ひ人の熱血を飲めるものなり。我は今や飢ゆること急なり。唯、人の心血を須む、何ぞ果を用ゆることを爲ん』。時に千の聖王は夜叉に告げて言はく『一切のうちにて捨て難きものは己が身よりも過ぎたるもの無し。我等、今日、心を捨つること能はざれども持用は「汝に」相ひ與へん』。是の時、夜叉、即ち偈を說いて言はく。

心を觀ずるに心相無し　[四五]四大色の所成なり

白蓮花と譯す。

【四〇】 曼殊沙華とは藍華、柔軟、小赤團華と譯す。色は鮮白にして體柔軟なれば見るもの剛強の三業を離る。摩訶曼殊沙華は大赤團華と譯す。

【四一】 八支齋とは八齋戒、八關齋、八戒等といふ。二說あり。倶舍論には一に殺生、二に不與取、三に非梵行、四に虛誑語、五に飲諸酒、六に塗飾香鬘舞歌觀聽、七に眠坐高廣嚴麗床上、八に食非時なり。この八種の非法を離るるを八戒といふ。又成實論、智度論は塗飾香鬘と舞歌觀聽とを分つが故に總じて九戒となる。この中前八は戒にして最後は齋なれば戒と齋とを合して八戒齋となす。

【四二】 檀波羅蜜とは檀は具さには檀那、布施と譯す。波羅蜜は度、又は到彼岸と譯す。

【四三】 夜叉とは八部鬼衆の一、捷疾鬼ともいふ。勇健、暴惡と譯す。天、地、虛空の三夜叉あり。

【四四】 羅刹とは可畏、護者、食人鬼等と譯す。惡鬼の通名。八部衆の一。

【四五】 四大色とは地水火風なり。

轉輪王と爲り、十善をもつて教化せり。本の善願の故に因緣に隨はずして壽命は八萬四千歳なりき。「命」終らんと欲し時に臨み、雪山の中に一りの婆羅門有りき。聰明にして多智なり。壽命は半劫なりき。「婆羅門は」これより先きに經の中において、『過去に佛有しき　栴檀莊嚴如來と號し、十號具足せらる。彼の佛世尊、甚深なる[四二]檀波羅蜜を說き、施者も及び受者をも見ざれば心行平等にして布施を行ぜりと聞きぬ』。時に大仙人は此の事を聞き已つて、雪山より出でて千の聖王のもとに詣り財寶を求索め、廣く諸王の爲めに甚深なる檀波羅蜜を讃說し、右足を翹げ、右手を擧げ、王の前に住立して、偈を說いて言はく。

施は妙善藥爲り　服する者は常に死せず
身と心とを見ざるなり　財物は空寂なりと觀ず
受者も「また」虛空の如し　是の如く布施を行ずれば
財も及び受者も無し　乃し應に菩薩行なるべし

時に千の聖王は各國土を以つて其の太子に付し、諸國に告下したまはく。『我等は今、一切施を修せんと欲へり。諸有ゆる貧窮にして財寶を須むる者は我が所に詣る可し。當に意の隨に施すべし』。爾の時、諸國の一切の人民は皆悉く千の聖王の所に來集し、聖王に白して言さく。『我等は今や唯、二つの事に乏し、餘に須むる所なし。何等をか二事と「なす」。一つには天樂なり。二つには天女なり』。時に千の聖王は摩尼珠を持ちて高幢の上に置き、大誓願を發していはく。『我等は福德ありて善き果報を受けたることが眞實にして虛ならずば。如意珠をして普く天樂を雨らしめ、一切に供給せしめよ。』念に應じて卽ち種々なる樂器を雨らせり。時に諸の樂器は虛空の中に住し鼓たざるに自ら鳴れり。復更に「聖王は」念を生ずらく。『若し我が福善眞實にして虛ならずんば、如意珠をして普く天女を雨らしめよ』。念に應じて卽ち種々の天女の容儀庠序として魔の天女の如くなるを雨らせ

化他の心畏れざるが故に無畏といふ。

【三五】　十八不共とは佛の有する獨特の法。身無失、口無失、念無失、無異想、無不定心、無不知已捨、欲無減、精進無減、念無減、慧無減、解脫無減、解脫智見無減、一切身業隨智慧行、一切口業隨智慧行、一切意業隨智慧行、智慧知過去世無礙、智慧知未來世無礙、智慧知現在世無礙これなり。

【三六】　大悲とは悲とは衆生の苦を拔く心をいふ。佛の悲心廣大なれば大悲といふ。

【三七】　三念處とは舊譯。新譯には三念住といふ。佛の大悲は衆生攝化のために常に三種の念に住す。第一念住、衆生佛を信ずるも佛は常に正念正智に住す。第二念住、衆生佛を信ぜざるも佛は常に正念正智に住す。第三念住、同時に一類は信じ一類は信ぜざるも佛は常に正念正智に住す。

【三八】　五體投地とは又は五輪投地ともいふ。身體の五處を投ずるを最敬となすは印度の風習なり。一に右膝、二に左膝、三に右手、四に左手、五に頭首なり。

【三九】　曼陀羅華とは適意華、天妙華、白華等と譯す。白色にして妙香あり、見るもの皆意に適ふ。摩訶曼陀羅華は大

緣の文字の『無明は行に緣たり。行は識に緣たり。識は名色に緣たり。名色は六入に緣たり。六入は觸に緣たり。觸は受に緣たり。受は愛に緣たり。愛は取に緣たり。取は有に緣たり。有は生に緣たり。生は老死憂悲苦惱に緣たり』と有るを見たり。五百の梵士は此の文字を見て、「三百人」有り、無明は行に緣たるをもつて所依起無しと觀ぜり。(三百人有り)「この」時に應つて卽ち辟支佛道を得たり。又二百人は、無明は行及び愛取有に緣たりと觀ぜり。「この」時に應つて卽ち辟支佛を成ずることを得たり。又無明乃至老死憂悲苦惱は無常なる行に因ると觀じて辟支佛を成ぜるもあり。優曇鉢林には一日の中にして五百一の辟支佛有りて世に出現せり。是の時、大地は六種に震動せり。乃至梵世諸天の宮殿も「六種に震動せり」。時に千の梵王は各衣裓を以つて、[二九]曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・■。

曼殊沙華・摩訶曼殊沙華を盛り優曇林中に至つて辟支佛を供養し、頭面に足を禮し言して白さく。『大德、我が爲めに法を說け』。時に辟支佛は身を虛空に踊らし十八變を作し、手を舒べ足を現じたりき。時に千の梵王は其の足下には十二因緣の文字の相の現ぜるを見、其の掌の中には十善の文有るを見、頂光の中に於ては五戒、[四一]八支齋の文「ある」を見たり。時に千の梵王は身心歡喜し、受持讀誦し、弘誓の願を發せり。『我等、今、諸の快士を見るに結加趺坐して禪定に入れるが如くなり。身分の光明には此の文字有りて我れをして讀誦せしめたり』。時に梵衆の中に一りの梵王有り。名けて慧見と曰へり。餘の梵に告げて言はく。『我れ今にして辟支佛の五戒、八支齋法を受持するを見たり。當に十善を行じて諸の緣起を觀ずべし。此の善根を以つて甚深なる阿耨多羅三藐三菩提に迴向せん。願くは我等が佛と作らん時には、法を說き人を度せんに、辟支佛に過ぐること百千萬倍ならん。我れ佛と成らん時には、我が名を聞かん者、我が形を見ん者をして速に無量の障礙を除滅することを得せしめんこと、我が今、辟支佛を見たるが如くにせん』。時に千の梵王は供養し畢つて各所安に還れり。梵天の壽に隨つて後各命終せり。命終して後に娑婆世界の千の四天下に於いて千の

【二八】 福田とは田畝に播種して秋收の利あるが如く、應に供養すべきものに供養すれば能く福報を受く。故に悲田敬田の行は世人の福田となる。小乘經典には學人田と無學人田とを福田となす。

【二九】 那由他 nayuta とは百阿由他を一那由他といふ。或は百億、或は千億、或は數千萬をいふ。

【三〇】 由旬 Yojana とは印度の里程の名目。八俱盧舍を一由旬といふ。六丁一里として四十里に當る。これに大、中、小の由旬あり。

【三一】 相好とは身相と隨形好。

【三二】 三十七品とは道諦の名數。七科に分つ。四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八正道これなり。これ等は皆菩提に順趣するの品類なれば道品といふ。

【三三】 十力には佛の十力と菩薩の十力との別あり。佛の十力とは是處非處智力、過現未來業報智力、諸禪解脫三昧智力、諸根勝劣智力、種々解智力、種々界智力、一切至處道智力、天眼無礙智力、宿命無漏智力、永斷習氣智力なり。菩薩の十力は略す。

【三四】 四無所畏とは一切智無所畏、漏盡無所畏、說障道無所畏、說盡苦道無所畏なり。

童子は三寶の名を聞き、身心歡喜し、壽の長短に隨つて、後に皆命終せり。命終に臨める時、三寶を聞ける善根の因緣力を以つての故に、五十一劫の「間」生死「をなすべき」業を除却して、命終の後に梵世に生ずることを得たり。諸天の生法は梵宮に生れ已りて卽ち三念することを得たり。自ら『往世、三寶の名を聞きけり。是の因緣を以つて、天上に生るゝことを得たり』と憶へり。時に千の梵王は各宮殿に乘じ、諸の梵と俱に七寶華を持して故の塔の前に至り、佛の像を供養せり。時に千の梵王は異口同音に說いて言はく。

慧日大名稱は　久しく善寂地に住せり
名を聞くものは諸の惡を除かれ　自然にして梵世に生る
我れ今頭面にして禮し　大解脫に歸依したてまつる

此の偈を說き已りて各梵世に還れり。跋陀波羅、汝今當に知るべし。その時の彼の國王なる十善化人は久しく已に成佛せり。毘婆尸如來是れなり。善稱比丘は尸棄如來是れなり。時の千の童子は豈、異人ならんや、今の拘留秦佛乃至最後の樓至如來是れなり。跋陀波羅、汝今當に知るべし。我れと賢劫の千の菩薩とは彼の佛の所に從つて三寶の名を聞き、始めて阿耨多羅三藐三菩提心を發せるなり。其の事是の如し」。

佛、跋陀波羅に告げたまはく。「汝今當に知るべし。我れ過去の無量無數阿僧祇劫を念ふに、此娑婆世界に一の大國有りき。波羅捺と名けらる。王の名をば梵德といふ。常に善法を以つて諸の人民を化したりき。彼の時の人壽は八萬四千劫なりき。時に王の梵德は自らの衰相を見て、國を以つて子に付し出家學道せり。仙人の生地なる憂曇鉢林中に於いて晨朝出家、端坐思惟して一食頃を經たり。逆順に十二因緣を觀「察」せり。往復に觀察すること凡べて十八遍なりき。時に應つて卽ち辟支佛道を得、身を虛空に踊したり。優曇林の中に五百の梵士有りき。「彼等は」辟支佛の足下に十二因

像法、末法これなり。三時を說ける經は大悲經なり。多くは正像の二時を述ぶ。雜阿含、俱舍論の如きはただ正法を說くのみ。大悲經の說は正法千年、像法千年、末法萬年といふ。又悲華經は正法千年、像法五百年といひ、大集月藏經等は正法五百年、像法千年といふ。日本の先德は正法五百、像法一千、末法滿年といふ說多し。正法とは佛滅なりと雖も未だ眞正の佛道廢れず、正しく證果を得るもののある時代をいひ、像法とは像とは似の義。佛滅年久しく法儀正しく行れず。ただ類似せる佛法行る時代なり。末法とは末とは微の義、佛法うたた微にして僅かに教ありて行もなく證果を得るもののなき時代なり。

【三五】十善とは國王たるものの因行は十善を行ずるにあり。十善とは不殺生、不偸盜、不邪婬、不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語、不貪欲、不瞋恚、不邪見これなり、これを身三口四意三に分つて說く。

【三六】毘陀論、Vedaとは明智と譯す。實事を分明にし、智を發生せしむるが故に名く。婆羅門所傳の經典。

【三七】四種の食とは一には段食、二には觸食、三には思食、四には識食なり。

をもつて答へて言はく。

波羅蜜を滿足せると　「淸」淨性なると覺と智慧と
勝心とを成就し得たるが　故に號名けて佛となす
無染性なると淸淨なると　永く世間を離るゝと
世の五陰を觀ぜざると　常住なるとを名けて法となす
身心常に無爲にして　永く[27]四種の食を離れ
世の良[28]福田となるが　故に比丘僧と稱せらる

時に千の童子は三寶の名を聞き、各香華を持し、比丘に隨從して僧房に行詣し、塔に入つて禮拜し、佛の色像を見たてまつる。彼の像の身量の高さは六十二[29]那由他[30]由旬にして八萬四千の諸の[31]相好を皆悉く具足せり。時に千の童子、佛の像を見已りて比丘に白して言さく『是の如き勝人大無上士は過去世の時において何なる功徳を修して、乃し是の如き無上なる勝相を得たまへるや』。比丘答へて言はく『善男子、汝今諦かに聽け。佛世尊は過去において八萬四千の諸の波羅蜜を修行せしが、亦復[32]三十七品の助菩提法をも修習したまへり。かるが故に此の如き端嚴の身を得たるなり。如來身は但に此八萬四千の諸の相好門を有するのみに不らず、亦[33]十力・[34]四無所畏・[35]十八不共・[36]大悲・[37]三念處・三明・六通・八解脫等をも有したまふなり』。時に千の童子は比丘が佛を讚歎するを聞き已つて、[38]五體を地に投じ、卽ち像の前にして弘誓の願を發せり『我等、今や各各應に阿耨多羅三藐三菩提心を發したれば算數の劫を過ぎて必ず成佛することを得べし。如今の世尊と等うして異なり有ること無けん』。第三の童子をば蓮華藏と名く。復誓願を發せり『我等今や比丘に因るが故に三寶の名を聞き、復如來の色像を見たてまつることを得たり。未來世に於て成佛すべきこと疑ひなし。未だ成佛せざるの間は恒に比丘と共に一處に生れん』。跋陀波羅、汝今當に知るべし。時に千の

味を分別して行相の淺深多少を知り、諸の煩惱魔及び魔人を破る定なり。

【一八】僧伽梨とは大衣、重複衣と譯す。三衣の一。說法又は城に入つて乞食する時に著用する衣。

【一九】須彌山とは妙高山と譯す。世界の中央にある最大最高の山。

【二〇】賢劫千佛とは現在賢劫の住劫、二十小劫の間に出世する千の佛。二十小劫の第九劫の減劫に拘留孫佛出世し、第二十小劫に樓至佛の出世を以つて最後とする千佛なり。

【二一】三種の淸淨なる菩提心とは出生菩提經に聲聞菩提、緣覺菩提、諸佛菩提を說けり。今の三菩提心もこの菩提心ならんか。

【二二】本事とは伊帝目多迦 Itivṛttaka の譯。如是語、如是說とも譯す。十二部經の一。菩薩の過去に於て行ぜし種々の因行を說けるもの。

【二三】跋陀波羅 Bhadrapāla とは賢護と譯す。在家の菩薩なり。大寶積經一〇九卷賢護長者會第三十九會、大方等大集賢護經一卷、智度論七、楞嚴經五、等を見よ。

【二四】正法とは佛敎の流傳する時期を三時に分つ。正法、

じて坐に就かしめ、佛に白して言さく。「世尊、我は今日、少しく諸問したてまつらんと欲す。唯、願くは世尊、我がために解說したまへ」。是の語を說ける時、八萬四千の諸の菩薩等は各瓔珞を脫ぎ、佛に散じて供養せり。散ぜる所の瓔珞は佛の頂上に住して、[一九]須彌山の如くなり。嚴顯なること觀るべし。千の化佛ありて山窟の中に坐せり。時に諸の菩薩も佛の足を頂禮し、異口同音に佛に白して言さく。「世尊、世尊と[二〇]賢劫千佛とは過去世の時において何なる功德を種え、何なる道行を修してか、常に一處に生れ、同じく共に一家なるや。一劫の中にして次第に當に阿耨多羅三藐三菩提を得、濁惡なる諸の衆生等を化度して、其れをして堅く[二一]三種の清淨なる菩提の心を發さしめたまふや。願くは我等及び未來世の諸の衆生の爲めの故に、當に廣く賢劫千菩薩の過去世の時における諸の波羅蜜の[二二]本事の果報を分別したまへ」。

爾の時、世尊、諸の菩薩に告げて言はく。「諦かに聽き諦かに聽け、善く之れを思念せよ。吾れ當に汝が爲めに分別し廣說すべし。[二三]跋陀波羅、汝今當に知るべし。乃往過去無量無數百千萬億阿僧祇劫にして、復、是の數よりも過ぎたる爾の時に、此の娑婆世界を大莊嚴と名け、劫をば大寶と名けたり。佛、世尊有しき。寶燈焰王如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と名けられ、世に出現したまへり。彼の佛・世尊、世に出現したまへる時も亦三乘を以つて衆生を教化せり。佛の壽は半劫なりき。[二四]正法は世を化して一劫「の間」住せり。像法は世を化して二劫住せり。像法の中に於いて一の大王有しき。名をば光德と曰へり。[二五]十善をもつて民を化し、國土の安樂なることは轉輪王「の國土」の如くたりき。爾の時、大王は諸の人民に教へて[二六]毘陀論を誦せしめたり。時に學堂の中に千の童子有りき。年各十五にして聰敏多知なり。諸の比丘の佛法僧を讚むるを聞けり。一りの童子有り、蓮華德と名けらる。「蓮華德は」善稱比丘に白して言さく。『云何がしてか佛と名けられ、云何がしてか法と名けられ、云何がしてか僧と名けらるゝや』と。比丘、偈

人。智慧第一。【二〇】大目犍連は十大弟子の一人。神通第一。【二一】迦旃延は十大弟子の一人。論議第一。【二二】阿那律は阿菟樓陀、十大弟子の一人。天眼第一。【二三】阿難は釋迦佛常隨仕の弟子。十大弟子の一人。多聞第一。【二四】三明とは三達ともいふ。阿羅漢果の聖者の有する三種の智明。宿住智證明・死生智證明・漏盡智證明これなり。第一は過去に通達する智、第二は未來に通達する智、第三は現在に通達する智なり。【二五】六通とは六神通のこと。天眼通、天耳通、他心通、宿命通、神足通、漏盡通。【二六】八解脫とは八背捨ともいふ。八種の解脫觀なり。背捨とは五欲を背棄し、執著心を捨つるが故なり。解脫とは無漏の智を起して羅漢果をさとるが故に名く。內有色想外色解脫、內無色想外色解脫、淨解脫身作證具足住、空無邊處解脫、識無邊處解脫、無所有處解脫、非想非々想處解脫、滅受想定解脫身作證具足住これなり。【二七】首楞嚴三昧とは勇健定、健行定、健相定と譯す。諸三

佛說千佛因緣經

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

是の如く我聞けり。一時、佛、[一]王舍城[二]耆闍崛山の中に在して、[三]大比丘衆五千人と倶なりき。其の名を尊者[四]阿若憍陳如・尊者[五]優樓頻螺迦葉・尊者[六]伽耶迦葉・尊者[七]那提迦葉・尊者[八]摩訶迦葉・尊者[九]舍利弗・尊者[一〇]大目犍連・尊者迦栴延[一一]・尊者[一二]阿那律・尊者[一三]阿難等と曰ふ。皆大阿羅漢にして、衆に知識せらるゝことは調へる象王の如し。作すべき所は已に辦じをはり、[一四]三明・[一五]六通・[一六]八解脱を具せり。菩薩摩訶薩八萬四千人あり。梵德菩薩・淨行菩薩・無邊行菩薩を上首とせり。跋陀波羅と應與無邊とは倶に上首たり。他方「より來れる菩薩は」月音菩薩・月藏菩薩・妙音菩薩を上首とせり。是の如き等の諸の大菩薩は皆久しく梵行を修して安隱清淨なり。[一七]首楞嚴三昧に住したまひ、皆悉く八萬四千の諸の波羅蜜を具足し、娑婆世界及び十方の國にして、示現して佛と作り、妙法輪を轉じ、般涅槃を現じ、耆闍崛山の昇仙講堂にして皆師子吼したまへり。是の諸の菩薩摩訶薩等は各各自ら過去の因緣を說きたまふ。是の如き音聲は三千大千世界に遍滿せり。天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等の一切の大衆も皆悉く集會せり。

爾の時、世尊、石室より出で、阿難に問ひたまひて曰く。「今、諸の聲聞、諸の菩薩等は皆何を講論せるや」。阿難、佛に白して言さく。「世尊、諸の菩薩衆は各各自らの宿世の因緣を說けるなり」。爾の時、世尊、安庠として徐ろに歩むこと大龍象の如くにして、[一八]僧伽梨を披て大衆の中に入り、諸の菩薩に告げたまひて言く。「汝等、今、各何なる義をか說けるにや。其大音聲は世界に遍滿せり」。跋陀波羅菩薩、即ち坐より起ちて自ら世尊の爲めに師子の座を敷き、頭面に足を禮し、佛を請

【一】王舍城とは Rājagṛha 中印度摩迦陀國の首都。紀元前六世紀に頻婆娑羅王ここに都し築城す。その阿闍世王もここに都し、釋尊の說法は此地に於いて最も多し。今の Rājgir の地なり。

【二】耆闍崛山とは Gṛdhrakūṭa 靈鷲山と譯す。王舍城の東北にあり。今の Chata 山なり。靈山、鷲の御山、鷲峯等といふ。

【三】大比丘衆とは比丘の中に於て最も秀でたる人々。比丘とは乞士、除饉、勤事男等と譯す。出家して常に乞食し清淨潔白なる生活をする男をいふ。

【四】阿若憍陳如は釋尊の最初に度せる五比丘の一人。婆羅門族の人。

【五】優樓頻螺迦葉は三迦葉の一人。初めは事火外道、後に兄弟と共に佛弟子となる。

【六】伽耶迦葉は三迦葉の一人、二兄と共に出家歸佛せり。

【七】那提迦葉は三迦葉の一人、釋尊成道第一年に兄弟共に出家し佛弟子となる。

【八】摩訶迦葉は大迦葉ともいふ。大飲光ともいふ。大飲光と翻す。十大弟子の一人。成道第三年に出家歸佛せり。頭陀第一。

【九】舍利弗は十大弟子の一

元錄のみである。貞元錄卷二に『千佛因緣經 法上錄云姚秦羅什譯』と記しながら第八卷には『或翻譯有憑、或別生疑僞』と述べてゐる。貞元錄が是くの如く前後一致しないで半信半僞でゐるのは如何なる譯があるのであらう。それから各『一切經』は皆『後秦、鳩摩羅什譯』としてゐるのも變なものである。出三藏記第四卷には『新集續撰失譯第一』とし、歷代三寶紀第八卷も『失譯、僧祐錄失譯』とし、法經錄第一、內典錄第六も『失譯』としてゐる。然るに『失譯』を譯經圖紀は第一卷に『千佛因緣經一卷後漢譯經失譯人名』と記し又同第二卷には『千佛因緣經一卷東晉失譯人名』と記して譯經時代を別としてゐる。此れでみれば二翻となるのであるが、他の經錄どれにも『二譯同本』と記してないから、恐らく千佛因緣經は單譯であつたと云ふべきである。開元錄が『後漢失譯』としてゐるのは譯經圖紀の前說を用ひたものであらう。兎に角、本經は「什譯」ではないことは明かであるが、何時代の譯經か明かではない。恐らく羅什頃の譯出には相違ない、故に『失譯』とするのが正當であらう。

本經と共通なるものと認めらるゝ經典並に註解。

本經の構想と相通ずる他の經典は上に記したやうな數種の經典があるにも關らず、經錄編者は何等記述する所のないのは如何したものであらう。

次に本經の註解書等は全く書目すらも認められない。然し乍ら藝術的方面では頗る盛行したものゝやうである。

昭和七年二月下旬

譯者　田島德音　識

のが、滅後の佛教が本生譚等の發生に依つて多佛思想が現はれ、遂に三世十方諸佛の示現となつた。然しながら釋尊出世以來以前から過去佛出世の傳說は行はれてゐたらしい、從つて未來佛出世も豫想されてゐたやうである。この印度傳說が母胎となつて釋尊の偉大さを讃歎しつゝ過去現在未來の釋尊を詩的に想起すれば必ずそこには幾多の諸佛も出世せらるべく、又諸菩薩も示現する筈である。多佛思想の發生は是の如き一面からのみであるとは云へない。他にも種々な要素、事情、理論が潜んでゐるのであるが、上記の事情も確に多佛思想發生の一要素であると云へよう。

現在千佛と云ふから、現在吾々が見聞し面晤し得ることのやうに考へるかも知れないが、現在とは賢劫を指し現在と云ふのであるから、吾人の經驗する現在の如き短時間ではない。現在と云ふ時間は幾百千億萬歲の永い時間―二十增減劫―を指して現在と云ふのである。こゝらの思惟の法式は佛教思想の時間概念が世間の時間概念と相違してゐる點の一つである。時間概念ばかりでなく空間概念も同樣に世間の空間の考へ方とは相違してゐる。例へば「常にこゝに住して滅せず」と云ふ場合の「此處」が或一地點を指示してゐるやうに聞えるが、決して一般の人の考へる「此處」ではなく、一般の人の「普遍なる空間」が「此處」であるが如きが一例である。すべて數量でも本質でも同樣に考へれば誤りはない。

千佛經の梗概

一時、釋迦佛、王舍城耆闍崛山中に大比丘衆五千人と俱に住在された。時に八萬四千の菩薩も俱に住した。是の諸大菩薩は各々自ら過去の因緣を物語つた。其音聲は三千世界に遍滿した。天龍八部は皆此の會に來集した。佛は石室より出で、今の講論は如何なるものであるやと阿難に問はれた。阿難は『菩薩衆が互に自らの宿世の因緣を說いてゐたのであります』と答へた。佛は安庠として大衆の中に入つて、跋陀羅菩薩の請じ奉つた座に著したまうた。又他の八萬四千の菩薩も各瓔珞を佛に供養した。そして『賢劫千佛の本緣事の果報を說きたまへ』と異口同音に白した。この請問に應じて、佛は賢劫千佛の過去の本事を詳かに說き示されたのである。

志磐は佛祖統紀に『經末未盡』と記して完譯でないと記述してあるやうに、本經は明かに結末が述べられてゐない。恐らく完成されない經典であつたものだらう。

翻譯者に就いて

本經の翻譯三藏の名を記した經錄は貞

佛說千佛因緣經解題

一、千佛に就いて

千佛因緣譚は本生譚(jātaka)に屬するものであることは云ふまでもない。本生譚に關しての大略は既に本緣部第十一「生經」の解題に際して赤沼・西尾の兩氏が述べてゐられる。それを一讀せられたい。

千佛とは過去・現在・未來の三世に各千佛ある中、一般には現在の千佛を特に千佛と稱されてゐる。この三世三千佛とは、三世に各、成住壞空の四劫がある。この四劫の中の住劫—二十增減劫—の期間に各、千佛が出生される。そして過去の住劫を莊嚴劫といひ、現在の住劫を賢劫といひ、未來の住劫を星宿劫といふ。莊嚴劫にも千佛が出生し、賢劫にも星宿劫にも皆千佛が出生するから三世三千佛と云はれるのである。三世三千佛のことは「三千佛名經」に具さにその名號を列ね、又「藥王經」には三劫三千佛の始めの佛號と最後の佛號とを擧げてゐる。現在賢劫の千佛出世に關しては經論に異說が多い、今は千佛の說かれてゐる經題を列記して置くに留める。一、千佛因緣經。二、賢愚經。三、賢劫經卷八。四、大悲經卷三。五、悲華經卷五。六、寶積經卷九。七、千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼經卷上。八、千手千眼觀世音菩薩姥陀羅尼身經。九、藥王經等。

千佛と數ふる理由は何故か? 千は無量無數の差別を示したもので千といふ數が確定的なものではあるまい と思はれる。古人も さう考へたのであらう。「祕藏記末」に『無量無數の差別智身の功德莊嚴藏を過去千佛とし、又自身に最初普賢行を起すを賢劫千佛とし、又自身に無量無數の如來ありて如法修行の故に煩惱の雲散じ、本有の如來あるを未來千佛となす』と記してゐる。これを見ても千といふ數を用ひた意はよく推定されるであらう。しかし千の數は三千世界の『千』の說明や千一夜物語の『千』といふ數へ方や、帝釋天の千眼や、佛足の千輻輪相等から推し考へると印度では早くから一般の人々が「千」を以つて無量無數の意味に用ひてゐたことが知られる。龍樹菩薩や世親菩薩を「千部の論師」といふ如きはそのためであらう。その用法が支那佛教に現はれて天台の一念三千等の「千」となり或は千佛洞の彫刻となり、日本佛教では千部讀經、千日まゐり、千社札等となつたのであらう。

元來、佛陀は釋迦一佛に限られてゐた

那賴陀十一密、羅修蜜囉十二素囉醯陀十三薩婆多羅十四勝伽嘍伽十五喝吔猗呵十六摩仇摩伊呵十七一是の陀羅尼章句を以て彼の諸の衆生を守護し攝取し、種種の病を除く。若くは毒蛇の螫、若くは癩病、若くは風病なり。文殊師利よ、是の金剛幢菩薩此の經法を以て衆生を安止し、諸病を除去す。文殊師利よ、汝爾時の金剛幢菩薩を豈異人なりと謂ふや。異觀を作す莫れ。何を以ての故に。我は是れ爾時の金剛幢菩薩なり。我れ此の經を解し、多く衆生を利す」。

爾時[四〇]文殊師利童子佛に白して言く、「世尊、菩薩此の陀羅尼章句を受持し、讀誦通利するに、當に何の[四一]宜、何の法則を行ずべきや」。佛の言く、「文殊師利よ、若し菩薩有りて此の陀羅尼章句に通達せんと欲せば、當に淨行を好み、肉を食はず、油をもて足を塗らず、多衆に往かず、常に衆生に於て慈心を起すべし。非法不淨の人にして而も此の經を讀むことを作す莫れ。亦不淨處に在りて讀む莫れ」。爾時文殊師利童子佛に白して言く、「世尊、若し菩薩有りて此の經を讀む時は身命を惜まざらむ」。佛の言く、「是の如し。是の如し。文殊師利よ、汝の說く所の如し」。爾時佛阿難に告ぐ。「阿難よ、汝此の經を受持せよ。此の經當來多く衆生を利せむ」。阿難佛に白して言く、「世尊、佛の所說の如く、我れ已に受持せり」。爾時世尊阿難を讃じて言く、「善き哉、善き哉、阿難よ、汝來世に於て衆の爲めに尊導せよ。彼の時の衆生此の經を讃說すること我より受くるが如くならむ」。爾時大德阿難、大德舍利弗、文殊師利童子及び諸の天人、阿修羅、乾闥婆等、佛の所說を聞きて、皆大に歡喜せりき。

佛說象腋經　終

【四〇】　原文此の處段を改めず。
【四一】　「宜」を元明本には「儀」に作る。

む。命終して生處に自から宿命を識らむ。命終して生處に五通を得む。命終して生處に彌勒菩薩を見む。此の經法を念じて其の心亂れざらむ。唯だ眠時を除き、夢中にも佛を見、亦菩薩を見む。此の經を信解する者は順忍を得む。此の經を念ずる者は現世に瞋を斷ぜむ。此の經を持する者は毒蛇の中に處して無所畏を得む。此の經を念ずる者は〔三七〕怨家を降すを得む。此の經を念ずる者は遍照三昧を得む。此の經を學ぶ者は一切の諸惡業障を蠲すを得む。此の經を說く時無量百千の法門を得む。是に菩提の心を失はざるを得む。是に無量の旋陀羅尼を得む。此の經を念ずる者は一切の魔事未だ曾て起るを得じ。亦現在佛前に生ずることを得む。一切善吉の諸願を具するを得む。此の經を念ずる者は無足・二足・三足・四足の諸毒蟲中に皆愛護せらるゝを得む。此の經を念ずる者は非人の惱、王の瞋無く、護らるゝを得む。文殊師利よ、此は是れ說法比丘の二十の功德なり。此の經を持して心に疑惑無く、讀誦通利して他の爲に廣說するが故に」。

爾時〔三八〕文殊師利童子佛に白して言く、「世尊、喩へば諸の藥樹は一切の病を除く。世尊、此の經も亦爾り。一切の病を斷ず」。佛の言く、「是の如し。是の如し。文殊師利よ、善く此の語を說けり。此の經は能く一切の病を斷ず。何を以ての故に。文殊師利よ、本過去世阿僧祇劫、復阿僧祇劫を過ぎて、爾時に佛有り。師子遊步如來應供正遍知と號す。世に出現して、無量百千の大衆の前に、此の經を演說せり。文殊師利よ、爾時衆中に一菩薩有り。金剛幢と名く。是の師子遊步如來應供正遍知より、此の經法を聞きて、心に疑惑無し。是の妙功德經を受持し、通利解入して勢力を得るが故に。村落城邑王宮に在りて、自から唱へて言く、我は是れ良醫なりと。時に無量百千の衆生種種の病に逼られ、悉く是の金剛幢菩薩の所に來詣せり。是の時金剛幢菩薩慈心に善く解し、此の經法陀羅尼章句を以て諸の衆生等を攝取し護持せりき。文殊師利よ、何等か是れ陀羅尼章句なる。

〔三九〕阿蘭一波嗏羅二毘尼那三修怛馳四修復多五阿菟嗏六毘畔那醯七呿伽留他八摩移宿伽九阿菟那折陀十

〔三七〕麗本「惡象」に作る。今三本並に宮本に依る。

〔三八〕原文此の處段を改めず。

〔三九〕此の陀羅尼の原音に就きては解題を參照せよ。

我れ不顛倒に非ず
是の善上有ること無し
[三五]此の法是れ有漏たり
法を思惟せざれば
無縛にして亦無解
此は是れ持戒と想ひ
二は倶に破戒なりと說く
諸法異有ること無し
是れ性を見る者なり
若し心著無き者は
是の如く知ること具足せば
若し思憶想無ければ
心無く我命無し
貪欲を出でんと欲する者は
亦婬欲を捨せず
往想に著するを厭はず
生死驚怖無し

未だ始より動發有らず
若し憶想有る者は
此の人心善ならず
是れ虛空に同如たり
是の慧上有ること無し
此は破戒の惡と想ふ
無上戒は二無し
戒に增減の相無し
是れ佛法を護持す
猶し空中の鳥の如し
是れ實に沙門の法なり
一切を思惟せず
菩提を得る難からず
欲の爲めに牽かれず
菩提を得る難からず
怖畏無きの際に於て
菩提を得る難からず

爾時世尊是の偈を說き已りて、文殊師利童子に告げて言く、「文殊師利よ、若し菩薩有りて此の經を信解し、疑惑有ること無く、受持し、讀誦し、通利せしめ已りて他の爲めに廣說せんに、是の人二十の功德を得む。何等か二十なる。諸天愛護し、諸龍[三六]常に護り、夜叉守護して常に亂心無から

【三五】麗本この句の前に「此法是無漏」の一句を有す。

【三六】麗宋本「當」に作る。今元明本に依る。

空にして邊際有ること無し
其の智は二有ること無し
衆生際思ひ亘し
是の智所知無し
其の心是の如く思はむ
我れ何れの時か成佛せむ
是の中に和合無し
凡夫和合せんと欲す
亦止住處無し
無礙にして物有ること無し
是の如く菩提を知る
衆生を知ること亦爾り
衆生界同じく等し
菩提を得んこと難からじ
一切の求を斷じ
無上菩提を覺り得む
布施をもて菩提を得んに
菩提を成ずるを得ず
精進の實を憶想せば
是の如く憶想に著せば

此の義を知るを以ての故に
虚空際の相の如く
本際鏡像の如く
是の分別の行者
我れ何れの時か惡を盡さむ
諸佛生有ること無し
法和合する者無し
能く空に合を造る無し
虚空無住の故に
是の如く虚空を說き
是の如く菩提を知る
菩提虚空界
若し是の如き等を知らば
是の菩提求め難し
心有ること無くんば能く
布施を思惟する者
終に菩提を得ず
思惟して戒に著する者
佛法の妙進に非ず
一切法顛倒せむ

悉く空閑の相の如し
貪瞋癡を斷ずるが故に
是の法盡すべからず
速疾に盡に歸す
是の實際得回し
愚癡亦無邊
亦復中を得ず
何れの處にか果葉有らむ
花も亦得べからず
衆生當に子を生ずべし
此に如實を見る
是れ終に子有ること無し
亦子の憂有ること無し
一切法無生にして
生死の苦を受けて
非智慧の者は疑はむ
邊有ること無く
此に於て疑有ること無し
我れ是を無際と說く
衆生際思ひ回し

多億數の諸佛
無上法を演說す
實法にして虛妄無し
是の如きは不實の法
婬欲と瞋と無邊
若し實を得ずんば
種子中に芽無し
若し其れ葉を得ずんば
無生法是の如し
不生にして亦不出
猶し之れ石女の如し
其の子無きを以ての故に
慧者の如く分別せば
是に恐怖有ること無し
憂妄凡夫を覆へり
若し此法の無實にして
無量阿僧祇たるを知らば
言ふ所の本際の如き
後際亦復爾り
無際にして億想の際は

菩提を得ること難からず
菩提に近づく者無し
是れ菩提を去ること遠し
各各相是非す
此は是れ破戒の惡なりと
諸の有爲實無し
之を知る幻化の如し
破戒も亦實ならず
是の中我有ること無し
布施と受者と
諸佛我れを記せず
布施の想餘無し
爾時我れ記を得て
淨戒を持ちて天に生ずるも
是の無上菩提も
愚癡妄りに憶想す
無爲にして生有ること無し
生なる者を思惟せざれ
是に忍を得ること難からず
法に作者有ること無し

菩提より遠ざかる者無く
別に分別者無し
凡夫各行を異にし
此れ持戒の成就なり
諸法猶し夢の如し
慧は取ること牢固ならず
是の中戒實ならず
諸法は因緣より生ず
千億劫中に於て
無上戒を護持す
我れ時に想を離る
一切の顚倒を離る
施は大富を得と說く
是の中所得無し
凡夫有に依止し
我等忍を得て
是の無生法の中
千億劫の中に於て
假名爲に法を說く
根本の住處無し

和合法有ること無し　凡夫和合せんと欲す
若し知るべく斷ずべくんば　說法衆生の爲なり
凡夫諸行を生じ　無生法を信ぜず
廣法を捨離して　菩提道最上なり
凡夫二法に著し　無二法を知らず
種種の幻實無し　凡夫人見異なり
是の中異有ること無し　一切同一相なり
若し凡夫の說有らば　二無く二の作無し
幻化に同じく平等なり　凡夫人或は說かむ
我れ時に欲を盡さず　瞋及び愚癡を斷(ぜず)
我れ當に善く思惟して　非物に物想を生じ
斷を計して涅槃と爲す　貪欲瞋恚を懷きて
空法を說示し　無盡亦無生なる
是を說て涅槃と名く　精進者の進を生ずる
是れ我が法を去ること遠し　布施持戒の想
菩提の想を樂む　是れ菩提に入らず
是等の想行を行じ　凡夫虛妄に覆はる
空法を知らず　諸法等一の相を
當に各各異說すべし。　若し此の法を解知せば
其の體性異ること無し　五指を手と名くるが如し

我れ今より往、自然明了に熾然明熾なり。餘明を假らずして我れ自ら歸依し、餘の歸依に非ずして、自から自尊に歸す。是の故に說いて佛は我が尊に非ずと言へり。何を以ての故に。我れ佛を離れず。佛我れを離れず」。舍利弗の言く、「大德何に緣りて是の如きの言を說く、法を念ぜず、僧を念ぜずと」。諸比丘の言く、「大德舍利弗よ、我れ今日より法として、若くは念、若くは攝を得べき無し。是の故に我れ今日より往、(法を念ぜず)僧を念ぜずと言へり」。舍利弗の言く、「大德何に緣りて我れ今より往、無作を說くと言ふや」。諸比丘の言く、「大德舍利弗よ、我れ今より往、一切諸法無作を知れり。是の中作に非ず、不作に非ず。是を以ての故に言ふ、我れ今日より無作を說くと」。舍利弗の言く、「大德何に緣りて說いて今より無因緣を說くと言ふや」。諸比丘の言く、「大德舍利弗よ、我れ今日より一切有道の生因緣盡き、是の中に因無し。是の故に說いて我れ今より無因無緣を說くと言へり」。舍利弗の言く、「大德何が故に說いて我れ今より往、無有業を說くと言ふや」。諸比丘の言く、「大德舍利弗よ、我れ今より往、一切法涅槃を究竟せるを知る。是の中調伏有ること無く、非調伏無し。是を以ての故に言ふ。我れ無業を說くと」。是の增上慢の諸比丘等是の法を說く時、三千六百の比丘有り。悉く諸漏を斷じ、心解脫を得たり。爾時世尊諸比丘を讃めたまふ、「善き哉、善き哉、是の實の[三四]希望中に法の得べき無し」。爾時文殊師利童子佛に白して言く、「言ふ所の得とは何の法をか得と名く」。佛の言く、「文殊師利よ、得とは名けて無生法忍と曰ふ」。文殊師利の言く、「世尊、菩薩無生法忍を得んと欲せば、當に云何が學び、云何が行じ、云何が住し、云何が修集せむ。

爾時に世尊文殊師利童子問ふ所の無生法忍の義に答へんがための故に即ち偈を說て言く、

若し佛智を求むる有らば　一切諸智の上なり
法の取るべきもの有ること無し　亦法の捨つべき無し
法の得べきもの有ること無し　若し生是れ有ならば

[三四] 麗本「希望」に作る。三本及び宮本は「惶怖」に作る。

し」。爾時佛復舍利弗を讃めたまふ、「舍利弗よ、善き哉、善き哉、舍利弗よ、是の如し。是の如し。舍利弗よ、若し法にして有實・有物・有眞ならば、則ち衆生の涅槃に入る無けむ。舍利弗よ、一切諸法は亦是れ實に非ず、物に非ず、眞に非ず。是の故に舍利弗よ、恒沙の衆生涅槃に入り、永く復生ぜず。亦盡を知らず。衆生不實の故に。舍利弗よ、若し一切衆生實想有ること無くんば、是を不實智を具足すと名く。是の故に舍利弗よ、施に果報無し。能く具足して不實智を滿ずるを得るなり」。爾時舍利弗佛に白して言く、「世尊、云何が智不實智を滿ずるを得て、而も疾かに無生法忍を獲得する」。佛の言く、「舍利弗よ、若し不實にして不證なるを知らば、舍利弗よ、何等か是れ不實なる者ぞ。我見・衆生見・命見・人見・斷見・常見に不實なる者有り。佛想・法想・僧想・涅槃僧、舍利弗よ、若し心動搖・戲論・[三二]總務皆是れ不實なり。舍利弗よ、是の如く不實を執する中に而も解脫を得む。舍利弗よ、是の事を以ての故に、不實智を具し、而して疾かに無生法忍を得るなり」。

[三三]是の法を說きたまふ時に、四萬二千人無生法忍を得、六萬の優婆塞無上正眞道の心を發し、三萬六千の天子智證に向ふことを得、是の六十增上慢の比丘諸漏を斷じて、心解脫を得たり。心解脫を得已りて、倶に共に同聲に是の如きの言を說く、「世尊、我れ今始めて六師に於て出家し、今日より往は、佛を我が尊に非ずとし、亦念法を非とし、又念僧を非とせむ。世尊、我れ今日より、無作を說き、無因緣を說き、無有業を說き、無調伏を說かむ」。爾時衆中若干の衆生各是の言を作さく、「是の諸の比丘或は佛戒を捨てゝ外道服を受けむ。所說顚倒せり」。爾時大德舍利弗、衆心を覺知して、諸の比丘に語りて言く、「大德何に緣りてか是の如きの語を說くや。我れ今始めて六師に於て出家すと」。諸比丘の言く、「大德舍利弗よ、今より已往は六師の諸師等同一相にして、無增無減なり。大德舍利弗よ、我等今諸師の不異を知る。出家中に於て分別する所無きが故に、出家と言ふ。舍利弗の言く、「大德何に緣りて說いて今より佛は我が尊に非ずと言ふや」。諸比丘の言く、「大德舍利弗よ、

【三二】前註を見よ。

【三三】原文此の處段を改めず。

有ること無し。涅槃は無量の功德を增益す。乃至欲樂心を生ぜしむ。舍利弗よ、假、聖福田ならば涅槃に入るに非ず。又舍利弗よ、離欲の聖人は各福田を見る。舍利弗よ、譬へば農夫の穀種を種下するが如し。因つて稗莠を生じ、亦餘草を生ず。舍利弗よ、汝が意に於て云何。而も是の農夫得る所の稗草は是れ果報なりや不や」。「不なり、世尊」。佛の言く、「舍利弗よ、譬へば農夫の穀種に依因して稗餘草を生ずるに、生相穀に似たるが如し。是の如く、舍利弗よ、聖福田に施せば、自然に大報あり。後諸漏を斷じ、愛果を乾焦す。舍利弗よ、而も是の農夫本と穀爲るを期す。餘の稗草を見ては心喜を生ぜず。果に非ざるが故に。所利に非ざるが故に。是の如く、舍利弗よ、有爲田に非ず。[28]安んぞ施を聖に上るに於て大果報を得んや。舍利弗よ、是の因緣を以て、正行に施する者は大果大報無し」。舍利弗の言く、「世尊、若し其の布施大果大報無くんば云何が名けて世の福田と爲すや」。佛の言く、「舍利弗よ、小果想に非ず、大果想に非ず。是の施不生なり。若し施不生ならば、是れ能く世間天人阿修羅の供を受けむ。舍利弗よ、無盡田に於て、果報を取らず、果報を與へず。是の故に舍利弗よ、大報に非ず、小果に非ず、是れ世の福田なり」。舍利弗の言く、「世尊、云何が是の世の福田果報を得ざる」。佛の言く、「舍利弗よ、汝が意云何。若し[29]涅槃は果報有りと爲んや不や」。舍利弗の言く、「無なり、世尊、若し施を涅槃と爲し、果報を得ば、一切の聖人を無爲と名けず」。佛即ち讚して言く、「善き哉、善き哉、舍利弗よ、是の事を以ての故に、施世福田には果報有ること無し」。爾時舍利弗佛に白して言く、「世尊、若し施に果報無くんば云何が[30]妄想智を具足する」。佛の言く、「舍利弗よ、意に於て云何。若し一切の法性を知らば是れ實なりや不や」。舍利弗の言く、「世尊、一切法を知ること猶し幻性の如し。世尊、若し幻性を知らば是れ[31]不實智なり。何を以ての故に。如來は一切諸法猶し幻性の如しと演說す。幻性の如しとは即ち是れ不實なり。世尊、若し一切法性此の如しと知らば是れ不實智たり。所以は何。一法として是れ實なる者有ること無

【二八】三本並に宮本には「安止於施得大果報」に作る。異譯「賢聖に施して功德を立てんと欲するも歡悅せしむる能はず」。

【二九】異譯「無爲」となす。

【三〇】異譯「空慧」。

【三一】異譯「虛無慧」。

名く。若し正見せば如來の所に於て實想を作さず、堅想を作さず、物想を作さず、名想を作さず、衆想を作さず。若し如來に於て實想を作さず、堅想を作さず、物想を作さず、名想を作さず、衆想を作さず。是の如き等の行、一切の諸行悉く是れ妄見なり。若し一切の行悉く是れ妄見ならば是に一切の諸法是れ邪見なるを知らむ。若し一切の諸法是れ邪見なるを知らば、佛是等を邪見を滿足すと說かむ。又一切の諸見是れ邪にして是れ亦邪見なるを知らむ。是の如く舍利弗よ、是の緣を以ての故に、如來を見んと欲するを名けて邪見と爲す。舍利弗よ、是等は如來の密身を見ず。是れ[一八]邪分別なり。如來の身に於て[一九]舍利如來の想を爲す。舍利弗よ、若し是の如きの見有らば如來に於て名けて邪知と爲す」。

爾時[二〇]舍利弗佛に白して言く、「世尊、[二一]云何が邪見を名けて正行と爲す」。佛の言く、「舍利弗よ、一切の凡夫正しく覺觀妄想分別を起し、依止・動發・不動發を起し、我見・衆生見・命見・人見を起し、我勝・我所勝に著し、是の諸事を知らむ。小凡夫等動搖[二二]總務して戲論を生ぜむ。是の如き等を悉皆不實なりと知らむ。舍利弗よ、無なれば名けて不實と爲す。舍利弗よ、不實なる者を妄語と名く。舍利弗よ、妄語者を名けて邪と爲す。舍利弗よ、是の如き等の事不實を攝取す。是等の邪見を名けて正行と爲す。舍利弗よ、[二三]是の緣を以ての故に、謂ふ所の邪見を名けて正行と爲す」。爾時舍利弗佛に白して言く、「世尊、頗る正行の所有布施小果大果無きもの有りや」。佛の言く、「舍利弗よ、若し是の如き等の正行成就せんに、施する所有らば、與に[二四]涅槃に趣向す。涅槃を受け、涅槃を[二五]齊分す。舍利弗よ、而も是の涅槃小果大果無く、小功德に非ず。何を以ての故に。[二六]是の涅槃は一切の果を離れ、齊分有ること無し。齊分すべからず」。舍利弗の言く、「[二七]世尊、若し其れ涅槃に齊分無くんば云何が如來無量無邊の功德を增益すと說きたまふや」。佛舍利弗に告げたまはく、「諸の凡夫煩惱行・我論・衆生論・命論・丈夫論を具す。是の如き等の諸衆生の爲の故に、說いて涅槃と言ふ。分齊

【一八】麗本「取」に作る。今三本並に宮本に依る。
【一九】「舍利」の二字三本並に宮本には「舍利弗」に作る。衍文なるに似たり。
【二〇】原文此の處段を改めず。
【二一】異譯「何をか世尊、其の邪見者を正見に入らしむると謂ふや」。
【二二】無量壽經に云く「勤苦悤務して各殺毒を懷く」。悤、匆皆通じて用ふ。世の督に急がしきこと。
【二三】異譯「是を以ての故に、舍利弗よ、其の邪見に墮するを知りて、緣りて正見に致らしむ」。
【二四】異譯「無爲」とす、下同じ。
【二五】齊分とは蓋し一定の處を割り當つるの意なるが如し。
【二六】異譯「其の無爲は一切功勳の報を離れ、處所有ること無し」。
【二七】異譯「如來至眞云何が無爲を處所無しと講說する。本と無爲を歎じて最も奇特功勳無限と爲せり。」

若し其の施中大果報無くんば、是れ世の福田なり。若し世の福田ならば是の中施す所、果報有ること無し。若し施果報無くんば是則ち[一二]不實の智を滿足す。若し其れ不實の智を滿足せば、是等疾かに無生法忍を得む」。

爾時、衆中六十比丘増上慢なる者是の如きの法を聞きて、是の思惟を作さく、「是の道闇昧なり。如來の説に同じく、外道の説に同じ。是の外道等[一三]富蘭那迦葉・末伽梨憍舍利・阿耆多翅舍欽婆羅・珊闍耶毘羅坻子・波復多迦旃延・尼犍陀若提子等の説く所是の如し。佛亦是の如し」。爾時に世尊是の六十の増上慢比丘の心の所念を知りて卽ち文殊師利童子に告げて曰く、「文殊師利よ、是の如し。是の如し。我れ如來の説法は外道に同じ。然るに是の外道は佛の説法を解せず」。爾時、[一四]六十増上慢比丘是の説を聞き已りて増益して苦を受け、憂惱悅ばず。其の心樂まず。是の如きの所説の法を知らざるが故なり。座より起ちて去りぬ。

爾時、[一五]大德舍利弗諸比丘に問ふ。「大德よ、汝等今何に去らんと欲する。當に如來の是の如きの説法を解すべし。何の因・何の緣の故に。如來爾時に説きたまはむ。大德よ、且らく住まれ。我れ如來に何の因緣を以て是の如く説きたまふかを問はむ」。爾時諸比丘大德舍利弗の語を聞きて、卽ち還た各各本座に復る。爾時、大德舍利弗佛に白して言く、「世尊、如來何に緣りて是の如き事を説きたまふや。願くは當に演説して比丘の疑を斷じたまへ」。佛舍利弗に告げたまはく、「意に於て云何。若し比丘有り。諸漏已に盡き、心解脱を得たらむに、是の比丘等此の言説を聞きて驚畏を生ぜんや不や」。舍利弗の言く、「不なり、世尊、若し比丘有り。聖諦を見む者は一切の聲を聞きて驚怖畏せず。何況んや諸漏已に盡き、心解脱を得たる者をや」。佛舍利弗に告げたまはく、[一六]或は癡人有り。妄想分別して、不實の法に於て虚空行を得む」。舍利弗の言く、「願くは世尊、是の法句義を説いて衆義を斷ぜしめよ」。佛舍利弗に告げたまはく、[一七]若し如來を夢の如く、幻の如しと見ば是を正見と

【一二】異譯「虚靜の慧を具足す。已に靜慧を具すれば」。
【一三】異譯「不(麗本は弗)蘭迦葉、摩訶離瞿耶樓、阿夷帝基耶、今離披休迦旃、先比盧持、尼犍子等」Pūrṇa-kāśyapa, Maskari-Gośāliputra, Saṃjayi-Vairaṭīputra, Ajita-keśakambala, Kakuda-Kātyāyana, Nirgrantha-jñātiputra
【一四】法華の會座五千の增上慢者あり。爲めに舍利弗三請するも佛說かず。彼等去るも佛制止せず。退くも亦佳なり矣と言ふ。本經との差を知るべし。
【一五】原文此の處段を改めず。
【一六】異譯「或は愚人有り、意塞がり沈冥して未曾有法に於て妄想を懐き、虚空行に逮らむ」。
【一七】異譯「其れ夢中に在りて如來を見る者は寧ろ審かに眞人の形を見ると爲さん乎。如來は此の夢中の視る所と謂はゞ則ち眞實に非ず」。

を解するが如し」。文殊師利の言く、「虚空は何ぞや」。佛の言く、「文殊師利よ、是の虚空は欲に染せず、不瞋・不癡なり。文殊師利よ、一切諸法亦復是の如し。染・瞋・癡無し。文殊師利よ、是の虚空は施の成就に非ず、戒の成就に非ず、忍の成就に非ず、進の成就に非ず、禪の成就に非ず、慧の成就に非ず。是の如く、文殊師利よ、一切諸法亦復是の如し。施の成就に非ず、戒忍・進・禪・慧の成就に非ず。文殊師利よ、猶し虚空の智に非ず、斷に非ざるが如く、文殊師利よ、一切の諸法亦復是の如し。智に非ず、斷に非ず。文殊師利よ、猶し虚空の修に非ず、證に非ざるが如く、文殊師利よ、一切諸法亦復是の如し。修に非ず、證に非ず。文殊師利よ、猶し、虚空の闇に非ず、明に非ざるが如く、文殊師利よ、一切諸法亦復是の如し。闇に非ず、明に非ず。文殊師利よ、猶し虚空の一切處に遍して捉ふべからざるが如く、文殊師利よ、一切諸法亦復是の如し。一切處に遍して捉ふべからず。文殊師利よ、猶し虚空の正道に進むに非ず、邪道に進むに非ざるが如く、文殊師利よ、一切諸法亦復是の如し。正道に進むに非ず、邪道に進むに非ず。文殊師利よ、猶し虚空の聲聞乘に非ず、緣覺乘に非ず、亦佛乘に非ざるが如く、文殊師利よ、一切諸法亦復是の如し。聲聞乘に非ず、緣覺乘に非ず、亦佛乘に非ず。文殊師利よ、猶し虚空の思に非ず智に非ざるが如く、文殊師利よ、一切諸法亦復是の如し。思に非ず、智に非ず。文殊師利よ、猶し虚空の動に非ず、發に非ず、動發に非ざるが如く、文殊師利よ、一切諸法亦復是の如し。動發に非ず、不動發に非ず、文殊師利よ、猶し虚空の衆生能く汚染する者有ること無きが如く、文殊師利よ、一切諸法亦復是の如し。是れ涅槃分を究竟し、無染にして寂靜に非ず、不寂靜にも非ず。文殊師利よ、猶し虚空の無住處に住するが如し。不動・不搖・不住處の故に。文殊師利よ、諸菩薩等亦復是の如し。諸の衆生無住處に住して實の不動・不搖・不住を得るを見る。文殊師利よ、是の實相法、如來を見んと欲す。是を邪見と名く。[二]是の如く邪見即ち是れ正行なり。若し是れ正行ならば、此の中布施大果有ること無し。亦大報無し。

【二】異譯「其の邪見の者正見に入るを求む。其の正見とは是を泥洹と爲す」とあり。

攝取して人天の妙樂を受けしむるや」。佛の言く、「文殊師利よ、而も是の菩薩三昧に入る。名けて寂靜と曰ふ。現に畜生に生じて心を失はず。人天の妙樂を受く。各其の形に隨つて爲に法を說く。菩薩無量千衆を安止して法に住せしむ。文殊師利よ、菩薩是の如く畜生身を受けて人天の妙樂を受く」。文殊師利復佛に白して言く、「世尊、云何が菩薩卑賤の家に生じて轉輪王の樂を受くるや」。佛の言く、「文殊師利よ、而も是の菩薩三昧に入る。名けて靜過と曰ふ。是の三昧力の故に、卑賤の家に生じて轉輪王の樂を受く。文殊師利よ、菩薩是の如く、卑賤の家に生じて轉輪王の樂を受く」。文殊師利佛に白して言く、「世尊、云何が菩薩現に諸道に入つて勝道の樂を受くるや」。佛の言く、「文殊師利よ、而も是の菩薩三昧に入る。見一切行無作光明と名く。菩薩是の三昧に住し、示して諸道に入り、勝道の樂を受く」。爾時、文殊師利佛に白して言く、「世尊、云何が菩薩善く一切佛刹に往返することを知り、本處を動ぜず、亦去來無く、諸佛刹に現じて、水月影の如くなる」。佛の言く、「文殊師利よ、而も是の菩薩三昧に入る。名けて過於一切言說と曰ふ。是の菩薩此の三昧に住する時、東西南北四維上下一切十方世界の中、其の身を示現して、本處を動ぜず、亦去來無し。是の三昧に住して諸佛を見、亦說法を聞くを得む。文殊師利よ、菩薩是の如く善く一切佛刹に往返することを知り、本處を動ぜず、亦去來無く、諸佛刹に現じて水月影の如し」。爾時文殊師利佛に白して言く、「世尊、云何が[8]菩薩一切の語を出して言說する所、各親近せざる無きや」。佛の言く、「文殊師利よ、而も是の菩薩陀羅尼を得む。名けて無量と曰ふ。是の持を得已りて、無量心に入り、無量語を知る。是の菩薩旋陀羅尼の力を得るが故に一切の語を出して(言說する所)各親近せざるは(無し)。文殊師利よ、菩薩是の如く、一切の語を出して言說する所各親近せざるは無し」。

爾時[9]文殊師利佛に白して言く、「世尊、是の菩薩の方便甚だ難し。若し菩薩有りて此の經に入る時何等の法にか入らむ」。佛の言く、「文殊師利よ、若し菩薩有りて此の經に入らんと欲せば、[10]虛空

【八】異譯「菩薩萬億の音を演べて言教を暢出して各各聞くことを得しむ」。
【九】原文此の處段を改めず。
【一〇】異譯「當信解虛空之門」とあるより見るに、今の原文「如解虛空」は恐らくは「信解虛空」ならざるか。

よ。爾時、文殊師利童子佛に白して言く、「世尊、何をか菩薩善能く諸功德法に安住し、一切諸の善薩行を示現し、無量阿僧祇の衆生を教化し、諸の佛形を現ずること水月の影の如しと謂ふや」。文殊師利是の如く問ひ已るに、佛卽ち讃じて言く、「善き哉、善き哉、文殊利師よ、能く總略して如來に是の義を問へり。我れ今當に爲に廣く分別して說くべし。文殊師利よ、諦かに聽け、諦かに聽け、善く之を思念せよ。吾れ今當に說くべし」。文殊師利白して言く、「是の如し。教を受けて聽かむ」。佛文殊師利に告げたまはく、「菩薩六法を成就すれば、諸の功德法に安住することを具するを得む。何等をか六と爲す。文殊師利よ、是の菩薩施して能く一切を捨し、自己を見ずして慳垢の行を離る。戒に安住して我を見ず、能く破戒の業を離る。忍辱を成就して我を見ず、能く瞋恚の行を離る。精進を有して身心の進に非ず。一切の禪定解脫三昧方便に入ることを知りて、亦自を念ぜず。一心を成就して慧行有りて明了に、自から一切諸道を解脫するを見る。文殊師利よ、菩薩是の如きの六法を成就すれば善能く一切功德に安住せむ。復次に文殊師利よ、復六法有り。善能く一切功德に安止せむ。何等をか六と爲す。文殊師利よ、是の菩薩地獄中に住して衆生を攝取し、天樂を受けしむ。畜生[七]身に生じては畜生を攝取して人の妙樂を受けしむ。卑賤の家に生じては轉輪王の樂を受けしむ。現じて諸道に入り勝道の樂を受けしむ。善く一切の佛刹に往返することを知り、水月の影の如く、一切の語を出し、言說する所無く親近せず。文殊師利よ、菩薩此の六法を成就すれば能く一切の功德に安止せむ」。爾時、文殊師利佛に白して言く、「世尊、云何が菩薩地獄の中に住して天樂を受けしむるや」。是の問を作し已るに、佛文殊師利に告げたまはく、「若し是の菩薩三昧に入らむ。大蓮華と名く。地獄中に住して衆生を攝取して天樂を受けしむ。諸の衆生の種種苦を受くるを見ては、各其の形を現じて爲に法を說き、無量の衆生をして悉く解脫を得しむ。文殊師利よ、菩薩是の如く地獄中に住して天樂を受く」。文殊師利復佛に白して言く、「云何が菩薩畜生中に生じて、畜生を

【七】後段に照すに「一身」は「中」に作るべきが如し。

詣す。王舍城中無量千衆佛所に來詣せり。爾時に世尊一切衆會の已に集れるを知り、文殊師利童子の面を觀已りて卽便ち微笑したまふ。爾時文殊師利卽ち座より起ち、衣服を整へ、偏へに右の肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌[三]を佛に向け、佛に白して言く、「世尊、何の因、何の緣ありてか微笑したまふや。諸佛如來應供正遍知緣無くして笑ひたまふに非ず」。佛文殊師利に告げたまはく、「過去此の耆闍崛中に於て十千の佛有り、[四]象腋經を說く」。爾時、大德阿難佛の所說を聞きて疾かに座より起ち、衣服を整へ、偏へに右の肩を袒ぎ、右膝を地に著け、[五]合掌を佛に向け、佛に白して言く、「善き哉、世尊よ、善き哉、善逝よ、今當に此の象腋經を演說したまふべし。是の經聞き難し。若し如來說きたまはゞ、疑有ること無からしめよ。此の深經典深光明有り。世尊、何が故に文殊の面を觀已りて微笑したまふや」。爾時に世尊阿難を讚じて言く、「善き哉、善き哉、阿難よ、善慧もて分別す。汝今阿難よ、諦かに聽き、諦かに聽け、善く之を思念せよ。我れ今當に說くべし」。阿難佛に從つて敎勅を受け已る。佛阿難に告げたまはく、「若し衆生有りて此の經を解する者は大象力の如く、大龍力の如し。是の諸の衆生此の經を解する者亦復是の如し。阿難よ、諸の衆生等此の經を解する者は師子の如く遊步して勝道に進趣せむ。阿難よ、此の經典は當來の菩薩能く之を愛樂せむ。阿難よ、此の經能く菩薩をして勇猛ならしむ。我れ世を去りて後、當來の菩薩、手に此の經を得、手づから此の經を書せむ。此の經の床座は旃陀羅に非ず。菩薩の手づから執持する所。亦戲論の菩薩の手得に非ず。亦假名の菩薩の手得に非ず」。爾時世尊現ずること文殊師利の像の如し。是の像を作し已るに文殊師利亦是の如く解す。「我れ今當に世尊に甚深の法を請問すべし。是れ聲聞緣覺の地に非ず。是れ菩薩地なり」。爾時、文殊師利童子卽ち佛に白して言く、「世尊、我れ今少しく如來應供正遍知に問はんと欲す。若し佛聽許せば乃ち敢へて諸請せん」。文殊師利是の如く請ひ已るに、佛文殊師利に告げたまはく、「汝の所問を恣にして[六]意所に隨つて一切の衆集を喜ばしめ

【三】「合掌向佛」は añjaliṃ praṇamya の譯語なればかく讀むを至當とす。

【四】異譯「喩象經」。

【五】前註を見よ。

【六】「隨意所喜一切衆集」今假りにかく讀む。善き讀方更に勘ふべし。異譯は「汝の所問を恣にせよ。諸大衆會悉く此に來集す。並びに當に恩を蒙らむ」。

憶想有ること無し我に正行す　異想無くんば是れ安樂ならむ
若し法を說かば勝れて[一]善妙　亦我及び衆生有ること無し
亦心有ること無し我が說法　不著不實なれば安樂なり
諸の善根に於て實想無し　物想有ること無し[二]受想無し
諸の結使を思分別せず　無二の行者彼れ安樂ならむ
生起中に於て起想無し　所住の處に過患の想を見る
晝夜常に勤行精進し　戲論無ければ彼れ安樂なり
亦妄想無く非處に住し　亦增上智を分別せず
如來外道差別無し　貢高妙無くんば彼れ安樂ならむ
無量無數にして限有ること無し　亦等虛空を捨離せず
我及び衆生異想無し　增減の見無く彼れ安樂なり
若くは或る夢行を得る有らむ　辯才を得て愚癡を化す
世間に行ずること水月の如し　無進の行者は一切樂なり
種種方便ある第一義　生死に著せず堅牢の想あり
微細の寂靜法を覺れる　無想の行者彼れ安樂なり

爾時(あるとき)、世尊舍利弗を讚じたまふ。「善き哉、善き哉、汝の深慧行能く法輪を轉ず。汝舍利弗是の耆闍崛山所有の比丘諸菩薩等の禪定に入る者を勅して集會せしめよ」。舍利弗佛に白して言く、「世尊、我れ任に堪へず。何を以ての故に。是の如き等の者は皆是れ威德ある大龍なればなり」。爾時(そのとき)世尊卽ち身光を放ちたまふ。所放の光明遍ねく無量無邊の諸佛の世界を照すに、諸の菩薩悉く皆耆闍崛山に來詣し、到り已りて皆虛空の中に住す。此の諸の比丘及び諸の菩薩は禪定より起ちて佛所に來

【一】麗本「美」に作る。三本並に宮本に依る。
【二】諸本「愛」に作る。宮本に依る。

亦有起に非ず不起に非ず　彼れ命を見ず安樂を受けむ
諸の衆生に於て憶想無く　是の諸の衆生は衆生に非ず
諸の衆生に於て想聲無く　我見無くんば彼れ安樂ならむ
智は衆生を分別せず　是れ無諍の法界を得む
丈夫一切の想を分別して　異覺無くんば彼れ安樂ならむ
常に施と持戒に善住し　常に行じ覺り了りて慳垢無し
無染汚の法中に住し　高下の見無くんば彼れ安樂ならむ
彼の忍得者甚だ勇猛なり　憎愛二見なる者有ること無し
精進及び懈怠を得ず　思想無ければ彼れ安樂ならむ
禪定を修行して堅固に住し　亦是の散亂を思惟せず
是れ善く禪定の法を知る　禪想無くんば彼れ安樂ならむ
憶想有ること無く智慧無し　亦無智に非ず自在を得たり
亦聰慧に非ず愚癡に非ず　異想無くんば彼れ安樂ならむ
若し空野聚に在らむも亦然り　彼の一切處に平等に行ず
村聚の中に於て厭惡無し　空處憍ること無くんば彼れ安樂ならむ
乞食の事に於て悉く具足す　亦終に乞食の想有ること無し
亦未だ曾て我が乞食を想はず　乞想無ければ彼れ安樂ならむ
若し棄てたる糞掃衣有らんには　收め取り聚集して以て身を覆ふ
亦弊衣の想を受畜すること無し　他を輕慢せずんば彼れ安樂ならむ
善逝の讃むる所佛の聽許する(ところ)　善く受持して三法衣を用ふ

佛說象腋經

宋罽賓の三藏曇摩蜜多譯す

是の如く我れ聞けり。一時佛王舍城耆闍崛山に在して、大比丘衆五百人と俱なりき。菩薩六萬、衆に知識せられたり。陀羅尼樂說無礙を得、說法無二にして、不可思議の神通を成就せり。其の名を無滅進意菩薩・過名聲威德藏菩薩・寶月花菩薩・大雲雷燈菩薩・無量觀出一切世菩薩・山勇菩薩・樂喜生菩薩・淨智無礙光明菩薩・解度衆生心菩薩・金剛得堅菩薩・解一切衆生語離菩薩・梵音勇威德菩薩・名聲而威無礙覺菩薩・一切善根寶聚菩薩と曰ひき。文殊師利童子と是の如きを上首とせる六萬の菩薩と俱なりき。爾時、大德舍利弗日晡時に於て禪定より起ち、佛所に來詣せり。爾時に世尊異樹下に坐して、寂靜三昧に入りたまふ。爾時、大德舍利弗、遙かに世尊の威儀寂靜なるを見て、即疾に草を取り、敷いて以て座と爲し、跏趺して坐す。正身にして坐するの頃、爾時、大德舍利弗即ち坐處に於て是の思惟を生ず。「未曾有なり、如來の是の如き寂靜の行、安樂の本、衆生を安樂にす。亦一切法性三昧を知れり」。爾時世尊三昧より安詳として起ち、謦欬の聲を發したまふ。爾時舍利弗如謦欬の聲を聞き、歡喜樂を受け、亦悲心を得たり。即ち佛所に往き、到り已りて、佛の前に住立し、佛を敬禮し已りて偈を說いて言く、

若し衆生有りて分別無く　乃至法に於て憶想せず
三昧に入りて常に世に行ぜば　常に是の如きの法を忍樂せむ
衆生の差別有るを見ず　幻性に同じく解脫者ならむ
諸法は虛空の體なりと分別せば　彼れ我想無く安樂を受けむ
和合中に於て想著無く　愚癡物所の想有ること無し

本經の陀羅尼は次の如くである。

河蘭。波蔡羅。毘尼那。修喝[一]吔。修復多。阿尭蔡。毘畔[二]那醯。呿伽留他。摩移宿伽。阿尭那。折他。那頼陀。蜜羅。修蜜囉。素囉醯陀。薩婆多羅。賸伽賸伽。喝吔猶呵。摩仇摩伊呵。

西藏譯相當の陀羅尼は次の如くである。

tadyathā alata vitāla vivina atirtha abhida anuṭa vibramha hanikha gar udamāyāsukha anāta jalada nada mitra amitra dsotrahita sarvatrala amga mamga arthayuta sabramha iśa.

尚ほ竺法護の無希望經には此の部分に譯語を當てゝ居る。法華經の場合も然うで、羅什は音譯してゐるに對し、彼の正法華は陀羅尼を翻譯してゐる。蓋しこれは彼の常套格なのであらう。

無挃。離僞[三]。以律[四]捨。善度。下有實。無有處。離迷惑。尊虚空。[五]荒如幻。無所生。不可得。慈善慈。愍衆生。一切下。求徑路。義精進。斯無梵[六]。此神咒。

今敢て是非取捨を加へず。後日眞正の梵語原音が還元せらるゝ日を俟つことゝする。

【一】 麗本「怛」に作る。今三本並に宮本に依る。
【二】 三本並に宮本「尼」に作る。
【三】 麗本「爲」に作る。今三本並に宮本に依る。
【四】 三本並に宮本「舍」に作る。
【五】 三本並に宮本「嚥」に作る。
【六】 麗本「楚」に作る。今三本並に宮本に依る。

昭和七年二月

譯者　泉　芳　璟　識

べきであらう。竺法護譯に「喩象」とあるは當らず偏らずと云ふべきであらう。四卷楞伽に求那跋陀羅の「縛象」と譯出せるものはこの Kaksyā を「帶」の意義に取つてその動作から「縛」といふやうな成語を作つたものか。西藏譯に glaṅ-boḥi rtsal とあるは「象勇猛」の義で決して「腋」でも「胸圍」でも無い。他に glaṅ-boḥi-beṅ とせるものは「縛象」に相當する。この西藏譯の「象勇猛」それから竺法護譯の別題象歩經とあるものから惟すと、或は Hasti-vikrānta-vihramin と云ふやうな經名も存在したのか、單に Kaksyā からは到底この譯語は出て來ない。

本經と楞伽經中の引用について

楞伽經の遮肉品には本經及び其の他の經典の名を出して居る。卽ち「象腋と大雲と涅槃と央掘摩と及び此の楞伽經に我れ皆斷肉を制せり」とある。本經にさまで斷肉が主張されてゐるわけでもないが、只後段陀羅尼章句に通達せんと欲せば淨行を好みて肉を食はざれとあるだけであるが、兎もかくこれが楞伽經の一品に引用されてゐることは相當にこの經典が著名であつたことを物語るもので、翻譯名義大集（Mahāvyutpatti）の一切經名の下にもこの經が擧げられてゐる。

本經の翻譯及び年代

本經は罽賓卽カシユミールの三藏曇摩蜜多 Dharmamitra によりて譯出された。彼は劉宋の代、元嘉元年に支那に來り、同十八年に至る間（西紀四二四―四四一）、虛空藏神咒經等の十二部を譯した。又本經はこれより先支那翻譯界の巨匠の一人竺法護によりて無所希望經（或は單に無希望經）の名によりて譯出されてゐる。彼は西晉の代、武帝の太始二年より愍帝の建興元年に至る間（西紀二六六―三一三）に夥しい經典を翻譯してゐる。本經も此の間に譯されたものである。今曇摩蜜多の譯に於て晦澁通じ難き部分は竺法護の譯を異譯の名に於て脚註に對照し、以て通讀の便に供することゝした。

本經の陀羅尼と其の原音

本經には後段に陀羅尼がある。陀羅尼は通常漢字を以て音を寫してあるが、その漢字によりて梵語の原音を知ることは極めて困難なことに屬する。本經の陀羅尼もやはり其の類で、梵語原典を見ない限り、到底推定は許さるべくもない。仍て今試みに本經の西藏譯からこの部分を抄出して比較對照して置く。西藏譯は梵音を比較的忠實に保存してゐるのが常であるから幾分梵語原音の還元には役立ち得ると信ずる。

佛說象腋經解題

一　經の梗概

舍利弗世尊の寂靜三昧を感嘆し偈を說く。偈は「安樂」の語を以て句を疊む。世尊舍利弗を讃め、一切衆を集めしむ。舍利弗任に堪へずと云ひて辭す。世尊仍て大光明を放ち衆會來集す。世尊文殊師利童子を見て微笑す。文殊師利所由を問ふ。佛答へて過去諸佛此の處に象腋經を說けりと云ふ。阿難更に問ふ。佛阿難に是の經の尊重すべきを宣し、文殊師利の像を現ず。文殊師利法を問ふ。佛兩重の六法を說く。次に虛空行の說あり。是の時六十增上慢の比丘は座を起ちて去る。舍利弗これを留めて座に還らしめ、佛に說法を請ふ。此に如來を見んとするは邪見なりの說、邪見正行の說、施に果報無しの說、一切法は幻性を具する等の說あり。說法了る時、大衆證果を得、增上慢の比丘も心解脫を得て、今日以往外道を師とし、三歸依を捨てん云云と宣言す。大衆驚愕の色あり。舍利弗これを訊問して彼等比丘その理由を說明す。世尊讃めて法は得べき無しと云ふ。文殊師利その得の義を問ひ、佛これを無生法忍なりと說き、更にこれを廣說して偈を述ぶ。次に此の經受持者の二十の功德の列擧あり。過去の受持者金剛幢菩薩とその陀羅尼あり。佛阿難に受持を勅して一經竟る。

本經の要旨と特徵

本經は空法不實法を說くを要とし、これを聞きて菩薩たるものは決して動亂せぬといふその堅固不拔の立脚地を高潮せんとするのである。「若し衆生ありて此の經を解するものは大衆力の如し」とある所から象腋の名を得たものである。或は異譯の無所希望經とも云ふのは「若し衆生有りて希望を懷かず」云云とある所から名を得たもので、これは分別憶想の無い境地を指すものである。

名稱に就ての考察

象腋經の原語は Hasti-kakṣyā であるが、Kakṣyā なる語は「胸圍」若くは「帶」の義であつて、「腋」とは聊か一致しないかの如くである。飜譯者の意は蓋し「胸圍」を以て擬せしものか。經中旣に象腋經の語も見え、十卷楞伽に菩薩流支亦「象腋」と譯してゐる。七卷楞伽に實叉難陀は「象脇」の譯語を用ひてゐるが、やはりこれは「胸の周圍」といふ意味に取るべきもので象の胸圍の巨大にして强きを以て菩薩の牢固たる立脚地を喩へたと見る

るを執持し、左手に復た恒沙の世界の中に七寶を滿てたるを持せむ。若くは晝三時、夜三時、持用て布施せむ。是の人懈らずして恒沙劫を經む。阿難よ、是の布施の功德も、若し是の經典を書寫し、受持し、讀誦する者有らば得る所の功德は復是よりも過ぐ。是の故に阿難よ、汝今是の經を受持讀誦し、諸の法器をして普ねく聞知することを得しめよ。是の諸人等則ち如來祕密藏法を受持すと爲す」。佛此の經を說き已りたまふに、無量志莊嚴王菩薩、大德阿難、大德迦葉、一切の大衆、天人阿修羅等、佛の所說を聞きて、皆大に歡喜せりき。

大方廣如來祕密藏經　終

性は是れ心の實性、心の實性は即ち是れ一切法の實性、覺は是れ一切諸の實性の故に。覺菩提と名く」。時に諸華臺所有の菩薩佛足を頂禮して是の如きの言を說く、「世尊、我等若し此の大地に至らん時、是の無量志莊嚴王菩薩乃し當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし」。是の時阿難白して言く、「世尊、是の諸華臺衆の菩薩等幾時か當に此の大地に至るべき」。

佛阿難に告げたまはく、「是の諸の菩薩下方界分の恒河沙等の諸佛如來の所に於て、是の如來祕密藏法を諮受請問し、聞き已りて義を解せり」。阿難白して言く、「是の無量志莊嚴王菩薩幾時か當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずべき」。佛阿難に告げたまはく、「是の賢劫の中に千佛已に出で當に出づべし。阿難最後の如來を號して盧志と名く。阿難よ、盧志如來應正遍覺諸の聲聞衆、多く諸佛の聲聞僧に先んず。阿難よ、是の盧志如來乃し當に是の無量志莊嚴王菩薩に無上道の記を授けて云ふべし。無量志莊嚴王菩薩は、九十八劫を過ぎて、當に成佛して莊嚴王と號す。亦是の界に於て無上道を得む。是の莊嚴王如來此の地に坐する時、是の華臺中の諸菩薩等爾も乃し地に至る。復當に此の如來密藏法を聞くべし。阿難よ、爾時、是の莊嚴王如來の世界を作無量功德莊嚴と名く。阿難よ、一切欲界の諸天の宮殿等も彼の莊嚴王の佛國土の中には一寶臺のみ。是の娑婆世界爾時、當に妙好色土と名くべし。阿難よ、莊嚴王如來の壽命百劫なり。佛滅度の後、正法世に住すること滿足十劫なり。純ら菩薩僧のみ」。是の莊嚴王如來の記を說き已るに佛上の華蓋便ち沒して現ぜず。無量志莊嚴王菩薩現に佛前に住す。是の時阿難白して言く、「世尊、此の法を護持し、久住を得しめ、閻浮提に於て增廣流布せしめよ。善丈夫をして能く如來密藏法を持せしめば、功德を成滿して手づから是の法を得む」。爾時、世尊阿難に告げて言く、「假令四大は其の性を變易せむも、終に是の善丈夫等をして是の法を聞かずして命終を取らしめざれ。阿難よ、若し書寫し、受持し、讀誦せば、當に知るべし、是の人即ち是れ如來の持する所、阿難よ、若し人有りて能く右手に恒沙の佛界の中に七寶を滿てた

生なく、滅無く、行無し。是を盡法と爲す。染無く、著無く、善不善無く、本性清淨なり。一切諸法本性常に淨なりと解知信入す。迦葉よ、我れ彼れ惡道に趣向すと說かず。惡道の果無し。何を以ての故に。迦葉よ、法は積聚無し。法は集無く、惱無し。迦葉よ、一切諸法の生滅は住せず。因緣和合して生起するを得。起り已りて還た滅す。迦葉よ、若し心生滅せば一切の結使も亦生じ已りて滅す。若し是の如く解せば犯處を犯すこと無し。迦葉よ、若し犯住有らば是の處有ること無し。迦葉よ、百千歲の極めて大なる闇室に燈明然えず。是の極闇室に門窓牖無し。乃至針の如き鼻孔も有ること無し。日月珠火所有光明能く入るを得る無し。迦葉よ、若し闇室の中に然火燈明せんに、是の闇頗る能く是の如きの說を作さむや。我れ百千歲住す。今應に去るべからずと」。迦葉白して言く「不なり、世尊、當に燈を然さんとする時、是の闇已に去る」。

佛の言く「是の如く迦葉よ、百千萬劫に造る所の業障、如來の語を信じ、緣法を解知し、觀察行を修し、定慧を修し、無我・無命・無人・無丈夫等と觀ずるに、我れ是の人を說いて名けて無犯・無處・無集と爲す。迦葉よ、是の事を以ての故に、當に知るべし、羸劣の諸煩惱等は智慧の燈照の勢には住すること能はず。

「迦葉よ、是の說は如來密藏住處無上にして、大師子吼して淨法輪を轉じ、天人魔梵の轉ずる能はざる所なり。迦葉よ、若し衆生有りて是の如來祕密藏法を信じ、是の如く受持し、是の如く觀察せば、彼れ當に是の如く大師子吼すべし」。是の時大德阿難白して言く「世尊、是の無量志莊嚴王菩薩自から其の身を以て如來を供養せり。當に何の身を以て菩提道を覺らむ」。時に華臺中の諸菩薩等阿難に問うて言く「意に於て云何。身を以て菩提を覺るべきや。阿難よ、斯の觀を作す勿れ。當に身心を以て菩提を覺るべしと」。阿難報へて言く、「諸の善丈夫よ、若し身心菩提を覺るに非ずんば、當に何等を用てか菩提を覺せむ」。諸菩薩の言く、「大德阿難よ、身の實性は是れ菩提の實性、菩提の實

犯と爲す。迦葉よ、若くは少不善、若くは其の堅住・堅執・堅著、一切我れ說いて之を名けて犯と爲す。迦葉よ、五無間罪、若くは堅住、堅執、堅著ならずして見を生ずる者を我れ彼を名けて犯と爲すと說かず。况んや復餘の小不善業道をや。迦葉よ、我れ不善法を以て菩提を得ず。亦善法を以て菩提を得ず。迦葉よ、若し不善を以て菩提を得ば諸の小凡夫も亦菩提を得む。若し善法を以て菩提を得ば、一切の燒かれたる草木叢林も應に還た生長すべし。迦葉よ、我れ今汝に問ふ。如來は云何が菩提を得たる」。迦葉白して言く、「佛は是れ法の本なり。世尊は是れ眼なり。世尊は是れ依なり。世尊の說の如く、當に共に奉行すべし」。佛の言く、「迦葉よ、煩惱の因緣より生ずるを解知するを菩提を得と名く。迦葉よ、云何が因緣より生ずる所の煩惱を解知すと爲す。是れ無自性より起れる法なり、是れ無生法なりと解知す。是の如く解知するを菩提を得と名く。迦葉よ、但だ假名字を菩提を得と名く。而も是の菩提は文字言說を以て得られず。若し文字無く、言無く、說無ければ菩提を得る無し。是れ第一義なり。迦葉よ、汝の所問の如き、十惡業道何者をか重しと爲すならば、[九]迦葉よ、人の父有りて緣覺道を得たらんに、子父の命を斷たば、殺中の重と名く。三寶物を奪はゞ、盜中の重と名く。若し復人有り。其母出家して阿羅漢道を得たらんに、共に不淨を爲さば、是れ婬中に重し。若し不實を以て如來を誹謗せば、是れ妄語中に重し。若し兩舌語をもて賢聖僧を壞せば、是れ兩舌中に重し。若し聖人を罵らば是れ惡口中に重し。言說もて求法の人を壞亂せば、是れ綺語中に重し。若し五逆の初業ならば是れ瞋恚中に重し。若し持淨戒の人の物を劫奪せんと欲せば是れ貪中に重し。邪見中の重之を邊見と謂ふ。迦葉よ、此の十惡道是を最も重しと爲す。迦葉よ、如來は是の十惡業是を最も重しと爲すと知りたまふ。迦葉よ、若し一人有りて十惡を具足せむ。迦葉よ、是の惡衆生若くは如來の因緣法を說きたまふを解知せむ。是の中に衆生、壽命有ること無く、人無く、丈夫無く、我無く、年少無く、作業者無く、受者、起者無く、知者、見者無く、福伽羅無く、

【九】此の下梵文あり。大乘集菩薩學論梵本中に引用せらる。解題を見よ。

實なりとや爲ん、不眞實なりとや爲ん」。迦葉白して言く、「我が解說する所は眞實有ること無し。何を以ての故に。世尊よ、所有貪欲は不淨を以て對し、瞋恚は慈もて對し、癡は因緣もて對す。世尊よ、若し不淨是れ實ならば、則ち不實の貪欲を除く能はず。亦貪欲不淨觀を生ずるに非ず。[六]若し慈是れ實ならば卽ち不實の瞋恚を除く能はず。亦瞋恚慈觀を生ずるに非ず。若し愚癡是れ實ならば愚癡を起し已りて因緣對に非ず。亦因緣能く愚癡を除くには非ず。是の故に世尊、一切の結使及び斷結の法、二俱に不實にして、無物無定、成就有ること無し。是の故に不實の諸煩惱等習近不實にして便ち除去することを得。世尊、結使は去無し。何を以ての故に。若し除去有らば則ち去有りと爲す。若し已に去有らば則便ち來有り。是の故に世尊、一切の結使は無去無來、是の故に知る、諸の一切有爲は無來無去にして煩惱を離ると名く」。佛の言く、「迦葉よ、此の如來密藏は一切法本性清淨と說く」。爾時、大德摩訶迦葉白して言く、「世尊、是の十惡道佛の所說の如くんば其の性無垢にして本性淨なりや」。佛の言く、「是の如し、是の如し、迦葉よ、何を以ての故に。自在有ること無くして殺を犯す。親信すべき無くして盜を犯す。無主無護に非ずして邪婬を犯す。他を護らんが爲に非ずして妄語を犯す。調伏の爲に非ずして惡口を犯す。外道の邪[七]增を破壞せんが爲に非ずして兩舌を犯す。器に隨應すること無くして綺語を犯す。麁惡の敎無くして瞋恚を犯す。希望增上善根有ること無き、之を名けて貪と爲す。[八]自在者を將護すること有ること無く、意少く正言せずして邪見を犯す。迦葉よ、是の十惡道若し堅著せずんば我れ彼れを名けて有過と說かず。迦葉よ、是の十惡道若し堅著せずんば名けて不犯と爲す。是の如く迦葉よ、一切の煩惱若し堅著せずんば我れ無犯と說く。迦葉よ、諸の不著者を名けて離見と曰ふ」。迦葉白して言く、「世尊、十惡業道何者か最も重き」。佛の言く、「迦葉よ、是の十惡業道殺及び邪見を名けて最も重しと爲す。迦葉よ、在在處に隨ひ、諸惡不善若くは堅住ならず、若くは堅執ならず、若くは堅著ならず。一切我れ說いて名けて不

【六】この一句三本及び宮本に依る。麗本缺く。

【七】「增」は「慢」なるべし。

【八】「無有將護自在者意少不正言而犯邪見」意義通じ難し、假りにかく讀む。

我れ是に惡道果有りと說かず。迦葉よ、是を如來祕密藏法と名く。應に當に密持して善好く守護すべし。應に彼の見著者の前に在りて開示演說すべからず。是の人をして所見を重增せしむる勿れ。「迦葉よ、云何が解爲る。謂く、如來の一切法を說きたまへるを解す。云何が縛爲る。言ふ所の縛とは所謂貪著なり。云何が解爲る。謂く貪著せず、二を分別せず。迦葉よ、我れ今是の無著者を名けて犯と爲すと說かず。何を以ての故に。迦葉よ、羸劣の煩惱は虛妄より生ず。迦葉よ、若し其の實ならざるは以て生ぜざるが故に、之を名けて實と爲す。迦葉よ、我れ今、喩を引かむ。不實妄想の事を示さんが爲の故に。迦葉よ、猶し人天芥子ばかりの火を持ちて吹いて增長せしめんに、漸く諸物を燒いて大火聚と成るが如し。是の如く迦葉よ、愚小凡夫少不正思惟妄念を起して、諸見に堅著し、隨所に妄想し、是の諸處に隨ひ、結使を增長す。迦葉よ、若し火聚有り。須彌山の如くにして所依有ること無からむ。迦葉よ、意に於て云何。是の火の如きは當に增長すべしとや爲ん、當に漸滅すべしとや爲ん」。迦葉白して言く、「是の火當に滅すべし。更に增長せじ」。佛の言く、「迦葉よ、不實妄想諸煩惱等、若し更に起さず、若し更に著せず、更に妄想せず、更に嬉樂せず、更に分別せずんば、此れ當に漸滅すべくして增長せじ。迦葉よ、是の事を以ての故に、應に當に羸劣不實の妄想煩惱は是れ眞實ならず。迦葉よ、猶し人有りて毒家舍に至り、竟に毒を服せず、自から驚怖を生じ、大苦痛を受けて聲を發して大に呼ばむ、我れ今毒に遇へり、我れ今毒に遇へりと。善良醫有りて不實の藥を持して是の病人をして不實の病を除きて衆苦を離るゝを得しめんが如し。迦葉よ、意に於て云何。若し是の良醫實藥を持して是の人に與へんには、是の人活くるや不や」。「不なり、世尊、是の人實に毒を服食せず、自から毒想を生ず。須らく不實の藥を以て之を療治すべし」。佛の言く、「是の如く、迦葉よ、諸の小凡夫不實の煩惱に惱まさる。是ハ故に如來不實の法を說く」。爾時迦葉白して言く、「世尊、如來の說法は不眞實なりや」。佛の言く、「迦葉よ、汝が解說する所、是れ眞

心を以て、若し能く心を生じて如來を緣念せんも、尙ほ大利を得。況んや淨心の者をや」。
佛の言く、「迦葉よ、汝の言ふ所の如し。若し衆生有りて如來に起念し、如來を思憶し、如來を觀緣せんに、是等一切悉く皆當に涅槃の果證を得べし」。大德迦葉白して言く、「世尊、我が佛の所說の義を解知する如くんば、寧ろ如來に於て不善業を起さむも、外道邪見者に於て所施をもて供養を作すこと非じ。何を以ての故に。若し如來に起す所の不善業も當に悔心有るべし。究竟して必ず涅槃に至ることを得む。外道の見に隨はゞ當に地獄餓鬼畜生に墮すべし」。

佛の言く、「迦葉よ、汝の言ふ所の如し。迦葉よ、設し人天有りて赤栴檀を罵り、手を以て打搥し、速かに撩めて地に棄てむ。迦葉よ、意に於て云何。是の如きの人に何等の香か有る」。迦葉白して言く、「而も是の人には栴檀の香あり」。「是の如く迦葉よ、若し衆生有りて如來を眼見し、耳に聞き、口に宣說せば、當に知るべし、是の人に解脫の香有り。迦葉よ、人有り。糞汚を執把し已り、諸の伎樂、一切の衆華を以て之を供養せんに、是の如きの人に何等の香か有る」。迦葉白して言く、「世尊、是の人唯だ糞穢の臭惡有り」。「是の如く、迦葉よ、其れ諸の外道に親近し、恭敬し、供養する有らば、當に知るべし、是の人も亦復是の如し。諸見の畏、地獄・畜生・餓鬼等の畏有り。迦葉よ、若し善男子、善女人、如來の大慈悲有るを信じ、慇重敬信し、慢を除き、憍らず、貪瞋と愚癡と有ること無く、意志決定して業報を解知し、質直無諂にして、幻僞有ること無く、如來の所に於て淨信心を得、諸根無貪にして、諂曲有ること無く、志意不壞にして、淨信成就し、佛の大悲を信じ、衆生を利すること多く、佛の本行を信じ、如來を信じ、一切諸の衆生等を捨てず、是の如きの心有り、是の如きの意有り、設し食と病藥所須に乏しければ、未だ道果を得ず、正位に入らず、若し所須を得ば、能く道果を得、正位に入る。若し其れを得ざれば、飢渴羸劣にして、善を修する能はず。道果を得ず。是の人若し如來の佛物・衣服・飲食・病藥所須を取りて自から之を服食せんに、迦葉よ、

の本願淨きに出るが故に。所願皆成ず」。

爾時大德摩訶迦葉白して言く、「世尊、我が佛所說の義趣を解するが如くんば、若し如來に於て不善業を起さんに、是の衆生等亦復惡道に墮するを畏れざらむ」。佛の言く、「是の如し、迦葉よ、若し衆生有りて大悲の如來に於て信敬心を生じて、解入進趣せむ。若くは佛現在せむに、若くは滅度の後、若くは如來及び塔に、若くは幢・幡蓋・華鬘・塗香、及び末香、若くは寶、若くは衣、及び諸の飲食を奉施せむ。種種所有の諸物に隨つて、若くは取り、若くは食し、若くは自から取り、若くは敎へて取らしめむ。迦葉よ、我れ是の人所犯有ること無しと說く。迦葉よ、貧を最苦と爲す。恭敬せられざるが故に、劫奪を作すが故に、畏懼無きが故に、信敬せられざるが故に、業を解せざるが故に、報を慮らざるが故に、貪求を以ての故に、調伏し難きが故に、貪瞋癡の故に、無慚愧の故に、兇橫惡の故に、如來大慈悲有るを思はず。如來多く衆生を利するを信ぜず。如來の塔物乃至一線を取り、若くは自から取り、若くは人をして取らしめむ、我れ是の人を說いて少犯と名けず。我れ彼れを惡道に墮せずとは說かず。迦葉よ、若し衆生有りて、如來の物及び佛塔の物に於て、若くは自ら取り、若くは人を敎へて取らしめむ。如來今悉く是の人を知り、悉く是の人を見たまふ。當に惡趣に墮すべし。又此の緣を以て當に斷結を得べし。何を以ての故に。是の人の心行佛に護らるゝが故に。迦葉よ、若くは如來に於て、若くは如來の塔(に於て)、心を生じ、念を緣じて乃至少許の悔心を起さむ。迦葉よ、是の衆生心自から當に改悔すべし。如來に悔心を生ずるに緣るを以ての故に、生死[五]一劫の罪を背棄し、結使微綏ならむ。迦葉よ、假ひ人天有りて地に墜墮せむ。大地に墮ち已りて還た大地に依りて起住するを得む。是の如く迦葉よ、是の衆生等如來の所に於て不善を生ずるが故に、惡道に墮在し、惡道に墮し已りて還た如來に緣りて速かに出離を得。云何が名けて如來に緣ると爲す。如來の所に於て慇重心を生ずるなり」。爾時、大德迦葉白して言く、「世尊、是の人是の惡賊の

【五】麗本「切」に作る。今三本並に宮本に依る。

の菩薩の啓請する所の如き者を說きたまへ」。爾時、世尊大迦葉に告げたまはく、「汝今善く如來密藏の少許の法分を聽け。何を以ての故に。若し一劫に於て此の法を演說するも窮盡すべからず」。迦葉白して言く、「是の如し、世尊よ」。爾時迦葉及び諸大衆教を受けて聽く。佛の言く、「迦葉よ、意に於て云何。汝我が菩薩道を行ぜし時、捨る所の手足頭目耳鼻、皮肉骨髓血及び妻子、略說、乃至一切の財物、處處菩薩を逼惱する者を謂へ。是の諸の衆生地獄畜生餓鬼及び諸惡趣に墮せず。何を以ての故に。本、菩薩たりし時志意淨きが故に。及び大誓願淨戒聚の故に。諸の衆生に於て大悲純至し及び堅忍の故に。大慈を以ての故に。大功德法の故に。牢强精進にして定んで大乘に向ふが故に。自心淨きが故に。大願豐饒の故に。自樂を嬉まざるが故に。其れ衆生有りて菩薩を觸嬈し之を毀罵するもの、菩薩の德の故に、惡道に墮せず。迦葉よ、我れ今喩を引いて以て斯の義を明かにせむ。迦葉よ、猶し病人に良醫の藥を授くるが如し。而も是の病人是の藥と良醫とを毀罵せむ。先づ毀罵し已りて後に乃ち藥を服せむ。迦葉よ、汝の意云何。藥罵を以ての故に藥と爲らざるや。病除かざるや」。「不なり、世尊、復毀罵すと雖も、藥勢を失はず而して能く病を除く」。「是の如く迦葉よ、菩薩は彼の藥及び良醫の如し。恭敬せずして種種觸惱すと雖も、然も是の菩薩純淨にして志意缺減有ること無し。迦葉よ、大寶珠の衆德所成なるが如し。其の性純淨にして、諸の瑕穢を除く。若し人天有りて是の寶を毀罵し、而も恭敬せず。迦葉よ、意に於て云何。是の大寶珠毀罵を畏るゝが故に、寶力を失ふや」。「不なり、世尊」。佛の言く、「迦葉よ、此の淨寶珠猶し彼の菩薩の志意淸淨なるがごとし。一切の衆生恭敬せずと雖も、所有功德折減有ること無し。迦葉よ、大油燈の如し。假令人天而も之を毀罵せむに、毀罵を以ての故に、便ち闇冥なりや。不なり世尊。佛の言く、迦葉よ、菩薩の志意純淨なること是の如し。復觸惱すと雖も、其の性を失はず。迦葉よ、是の事を以ての故に、當に知るべし、衆生菩薩を觸嬈する者有りと雖も、惡道に墮せず。何を以ての故に。是の菩薩

【四】迦葉に對して如來祕密藏法を說く。

此の無上の捨を以て　願くは導師の如くならしめよ
財を二足尊に供ふ　此の事難と爲さず
云何が希有と爲す　謂ふ所の身供養たり
我れ今無等に供し　自身を遍眼に奉る
世の人天の爲めに供すること　大智師子の如くならむ

爾時、無量志莊嚴王菩薩卽便ち身を放ちて如來の上に投ぜり。爾時に當り、佛の神力を以て未曾有の華・異華・異色、甚だ鮮淨に、極妙端嚴なるものを如來の上に散じ、是の菩薩の身又地に墜ちず、亦空に現ぜず。此の諸華等佛の身上に至りて卽ち復還踊りて虛空の中に住し、大華蓋と成り、四天下を覆へり。是の華蓋の中に華貫を垂懸し、大光明出づ。是の光明の中に、妙蓮華を現ず。是の蓮華の上に菩薩有りて坐す。無量志莊嚴王の如し。是の菩薩等華臺より起ち、佛足を頂禮して、同聲に請うて言く、「唯願はくは世尊、如來祕密藏法を說いて斷絕せしむる無かれ。及び如來密藏眷屬を護りたまへ」。

爾時、大德摩訶迦葉、希有心を生じ、未曾有なりと歎じ、白して言く、「世尊、是の無量志莊嚴王菩薩身を以て如來を莊嚴し供養し、身を以て如來を供養し已りて、是の菩薩の諸莊嚴事を現ず。世尊、願はくは一切諸の衆生等をして是の如きの莊嚴の身を得せしめよ。願はくは如來をして常壽にして世に住せしめよ。世尊、我等今快く大利を得たり。乃し是の善大丈夫を見、其の說法を聞くを得たり」。爾時、佛摩訶迦葉に告ぐ、「汝今是の無量志莊嚴王菩薩を見るや否や」。「已に見る、世尊よ」、「迦葉よ、是の善男子恒河沙等の佛所に於て、恒に是の如きの如來祕密藏法を諮請することを得たり。賢劫諸佛の所、亦當に是の如きの如來祕密藏法を請問すべし」。

爾時、大德摩訶迦葉復佛に白して言く、「善き哉世尊、唯願はくは敷演して是の如來祕密藏法、此

我れ世間を攝護せむ　　報を望まず道を得む

「善男子よ、菩薩二法有り。是れ所應の處。何等か二なる。常に諸佛に値ふ。亦常に菩薩乘者に値遇す。是を二と爲す。而して頌を說いて曰く、

二種の所應處　　是の處名稱を增す
諸如來に値ふことを得ると　　菩薩に識知せらるゝと

「善男子よ、菩薩二法有り。應に修すべからざる所。何等か二なる。聲聞乘者と願行を與にし、而して共に同じく止まらず。諸有の獨處宴默を驚畏せず。是を二と爲す。而して頌を說いて曰く、

修行者と共に同じく　　止住せざれ
諸趣の依止　　宴寂の處を驚畏せざれ

「善男子よ、是を初入如來密藏根本句と名くるなり。菩薩若し是の初根本句に入れば、是の菩薩能く如來の祕密藏法を成就す。世尊入如來密藏初句法を說く時、六萬の衆生及び天と人と無上正眞道の心を發し、十千の菩薩無生法忍を得、五百の比丘諸法を受けず。永く諸漏を盡して、心解脫を得たり。時に此の三千大千世界六種に震動し大光普ねく照して人天の伎樂鼓せざるに自から鳴る。人天阿修羅等、同聲に三たび是の如きの言を作さく、「其れ衆生有りて、是の如來密藏法を聞くを得ば、快く善利を得む。若し書寫し、受持し、讀誦し、說の如く修行する有らば、是等の衆生皆當に是の如きの如來祕密藏法を失はざるべし」。

爾時、無量志莊嚴王菩薩是の如來密藏法を聞き已りて、即ち是の念を作さく、「我れ今當に何等の供具を以て、如來應供正遍覺を供養すべき。復是の念を作さく、外物は捨て易し。內事は捨て難し。我れ今當に自身を以て如來世尊に供し奉らむ」。即ち虛空に昇りて、而して偈を說いて言く、

我れ今　[三]遍覺に奉るに　　自身を以て供養す

[三] 麗宋本「獨」に作る。今元明本に依る。

自から稱擧せず他を輕んぜず　造る所の諸惡を悔いて作らず
憍慢及び慢慢を生ぜず　其の心端直にして善行を修す

「善男子よ、菩薩二法有り。端直速疾なり。何等か二なる。若し所問有らば實の如く答ふ。先に見る所の事覆藏する所無し。是を二と爲す。而して頌を說いて曰く、

問の如く而も演說し　先の所見を藏さず
寧ろ身命を捨つるも　終に妄語を說かず
是の法に正直なる　是を賢善根と爲す
彼れ質直を得て　疾に勝菩提を覺らむ。

「善男子よ、菩薩二法有り。諂僞有ること無し。何等か二なる。多く利を獲と雖も歎德を欲せず。利養を得ざるも自から稱擧せず。是を二と爲す。而して頌を說いて曰く、

多く利養を得と雖も　己れが德を歎示せず
大智の欲せざる所を　是の不諂者は得たり
設ひ利養を得ざるも　此は是れ我が本業
他の過有るを欲せず　彼をして業を熟せしむる勿れ

「善男子よ、菩薩二法有り。他の報を望まず。何等か二なる。我れ應に當に一切衆生を利すべし。諸衆生の我れを利するには非ず。我れ當に覺知して菩提を爲すべし。是を二と爲す。而して頌を說いて曰く、

我れ應に衆生を利すべし　我れ彼等を荷擔せむ
我れ無爲道を求め　他の報を觀望せず
我れ有爲を求めず　我れ無爲道を求めむ

卷の下

「善男子よ、菩薩四障法有り。應に當に覺知すべし。何等か四なる。正法を毀謗す。祕して法を悋惜す。増上慢を懷く。無色定を修す。是を四と爲す。而して頌を說いて曰く、

菩提心に四有り　　[一]是を說いて障礙と名く
菩薩應に覺知すべし　　應に數數遠離すべし
正法を毀[二]謗すると　　多聞にして悋惜を懷くと
増上慢貢高なると　　不善にして禪定を起すと
是の故に正法を護り　　聞き已りて廣く流布し
慢を捨てゝ貢高無く　　不禪定を遠離せよ

「善男子よ、菩薩四法有り。所造速疾なり。何等か四なる。所作は智を以てす憍慢を以てせず。所有善根を菩提に回向して下乘に趣かず。一切の諸趣に染著を生ぜず。若し染著を生ぜば一向に專ら衆生を化せんが爲にす。晝夜三時に常に三分を修す。過惡業を滅して未來に造らず。是を四と爲す。而して頌を說いて曰く

造る所智を以てして慢を以てせず　　善を上道に廻して下乘に非ず
慧者諸有を信ぜず　　發心諸の衆生を利せんが爲にす
晝日三時夜亦爾り　　三分悔過して先惡を滅し
衆惡を造らず諸善を集む　　慧者是の如く善業を集む。

「善男子よ、菩薩四法の極好なる有り。何等か四なる。自から稱擧せず。他を輕んぜず。諸惡を遠離す。諸慢を捨除す。是を四と爲す。而して頌を說いて曰く、

【一】諸本「示」に作る。今明本に依る。
【二】麗本「誹」に作る。今三本並に宮本に依る。

の心火の如し。其の心風の如し。是を四と爲す。而して頌を說いて曰く、

其の心地水の如く　心亦風火の如し
作不作同等にして　道を得ずんば退かず

「善男子よ、菩薩四法有り。無我を解知す。何等か四なる。而も是の菩薩是の如きの念を作す。諸の衆生界我れ當に悉く是等の心行を知るべし。諸の衆生界我れ當に悉く是等の諸根を知りて說法を爲すべし。諸の衆生界我れ當に一切の煩惱を除斷して說法を爲すべし。無量の佛智我等覺了せむ。實に我が身能く此の法を覺るに非ず。亦我が心に非ず。我が諸の善根能く此の法を覺る。我有ること無き者を名けて菩薩と爲す。是を四と爲す。而して頌を說いて曰く、

衆生界の諸心　所行思議し叵し
煩惱妄分別　妄想是非を生ず
佛智亦是の如し　無量にして思議し叵し
我の所能佛智を　解了するに非ず
諸結使相違し　無色にして見るべからず
我れ應に悉く除斷して　解脫道を顯示すべし

「善男子よ、菩薩四法有り。怯弱有ること無し。何等か四なる。諸の善根を願ふ。方便慧を修す。信進念力を修す。無上道を信ず。是を四と爲す。而して頌を說いて曰く、

善喜悅充潤し　慧方便の衆香
信精進念力　斯に解脫道有り
是の如きの四慧法　法を持して厭有ること無し
厭倦者の依と爲り　亦世の爲めに救と作る

大方廣如來祕密藏經 卷上

ること無し。是を四と爲す。而して頌を說いて曰く、

慈を修して瞋恚無し　　悲を起して疲倦無し
法を以て歡喜を生じ　　煩惱を捨てゝ難無し

「善男子よ、菩薩四法の[二]無厭有り。何等か四なる。多聞にして無厭、德を集めて無滿、[三]阿練兒處にして無滿、廻向して滿足無し。是を四と爲す。而して頌を說いて曰く、

聞を求めて無滿福を集むるも爾り　　阿練兒處にして滿足無し
福德を廻向して滿足無し　　菩薩是の如く四の無厭あり

「善男子よ、菩薩四法の無足有り。何等か四なる。是の菩薩過去佛を念じて是の如きの念を作す。是の諸佛等皆悉く最勝菩提を修集せり。我れ今云何が修集せざらむ。未來佛を念じては我れも亦是等の數中に入在せむ。現在佛を念ずるに、是の佛を念ずる時、是の念を作す。此の諸佛等現に悉く一切の諸法を了知せり。是の諸の念の中に怯弱有ること無し。是を四と爲す。而して頌を說いて曰く、

過去佛を憶念し　　無怯心增長す
彼の佛勝道を得たり　　我れ云何が得ざらむ
未來の善逝を念じては　　我れも亦是の數中に有らむ
無怯にして倍す精進し　　我れ定んで是の數に在らむ
現在導師の本行　　菩薩時を念じては
我れ當に諸結を除き　　寂滅菩提を證せむ
一切法を解了して　　所住所欲の如くならむ
終に怯心を生ぜず　　倍す好勝進を生ぜむ

「善男子よ、菩薩四法有り。大乘を退せず。何等か四なる。其の心地の如し。其の心水の如し。其

【二】「無厭」「無滿」「無滿足」は同意義と知るべし。
【三】阿練兒處は āraṇya 空閑處、曠野、森林等の意あり。

「善男子よ、菩薩二法有り。一切智を首と爲して忍辱を修行す。何等か二なる。自から己れの樂を捨てゝ他に樂を施與す。是を二と爲す。而して頌を說いて曰く、

　自樂を求めず　常に利樂を他に爲す
　斯に是の如きの忍有り　佛菩提を首と爲す

「善男子よ、菩薩二法有り。一切智を首と爲して、精進を修行す。何等か二なる。菩提心を首と爲し、諸の衆生を捨てず。是を二と爲す。而して頌を說いて曰く、

　一切の白淨を行じ　上道心を首と爲し
　我と衆生を見ずんば　精進毀[二]滅無からむ

「善男子よ、菩薩二法を成就して、一切智を首と爲して禪定を修行す。何等か二なる。方便して禪に入り、本願力もて出づ。是を二と爲す。而して頌を說いて曰く、

　勇健者常に起ち　智者禪定を行ず
　諸の結使を降伏して　恒常に禪を得んと欲す
　本願力持して出で　當に世の導師と爲るべし
　斯に是の如きの德有り　禪定を獲得せむ

「善男子よ、菩薩二法を成就して、一切智を首と爲して智慧を有す。何等か二なる。自から諸見を離れ、一切衆生の見を斷ぜんが爲の故に智業を修行す。是を二と爲す。而して頌を說いて曰く、

　彼れ諸見を離れ　利を修めて衆生の爲めにす
　勝智現前する有り　智安隱にして道を行ぜむ

「善男子よ、菩薩四法を成就して、方便有り。何等か四なる。衆生を慈愍して而も爲に救を作す。大悲眞實にして疲倦有ること無し。喜樂して法に於て歡喜を生ずるが故に。煩惱を捨離して怯弱有

【二】諸本「減」に作る。今明本に依る。

釋梵及び護世を憙ばず　是れ諸の邪有悉く無常なり
聲聞及び緣覺を憙ばず　唯だ勝乘に[九]趣向する心を除く
世禪及び外道を憙ばず　身見及び邊見を憙ばず

「善男子よ、菩薩四法有り。一切智心を護る。何等か四なる。說の如く、住の如く、作の如くにして而も說く、諸の衆生に於て其の心平等なり。極欲心を生ず。善法を[一〇]護る。是を四と爲す。而して頌を說いて曰く、

說の如く住の如く作の如く說き　心を衆生に等しくし極欲道と
善住と是の四勝法に於て　常に道心を護りて忘失せざれ

「善男子よ、菩薩四法有り。是れ應に作すべき所。何等か四なる。多聞を修集し、多聞を思念し、所聞を說き、寂靜を退せざる、是を四と爲す。而して頌を說いて曰く、

斯に常に勤めて未聞を集め　是に常に修して多聞を思念し
是に常に勤めて多聞を說き　是に常に勤修して禪を得るを爲す。

「善男子よ、菩薩二法有り。一切智心を定めて布施を行ず。何等か二なる。意を專らにして定を念ず。捨して果報を望まず。是を二と爲す。而して頌を說いて曰く、

歡喜心を以て施與し　施し已りて喜を生じて報を望まず
一切悉く捨して菩提に向ふ　定心施し已りて菩提を證す

「善男子よ、菩薩二法有り。一切智を首と爲して淨戒を修持す。何等か二なる。諸の衆生に於て、侵害の心無く、毀戒者の所に大悲心を生ず。是を二と爲す。而して頌を說いて曰く、

毀害の心を生ぜず　等しく上中下に施し
倍增して悲心を　惡逆の衆生に生ず、

【九】麗本に「起何」とあるも、三本並に宮本により「趣向」と讀む。
【一〇】麗本に「謂」に作るも、三本並びに宮本に從ふ。

常に門を開いて大に施し　彼は相好の岸に到る
善く種種の施を好む　斯に當に淨土有るべし
常に憍慢有ること無し　恒に求めて佛智を集む
集聞して滿足すること無し　斯に利なる智慧有り
是の如き勝妙の相　方便して道根を起す
是れ巧心の轉ずる所　先の諸功德を集む

「善男子よ、菩薩四法有り。常に喜樂す。何等か四なる。佛を見るを喜樂す。餘の菩薩の勝精進なる者を見て喜樂を生じ、是の如きの言を作す、我れ當に何れの時か受記を滿足せむ。無上菩提道の記を受けては、我れ當に何れの時か諸衆生の前に諸佛の事を作さむ。佛の智慧に於て喜樂の心を生ず。是を四と爲す。而して頌を說いて曰く、

我れ當に何れの時か現たり佛を見む　彼れ喜樂を生じて佛を見んと欲す
餘の菩薩勝進者を見て　喜を生じて是の精進を修せんと欲す
我れ當に何れの時か德衆を滿じ　勝記を授かりて菩提を證するを得む
勝智某方に法王と作り　菩薩常に是の喜欲を生ず
我れ何れの時か世に佛事を作し　神通智を得て彼岸に到らむ
名聞普遍にして十方を供す　菩薩常に此の喜欲を生ず

「善男子よ、菩薩四法の不憙有り。何等か四なる。稱譽と不實の功德と諸の利養を得ることを憙ばず。諸の釋梵護世人天の富樂を得ることを憙ばず。一切の聲聞緣覺を憙ばず。一切の外道の得る所の勝供養事を憙ばず。是を四法の不憙と爲す。而して頌を說いて曰く、

名稱大利養を憙ばず　身命財に於て亦是の如し

是の一切智心　清淨にして常に照明す
常に是の中に住して　世間の頂禮する所
常に柔軟語を出し　速疾に教誨を受け
諸の師長に諮問す　一切智勝心
本性常に清淨にして　菩提心を守護す
白淨にして煩惱を離れ　最勝にして相違せず

「善男子よ、菩薩四法あり。菩提心を顯示す。何等か四なる。此は是れ我が住處なり。是の處に住し已りて開示し顯說す。是の心を知るに無量の德あり。亦他の爲めに是の如きの事を說く。是を四と爲す。而して頌を說いて曰く、

善く所住に住す　菩薩是に住し已りて
是の如きの法を稱揚す　菩提の妙心
道心德無量にして　及び稱揚等を發す
稱揚し已りて便はち　稱揚者の得る所を行ず

「善男子よ、菩薩四法有り。菩提心を教修せしむ。何等か四なる。謂く、麁獷ならず、言說柔軟に、麁澁有ること無く、顏色和悅なり。是を四と爲す。而して偈を說いて言く、

柔軟にして義を解說す　常に麁獷有ること無し
和顏にして是の法に住す　彼れ菩提心を教ふ

「善男子よ、菩薩四法有り。菩提の心善根を首と爲す。何等か四なる。相好を成滿し門を開いて大施す。淨佛土の行を修して種種に施す。智慧を淨めて常に憍慢を伏す。智慧を滿足して多聞を修集す。是を名けて四と爲す。而して頌を說いて曰く、

當に志念意を專らにすべし　極めて好く念念を專らにすべし
此は是れ諸法の本なり　一切世間の塔なり
常に菩提心を念じて　住意好く善住す
此は是れ十力の本なり　當に天世の塔爲るべし

「善男子よ、菩薩四法を具足せば一切智心然ゆ。何等か四なる。勢力通集して本行を失はず。五根力を滿じ、身心精進にして我有ること無し。勤行精進にして爲に他を利益す。是を四と爲す。而して頌を說いて曰く、

演說する所の四法　菩提心を熾然ならしむ
若し智慧を熾然ならしめば　煩惱を止息するを得む
勢力及び通達　是の如く勤めて精進し
安住して是を服し已り　莊嚴懈怠無く
斷に本誓を失はず　善く根力に安住し
身心疲倦無く　勤進して實身を求む
是の如きの熾然に住し　菩提心を增長す
彼の智慧是の如し　猶し日月の增長するが如し

「善男子よ、菩薩四法有り。菩提心を勸む。何等か四なる。大衆中に在りて菩提の心を稱揚し、讚歎す。其れをして菩提の心を開解せしむ。善く敎誨を受けて師長に隨順し、淸淨心を發す。一切の煩惱自在を得ず。是を四と爲す。而して頌を說いて曰く、

勸導して道心を唱へ　先づ此に住するを本と爲す
當に一切智有るべし　是を因を知る者と名く

如來に給侍し　好く尊重し恭敬し、
若し聞く所の法有らば　聞き已りて說の如く行ず
常に如來を讃歎し　信敬して之を愛樂す
面たり勝法を聞き已りて　智者は義に依る
常に功德を讃歎し　世の所有を調御す
彼れ常に勤めて依止し　諸佛を正念す
數數佛德を讃じ　常に勤めて己の行を觀じ
常に獨靜處を樂しみ　如來を思念し
善く是の如きの法を攝し　修行心亂れずんば
斯の人三昧有り　菩提心を忘れじ

「善男子よ、菩薩四法を具足して菩提心を憶す。何等か四なる。我れ要らず當に一切衆生の良福田爲らむ。我れ當に道を說くべし。我れ當に隨つて如來の所趣に趣くべし。我れ當に實に諸衆生の行を知るべし。是を四と爲す。而して頌を說いて曰く、

我れ當に世の勝福田と爲るべし　邪道に趣く者に正路を示し
善逝の趣く所我に趣くべし　我れ當に常に衆生の行を知るべし
菩薩大士此の德を念じ　常に菩提勝道心を念ぜむ
彼れ當に速疾に法王と成り　神通智を得て世に等しきもの無けむ

「善男子よ、菩薩四法を具足して一切智心を念ず。何等か四なる。志を專らにして意は是れ諸法の本なることを念ず。當に法の本を念ずべし。一切智心是れ世の寶塔たるを發す。當に寶塔を念ずべし。是を四と爲す。而して頌を說いて曰く、

色と財封と自在と　　眷屬とに放逸ならざれ
諸の有爲法を觀ずるに　　皆悉く是れ無常なり
不放逸にして慢を離れ　　菩提心を守護せば
斯の行法の功德　　菩提に趣いて退かじ
〔八〕初偈は是れ行半

「善男子よ、復四法有り。菩提心を退せず。何等か四なる。諸の波羅蜜を集め、實の菩薩に親近し、大悲を修集し、四攝法を以て諸の衆生を攝す。是を四と爲す。而して頌を說いて曰く、

常に六度を修して滿足無し　　聞を生じ聞き已りて心柔軟なり
大欲を生じて惡友を離れ、　　善友に親近して所欲に隨ふ
常に勝道を修して向者に近づき　　常に悲心を修して四攝に住し
常に好く堅く菩提心に住せば　　佛の功德聚得難からず

「善男子よ、菩薩四法を具足して一切智心を捨てず。何等か四なる。佛の功德を信じ、佛智を修集し、佛の神通を見、佛種を斷ぜず。是を名けて四と爲す。而して頌を說いて曰く、

佛德を信解し已りて　　勤めて佛智を修集し
佛の神通を見已りて　　勤めて佛種を守る
是の如きの法を修行して　　菩提心を捨てざれば
隨所に諸佛を見て　　倍す精進力を生ぜむ

「善男子よ、菩薩四法を具足すれば、終に菩提の心を嬈亂せず。何等か四なる。諸佛の面前に給侍し、如來に從つて法を聞き、常に佛德を歎じ、寂靜緣に依止して佛を念ず。是を四と爲す。而して頌を說いて曰く、

【八】これ本文にあらず恐らくは譯者の插入する所なるべし。偈頌は二行四句を原則とす。今一行半にして形態具足せざるを注意するなり。而もこの種のことは經典中數々遭遇することにして必ずしも珍しとせず。

かに聽き、善く之を思念せよ、吾れ當に少しく如來の密藏法を說くべし。」無量志莊嚴王菩薩、卽ち佛に白して言く、「是の如し、世尊、敎を受けて聽きたてまつらむ。」佛の言く、「善男子よ、如來の密藏法とは謂く一切智心なり。是の心を發し已りて堅固守護し、不退不捨にして饒亂有ること無し。善好く憶念して、熾然勸導し、顯示し、敎誨し、善根を先首として、喜樂守護し、常恒に應に作すべきの業を堅造す。是れが爲めに布施し、是れが爲めに持戒し、是れが爲めに忍辱し、是れが爲めに精進し、是れが爲めに禪定し、是れが爲めに方便し、是の心を柱と爲し、怯ならず、弱ならず、羸ならず、壞せず、懶惰有ること無し。背せず、捨せず、是の心に順向して之を覺了す。善業を首と爲して質直・無曲・正住・端直にして、幻無く、僞無く、作し已りて疑無し。未だ作さゞる者を作し、應に作すべき所の如く、勤めて之を修行し、不正行を捨て、正行を勤修す。善男子、是を如來祕密藏法所入の法門と名く。謂ふ所の堅固一切智心、好く堅く守護して之を棄捨せざれ。

「善男子よ、何等か一切智心堅固なる。善男子よ、一切智心堅固に四有り。何等か四なる。餘乘を念ぜず、餘天を禮せず、餘心を發さず、志意轉ずること無し。是を四と爲す。而して頌を說いて曰く、

餘乘を念ずるを生ぜず　佛を禮して天を禮せず
餘の欲心を生ぜず　外の凡夫を禮せず
是の法を修行する時　一切智心堅し
魔及び外道　便を得ること毛髮の如くだも非ず

「善男子よ、復四法有り。一切智心を護る。何等か四なる。色の爲に醉ひ、及び財封に醉はず。眷屬に醉ひ及び自在に醉ふに非ず。是を四と爲す。而して頌を說いて曰く、

色と財封とに醉ふに非ず　眷屬及び自在(亦然り)

一切諸佛悉く平等に　智慧通等にして人尊と號す
成佛するは無等の白淨法　卑劣を示現して衆生を調ふ
尊若し悉く佛の境界を示さば　一切衆生心迷亂せむ
大悲是等を利せんが爲の故に　彼の所行を修して法を演說す
人尊の智は衆の所樂に勝る　常に和顏柔軟語を先とす
人天を算數するに德等しきもの無し　是の故に歡喜して尊を頂禮す
一切智は諸の衆生に等し　諸法の際を盡して外道を降す
一切智見魔怨を伏す　〔六〕十方諸力を降すものに稽首したてまつる。
常に眞實誠諦の語を樂み　善く說の如く行ずる所の如きを知り
苦樂に動かされざること山王の如し　我れ今施世樂に稽首したてまつる。

爾時無量志莊嚴王菩薩、偈をもて佛を讃じ已りて佛に白して言く、「世尊、寶杖如來世尊を問訊したてまつる。少病少惱にして、起居輕利、安樂行たるや不や。世尊、我れ今少しく如來・應供・正遍覺に請問せんと欲す。若し佛聽したまはゞ乃ち敢て諮啓せむ。」佛無量志莊嚴王菩薩に告ぐ、「善男子、如來常に聽したまふ。疑有る所に隨ひ、汝が所問を恣にせよ。吾れ當に汝の所問に隨つて演說して汝の心を悅可せしむべし」。〔七〕「是の如し世尊、願樂して聞かんことを欲ふ」。時に無量志莊嚴王菩薩白して言く、「世尊、我れ先佛・如來・應供・正遍覺より聞けり。法有り。如來祕密藏と名く。若し菩薩有りて是の祕藏に住せば無盡法を得、無盡辯を得、佛無盡を見、善能く無盡の神通を獲得し、諸の衆生の爲に實の依止と作らむ。善き哉世尊、願くは爲めに如來祕密藏法を演說したまへ。」爾時、佛無量志莊嚴王菩薩に告ぐ。「善き哉、善き哉、善男子よ、乃能く佛に是の如きの法を問へり。善男子よ、汝已に曾て恒河沙の佛所に於て、諸の善根を殖ゑ、諮受し請問せり。善男子よ、汝今諦

〔六〕諸本「百力」に作る、明本「十方」。

〔七〕これは佛語に非ず、菩薩の語なり。此の間何等か若干の脫落あるが如し。

導師此は是れ何の利事ぞ　此の事を見る者何の增益かある
此は是れ何種ぞ佛知らんと欲す　此の無量の諸神變を現ずるを

爾時、佛摩訶迦葉に告げたまはく、「東方此を去ること七十二億の佛土にして國有り常出大法音と名く。彼の中に佛有り。號して寶杖と曰ふ。今現に在す。彼に菩薩有り。無量志莊嚴王と名く。此の土に來至し、我を見禮拜して諮受し聽法し、諸の菩薩の爲めに大法欲を生じ、大法力を生じ、大法智を集め、常出大法音國の所有功德及び寶杖佛の所有功德を顯はさんと欲す。此の緣を以ての故に、是の無量志莊嚴王菩薩は而も此の娑婆世界に來至す。一日一夜に衆生を利する所、汝等此の三千大千世界に滿つる諸大聲聞の法をもて衆生を利するよりも多し。假令汝等の數、稻麻竹葦・甘蔗叢林の如くにして壽命一劫ならむも、利する所の衆生猶し尙ほ等しからず。」大德迦葉白して言く、「世尊、閻浮提の人若し是の善丈夫の名を聞くことを得んに尙ほ大利を得、況んや信心有りて復說法を聞かんをや。」時に無量志莊嚴王菩薩及び諸の[四]寶臺如來の前に住して佛足を頂禮す。當に佛を禮せんとする時、是の三千大千世界をして六種に震動せしめ、百千の伎樂鼓せざるに自から鳴る。一切の大衆如來の足を禮したてまつる。爾時、無量志莊嚴菩薩佛を遶ること三匝すれば、及び八萬四千の寶臺も亦遶ること三匝、三匝し已りて[五]佛に合掌を向け、偈を以て佛を讚したてまつる。

善能く柔軟微妙の語あり　錯無く雜無く、淨くして無垢なり
善名威德慧中の勝　我れ今最勝仙に稽首したてまつる
多百千劫功德を滿じ　安隱樂を施して百苦を滅す
仁が大悲喜は三界に等し　而して法を演說して塵垢を除く
十方の諸佛仁が德を歎ず　善逝惡時に菩提を得
惡衆生を度して疲倦無し　一衆生を度するも尙ほ難しと爲す

【四】前には華香對開衆となり、今は寶臺人の如く動作する、奇とすべし。前後註參照。

【五】前註を見よ。

一の樹下に皆悉く寶師子座を化作し、衆寶を間塡し、皆悉く百千の妙衣を敷置せり。是の諸の座上に皆佛の坐せるを見る。形色相貌釋迦牟尼の如し。是の無量志莊嚴王菩薩、是の化を現じ已りて、虛空の中に於て寶蓋を化作す。縱廣正等にして百千由旬なり。繒綵を垂懸し、鈴網莊飾せり。風鈴網を吹くに柔和・微妙・可愛の軟音を出す。其の音遍ねく三千大千佛の世界に告ぐ。時に此の三千大千世界平坦なること掌の如し。寶蓮華を生じて如來を供養す。時に無量志莊嚴王菩薩八萬四千の寶臺を以て自から圍遶して佛所に來詣せり。是の時大衆是の化を見已りて、未曾有なるを得て、是の言を作さく「今見る所の如き、此の大士來りて莊嚴の事相ある、必ずや、大法を說かむ。及び此の三千大千世界の諸の莊嚴事、又上空中に寶蓋を如來の上に垂懸せる、一切の天宮悉く皆隱蔽せり。」是の時大德摩訶迦葉佛の神力を承け、座より起ちて衣服を整へ、偏へに右の肩を袒ぎ、右膝を地に著け、[三]佛に合掌を向けて偈を說いて言く、

無垢淨光空より出づ　釋梵諸の光明を隱蔽す
及び日月珠火の光を蔽へり　唯願はくは人尊此の相を說きたまへ
此の空中に妙寶蓋を現ず　百千由旬の地を遍覆せり
幢幡鈴網以て莊嚴す　世尊今將に法雨を雨らさんとす
鈴網より出づる所の妙聲音　其の音遍ねく此の佛界に告ぐ
音を聞く有る者は煩惱息む　何の利益の爲めに此の事を說くや
三千世界平にして掌に等し　百千の蓮華地より出づ
華香適意にして身心を悅ばす　是れ何の威德の爲す所ぞ
東方遍ねく金色の光を放ち　八萬四千の妙寶臺あり
臺内の寶樹師子座に　導師釋師の如きを見る

【三】 añjalim praṇamya なる原語なりと推定せらるゝを以て「向佛合掌」をかく讀む。

聲聞緣覺の念を起さず、一切智寶の心を捨てず、其の心清淨にして猶し虛空の如く、其の身柔軟にして、心に染汚無く、志意壞すること無く、所至の處に隨つて心に染著無く、妙音和軟にして、言說する所有らば顯露にして解し易し、其の言淸白にして、無染の法句を說く、常に他の德を觀じ、勇猛にして侶なく、志道場を欲せり。其の名を、山剛菩薩・大山菩薩・持山巖菩薩・山積菩薩・石山王菩薩・大進菩薩・信進菩薩・極進菩薩・喜手菩薩・寶印手菩薩・寶手菩薩・德手菩薩・燈手菩薩・常擧手菩薩・常下手菩薩・常喜根菩薩・常思念菩薩・常勤菩薩・常觀菩薩・法勇王菩薩・淨寶光明威德王菩薩・摩尼光王菩薩・過諸蓋菩薩・總持自在王菩薩・發心轉法輪菩薩・法勇菩薩・淨衆生寶勇菩薩・道分味菩薩・捷辯菩薩・無礙辯菩薩・不動足進菩薩・金剛足進菩薩・金剛志菩薩・虛空藏菩薩・相好積嚴菩薩・壞魔網菩薩・勝志菩薩・導師菩薩・喜見菩薩と曰ひき。賢護等の十六の大士、彌勒等の賢劫の菩薩、兜率陀天の[二]曼陀羅華香等を而も上首と爲し、他化自在天王等の三萬二千、是の如きの天子、及び餘の大乘に趣向する者、三千大千世界の中、釋梵護世・欲界・色界・淨居の諸天、一切來集し、恭敬供養して如來を禮拜しき。

爾時世尊無量百千の大衆に恭敬圍遶せられて法を演說したまふ。是の時東方此の佛土を去ること七十二億刹にして彼に佛土有り。名けて常出大法之音と曰ふ。其國に佛有り。號して寶杖如來・應供・正遍知・覺と曰ふ。今現に在ます。而して是の常出大法音國の一切の江河池泉諸水一切の樹木、一切の衆華、一切の諸葉、一切の華果、一切の臺觀、常に法寶無上の法音を出す。彼の土の衆生常に是の如きの勝妙法音を聞く。是の寶杖佛の常出大法音國に菩薩有り。無量志莊嚴王と名く。是の菩薩寶杖佛を觀じ已りて、猶し壯士の臂を屈伸する頃の如くに、是の常出大法音國を沒して、一念の頃に此の娑婆世界に來至せり。時に無量志莊嚴王菩薩八萬四千の寶臺を化作せり。妙寶所成にして四方四柱縱廣正等にして莊嚴極妙なり。一一の寶臺八萬四千の寶樹を化作す。華果茂盛なり。一

【二】華香を對開衆として數へ擧ぐること奇なれども、後段に八萬四千の寶臺が佛を繞ることを云へば、是亦許すべきか。

大方廣如來祕密藏經

譯人の名を失す。三秦錄に附す。

卷の上

是の如く我れ聞けり。一時、佛王舍城祇闍崛山に住したまひて、大比丘僧八千人と俱なりき。菩薩摩訶薩三萬二千ありき。衆に知識せられ、陀羅尼無礙辯才を得、無生法忍を得、魔怨を降伏し、一切法の中に快く自在を得、善く種種の神通變化を能くし、善く一切の禪定三昧を知りて入出自在に、諸の衆生の爲に不請の友と作り、永く蓋纏を離れ、善能く諸の衆生の根を了知し、善く了義の法に依止することを知り、六度を淨修して彼岸に到り、五通に遊戲し、衆生を敎化して心厭倦無く、無量無邊百千萬億那由他劫に久しく諸行を修し、已に曾て無量の諸佛を供養し、善く諸佛の護持する所と爲り、正法城を護り、佛種を斷ぜず、常に聖德を以て一切を悅樂せしめ、妙法輪を轉じ、善能く無邊の佛土に往來し、諸佛に奉覲し、大師子吼し、大法船を治め、大法鼓を擊ち、大法蠡を吹き、善く一切の福德莊嚴を集め、相好身を嚴り、念慧堅進に、善く慚愧を知り、法喜自から娛み、大慈大悲を具足成就し、日月所有の光明を隱蔽し、利衰毀譽稱譏苦樂是の世の八法の汚す能はざる所、高ならず、下ならず、善く愛恚を斷じ、常に方便智慧と相應し、衆生の根に隨つて善く之を開化し、無救者を救ひ、有所爲の作善之を觀察し、身口意業諸の過患無く、善能く定慧莊嚴を集め、其の心調柔猶し[一]大龍の如く、大師子の如く外道を降伏し、善能く大丈夫の行に進趣し、諸の怖畏を離れ、善能く諸の衆生の疑を決斷し、善能く無量の諸佛を勸請して法輪を轉ぜしめ、善く大願に住し、永く二見を離れ、常に勤めて一切衆生を度脫せしめ、善く垢淨所起の因緣を知り、善く正念を修し、

【一】nāga には龍の義あると共に亦象の義あり。今調柔の語に對應すれば寧ろ象の義を取るべきが如し。

極の貪とは、正道の財利に於て侵奪の心を起す。最極の瞋とは五無間に於て悲愍の心無し。最極の邪見とは、謂く、横に僻執深險の惡見を起す。迦葉波よ、若し一衆生是の如きの十不善業道の大罪を具足せむ。如來是の因緣を以て法要を宣說す。無我・無人・無衆生・無命者・無作・無受に悟入せしめんが爲めなり。是の行是れ造作、是れ幻化なり。然るに諸法の性は即ち煩惱の性なり。諸法の自體明亮なるを入解し、諸法の種種性を信解せば、我れ衆生の惡趣に墮する者有りと說かじ。」

本文の異同は比較して知るべきである。尙ほ一九二二年ロンドンに於て出版せられしラウズ(W.H.D.Rouse)の英譯一六八頁にこれに相當する文があるが今は擧ぐることを略する。梵文は一九〇二年に出版の完成を見たのでベンドール(Cecil Bendall)の校訂にかゝり、露都に於て佛敎叢書の第一卷として公にされた。

本經の標題は梵文では tathāgata-koṣa となつてゐるが、附註の言ふ所によればスパーシタサングラハ(善說集)と稱する梵本の中にはこの經は tathāgata-guhya-koṣa-sūtra となつて引用されてゐるといふことだし、西藏譯では tathāgata-garbha-sūtra となつてゐるとのことである。支那譯になつた分の梵本には更に大方廣 mahā-vaipulya なる語が冠せられてあつたものと見える。

昭和七年二月

譯者　泉芳璟　識

も純正なサンスクリット原文があつたことが云へるわけである。左にこれを引用する。

yaḥ kāśyapa pitā ca syāt pratyeka-
buddhaś ca taṃ jīvitād vyaparopayed
idam agraṃ prāṇātipā tānām/ idam
agram adattādānānāṃ yaduta tri-ratn-
a-dravyāpaharaṇatā/ idam agraṃ kā-
ma-mithyā-cārāṇāṃ yaduta mātā syād
arhantī ca/ idam agraṃ mṛṣāvādānāṃ
yaduta tathāgatasyābhyāṇhyanām/
idam agraṃ paiśunyānāṃ yadutārya-
saṃghasyāvarṇsḥ/ idam agraṃ pāru-
ṣyāṇāṃ yadutāryāṇām avasphaṇḍana-
m/ idam agraṃ saṃbhinna-pralāpānā-
ṃ yaduta dharma-kāmānāṃ vikṣepa-
ḥ/ idam agraṃ vyāpādānāṃ yadutā-
nantarya-parikarṣaṇam/ idam agram
abhidhyānāṃ yaduta samyag-gatānāṃ
lābha-haraṇa-cittatā/idam agraṃ mith-
yā-dṛṣṭīṇāṃ yaduta gahanatā-d,ṣṭiḥ/
ime kāśyapa daśākuśalāḥ karma-pa-
thā mahā-sāvadyaḥ/ sacet kāśyapa
eka-satva ebhir evaṃ mahā-sāvadyair
daśabhir skuśalaiḥ karma-pathaiḥ
samanvāga to bhavet/ sa ca tathāga-
tasya hetu-pratyaya-saṃyuktāṃ dha-
rma-deśanāṃ avataren/ nātra kaścid
ātmā vā satvo vā jīvo vā pudgalo vā
yaḥ karoti pratisaṃvedayate iti hyakṛ-
tāṃ anabhisaṃskārāṃmyādharmatāṃ
asaṃkleśa-dharmatāṃ prakṛti-prabhā-
svaratāṃ sarva-dharmāṇām avataraty
ādi-śuddhān sarva-dharmān abhiśrad-
dadhāty adhimucyate/ nāhaṃ tasya
satvasyāpāya-gamanaṃ vadamīti ॥

梵文の譯

「迦葉よ、父にして獨覺なる彼を殺すは是れ殺生の最なるものなり。三寶物を盜むは不與取中の最なり。母にして阿羅漢なる（に對する）は邪行中の最なり。如來を誹謗するは妄語中の最なり。

聖衆を謗るは兩舌中の最なり。聖者を罵らば惡口中の最なり。求法の人を擾らば綺語中の最なり。無間を牽くことは瞋中の最なり。正道に行けるものゝ利得を奪ふ心はこれ貪中の最なり。邊見はこれ邪見中の最なり。迦葉よ、これらの十不善業道は最も重し。若し一有情ありてこの最重の十不善業道を具足せむ。而して彼は如來の因緣積集の法說に入らむ。世に何等の我、有情、壽者、補特伽羅の作爲し享受するものなしと、一切諸法に就て無作、無爲、幻法性、不雜染法性、本來淸淨を知り、一切諸法を本初淸淨と信解せむ。我れ彼の有情を惡趣に行くと說かじ。」

二

今これに相當すべき宋法護譯大乘集菩薩學論第十一の文を次に擧げる。

「佛の言く、迦葉波よ、十不善業道有り。是を大罪と爲す。此に最極の殺生とは、謂く、父を殺して緣覺の命を斷ずるが若し。最極の不與取とは、謂く、三寶の財物を掠き奪ふが若し。最極の欲邪行とは、謂く、母及び無學尼を汚すを起す。最極の妄語とは、謂く、我は是れ如來なりと言ふ。最極の兩舌とは、謂く、聖衆に於て離間語を作す。最極の惡口とは、謂く、聖賢を呵毀す。最極の綺語とは、謂く、巧みに浮飾を構へて諸の法欲を亂す。最

大方廣如來祕密藏經解題

本經は佛が常出大音國より來至せる無量志莊嚴王菩薩に對して祕密藏法を說く。菩薩は歡喜して身を以て佛を供養し、希有廣大の神通變化を現ずる。これに就て大德迦葉問を起し、佛は更に祕密藏法を敷演する。これが一經の主旨である。

抑も祕密藏法とは大乘佛教の立場から、一種の特別な角度を以て、通途佛教の德目を眺めた、その觀點なり、視野なりを意味するので、本經に於ては迦葉に對しての說法中に始めてこれが顯はれるやうである。卽ち菩薩の修行を妨害する衆生は決して惡趣に墮せずとか、如來の塔物を盜取してたとひ地獄に墮するとも、悔心によりて出離すれば、外道の見に歸するよりは勝るとかいふ如き論法は常途一般のものと聊か異る所がある。殊に煩惱は總て不實の法にして如來の說法も不實なりと云ひ、十惡業道も堅著せざれば不犯にして、其の性本來無垢淸淨なりと云ふに至つては頗る奇嬌の言といふべきである。尤も空觀の立場からは是の如き言說は許さるべきも、一步を過まれば邪見にして、全く佛魔一紙のきはどい境地と謂ふべきである。

最初無量志莊嚴王菩薩に對する四法とか二法とかの德目の列擧にはあまりこれといふ意義も見出されない。只得るに隨つて大乘菩薩の德目を收載したものと見える。本經の興味は寧ろ後段の迦葉に對する說法によりて喚び起される。一體大迦葉は婆羅門出身の弟子で、かうした論議を背負つて立つには實に適(はま)り役と謂ふべきだ。同じく後段に阿難が出て來るが、彼は現身を供養した菩薩が如何して菩提を覺り得るかとか、この華臺に乘れる諸菩薩は何時正覺を得るかとか、例によつて瑣細な問題に注意を向けてゐる。此處らでも佛典文學に現はれる人格それ〴〵の書き分け方が興味を惹くのである。

本經は秦錄に附載せられてゐるだけで、譯人の名も知れず、又他に異譯の經典も無く、只此の經一本だけであるが、譯文は暢達にして高雅、譯者は決して凡手ではない。

面白いことは本經の梵本が存在を認められてゐることである。尤も相當する梵本が完全に保存されてゐるといふのではない。大乘集菩薩學論といふ幾多の經典を引用した論本があつて、その梵文が近時出版された。題して Śikṣāsamuccaya と云ふ。學集の義である。この中に本經の十惡業に關する一節が援引せられてゐる。これで本經には正に相當せる梵文、それ

佛說法受塵經

後漢安息國三藏安世高譯す

聞くこと是の如し。一時佛舍衛國祇樹給孤獨園に遊びたまふ。佛諸の比丘に告げたまふ。比丘教を受けて佛に從つて聽く。佛比丘に言はく、「凡そ[一]人一法を爲すに、[二]塵を受けて自から汚れ、迷惑し、憂愁し、沒して端際無し、吾れ其の無上吉祥の道を得ざるを見る。丈夫の女子の色を見んと欲するが如し。是を以て好色の士、染を爲し、醉を爲し、貪を爲し、汚を爲し、惑を爲し、著を爲し、住を爲し、受を爲す。婬女の言に從ふが故に、長久に趨走し往來し、爲めに勤苦を受くるのみ。常に婬女の聲を聞かんと欲し、鼻其の香を聞かんと欲し、舌其の味を得んと欲し、身其の[三]細滑を更めんと欲す。是を以て長久に趨走し往來して苦を受く。是の故に當に女の色・聲・香・味・細滑の爲めに染惑せらるべからざるなり。當に是を覺知すべし。又復諸の比丘よ、凡そ[四]人法を爲すに塵を受けて自から汚れ、迷惑し、憂愁し、沒して際無し。吾れ其の無上吉祥の道を得ざるを見る。婬女の男子の色を見んと欲するが如し。是を以て好色の女染を爲し、醉を爲し、貪を爲し、汚を爲し、惑を爲し、著を爲し、住を爲し、受を爲す。士の色の爲の故に、長久に趨走し、往來し、苦を受くるのみ。常に男子の聲を聞かんと欲し、鼻其の香を聞かんと欲し、舌其の味を得んと欲し、身其の細滑を更めんと欲す。是を以て長久に趨走し、往來して苦を受く。是の故に當に士の色・聲・香・味・細滑の爲めに染惑せらるべからざるなり。當に是を覺知すべし。」佛是を說き已りたまふに、皆歡喜して受行せりき。

佛說法受塵經終

【一】「人法を爲すに」と後段にあり。一の字無し。
【二】塵とは煩惱を云ふ。
【三】細滑とは觸に同じ。
【四】「人一法を爲すに」と前段にあり。孰れか可なるや決し難し。

佛說法受塵經解題

本經は衆生煩惱の爲めに道を失ふを戒めたものである。この種の教誡は佛教が始めて支那に傳來せし當時、先づ以て何人に對してもなされたものであつたらしい。譯者も安世高と云へば當時の傳教者の一人であり、最もよく當時の教團の簡素にして力强き面影を代表する經典の一たるを失はぬ。

これも原始期の經典の一なる四十二章經に云く、「人愛欲を懐きて道を見ず、(中略)要は心垢盡きて乃ち魂靈の從來する所、生死の趣向する所を知らむ、諸佛の國土は道德の所在のみ」。この說本經を註し得て餘蘊無しと謂ふべきである。

昭和七年二月

譯者　泉　芳　璟　識

さしめき。今復更に文殊師利の所に於て正法を說くを聞いて順法忍を得たり。佛阿難に告げたまはく、汝此の上威德長者子を見るや不や。阿難白して言く、唯然り已に見る。佛の言く、阿難、此の長者子を我れ過去に於て已に曾て敎化して阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめき。今我が所に於て正法を說くを聞いて順法忍を得たり。阿難、此の勝金色女は當來の世に於て、九十百千劫を過ぎて、當に佛と作るを得て、號して寶光多他阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀と曰ひ、[二八]壽命無量ならむ。其の佛の世界を寶德刹と名け、劫を樂生と名く。彼の女當來に佛と成るを得ん時、其の國の衆生衣服・飮食・壽命・身色、悉く忉利の諸天王等の如く、等しくして異ること無し。彼の佛の世界には聲聞辟支佛有ること無し。純一大乘諸菩薩寶のみなり。彼の寶光如來成佛の時、此の長者子菩薩身を得、名けて德光と曰ふ。佛の法藏を持し、寶光如來所說の法藏を皆悉く受持せむ。寶光如來涅槃に臨む時、德光菩薩の與に菩提の記を授けて、諸の大衆に告げむ。我が滅度の後、我が法滅し已りて此の德光菩薩當に佛と作ることを得べし。號して寶炎如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士調御丈夫・天人師・佛・世尊と曰ふ。爾時、如來二人に記を授け已りたまふに、是の時三千大千世界六種に震動し、大光明を放ちて十方一切の世界に遍滿せり。此の授記の法を說きたまふ時、八千人等阿耨多羅三藐三菩提心を發しき。爾時長老阿難佛に白して言く、世尊、當に何が此の經を名くべき。佛の言く、此の經を大莊嚴法門と名く。是の如く受持せよ。亦文殊師利神通奮迅力經と名く。亦勝金光色光明德女敎化經と名く。此の經を說き已りたまふに、長老阿難、勝金色女、及び長者子、文殊師利、天人阿修羅等、一切の大衆歡喜奉行せりき。

大莊嚴法門經 終

【二八】 壽命無量といふことは一種の數量にあらずんば言語の慣用なるべし。然らずんば後段涅槃に臨まんとする時と云へるものと撞着するが如し。

彼の中に貪瞋に非ず　亦復愚癡に非ず
染に非ず清淨に非ず　是の如く我れ彼を識る
諸の凡夫は醉へるが如し　顚倒して惡覺を生ず
智者の染せざる所なり　是の如く我れ彼を識る
彼の林中の屍の如き　臭爛し惡にして不淨
身の體性是の如し　是の如く我れ彼を識る
過去は本不滅　未來も亦不生
現在は暫らくも住まらず　是の如く我れ彼を識る
文殊當に善聽したまへ　彼の恩報すべきこと難し
我れ本貪欲多し　不淨を見て解脫せり
彼の身實に死せず　我を化せんが爲めに死を現ず
衆を愍れむが故に示現す　誰か見て心を發さゞらむ
是の如きの貪瞋癡　及び一切の煩惱
是の如きの體性の法　善き哉甚だ微妙なり

[二六]爾時、如來即便ち微笑したまふに、其の面門より五色の光出で、遍ねく三千大千世界を照し、照し已りて還りて頂より入る。爾時阿難斯の光を見已りて、即ち座より起ち、偏へに右の肩を袒ぎ、佛足を頂禮して、右膝を地に著け、[二七]合掌を佛に向けて讃じて言く、善き哉世尊、何の因緣を以て微笑を示現したまふや。諸佛如來多他阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀は因緣無くして微笑を現じたまふに非ず。佛阿難に告げたまはく、汝是の金色女を見るや不や。阿難白して言く、唯然り已に見る、佛阿難に告げたまはく、此の金色女を文殊師利は已に過去に於て敎化して阿耨多羅三藐三菩提心を發

【二六】　金色女及び長者子の授記。

【二七】　「合掌向佛」は明かに añjalim praṇamya の譯なればかく讀みたり。

即ち是れ一切衆生心の體性なり。自心の垢を離るゝ如く、即ち是れ一切衆生心は垢を離る。自心の貪を離るゝ如く、即ち是れ一切衆生心は貪を離る。自心の瞋を離るゝ如く、即ち是れ一切衆生心は瞋を離る。自心の癡を離るゝ如く、即ち是れ一切衆生心は癡を離る。自心の煩惱を離るゝ如く、即ち是れ一切衆生心は煩惱を離る。此の覺を作す者を一切智智覺と名く。是の如く清淨攀縁方便行あり。菩薩能く煩惱の體性一切衆生の心を染するを知らば、若し說いて客塵煩惱相續して心を染すと言ふ者有らんに、菩薩法の方便を見て、彼の衆生に於て善く教化して惱亂せらるゝ無からしめむ。若し彼の衆生客塵煩惱を覺らば、客塵煩惱も亦能く染せず。

佛此の法を說き已るに長者子順法忍を得たり。時に[二四]勝金色女長者子の教化を受けしを知り已りて、五百の馬車を莊嚴して前後を圍遶せられ、種種の音樂皆悉く作唱して佛所に來詣し、到り已りて車より下り、頭面三禮して右に遶ること三匝し、却いて一面に住す。

爾時、文殊師利童子長者子に問うて言く、汝此の妹を識るや不や。長者子の言く、我れ今實に識る。文殊師利の言く、汝云何が識る。時に長者子即ち文殊に向つて偈を說いて言く、

色を見ること水沫の如し　諸受悉く泡の如し
想を觀ずる陽炎に同じ　是の如く我れ彼を識る
行を見ること芭蕉の如し　識を知ること猶し幻の如し
女の名は假に施設せり　是の如く我れ彼を識る
身は覺無くして木の如し　亦草瓦礫の如し
心則ち見るべからず　是の如く我れ彼を識る
我に非ず衆生に非ず　壽[二五]富伽羅に非ず
十八界相續す　是の如く我れ彼を識る

【二四】離染の世界に男女再會す

【二五】前註を見よ。

して壁を照し、水動けば則ち動き、來去無きが故に。鏡中の像の如し。業力より生ずるが故に。水中の月の如し。水靜かなれば則ち現ず。來去無きが故に。響の如し。聲より生じ說いて實とすべからざるが故に。影の如し。作るべからざるが故に。幻の如し。體性空の故に。風の如し。性捉ふべからざるが故に。是の如く一切法は虛假不實にして不增不減の故に。是の如く長者子よ、當に知るべし、一切法主無く、作無く、執著有ること無し。汝の先の欲覺今何所にか在る。長者子の言く、此の中に見る所の長短の好色、惡覺の因緣によりて凡夫は貪著するも、聖法の中に於て是の如きの事無し。聖人の法中但是れ不淨なり。實の如く見るが故に。惡覺を離るゝが故に。貪瞋癡盡るが故に。佛の言く、善き哉、善き哉、長者子よ、貪の性を見るが故に惡覺觀を離る。惡覺を離るゝが故に貪瞋癡盡く。是の故に汝當に清淨心を生じ、方便行を修し、一切の境に於て智慧業を起し、自身見及び他身見を離るべし。長者子の言く、菩薩云何が淸淨心を生じ、智慧行を行ぜむ。佛の言く、長者子よ、菩薩當に貪の體性の中に於て菩提を求め、是の如く瞋癡の體性の中に菩提を求め、亦一切煩惱の體性の中に於て菩提を求むべし。是の如く貪瞋癡等一切の煩惱の性は空にして物無し。菩薩則ち一切の法中に於て智慧行生ず。是の故に長者子よ、彼の貪瞋癡の性は根本有ること無し。亦住處無く、亦主者無く、亦作者無し。內外淸淨にして空にして所有無し。我無く、衆生無く、壽命無く、[三]富伽羅を離る。無相なり。惡覺觀を離るゝが故に。無願なり。渇愛取を離るゝが故に。是の如く貪瞋癡の體性は無生の故に、菩薩は一切の法中に於て智慧行生ず。復次に長者子よ、淸淨攀緣方便の行あり。[三]菩薩一切衆生の心法中に於て悉く菩提有り。何を以ての故に。若し彼の心色無く、色を離れ、分別を離れ、體性幻の如く、彼此內外相續せざれば、是を菩提と名く。復次に長者子よ、菩薩は應に餘事を覺るべからず。但自心を覺れ。何を以ての故に。自心を覺るとは卽ち一切衆生の心を覺るが故に。若し自心淸淨なれば、卽ち是れ一切衆生の心淸淨なるが故に。自心の體性の如く、

【三】前註を見よ。

【三】此の「菩薩」の二字原典にあるも恐らくは省くを可とすべきか。

し、僧に歸依したてまつる。三歸依已りて是の如きの言を作さく、此の善根種種の功德を以て願くは來世に於て阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得む。而して佛に白して言く、世尊、此の金色女は衆に知識せられたり。我れ欲樂の爲に彼に財寶を與へぬ。將に林所に向つて共に相娛樂せんとし、彼の林中に至り、我が膝を枕にして臥し、奄忽にして死せり。卒便ち爛壞し臭穢畏るべし。將ゐる所の眷屬悉く我を捨てゝ去り、見る者有る無し。恐らくは阿闍世王此の女の死せるを知り、我が殺害せしならむと謂ひて、橫に刑戮を加へむ。是の故に我れ今大怖畏を生ず。

爾時[三]、佛長者子に告げて言く、汝憂怖すること莫れ。我れ當に汝に一切無畏を施すべし。汝長者子、佛に歸依せば一切處に於て怖畏する所無し。又復告げて言く、汝當に怖畏の因緣を放捨すべし。時に長者子佛に白して言く、一切の怖畏は何より生ずる。佛の言く、貪瞋癡の因緣の故に怖畏生ず。身見の因緣の故に怖畏生ず。惡見の因緣の故に怖畏生ず。渴愛の因緣の故に怖畏生ず。我我所 因緣の故に怖畏生ず。執著の因緣の故に怖畏生ず。鬪諍の因緣の故に怖畏生ず。自身愛縛の因緣の故に怖畏生ず。無常中に於て常想を生ずるが故に怖畏生ず。苦法中に於て樂想を生ずるが故に怖畏生ず。不淨中に於て淨想を生ずるが故に怖畏生ず。無我中に於て我想を生ずるが故に怖畏生ず。五陰の因緣に執著するが故に怖畏生ず。十二入を觀ぜざるが故に怖畏生ず。十八界を觀ぜざるが故に怖畏生ず。未來の惡を見ざるが故に怖畏生ず。內外身の因緣を觀ぜざるが故に怖畏生ず。壽命を愛する因緣の故に怖畏生ず。長者子よ、是の如き等の因緣の故に一切怖畏生ず。是の如き等の事を汝當に放捨すべし。又復告げて言く、汝此の女の身種種の惡事を見るや不や。長者子の言く、唯然り世尊、我れ今已に見る。佛の言く、是の如く一切の諸法無常にして敗壞、苦空にして不實、但是れ虛誑なり、愚癡は知らず。業緣より生ずるが故に。幻の如くにして實ならず。色相を離るゝが故に。夢の如し。喜樂實樂無きが故に。熱時の炎の如し。水に非ざるに水想するが故に。亦水光の如し。影發

【三】長者子の得道。

汝の怖は能く除く無し　亦安慰するもの無し
汝今應に速かに　如來大師の所に往くべし
汝の大怖畏　父母眷屬知識も
能く救ふ者に非ず　唯佛世尊あり
能く其の根本を拔き　能く畏畏無きことを施さむ
及び無護者を護らむ　汝宜しく佛に歸依すべし
亦勝法僧に歸せよ　若し天龍等の
彼に歸依する者有らんに　怖畏皆解脫して
速かに天人の身を得む

爾時、長者子上威德此の偈を聞き已りて心大に歡喜し、踊躍無量にして、深く自から慶幸とす。死屍を捨棄して林より出づ。爾時[18]、佛は耆闍崛山頂に在して、長者子の善根成熟し、敎化を受くるに堪へたるを知り、大光明を放ちたまふ。其の光遍ねく摩伽陀國を照す。時に長者子光明の中に於て遙かに佛身を見たてまつる。猶し日の出づるが如し。大衆に圍遶せられて、爲に法を說きたまふ。是の事を見已りて一心に佛を念ずるに、忽然として復七寶の階道周匝せる欄楯の佛所に至るを見る。又妙華の階道に遍布せるを見る。時に長者子路を尋ねて往かんと欲す。[19]始めて發足の時、釋提桓因即ち前路を遮ぎり、道に當りて立ち、是の如きの言を作さく、汝長者子往いて佛を見んと欲するは大善利を獲む。佛亦汝を愍みたまふ。我れ當に汝と俱に佛所に詣るべし。時に長者子即ち帝釋と共に往いて佛所に至り、佛所に到り已るに、時に天帝釋即ち[20]衣裓の曼陀羅華を以て長者子に與へ、敎へて佛に散ぜしむ、時に長者子天華を受け已りて歡喜心を發し、以て佛の上に散じ、頭面に禮を作して、右に遶ること三匝、一面に於て立ちて佛に白して言く、我れ今至心に佛に歸依し、法に歸依

【一八】　靈山に於て俱會一處の場面となる。

【一九】　帝釋道を敎へて誘ひ引く。

【二〇】　衣裓は阿彌陀經にも出づる語なり。法華義疏八に眞諦三藏の說を擧げて衣箱也とあれば一種の器物の如く見ゆるも、又同四には衣袷也と云ひ、法華玄贊五には衣襟也とあるよりすれば器物には非ず。此の本文衣服の一部なるを立證するが如し。

汝今應に怖るべからず
一切眞實に非ず
云何が今怖畏せむ
能く汝に安樂を施さむ
諸欲の無常を說く
五欲誑にして實ならず
猶ほ風の水を鼓して
彼の中實の作無し
是の如く名色の法
業力の故に失せず
本見る所の妙色
此の惡色何より來り
是の法方に住せず
不去にして未來に至る
彼の中作者無し
作受の法を離れ
汝他人の身に於て
若し能く自から觀察せば
夢中に欲樂して
寤めたる人の欲樂に著するも

此の法體性空なり
汝先に貪著する所
導師釋迦文
說法中の最勝
譬へば雲霧電の如し
智者誰か貪著せむ
能く泡沫を起さしむるが如し
因緣合するが故に生ず
亦實の作有ること無し
諸法和合して生ず
今に於て何處にか去れる
而も大怖畏を生ずる
亦餘處より來らず
集起の故に見るべし
亦實の受者無し
幻の如く空にして實無し
應に怖畏を生ずべからず
汝の身も亦是の如し
踊躍して大に歡喜するが如く
夢等の如く異るなし

て救無く、依無し。四方を遍觀するに歸依處無し。倍す怖畏を增し、大怖聲を發す。彼の長者子二の因緣の故に大怖畏を生ず。一には昔未だ見ざる所の是の如きの怖事、是の故に怖を生ず。[一六]二には大衆我れと彼と同じく來りて此に在りしを知る。而るに今忽ち死せり。我れ故に殺せしと謂はむ。阿闍世王此の理を嚙み横まに加戮せられざらんかと恐る。是の故に怖畏す。時に長者子獨り此の林に於て一人を見ず。復是の念を作さく、我れ今怖畏す。諸の沙門・婆羅門・天・龍神・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽等誰か能く救ふ者ぞ。彼の長者子過去の善根熟すと雖も、文殊師利の金色女と共に說く所の法を聞見せざるを以ての故なり。[一七]文殊師利卽ち神力を以て諸の樹林をして悉く偈を說かしめて言く、

一切法の體性　長者の見る所の如し
三界悉く虛妄　幻の如く皆實ならず
皮は惡不淨を覆ひ　凡夫羞恥無し
惡覺因緣の故に　妄想して貪著を生ず
譬へば瓶に糞を滿たし　外に假に畫きて莊嚴せむ
愚癡知らざるが故に　瓶を取りて頭に戴きて行かむ
地に墮して卽便破れ　不淨皆充滿す
種種の臭近づき難し　心悔いて捨離を求めむが如し
是の如く諸の凡夫　橫に女色を分別し
長短赤白を見　惡覺の故に愛染す
若し身の實性を見れば　汝の身も亦是の如し
誰か實見の人有りて　臭屍に於て著を生ぜむ

【一六】梵劇陶車にヴサンタセーナー女が殺されて園林の落葉中に埋められ、王の捜査嚴重なる一條あり。

【一七】林樹の偈を說くが如き構想は印度文學の常套なり。シャクンタラ劇第四幕にカンヴ仙の愛別の歌に和して森の木魂も姫を送るの韻を發するの一條あり。比較すべし。

彼の闇不去にして亦不來
煩惱不去にして亦不來
猶し良醫の衆病を療するが如し
而も彼の地水風を治せず
諸の衆生の煩惱の病を治す
煩惱去らず法失はず
亦復諸界入を具有せり
今皆遠離して清淨なるを得たり

是の如く智慧煩惱を離る
亦復不生にして亦不滅
但客病を除いて病生ぜず
是の如く文殊勝醫王
智慧の因緣煩惱無し
而も我が此の身五陰有り
我れ前者の雜煩惱に於て

時に文殊師利大衆の中に於て說法敎化し已りて、大衆歡喜せり。文殊師利讃めて言く、善き哉、善き哉、至心に聽法することや。既に讃歎し已りて大衆の中に於て是の如きの言を作さく。[一三]我れ今日要ず如來の所に至らむ。汝等大衆若し法を聽かんと欲せば當に佛所に往くべし。此の語を說き已りて文殊師利及び諸の大衆各所止に還りぬ。

爾時、[一四]勝金色女八十の從女に前後を圍遶せられ、長者子と共に同じく寶車に載り、園林に往詣し、既に林所に到る。種種莊嚴・寶幢・幡蓋・香華・瓔珞・百寶香爐林樹の間に遍ねし。欲樂の爲の故に、倡伎樂を作し、歌舞戲笑す。又種種甘美の飲食を設けたり。爾時、勝金色女頭を以て彼の上威德長者子の膝上に枕して睡る。即ち神力を以て其の臥處に於て現じて[一五]死相を爲す。膖脹・臭爛・附近すべきこと難し。須臾にして腹破れ、肝腸剖裂し、五藏露現し、臭穢惡むべし。大小便道不淨を流溢し、眼耳鼻の中及び諸の身分、一切の毛孔、膿血交り横はり、口惡氣を出す。膖穢臭處薰林間に遍ねし。髑髏骨破れ、腦出でて流散し、支節塗漫し、青蠅唼食し、蛆蟲蠢動し、種種の穢惡稱說すべからず。時に長者子此の死屍を見て大恐怖を生じ、身毛皆竪ちて而も是の念を作さく、我れ今此に於

【一三】文殊大衆を勸めて靈山に詣る。
【一四】金色女の神通長者子を化度す。
【一五】不淨の相敍述眞に逼り、人をして面を掩はしむ。

金色女諸大衆の心に疑を生ぜしを知り已りて、大衆に語りて言く、離貪の菩薩は復常に貪者と共に俱なりと雖も、敎化を以ての故に惡名を遠離す。菩薩は自から瞋癡を離る。(貪者と)共に俱なりと雖も、敎化を以ての故に、亦惡名無し。菩薩は自から煩惱を離る。煩惱者と俱なりと雖も、敎化を以ての故に惡名を離る。譬へば母子共に俱なれども常に貪染無きが如し。離貪の菩薩亦復是の如し。貪者と俱なるも常に貪染無し。譬へば[二]黃門の女人と俱なるも亦貪染無きが如く、是の如く菩薩は三界を遠離せり。欲界に行ずと雖も而も欲心なし。時に金色女諦かに生死煩惱の惡法を知りて離欲際に住し、離欲の光明を得て欲の闇冥を除き、文殊師利の足を禮し、足を禮し已りて右に遶ること三匝、[三]車に上らんと欲するに臨みて偈を說いて言く、

我れ今車に上り三毒を離る　體性清淨にして貪染無し
瞋恚を遠離して慈心有り　復愚癡無く智慧を得たり
我が貪覺觀して已に清淨なり　今當に車に上りて林に詣で去らんとす
我れ昔貪有り心迷醉す　財色に耽著して覺知せず
猶し大雲の大地を覆ふが如く　日光出でず照曜せず
彼の光不去にして亦不來　大雲覆ふが故に隱れて現ぜず
是の如く衆生煩惱に覆はれ　清淨の大智光明ならず
彼の智不來にして亦不去　煩惱を知り已れば智光出づ
亦復餘處より來るに非ず　惡覺觀の故に煩惱生ず
淨覺觀の故に煩惱滅す　名色取らず亦捨せず
亦復不生亦不滅　亦他に與へず他より取らず
是の如きの法味甚だ清淨なり　猶し燈の然えて闇を滅除するが如し

【二】男女性器に就て不具足なるもの。
【三】出發せんとするに臨み偈を說く。旣に其の決意の尋常にあらざるものを看るべし。

欲する、是を出家と名く。自身煩惱を除くを以ての故に名けて出家と爲すに非ず。勤めて一切衆生の煩惱を斷ずるを名けて出家と爲す。自から能く身心を[九]將護するを名けて出家と爲すに非ず。一切衆生を將護するを名けて出家と爲す。自から身心の縛を解くを以ての故に名けて出家と爲すに非ず。爲めに一切衆生の身心の縛を解くが故に名けて出家と爲す。自身生死の怖畏に於て解脱を得るを以ての故に名けて出家と爲さず。能く一切衆生の生死の怖畏を除き、得脱せしむる者を名けて出家と爲す。自から涅槃を樂むを以て名けて出家と爲すに非ず。勤行精進にして爲に衆生をして一切佛法を滿足せしむるが故に名けて出家と爲す。文殊師利の言く、女子、夫れ出家とは一切衆生に於て慈悲心を起すを名けて出家と爲す。出家とは一切衆生の惡を見ず。亦相を取らざるを名けて出家と爲す。出家とは他の罪を擧げず。慚愧有る者を敎へて懺悔せしむる是を出家と名く。女子、出家とは難し、名他に屬すと爲す。菩薩は爾らず。身心自在にして繫屬無きが故に。女の言く、云何出家の名他に屬すと爲す。文殊師利の言く、戒に屬する者を名けて出家と爲す。破戒者を出家と名けず。三昧に屬する者を名けて出家と爲す。亂心者を出家と名けず。智慧に屬する者を名けて出家と爲す。愚癡者を出家と名けず。解脱に屬する者を名けて出家と爲す。離解脱者を出家と名けず。女子の言く、文殊師利よ、云何が菩薩は名他に屬せざる。文殊師利の言く、菩薩の內自證法は他に從つて學ばざれば、名他に屬せず。何を以ての故に。菩薩は一切の智に於て卽ち自から開解せるが故に。爾時、文殊師利此の出家の法を說き已るに、五百の菩薩心歡喜を生じ、卽ち身上の衣服瓔珞を脫して文殊師利に奉りて讃して言く、善き哉、善き哉、快く此の法を說けり。我れ當に修行すべし。

爾時[一〇]文殊師利金色女に語りて言く、汝車に上りて威德長者子を敎化すべし。若し能く此の長者子を敎化せば卽ち出家と名く。爾時、文殊師利此の語を說く時、一切の大衆咸な疑怪を生じ、各是の念を作さく、今此の女人已に貪欲を離る。何が故に乃ち遣はして貪者と共に俱ならしむ、爾時、

【九】將は養の意。養ひ護るの義なり。

【一〇】已に自利成りて次に利他の行に上る。これ大乘の通規なり。

恭敬せり。女の言く、文殊師利よ、應に是の如く恭敬し供養すべからず。是の如く供養するものは供養と名けず。何を以ての故に。若し自身他身を見、及び有法を見、而して說くべき者は供養と名けず。若し自身他身及び有法を見ずんば是を供養と名く。是の如く聞無く、著無き、是を聽法と名く。亦供養と名く。文殊師利の言く、云何が法供養なる。女の言く、若し身を夢の如しと觀じ、說者は幻の如し、所聞の法は響の如しと、是の如く信じ已りて二種の解脫を作さず。是を法供養と名く。文殊問うて言く、云何が聽法なる。女の如く、如說修行是を聽法と名く。是の金色女文殊師利童子の神通力を以ての故に、又自身過去の善根智慧力を以ての故に、彼の衆中に於て如法に法を說く。爾時、金色女此の法を說く時、衆中億千人有り。阿耨多羅三藐三菩提心を發せり。復過去に深く善根を植ゑたる諸天人衆有り。其の數五百、無生法忍を得、三萬三千の天人は遠塵離垢法眼淨を得たり。勝金色女は淨心歡喜して順法忍を得、順忍を得已りて、文殊師利の足を禮し、自から己身に於て深く慚愧を生じ、是の如くの言を作さく、我れ正法に於て猶し死人の如し。唯願はくは慈愍して我れに出家を聽したまへ。[七]文殊師利の言く、菩薩の出家は自身の剃髮を以て名けて出家と爲すに非ず。何を以ての故に。若し能く大精進を發し、爲めに一切衆生の煩惱を除く、是を菩薩の出家と名く。自身染衣を被著するを以て名けて出家と爲すに非ず。勤めて衆生の三毒の染心を斷ず。是を出家と名く。自から戒行を持つを名けて出家と爲すに非ず。能く毀禁を淨戒に安住せしむる是を出家と名く。[八]阿蘭若處に獨坐思惟するを以て名けて出家と爲すに非ず。能く女色生死流轉に於て、慧方便を以て化して解脫せしむる、是を出家と名く。自身に律儀を守護するを以て名けて出家と爲すに非ず。若し能く廣く四無量心を起し、衆生を安置せば、是を出家と名く。自身に善法を修行するを以て名けて出家と爲すに非ず。能く衆生をして善根を增益せしむる、是を出家と名く。自身涅槃に入るを得るを以て名けて出家と爲すに非ず。爲めに一切衆生を安置して大涅槃に入らしめんと

【七】眞の出家とは何ぞ。

【八】阿蘭若 araṇya 空閑處、曠野、森林の義。

の大悲は當に何に於てか求むべき。女の言く、一切衆生の煩惱中に於て求む。何を以ての故に。若し衆生煩惱無くんば菩薩阿耨多羅三藐三菩提心を發さず。文殊師利の言く、喜心當に何に於て求むべき。女の言く、最勝信淸淨菩提喜心中に於て求む。文殊師利の言く、菩薩捨心云何が滿ずる。女の言く、一切衆生の鬪諍を捨離する、是を名けて滿と爲す。一切諸法の諍論を遠離する、是の故に滿と名く。文殊師利の言く、云何が諍論と名く。女の言く、若し菩薩自から言ふ、我れ當に一切の煩惱を捨離し、一切衆生を度脫せしむべしと、是を諍論と名く。文殊師利又言く、誰と諍論する。女の言く、一切の外道なり。又問ふ、誰か是れ外道なる。女の言く、他の邪說に於て隨順し忍受する是を外道と名く。復次に菩提忍心は何より生ずるや。女の言く、一切衆生の惱亂の中より生ず。何を以ての故に。若し惱亂せざれば忍心生ぜざるが故に。若し菩薩諸の衆生の呵罵打辱を受けんに、其の心地の如く、怨恨を起さず。是を忍と爲す。文殊師利の言く、云何が瞋恨なる。女の言く、瞋恨は能く百劫に作る所の善業を滅す。是を瞋恨と名く。又問ふ、云何が非瞋恨なる。女の言く、若し一切の煩惱境中に於て障礙する所無きを無瞋恨と名く。文殊師利の言く、菩薩諍論の中に於て云何が能く勝たむ。女の言く、菩薩一切の法に於て分別する所無く、亦所得無し。是を名けて勝と爲す。文殊復言く、云何が菩薩魔怨を遠離する。女の言く、菩薩現に魔業を行ずと雖も染著する所無し。是れ則ち名けて魔怨を遠離すと爲す。何を以ての故に。菩薩五陰の煩惱を現ずと雖も五陰の煩惱と和合せず。體性無染の故に。菩薩は生死を示して衆生を敎化すと雖も、一切法去來無しと知るが故に。衆生の爲に天魔道を說くと雖も、一切智の中に於て自身我我所を遠離するが故に。文殊問うて言く、菩薩云何が衆生を敎化す。女の言く、當に方便般若波羅蜜を修して能く敎化するが故に。文殊又言く、菩薩云何が一切衆生を安住する、女の言く、菩薩は自から智中に住するが如く、一切衆生亦是の如く住す。文殊師利の言く、女子、一切の大衆汝の說法を聞いて心愛樂を生じ汝を

へば火の大積草木を燒くに、火勢滅し難きが如く、是の如く惡見・毒心・煩惱と合し、三界の中に於て熾然として常に燒き、休息有ること無し。譬へば薪無くんば火然るを得ざるが如く、是の如く惡見を遠離すれば煩惱三界を生ぜず。譬へば火然えて設ひ百千歳ならむも、利益有ること無く、亦增多ならざるが如く、煩惱の熾火も亦復是の如し。百千年に至りて利益する所無し。亦增多ならず。譬へば火滅して方所に至らざるが如く、是の如く智慧諸煩惱を滅すること亦復是の如し。方所に至らず。譬へば猛火の能く入る者無きが如く、是の如く、自性清淨の客塵煩惱は生じて而も染する能はず。

爾時、文殊師利金色女に問うて言く、云何が身を見る。金色女の言く、水中の月を見るが如し。又問ふ、云何が五陰を見る。女の言く、佛の所化人を見るが如し。又問ふ、云何が十八界を見る。女の言く、劫火の諸世界を燒くを見るが如し。又問ふ、云何が十二入を見る。女の言く、不作の業行の如し。又問ふ、云何が四衆を見る。女の言く、上虚空を見るが如し。又問ふ、云何が自身を觀ずる。金色女の言く、父母の和合より生ずるを知る。又問ふ、云何が我が身を見る。女の言く、盲人の色を見るが如し。又問ふ、汝今此の法を聽くや。金色女の言く、幻人の法を聽くが如し。又問ふ、汝阿耨多羅三藐三菩提心を發すや。金色女の言く、我れ已に發心して復更に發さず。又問ふ、汝檀那波羅蜜を行ずるや。女の言く、煩惱中に行ぜず、亦捨せず。又問ふ、汝尸波羅蜜を滿ずるや。女の言く、滿ずること虚空の滿つるが如し。又問ふ、汝羼提波羅蜜を修するや。女の言く、已に修すること一切衆生の不生不出の如し。又問ふ、汝毘梨耶波羅蜜を發すや。女の言く、已に發すこと一切法不可得の如し。又問ふ、汝禪波羅蜜に住するや。女の言く、已に住すること法界中に住するが如し。又問ふ、汝般若波羅蜜を滿ずるや。女の言く、已に滿ず。云何が滿ずる。不增不減方便智の故に。又問ふ、汝慈を修するや。女の言く、已に修すること一切衆生の不生の如し。又問ふ、菩薩

有生に非ず、有滅に非ず。亦安置せず。我れ是の如く知り、是の如く煩惱の體性を正見す。文殊師利金色女に語りて言く、何者か是れ煩惱の體性なる。金色女の言く、諸惡覺觀は是れ煩惱の體性なり。不淨攀緣の故に煩惱則ち生ず。清淨覺觀の故に煩惱は客の如し。是の故に煩惱は空智と和合せず。無相無願と和合せず。大毒蛇の眼もて人を視る時、人便ち消滅す。若し智人有りて[四]阿伽陀藥を持ちて彼の蛇の所に往かんに、蛇藥氣を聞きて即便毒を失ふ。乃至童子の種種に觸惱せんも害を爲し能はざるが如し。文殊師利よ、我れ昔の時に於て、惡覺觀の故に顚倒心生ず。煩惱火の爲めに焚燒せられ、自身に愛著して此の身の沫の如く、炎の如く、幻の如く、化の如く、夢中に於けるが如くなるを知らず。五欲の樂を受くること[五]蜜を刀に塗るが如し。愚者は味を貪りて舌を傷ふを覺えず。又草露の日を見て便ち消ゆるが如し。諸行無常の迅速なるを知らず。五陰の一向に常に苦なるを知らず。自身の性淸淨ならざるを知らず。一切法の我我所種種の差別を離るゝを知らず。自から所見無く他をして闇蔽ならしむるを知らず。自から縛し復他をして縛せしむるを知らず。我れ未だ法を聞かず、此の諸法に於て解脫を得ざりき。我れ今法を聞き、智慧を得已りて、諸の煩惱に於て解脫を得たり。是の故に一切の衆生我が身所に於て貪心を生ぜず。文殊師利よ、譬へば光明の闇と住せざるが如く、是の如く貪心を離るゝ者は煩惱住せず。爾時、金色女文殊師利に對して是の法を說き已りて、文殊師利に白して言く、一切の天人大衆雲集せり。唯願はくは慈悲をもて具さに法力を說き、人天を開示して一切煩惱の體性を知らしめよ。體性を知り已りて諸の衆生に於て憐愍の心を起し、諸の衆生に安隱を得せしめんが爲めの故に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發さむ。時に文殊師利復是の言を作さく、[六]此の煩惱の體性は信じ難く解し難し。何を以ての故に。此の煩惱の性即ち是れ菩提なるが故に。譬へば火の未だ出でざる時、薪を燒く能はず。是の如く不生の煩惱は流轉の中に於て生死を受けず。火出で已りて即ち能く薪を燒くが如く、惡覺生ずる者は生死に流轉す。譬

【四】華嚴入法界品彌勒の下に「阿伽陀藥の如し、能く惑病を除き永く安隱ならしむるが故に」とあり。原語は agada とあり。

【五】四十二章經に言く、「財色の人に於ける、人の捨てざること、譬へば刀刃の蜜有るが如し。一餐の美にも足らざるに、小兒之を舐るときは則ち舌を割くの患有り」。

【六】煩惱の體性文殊によりて明かにせらる。

卷の下

爾時、[一]世尊、侍者阿難と耆闍崛山頂の大經行處に在して遙かに文殊師利を讃じて言く、善き哉、善き哉、文殊師利よ、善く菩薩の最勝精進方便法門を說けり。汝の說く所の如し。此の語を讃する時、其の聲三千大千世界に遍滿し、一切の大地六種に震動せり。是の時、無量の天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等、帝釋天王・大梵天王・四天大王、皆悉く聲を尋ねて同じく佛所に詣り、恭敬して足を禮して、卻いて一面に坐し、倶に佛に白して言く、世尊、向に如來讃善哉の聲大千界に遍滿するを聞き、地皆震動せり。未審、如來誰をか讃歎したまふや。爾時に世尊諸の大衆に告げたまふ。我れ向に文殊師利を讃歎せり。是の時大衆復佛に白して言く、世尊、文殊師利今何處にか在る。佛の言く、[二]王舍城東門の路上に在り。金色女と共に諸の大衆の爲めに妙法を敷演せり。汝等若し法を聞かんと欲樂せば宜しく彼に往くべし。是の時、一切の天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等、帝釋天王・大梵天王・四天大王、佛の教を聞き已りて、倶に文殊師利の所に詣り、各自身の殊勝光明を現じ、天の妙華を雨らして王舍城及び諸の大衆に遍からしむ。爾時、一切の人天大衆皆相見ることを得て障礙有ること無し。時に王舍城の一切の人民諸の天衆を見、及び妙華を見て、皆共に相隨つて文殊師利の所に往く。爾時、阿闍世王大威德を以て莊嚴し、四兵及び後宮の婇女亦皆文殊師利の所に往詣す。[三]是の時、城中の一切の王子・大臣・長者・居士子等、金色女の心寂滅に住するを見て、皆染心を捨て、五根清淨にして、諸の慚愧を具し、復煩惱無し。時に文殊師利此の大衆の金色女に於て染心無きを見已りて、金色女に問うて言く、汝今煩惱置いて何處に在ればか、諸の王子乃至居士子等をして染心を生ぜざらしむるや。金色女の言く、一切の煩惱及び衆生の煩惱は皆智慧解脫の岸、如如法界平等法の中に住す。彼の諸の煩惱

【一】場面は一轉して靈山會となる。

【二】文殊の所在。

【三】金色女に於て貪染全く無し。

便無きが故に。是の如く聲聞緣覺は空・無相・無作の法の中に、方便無きが故に自から出づる能はず。最勝精進の菩薩は方便有るが故に能く入り能く出づ。譬へば人有りて陣に入りて闘戰するに身傷損無くして而も能く免れ出づるが如し。是を最も難しと爲す。是の如く菩薩空・無相・無願三解脫門に入るも方便有るが故に則ち能く免れ出づ。是を則ち名けて菩薩の方便と爲す。

勝金色女文殊師利に問うて言く、云何が名けて菩薩の方便と爲す。文殊師利の言く、方便に二種有り。一には生死を捨てず。二には涅槃に住せず。復二種有り。一には空門、二には惡見門なり。復二種有り。一には無相門、二には相覺觀門なり。復二種有り。一には無願門、二には願生門なり。復二種有り。一には無作門、二には種善根行門なり。復二種有り。一には無生門、二には示生門なり。復二種有り。一には無出門、二には陰入界門なり。復二種有り。一には寂滅門、二には出生門なり。復二種有り。一には定門、二には教化門なり。復二種有り。一には法界門、二には護正法門なり。復二種有り。一には聲聞門、二には深心菩提行門なり。復二種有り。一には辟支佛門、二には四無礙門なり。若し菩薩有りて是の如き等の二種の法門に於て他の爲めに示現して執着する所無くんば、一切の法門に於ても亦復是の如し。是を方便と名く。復二種の門有り。一には貪門、二には離貪門なり。復二種有り。一には瞋門、二には離瞋門なり。復二門有り。一には癡門、二には離癡門なり。復二門有り。一には煩惱門、二には離煩惱門なり。復二種有り。一には一切生門、二には、離生門なり。此れを菩薩の方便門と名く。復二種有り。一には一切凡夫行門、二には一切學無學聲聞辟支佛菩薩如來門なり。若し能く此の二種の門を知らば、是を菩薩の最勝方便と名く。

大莊嚴法門經卷上

爾時、勝金色女是の語を說き已りて文殊師利に問うて言く、云何が菩薩能く煩惱を離れむ。文殊答へて言く、若し菩薩有りて煩惱の生を知り、煩惱の滅を知らば是れ則ち煩惱を離るゝ者と名けず、譬へば明燈の能く諸闇を滅するが如し。若し闇と俱ならば名けて燈と爲さず。是の如く菩薩煩惱の生を見、煩惱の滅を見れば則ち煩惱を離るゝ菩薩と名くるを得ず。復次に煩惱を離るゝ菩薩は煩惱を見ず、清淨を見ず、見に非ず、不見に非ず。心意識を離るゝ者を煩惱を離ると名く。彼彼の處に於て心分別有り、乃至涅槃を念ずる者、是を不離煩惱と名く。何を以ての故に、或は心、或は心數、攀緣罪福を生ずるが故に。此の攀緣を一切作行と名く、若し作行し已れば是を流轉と爲す。若し流轉の法は實の流轉と名く。一切の流轉を名けて煩惱と爲す。

復次に和合する者を名けて煩惱と爲す。何者か和合なる。眼と色と和合し、耳と聲と和合し、鼻と香と和合し、舌と味と和合し、身と觸と和合し、意と法と和合し、三昧と煩惱と和合す。何を以ての故に。現に三昧を得て相に出沒する者を名けて煩惱と爲し、惡覺を離るゝ者を煩惱を離ると名く。心行を離るゝ者を煩惱を離ると名く。無功用の者を煩惱を離ると名く。數量を離るゝ者を煩惱を離ると名く。若し菩薩有りて自から煩惱を離れ、復他をして離れしめ、一切衆生の縛を解かんが爲の故に、勤行精進せば、如來此を說いて煩惱を離れたる精進の菩薩と名く。

時に勝金色女文殊師利に問うて言く、何をか名けて最勝精進菩薩と爲す。文殊師利の言く、若し菩薩有りて空法を證せず、身見の衆生に於て悲心を捨てず。無相を證せず、惡見の衆生に於て悲心を捨てず。無願を證せず、願行の衆生に於て悲心を捨てず。無作の法を證せず、作行の衆生に於て悲心を捨てず。無生法を證せず、生老死の衆生に於て悲心を捨てず。無出法を證せず、生滅の衆生に於て悲心を捨てず。聲聞・辟支佛の果を證せず、菩薩位に住して、一切の衆生に於て悲心を捨てず。是を最勝精進の菩薩と名く。譬へば大海の如し入り易くして出で難し。何を以ての故に。善方

【三】金色女と文殊と一問一答。

よ、我が貪瞋癡の如く、一切衆生の貪瞋癡亦復是の如し。我が煩惱の如く、當に知るべし、一切衆生の煩惱も亦復是の如し。

復次に文殊師利よ、譬へば猛火の一切の草木に於て恐怖を生ぜざるが如し。是の如く智慧行の菩薩は諸の煩惱に於て恐怖を生ぜず。譬へば日輪の闇と住せざるが如く、是の如く智慧行の菩薩は惑と住せず。譬へば大風の諸山樹木能く障礙する無きが如く、是の如く智慧行の菩薩を、一切世間煩惱境界は能く障礙する無し。譬へば虛空の劫火に燒かれざるが如く、是の如く智慧行の菩薩は諸煩惱の火亦燒く能はず。譬へば寶有り名けて[一九]鐵愛と曰ふ。不淨に住せず。所止する處に隨つて一切清淨なり。是の如く智慧行の菩薩は一切の煩惱に於て亦復住せず。譬へば虛空の地と合せざる如く、是の如く、智慧行の菩薩は煩惱諸結と和合せず。鐵圍山を風の動ずる能はざるが如く、是の如く智慧行の菩薩は一切の煩惱の動ずる能はざる所なり。譬へば倉鵠は水乳の和合せるに惟乳を唼りて水を取らず。是の如く智慧行の菩薩は一切の煩惱と和合すと雖も、而も但智を取りて煩惱を取らず。[二〇]鬱單越國の如き、男女和合するに悉く樹下に詣る。若し[二一]親に非ざれば樹枝垂下して共身を陰覆す。菩薩も是の如し。根未熟の衆生に於て智垂化せず。

復次に文殊師利よ、我れ今此の一切の煩惱に於て驚怖を生ぜず。何を以ての故に。一切の煩惱の性を知るを以ての故に。善く菩薩の無畏の鎧を被るが故に。譬へば健人の陣に臨みて怖れざるが如し。若し恐懼を生ぜば則ち健人に非ず。菩薩も亦爾り。諸の煩惱に於て而も恐怖を生ぜば則ち菩薩に非ず。又人有りて陣に入りて相撃つが如し、他に勝つ能はずして反つて他の爲めに害せらるゝを健兒と名けず。若し諸の菩薩の煩惱に害せらるゝ者をば菩薩と名けず。文殊師利よ、淨水珠の如し。之を濁水に投ずれば水則ち清淨にして彼の濁水に汚されず。菩薩煩惱と和合すと雖も煩惱に染汚せられず。

【一九】 ayaskānta なるべし。磁石のことを爾か呼ぶ。

【二〇】 uttarakuru 即ち北倶盧洲のことなり。

【二一】 親族にして相婚すべからざる男女なり。北倶盧洲は顏容同一にして各區別し難きが故にかくの如く樹枝の垂下を以てこれを知るといふ。

文殊師利の所說の如く、貪は寂滅の法にして一切和合の法も亦是の如く寂滅なり。若し衆生有りて此の法を知らず、貪著を起さば、我れ能く彼をして貪著を遠離し、阿耨多羅三藐三菩提に安住せしめむ。何を以ての故に。一切の煩惱は猶し死人の如し。但顚倒妄想を以ての故に生ず。若し顚倒諸の妄想無ければ煩惱則ち滅す。我れ今文殊師利の所說の法要を聞くを得て知りぬ、一切の煩惱は猶ほ雲霧の如く體性不實なり。煩惱は電の如し、一念も住らず。煩惱は風の如し、體性不生なり。煩惱は空中の畫の如し、見るべからざるが故に。煩惱は水に畫くが如し、畫くに隨つて隨つて滅するが故に。煩惱は夜叉鬼の如し、惡覺を生ずるが故に。煩惱は熱病の如し、狂妄語するが故に。煩惱の體性無し、惡覺生ずるが故に。煩惱捨し難し、我我所の執の故に。物無くして妄りに客塵を取る。煩惱妄生の故に。煩惱は想に隨つて現ず、惡覺觀取の故に。煩惱は眼の如し、種種の境起るを見るが故に。煩惱は體無盡なり、心の濁に由りて生ずるが故に。煩惱は體性無し、和合緣生の故に。煩惱は闇聚の如し、陰入界合するが故に。煩惱は不可識なり、名色無きが故に。煩惱は不可知なり、善覺無きが故に。煩惱は種子の如し、能く菩提を生ずるが故に。何を以ての故に。要らず煩惱に因りて能く菩提を滿ずるが故に。

文殊師利よ、菩提は金剛橛の如し。衆生の煩惱動ずる能はざるが故に。又菩提は金剛跡の如し。一切の煩惱破する能はざるが故に。何を以ての故に。法界方便不可壞の故に。文殊師利よ、煩惱を見る者を名けて菩提と爲す。何を以ての故に。一切の境界菩提に順ずるが故に。是の如く菩提は住處有ること無し。一切の煩惱も亦住處無し。何を以ての故に。生卽ち滅の故に。文殊師利よ、心の體性の如きは說示すべからず。亦此に在り、彼に在りと說くべからず。貪瞋癡の體性亦復是の如し。菩薩は是の如く煩惱を知るが故に、多貪の衆生、多瞋の衆生、多癡の衆生に於て、善く敎化して然も彼の衆生の爲めに惱亂せられず。乃至敎化して衆生に等分して亦惱亂せられず。文殊師利

知無し。皮膚に在らず、筋血に在らず、骨髓に在らず、髮毛に在らず、指爪に在らず、內外に在らず、眼耳鼻舌身意に在らず、住に非ず、不住に非ず、定住ならず、不定住に非ず、此住に非ず、彼住に非ず、色に非ず、見るべからず、捉ふべからず、障礙無く、分別無く、執ずべからず、和合せず、非家・離家・淸淨・最淸淨・光明照曜す。彼の心意思量分別は煩惱と和合せず、亦淸淨に非ず。何を以ての故に。體性淨なるが故に煩惱と和合せず。和合せざるが故に淸淨光明あり。又彼の光明は身無し。身無きが故に煩惱と和合せず。亦淸淨に非ず。是の如く陰界入の體性は卽ち是れ菩提、菩提の體性は卽ち是れ陰界入なり。是の故に汝が身の陰界入の性是を菩提と名く。何を以ての故に。彼を離るゝに非ざるが故に。名けて菩提と爲す。陰界入を離れて事中に菩提は得べからず。陰界入を覺れば卽ち是れ菩提なり。是の故に我れ一切法平等覺此れを菩提と名くと說く。

爾時、文殊師利童子此の法を說き已るに、時に虛空の中に五百の諸天阿耨多羅三藐三菩提心を發せり。復勝金色光明德女に隨從するもの有り。若くは男、若くは女、童男童女二百人、阿耨多羅三藐三菩提心を發せり。六十の天人諸法中に於て法眼淨を得たり。時に勝金色女踊躍歡喜して心淸淨なるを得、五體を地に投じて、文殊師利の足を禮して是の如きの言を作さく、佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依したてまつる。三寶に歸し已りて、梵行五戒を受け、戒法を受け已りて、至心に阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、既に心を發し已りて、文殊に白して言く、我れ今是の如きの法敎を聞くを得たり。一切衆生をして安隱を得せしめんが爲の故に、慈悲の心を起し、佛種を斷ぜざらんが爲の故に、至心に阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。文殊師利の我が爲めに此の菩提の法を說きしが如く、我れ當に順行すべし。亦當に廣く一切衆生の爲めに是の如きの法を說くべし。[一八]文殊師利よ、是の如く佛法は寂滅、大寂滅なり。我れ知らざるが故に、惡覺觀に隨ひ、顚倒心を起し、身見を執じ、自から身に貪著し、復他をして貪らしむ。我れ今至心淸淨にして一切の罪業を懺悔す。

【一八】金色女自ら領解する所を開陳す。

是れ菩提なりと說く。

復次に眼を覺る者、是を菩提と名く。是の如く耳鼻舌身意を覺る者、是を菩提と名く。眼の體性は空なり。能く是の如きの體性空を覺る者は卽ち是れ菩提なり。耳鼻舌身意の體性は空なり。能く覺知する者は卽ち是れ菩提なり。復次に眼の體性は不貪・不瞋・不癡なり。貪瞋癡を離るゝ卽ち是れ菩提なり。是の如く耳鼻舌身意の體性は不貪・不瞋・不癡なり。貪瞋癡を離るゝ卽ち是れ菩提なり。眼主者無く取者無し。菩提も亦主者無く、取者無し。是の如く耳鼻舌身意も亦主者無く、取者無し。菩提亦主者無く、取者無し。眼の中に男法・女法・亦非男非女無し。是の如く菩提の中に男法・女法・亦非男非女無し。耳鼻舌身意の中に男法女法無し。耳鼻舌身意亦男に非ず、女に非ず。是の如く菩提の中に男法・女法無し、菩提亦男に非ず、女に非ず。復次に眼色は如如より來る。此の如きを覺るが故に名けて菩提と爲す。是の如く意法は如如より來る。此の如を覺るが故に名けて菩提と爲す。是の故に我れ汝が身卽ち是れ菩提なりと說く。

復次に汝が身は我無く、衆生無く、壽命無く、[一五]哺沙無く、[一六]富伽羅無く、人無く、[一七]摩那摩無く、作者無く、受者無く、見者無く、聞者無く、嗅者無く、味者無く、觸者無く、知者無し。彼の菩提も亦我無く、衆生無く、壽命無く、哺沙無く、富伽羅無く、人無く、摩那摩無く、作者無く、受者無く、見者無く、聞者無く、嗅者無く、味者無く、觸者無く、知者無し。是の故に一切法不可知は卽ち是れ菩提なりと說く。

復次に此の身は知無く、覺無く、作無し、猶し草木石壁の如し。若くは內の地界、若くは外の地界を地の體性と名く。此の地界の性を如來は般若の智力もて覺り已る、是の故に我れ汝が身卽ち是れ菩提なりと說く。

復次に妹よ、汝が心意の如き、和合して思量し、分別す。而して此の心意の思量分別は覺無く

[一五] 前註を見よ。
[一六] 前註を見よ。
[一七] 摩那摩は恐らく摩那婆 mānava なるべし。儒童と譯す。我の一種。

復次に五陰を覺る者は菩提を覺ると名く。何を以ての故に。五陰を離れて佛は菩提を得るに非ず。菩提を離れて佛は五陰を覺るに非ず。此の方便もて知る。一切衆生は悉く菩提に同じく、菩提も亦一切衆生に同じ。是の故に我れ汝が身卽ち是れ菩提なりと說く。

復次に四大の法生ず。所謂地界・水界・火界・風界なり。而るに此の地界は我に非ず、衆生に非ず、壽命に非ず、[一三]晡沙に非ず、[一四]富伽羅に非ず。地界平等にして是れ菩提なり。過去無數の故に。水界平等にして是れ菩提なり。體性不生の故に。火界平等にして是れ菩提なり。體性不可覺の故に。風界平等にして是れ菩提なり。體性不可見の故に。地界の體性を如來覺するが故に菩提を得。是の如く水界・火界・風界を如來覺するが故に菩提を得。地性を覺る者は是を菩提と名く。是の如く能く水火風等を覺る是を菩提と名く。是の故に我れ汝が身卽ち是れ菩提なりと說く。

復次に地界は水を知らず。水界は火を知らず。火界は風を知らず。是の如く諸界は名無く說くべからざるもの是を菩提と名く。是の故に我れ汝が身卽ち是れ菩提なりと說く。

復次に汝が身に眼法生ずるや不や。是の如く、耳鼻舌身意生ずるや不や。妹よ、此の中に眼は空なり。眼空の體性卽ち是れ菩提なり。是の如く耳鼻舌身意は空なり。(乃至)意空の體性は卽ち是れ菩提なり。

復次に、若し眼の體性空ならば色は說くべからず。色空の體性卽ち是れ菩提なり。是の如く耳鼻舌身意の體性空ならば、一切法說くべからず。法空の體性卽ち是れ菩提なり。復次に眼は色を取らず。菩提も亦眼の如し。色を取らず。是の如く、耳鼻舌身意は聲香味觸法を取らず。菩提も亦是の如し。一切法を取らず。是の如く眼識界は色界中に住せず。眼識色界菩提の中に亦住せず。耳識界・鼻識界・舌識界・身識界・意識界は法界中に住せず。是の如く、意識、法界は菩提中に住せず。眼識界菩提界は無二にして別無し。乃至意識界菩提界も無二にして別無し。是の故に我れ汝が身卽ち

【一三】poṣa 養者と譯す。
【一四】pudgala 通常補特伽羅と音譯す。數取趣と譯するは一種の附會譯なり。我といふが如き意義なり。

等なり。是の故に我れ汝が身卽ち是れ菩提なりと說く。

復次に五陰は夢の如く體性不生なり。菩提も亦是の如く、體性不生なり。是の如く夢平等の故に五陰も平等なり。夢平等の故に菩提も平等なり。是の故に我れ汝が身卽ち是れ菩提なりと說く。

復次に五陰は陽炎の如し。業緣を以ての故に生ず。菩提も亦陽焰の如し。業無く、報無し。是の如く、陽炎平等の故に五陰平等なり。陽炎平等の故に菩提も平等なり。是の故に我れ汝が身卽ち是れ菩提なりと說く。

復次に五陰は鏡中の像の如し。體性空にして不去不來たり。菩提も亦是の如し、無去無來なり。是の如く鏡像平等の故に五陰平等なり。鏡像平等の故に菩提も平等なり。是の故に我れ汝が身卽ち是れ菩提なりと說く。

復次に五陰は但是れ假名なり。菩提も亦是の如し。但是れ假名なり。是の如く五陰平等の故に菩提も平等なり。是の故に我れ汝が身卽ち是れ菩提なりと說く。

復次に五陰は作者有ることなし。作者の義を離るゝは是れ菩提なり。五陰は體性無し。體性の義を離るゝは是れ菩提なり。五陰は不生なり。生の義を離るゝは是れ菩提なり。五陰は無常なり。常の義を離るゝは是れ菩提なり。五陰は無樂なり。樂の義を離るゝは是れ菩提なり。五陰は不淸淨なり。淸淨の義を離るゝは是れ菩提なり。五陰は無取なり。取の義を離るゝは是れ菩提なり。五陰は家無し。家の義を離るゝは是れ菩提なり。五陰は去來無し。無去來の義は是れ菩提なり。五陰は聖人の法論なり。菩提も亦聖人の法論なり。是の如く論非論の法は五陰の體性なり。如來一切覺りたまふが故に是を菩提と名く。是の如く五陰の體性卽ち是れ菩提の體性なり。菩提の體性は卽ち是れ一切諸佛の體性なり。汝が身中の五陰の體性の如きは卽ち是れ一切諸佛の體性たり。諸佛の體性は卽ち是れ一切衆生の五陰の體性なり。是の故に我れ汝が身卽ち是れ菩提たりと說く。

三藐三佛陀と號す。彼の佛の說く所、身及び菩提皆悉く平等なり。意に於て云何。汝が身、五陰、十二入、十八界有りや不や。是の女過去の善根因緣あり。此の語を聞き已りて、卽ち法光を得、法光を得已りて、文殊に白して言く、是の如し、是の如し。我が今の此の身五陰、十二入、十八界有り。文殊師利の言く、汝が意に於て云何。色は覺るべく知るべきや不や。女の言く、不なり。覺るべからず、知るべからず。文殊師利の言く、菩提亦是の如し。覺るべからず、知るべからず。是の如く、色平等の故に菩提亦平等なり。是の故に我れ汝が身卽ち是れ菩提なりと說く。

文殊師利の言く、汝が意に於て云何。受・想・行・識、覺るべく、知るべきや不や。女の言く、不なり。覺るべからず、知るべからず。文殊師利の言く、菩提も亦是の如し。覺知すべからず。是の如く、受・想・行・識、平等の故に、菩提亦平等なり。是の故に我れ汝が身卽ち是れ菩提なりと說く。

文殊師利の言く、汝が意に於て云何。此の色說いて此に在り、彼に在り、內に在り、外に在り、中間に在りとすべきや不や。說いて青・黃・赤・白・頗梨[二]・雜色[三]とすべきや不や。女の言く、不なり。文殊師利の言く、菩提も亦是の如し。得て說くべからず。是の如く色平等の故に菩提も亦平等なり。是の故に我れ汝が身卽ち是れ菩提なりと說く。

文殊師利の言く、受・想・行・識、說いて此に在り、彼に在り、內に在り、外に在り、中間に在りとすべきや不や。說いて青・黃・赤・白・頗梨・雜色とすべきや不や。女の言く、不なり。色の說くべからざるが如く、乃至受・想・行・識も亦說くべからず。文殊師利の言く、菩提も亦是の如し。說くべからず。是の如く受・想・行・識、平等の故に菩提も平等なり。是の故に我れ汝が身卽ち是れ菩提なりと說く。

復次に五陰は幻の如く、體性實ならず。顚倒の故に生ず。菩提も亦幻の如く、體性實ならず。顚倒を以ての故に。世俗に生を說くこと是の如し。幻平等の故に五陰平等なり。幻平等の故に菩提平

【二】水晶を云ふ。
【三】種々の色を雜へたるの意。

摩睺羅伽なりと爲んや、是れ帝釋と爲んや、是れ梵天と爲んや、是れ四天王天と爲んや。毘沙門の言く、天に非ず、夜叉に非ず、乾闥婆に非ず、阿修羅に非ず、迦樓羅に非ず、緊那羅に非ず、摩睺羅伽に非ず、亦帝釋に非ず、亦梵天に非ず、亦四天王天に非ず、是の如き等の輩は悉く菩薩に非ず。菩薩と言ふは、一切衆生の願求する所に隨つて悉く能く滿足せしめ、慳悋を生ぜず。是を菩薩と名く。時に勝金色女卽ち是の念を作さく、所說の如くんば我れ今衣を乞はんに必定して應に得べし。卽便ち車より下り、文殊師利の所に向ひ、到り已りて白して言く、文殊師利よ、願くは能く我れに著る所の衣裳を施さんや。文殊師利の言く、妹よ、汝若し能く阿耨多羅三藐三菩提心を發さば當に汝に衣を與ふべし。女の言く、文殊師利よ、何をか名けて菩提心と爲すや。文殊師利の言く、汝が身卽ち是れ菩提なり。女の言く、云何んが我が身卽ち是れ菩提なる。願はくは重ねて廣說し、我をして解を得しめよ。

是に於て女人[九]偈を說いて衣を乞ふ。

文殊久しく菩提の願を發す、　今我れに身上の衣を施すべし。
若し施す能はずんば菩薩に非ず、　猶し枯れたる河の而も水無きが如し。

爾時、文殊師利偈を說いて答へて言く、

汝若し能く菩提心を發さば、　我れ當に願に隨つて汝に衣を施すべし。
若し堅固菩提者有らば　一切の天人皆供養せむ。

爾時、勝金色女復偈を以て問ふ。

菩提何の義か有る。　菩提誰に從つて得む。
菩提誰か能く與へむ、　菩提何の行をか成する。

[一〇]爾時、文殊師利、金色女に語つて言く、今に於て現在に佛有す。釋迦牟尼多他阿伽度、阿羅訶、

【九】小野小町大和の石上寺にて僧正遍昭に贈れりといふ歌、「岩の上の旅寢をすればいと寒し苔の衣をわれにかさなむ」。遍昭返歌に「世を背く苔の衣はたゞ一重、かさねばうとしいざ二人ねむ」。

【一〇】文殊の說法。

復種種甘美の飲食、衣服、臥具を持ち、次第隨從して園林に往詣す。爾時大衆若くは男、若くは女、童男童女、皆悉く隨逐し、左右より觀看せり。

爾時、[七]文殊師利童子、禪定より起ち、一切衆生に於て大悲心を起して是の念を作さく、何等の衆生か大乘の中に於て敎化を受くるに堪へむ。何等の衆生か應に神通を以て敎化を受くべき。何等の衆生か應に過去の業緣を以て敎化を受くべき。何等の衆生か應に正法を聞きて敎化を受くべき。是の念を作し已りて金色女と長者子と同じく寶車に載りて園林に詣らんと欲するを見る。見已りて卽ち根性の差別を覩じ、差別を覩じ已りて是の念言を作さく、此の女過去の善業因緣敎化を受くるに堪ふ。若し我が法を聞かば、卽ち能く信受せむ。爾時、文殊師利神通力を以て身光明を放ち、日光を映蔽して悉く復現ぜず。何に況んや餘の光をや。時に文殊師利著る所の衣服、面より各光照して一由旬に滿つ。彼の多衆をして皆悉く覩見せしむ。復種種の衆寶瓔珞、天冠、臂印を以て其の身を莊嚴し、見る者をして心貪樂を生ぜしむ。是の事を作し已りて、女の所に往詣して路に當りて住し、光は女身及び長者子駟馬寶車を照し、所有光明皆悉く闇蔽して、猶し聚墨の眞金に比するに光明有ること無きが如し。彼の金色女文殊師利の衆寶莊嚴の衣服淸潔にして光明遠く照すを見て、是れ天童ならむと謂ひ、自から己身及び長者子に於て、而も鄙惡を生じて復愛樂せず。文殊の身及び衣服に於て貪著の心を起し、默して自から念言すらく、我れ當に彼に就て共に嬉戲を爲し、心を縱まゝにして欲樂して彼の衣を求索せむ。是の念を作す時、文殊師利の威神力の故に、毘沙門王化して人の像と爲り、空より下りて女の前に立ち之に語りて言く、汝今彼の人の所に於て貪欲の心を生ずべからず。何を以ての故に。彼の人淸淨にして貪欲無きが故に。金色女の言く、此は是れ何人ぞや。毘沙門の言く、此は是れ文殊師利童子菩薩なり。金色女の言く、云何が[八]菩薩と名くる。願くは善く之を說きたまへ。是れ天と爲んや、是れ夜叉と爲んや、乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・

【七】文殊金色女を化せんとす。

【八】菩薩の名始めて耳に達して迅雷の如し。

大莊嚴法門經

亦は文師殊利神通力經と名け、亦は勝金色光明德女經と名く、

隋[一]天竺三藏　[二]那連提耶舍譯す

卷の上

是の如く我れ聞けり。一時佛王舍城耆闍崛山に在して、大比丘衆五百人、大菩薩衆八千人と倶なりき。爾時、王舍城の中に[三]婬女あり。女を勝金色光明德と名く。彼の女宿世の善根因緣もて形貌端正、衆相具足し、身眞金色にして、光明照曜し、容儀媚麗にして、世の希有とする所なり。神慧聰敏にして辯才無礙、音辭清妙にして深邃柔軟なり。言常に笑を含み、語に[四]麁獷無く、顧眄進止、[五]容豫安詳なり、所在の處に隨ひ、或は行、或は住、或は坐、或は臥、地皆金色にして、光明照曜す。著る所の衣服、靑、黃、赤、白、亦皆金色なり。時に王舍城一切の人衆、或は是れ王子、或は大臣の子、或は長者の子、或は豪富の子、見る者貪染し、心を繋け愛著し、情捨離すること無し。是の金色女或は聚落に在り、或は街巷に在り、或は市肆に在り、或は河岸に在り、或は園林所遊の處に在り。若くは男、若くは女、童男童女皆悉く隨從し、觀るに厭足無し。復異日に於て長者子有り。上威德と名く。欲樂の爲の故に、多く財寶を與へ、共に相要契し、駟馬車に乘る。其の車純ら金、銀、琉璃、摩尼、眞珠、上妙の衆寶を以て嚴飾し、莊校し、寶幡微妙の幡蓋を建立し、寶座華鬘あり、塗香、末香是の如きの種種和合の勝香を以て塗熏す。[六]瞻蔔華を以て瓔珞と爲し、其の身を莊嚴して同じく寶車に載せたり。寶車の前に於て種々の伎樂、歌舞作倡し、其の車の後に於て

【一】隋は西紀五八九（又は五八一）—六一六に至る。本經は開皇三年（五八三）の譯。
【二】Narendrayaśas 解題を見よ。
【三】解題を見よ。
【四】獷は猛くあらき貌。禮儀なきを云ふ。
【五】容豫は從容悅豫なるべし、悠々として心に寛ぶ所あるを云ふ。
【六】michelia campaka 芳香ある黃花を有す。

忽然として命絶え、膖脹臭爛して腹潰（はらつひ）え蟲出づ。齒落ち、髮墮ち、肢體解散す。蓮華之を見て心大に驚怖す。云何が好人忽ちに便ち無常なるや。此の人尙ほ爾り。我れ豈久しく存せむ。故に當に佛に詣で（まう）ゝ精進に道を學ばむ。卽ち佛所に至りて五體を地に投ず（下略）』。

この說話は本經の一場面と構想太だ相似てゐることが注意される。但しこの法句譬喩經の說話は處々に引用せられ、小泉八雲氏の作品の中にもたしか『ブンダリ』と題する一小品となつてゐたと記憶する。然し本經の場面はあまり注意を惹いたことを聞かぬ。實は本經の構想、記述の方が寧ろ遙かに優れてゐるとさへ思はれる。

本經の譯者那連提耶舍　Narendrayaśas（尊稱）は北印度烏場國の人、姓は釋迦、天保七年鄴都に至り、天保八年より天統四年に至る間（577—568 A. D.）菩薩見實經等の七部を譯し、更に隋の代開皇二年より五年に至る間に（582—585 A. D.）に大集日藏經等の八部を譯すとある。本經の譯文は暢達にして流麗實に譯經の範として可なりである。又竺法護の譯出にかゝる大淨法門經なる異譯の一經がある。大體に於て吻合する。これは稍や早代の譯文であり、比較的解し難い語句も見えるが對照し來れば其の古色掬すべき所亦捨て難いものがある。

昭和七年二月

譯者　泉　芳　璟　識

支出される年倖で抱へられたものである。シュードラカの作と稱する有名な梵語、戯曲ムリッチェハカテイカー(陶車)の女主人公ヴサンタセーナーはこの種類の娼婦であつた。華嚴經入法界品に善財童子が歴訪する善知識の中、婆須蜜多女と云ふのがあるが、これ亦ガニカーである。又諸經典に現はるゝ世尊に園林を寄贈したかの菴羅女卽ちアンバパーリーもこのガニカーであつたらしい。

煩惱卽菩提の敎法が表現せらるゝには貪愛の中心に立つ娼婦が最も適任であらねばならぬ。本經はこの點に於て遺憾なくこの金色女なる女性を活躍せしめた。彼女は最初文殊の衣服に貪著した。併し飜然として一念發起するや、宿緣とは云ひながら驚くべき雄辯を以て大乘教理を論じ去り論じ來る。併しながら彼も畢竟は弱き女性である。「深く慚愧を生じて」、「猶し死人の如し」と告白し、慇懃に出家を求めた。文殊は彼女に出家の眞義を示し、剃髮のみが必ずしも出家でない。自利を成就せし汝は今や利他の途に上るべきである。これ眞の出家であると諭す。此に於てか彼女は情人の上威德長者子と園林の中に相會し、死人の相を現じて彼を徹底的に敎化した。曾て死人の如しと告白したことは如實に文字通りに働いて大なる化導をなしたのである。

忽然として死相不淨の態を示現した記述は法句譬喩經(第二)の蓮華女の說話にも見えてゐる。それは次の如くである。

『昔、佛羅閱祇、耆闍崛山中に在しき。時に城內に婬女人有り。名けて蓮華と曰ふ。姿容端正にして國中に雙び無し。大臣子弟尋敬せざるは莫し。爾時蓮華善心自から生じ、世事を棄てゝ比丘尼と作らんと欲し、卽ち山中に詣り、就て佛所に到る。未だ中道に至らざるに、流泉水有り。蓮華水を飲み、手を澡ぎ、自から面像を見るに容色紅輝、頭髮紺青、形貌方正にして挺特比無し。心に自から悔いて曰く、人生世に於て形體此の如きを云何が自から棄てて行じて沙門と作らむ。且らく當に時に隨つて我が私情を快くすべしと念じ已りて便ち還る。佛蓮華の應に化度すべきを知り、化して一婦人と作る。端正世に絕す。復蓮華に勝ること數千萬倍なり。路を尋ねて逆へ來る。蓮華之を見て心甚だ愛敬す。卽ち化人に問ふ、何所より來る。夫主兒子父兄中外皆何許にか在る。云何が獨行して將從無きや。化人答へて言く、城中より來る。家に還歸せんと欲す。相識らずと雖も、寧ろ共に還るべし。泉水上に到りて坐息して共に語らん不や。蓮華言く、善し。二人相將ゐて還た水上に到り、意の委曲を陳ぶ。化人睡り來り、蓮華の膝を枕にして眠る。須臾の頃に

大莊嚴法門經解題

王舍城の一婬女勝金色なるものを拉し來りて文殊師利の神通力よくこれを敎化せしことを叙べ、大乘の敎理を到る處縱横に點出したのが本經典である。

大乘經典の中に女性をその主要人格となせるものは勝鬘經の勝鬘夫人の如き、月上女經の月上女の如き、觀無量壽經の韋提希夫人の如き、頗る異彩を放つてゐるし、法華經の龍女成佛も、維摩方丈の室に舍利弗を飜弄せる天女も、それ〴〵に見る所の立場立場から興味を惹くのであるが、本經の主要人格の如き婬女を拉し來つたものは一寸他に類例を見ないやうである。

婬女とは娼婦と云ふが如きものである。併し印度古代の娼婦は現今にあつてはもはやその如何なるものなるかを知るの術もない。只愛經の示す所によれば、「娼婦とは情人に性的の快樂を與へて生計の資を得るものである」と云ふ(六、一、一)。かくて娼婦に次のやうな種類が數へ擧げられてゐる。(六、六、五四)

(一)クンブハダーシー　水汲み女、下級の娼婦。

(二)パリチャーリカー　婢女にして主人と通ぜるもの。

(三)クラター　良人ありて密かに他の男子に關係せるもの。

(四)スヴイリニー　良人あるも大膽に他の男子に通ずるもの。

(五)ナテイー　女優にして他の男子と情事關係あるもの。

(六)シルパカーリカー　細工物などの職業に從事し情を賣る女。

(七)プラカーシャヴィナシユター　公娼。

(八)ルーパージーヴー　美貌を賣るもの(註によれば前の六種はこの中に含まるゝが如し)。

(九)ガニカー　優等の娼婦。

娼婦一般の稱呼はヴェーシユヤーと云ふが、その中でも右のやうに種々なものがある。尤もこれらの生活狀態は千差萬別であるが、愛經にはその生活狀態を說いて云ふ。

「その裝飾は頭より足に及び、住むに高價なる舍宅あり。これを飾るに稀世の器皿家具を以てし、多くの奴婢を使用す。これ優等の娼婦である。簡素にして淨き衣服、食に飽き、香料、ベテル、若干の黃金の裝飾を準備する、これ最下の娼婦である。」(六、五、二六)

財經の中にはこの優等の娼婦ガニカーのことが見えてゐるが、これは國費から

又復舍利弗よ、佛の說きたまふ所の如く、能く十二因緣を觀ずれば、是を正見と名く。若し十二因緣を正觀せば過去身の中に於て有の想を生ぜず。未來身の中に於ても亦無の想を生ぜず。[二五]衆生は何より來り、去りて何れの所に至るとや爲んと(云ふが如き想を懷かず)。若し沙門・婆羅門、及び世間の人・諸の見・我見・衆生見・命見・丈夫見・吉不吉見を成就せむ。是の如きの十二因緣(を觀ぜば)多羅樹の其の首を剪滅せんに更に生ずるを得ざるが如く、我見則ち除かれむ。若し人十二因緣を正見せば若ち是の如きの思心を得む。尊者舍利弗よ、若し衆生有りて能く此の法を[二六]忍ぜば、此の多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀・善逝・世間解・調御丈夫・天人師・佛・世尊、必ず爲めに阿耨多羅三藐三菩提の記を授けむ。尊者舍利弗、彌勒の是の說を作すを聞き已りて歡喜して去れり。天龍夜叉乾闥婆阿修羅及び諸大衆、彌勒を頂禮し、歡喜し、奉行せりき。

佛說稻芋經終

【二五】 因少果多の一項は說明缺く所あるが如し。不空譯、「云何が因少果多なる。此の身に於て少しの善惡業を作るに、來生の身に於て多く善惡の報を受く」。施護譯「云何が少因多果なる。凡そ造る所の因は赤田に事ふるが如し。專心勤力の故に果を獲ること廣く多し」。施護譯「來るに所從無く、去るに所至無し」。西藏譯「これは何か、これは如何やうにあるか、何があるか、如何になるが、かかる有情は何處より來れるか、こゝから死んでどこへ行くんだらうかなどゝ現在についてもとやかく考へないのである。

【二六】 忍は認知すること。

するが故に眼識を生ず。是の如く衆緣若し和合せずんば眼識則ち生ぜず。而も眼識は亦我れ能く體相と作ると作念せず。色も亦我れ能く境界と作ると作念せず。明も亦我れ能く照了すと作念せず。空も亦我れ能く無礙なりと作念せず。作意も亦我れ能く眼識を發起すと作念せず。眼識も亦我れ數緣より生ずと作念せず。此の如く眼識實は假にして衆緣和合して生ず。是の如く次第に諸根の識を生ずることも亦是の說の如し。

復次に舍利弗よ、法の此の世より他世に至るもの有ること無し。但だ業果莊嚴し、衆緣和合して便はち生ず。又復舍利弗よ、譬へば明鏡の能く面像を現ずるが如し。[二二]鏡面は各異所に在るも、而も往來する無くして物は同處に見はる。又復舍利弗よ、月は天に麗はしきも地を去ること四萬二千由旬なり。水は流れて下に在り。月は上に曜く。玄象一なりと雖も、影は衆水に現ずるが如し。月體降らず、水質昇らず、是の如く舍利弗よ、衆生は此の世より後世に至らず。後世より復此に至らず。然も業果因緣の報應する有り、損減すべからず。復次に尊者舍利弗よ、火の薪を得て便ち然え、薪盡れば則ち止むが如く、是の如く業結んで識を生じ、諸趣に周遍し、能く名色の果を起す。[二三]我無く、主無く、亦受者無し。虛空の如く、熱時の炎の如く、幻の如く、夢の如く、實法有ること無し。而も其の善惡因緣果報は業に隨ひて亡びず。又復尊者舍利弗よ、十二因緣は亦五因緣より生ず。非常と非斷と、不來不去と、因少果多と、亦相似相續次第して生ず。[二三]云何が非常なる。一陰滅して一陰生ず。滅は卽生に非ず。生は卽滅に非ず。故に非常と名く。云何が不斷なる。秤の高下の此に滅して彼に生ずるが如し。故に不斷と名く。實の如く知見せよ。云何が不來不去なる。子の去りて芽に至るもの有ること無し。亦芽の來りて子の所に趣くもの無し。是の緣を以ての故に此より彼に至るもの有ること無し。[二四]然も實に少種を以て能く多果を生ず。云何が相似にして生ずる。不善の因の如く不善の果を生ず。善因の如く善果を生ず。是を以ての故に相似相續して生ずと名く。

【二二】不空譯「譬へば明鏡の其の面像を現ずるに、其の面像は移轉して鏡中に至らず。而も此の鏡中其の面像有るが如し」。施護譯「又明鏡の面を照すに、面は鏡中に現ずるも實に面の鏡內に入ること無きが如し」。

【二三】維摩經佛國品の寶積長者子の偈に言く、「因緣を以ての故に諸法生ず。我無く、造無く、受者も無し。善惡の業亦亡びず」。

【二三】施護譯「云何が無常なる。謂く、此の蘊滅して彼の蘊生ず。滅は卽ち生に非ず。生は卽ち滅に非ず。生滅異るが故に。故に無常と名く」。

【二四】西藏譯「どういふのを不常といふか、臨終の諸蘊に再生に屬する諸蘊とは各別物であつて、臨終の蘊たるものは決して再生に屬するところのものでなく、臨終の諸蘊滅したる時、再生に屬する諸蘊が生ずるのであるから不常である」。

聲哀感なるを名けて憂苦と爲す。事來りて身に逼る。是を名けて苦惱と名く。追思相續の故に名けて悲と爲す。煩惱纒縛の故に名けて惱と爲す。[一八]邪見妄解を名けて無明と爲す。此の邪解を以て三業を起すが故に名けて行と爲す。善惡等の業能く果報を受くるが故に名けて識と爲す。汚穢無記より汚穢無記の識を生じ、不動業は不動の識を生ず。識より名色を生じ、名色より六入を生じ、六入より觸を生じ、觸より受を生じ、受より愛を生じ、愛より取を生じ、取より有を生じ、有より生を生じ、生より老死憂悲苦惱あり。彌勒尊者、舍利弗に語る。十二因緣各各果有り。常に非ず。斷に非ず。有爲に非ず。有爲を離れず。[一九]盡法に非ず。離欲法に非ず。[二〇]滅法に非ず。有佛無佛相續して斷えず。河の駛流の間絕ゆる時無きが如し。

爾時、彌勒重ねて尊者舍利弗に語る。十二因緣各各因有り、各各緣有り。常に非ず。斷に非ず。有爲に非ず。有爲を離れず。盡法に非ず。離欲法に非ず。滅法に非ず。有佛無佛相續して斷えず。河の駛流の間絕ゆること無きが如し。能く四緣を以て十二緣を增長す。何等をか四と爲す。無明と愛と業と識となり。識は種の體爲り。業は田の體爲り。無明と愛とは是れ煩惱の體なり。能く識を生長す。業は識の田と爲り、愛は潤漬たり、無明は識の種子を覆植す。業は我れ能く識種を覆植すと作念せず。識も亦我れ爾より因緣する所なりと作念せず。復次に業を識田と爲し、無明を糞と爲し、愛水を潤と爲し、便はち名色等の芽を生ず。而も名色の芽は亦自より生ぜず。亦他より生ぜず。亦自他より合生せず。亦自在天より生ぜず。亦時方より生ぜず。亦體より生ぜず。亦因緣無くして生ぜず。復次に欲樂の父母の精氣衆緣和合の故に名色の芽を生ず。主無く、我無く、造無く壽者無し。猶し虛空の如く、幻の如し。衆因緣和合よりして生ず。復次に尊者舍利弗よ、眼識は五因緣より生ず。云何が五と爲す。眼と、色と、明と、空と作意とを以て識便はち生ずることを得。眼識は眼根に依り、色を以て境界と爲し、明を緣じて以て照と爲し、虛空は障礙を作さず、作意は起發

【一八】十二因緣の解釋第三その活動作用を說く。
【一九】無盡といふが如し。
【二〇】不滅といふが如し。

と爲す。是の如き等の六緣を名けて身と爲す。若し六緣具足して損滅なくば則便ち身を成じ、是の緣若し減なば身則ち成ぜず。地亦我れ能く堅持せりと念はず。水亦我れ能く滋潤すと念はず。火亦我れ能く成熟せりと念はず。風亦我れ能く息を出入せしむと念はず。空亦我れ能く障礙無からしむと念はず。識亦我れ能く生長せしむと念はず。身亦我れ數緣より生ずと念はず。若し此の六緣無くんば身亦生ぜず。地も亦我無く、人無く、衆生無く、壽命無く、男に非ず、女に非ず、亦非男にもあらず、非女にもあらず。此に非ず、彼にあらず。水・火・風、乃至識等も亦皆我無く、衆生無く、壽命無し。乃至亦此に非ず、彼に非ず。

[一二]云何が無明と名くる。無明とは六界の中に於て、一想・聚想・常想・不動想・不壞想・[一三]樂想・衆生想・壽命想・人想・我想・我所想を生ず。是の如きの種種衆多の想を生ずる、是を無明と名く。[一四]是の如く五情の中に貪欲瞋恚の想を生ず。行亦是の如し。一切假名の法に隨著するを名けて識と爲す。四陰を名と爲し、色陰を色と爲し、是を名色と爲す。名色增長して六入を生ず。六入增長して觸を生ず。觸增長して受を生ず。受增長して愛を生ず。愛增長して取を生ず。取增長して有を生ず。有增長するが故に能く後陰を生ずるを生と爲す。生增長して變ずるを名けて老と爲す。受陰敗壞の故に名けて死と爲す。能く嫉熱を生ずるが故に憂悲苦惱と名く。五情違害するを名けて身苦と爲す。意和適せざるを名けて心苦と爲す。[一五]是の如き等の衆苦聚集して常に闇冥に在るを名けて無明と爲す。諸業を造集するを名けて行と爲す。諸法を分別するを名けて識と爲す。建立する所有るを名けて名色と爲す。六根開張するを名けて六入と爲す。緣に對して[一六]塵を取るが故に名けて觸と爲す。苦樂を受覺するが故に名けて受と爲す。渴して飮を求むるが如くなるが故に名けて[一七]愛と爲す。能く所取有るが故に名けて取と爲す。諸業を起造するが故に名けて有と爲す。後陰始めて起るが故に名けて生と爲す。住世衰變するが故に名けて老と爲す。最後敗壞の故に名けて死と爲す。往事を追感し、言

【一二】十二因緣の解釋第一。

【一三】樂想の上「內生」の二字あるも、異譯に對檢する衍字なるが如し。

【一四】行の說明なり。不空譯「是の如きの無明境界有るに於て貪瞋癡を生ず。彼の貪瞋癡に於て行を生ず」。施護譯「無明に由るが故に卽ち貪慾瞋恚を生ず。無明は行を緣ず」。敦煌本「無明有るが故に、諸の境界に於て貪瞋癡を起すもの は此は是れ無明行を緣ずるなり」。西藏譯「かくの如く無明あるによつて、諸の境に對して貪欲瞋恚愚癡を起す。こゝに諸の境に對して貪慾瞋恚愚癡を起すといふはこれ(無明の緣によりて諸行)といはれるものである」。

【一五】十二因緣の解釋第二。

【一六】塵とは境に同じ。

【一七】愛の原語は tṛṣṇā 又は訛形の taṇhā なり。そのまゝに渴の意なり。

と言はず。芽亦我れ數緣より生ずと言はず。作念せずと雖も、爾の數緣より生ず。而も實は衆緣和合より芽を生ずることを得。亦自より生ぜず。亦他より生ぜず。亦自他より合生せられず。亦自在天より生ぜず。亦時方より生ぜず。亦本性より生ぜず。亦無因より生ぜず。是を生法の次第と名く。是の如く外の緣生法は[九]五事を以ての故に、當に知るべし、不斷にして亦非常なり。亦此より彼に至らず。芽種は少なきも果は則ち衆多なるが如し。相似相續して異物を生ぜず。云何が不斷なる。種芽より根莖次第に相續するが故に不斷なり。云何が非常なる。芽莖華果各自別なるが故に非常なり。亦種滅して後芽生ずるにあらず。亦滅せずして芽便はち生ずるにもあらず。而も因緣法の芽起り、種は謝す。次第生の故に非常なり。種芽名相各異るが故に。此より彼に至らず。種少なく果多きが故に、當に知るべし、不一なることを。是を種少果多と名く。種子の如きは異果を生ぜざるが故に、相似相續と名く。此の五種の外緣を以て諸法生ずることを得るなり。

內の因緣法は二種より生ず。云何が因たる。無明より乃至老死に至り、無明滅すれば卽ち行滅す。乃至生滅するが故に則ち老死滅す。無明に因るが故に行有り。乃至生有るに因るが故に老死有り。無明は我れ能く行を生ずと言はず。行亦我れ無明より生ずと言はず。乃至老病死亦我れ生より生ずと言はず。而も實に無明有れば則ち行有り。生あれば則ち老死有り。是を內因次第生法と名く。云何が內の緣生法と名くる。謂ふ所の六界・地界・水界・火界・風界・空界・識界なり。何をか謂ひて地と爲す。能く堅持する者を名けて地界と爲す。何をか謂ひて水と爲す。能く潤漬する者を名けて水界と爲す。何をか火と爲す。能く成熟する者を名けて火界と爲す。何をか謂ひて風と爲す。能く息を出入せしむる者を名けて風界と爲す。何をか謂ひて空と爲す。能く障礙無からしむる者を名けて空界と爲す。何をか謂ひて識と爲す。[一〇]四陰五識亦は言ひて名と爲し、亦名けて識と爲す。是の如く衆法和合して名けて身と爲す。有漏心を名けて識と爲す。是の如く四陰を[一一]五情根の爲めに名けて色

【九】五事の相ある外の緣生法。五事とは不斷と非常と、不至と、種少果多と相似相續となり。

【一〇】支謙譯「隨轉して雙箭の窄るが如し是を識種と爲す」。不空譯「名色を轉ぜしむること束蘆の如し。五識の有漏の意識と相應するを名けて識界と爲す」西藏譯「凡そ椽を束ねて作つた建物の如く、身の名色の芽を生成する五群の識の集まりと有漏の意識と、これは識界といはれる」。

【一一】五情根は五識身と云ふが如きか。即ち眼耳鼻舌身の感覺の群團を指すに似たり、

無作、非有爲、無住、無爲にして心境界に非ず、寂滅無相なり。是を以ての故に十二因緣を見れば卽ち是れ法を見る。常に相續して起り、生無く、實の如く、見顚倒ならず、無生、無作、非有爲、無住、無爲にして、心境界に非ず、寂滅無相なり。是を以ての故に十二因緣を見れば卽ち是れ無上道具足法身を見るなり。

尊者舍利弗、彌勒に問ふて言く、云何が十二因緣と名くる。彌勒答へて言く、因有り、緣有り、是を因緣法と名く。此は是れ佛略して因緣の相を說きたまふなり。此の因を以て能く是の果を生ず。如來世に出でたまふも因緣生法あり。如來世に出でたまはざるも亦因緣生法あり。性相常住にして、諸の煩惱無く、究竟して實の如く、不如實に非ず。是れ眞實の法にして顚倒の法を離れたり。

復次に十二因緣の法は二種より生ず。云何が二と爲す。[三]一には因、二には果なり。因緣生法復二種有り。[四]內の因緣有り、[五]外の因緣有り。外の因緣法は何より生ずる。種の能く芽を生じ、芽より葉を生じ、葉より節を生じ、節より莖を生じ、莖より穗を生じ、穗より華を生じ、華より實を生ずるが如し。[六]種無きが故に芽無し。乃至華實有ること無し。種有るが故に芽生ず。乃至華有るが故に果生ず。而も種は我能く芽を生ずと作念せず。芽も亦我れ種より生ぜりと作念せず。乃至華も亦我れ能く實を生ずと作念せず。實も亦我れ華より生ずと作念せず。而も實種は能く芽を生ず。是の如きを名けて[七]外の因生法と爲す。[八]云何が外の緣生法と名くる。謂ふ所の地・水・火・風・空・時なり。地種は堅持し、水種は滋潤し、火種は成熟し、風種は發起し、空種は障礙を作らず、又時節を假りて氣和變す。是の如きの六緣具足して便はち生ず。若し六緣具せざれば物則ち生ぜず、地・水・火・風・空・時の六緣調和して增減せざるが故に、物則ち生ずるを得るなり。地亦我れ能く持すと言はず。水亦我れ能く潤すと言はず。火亦我れ能く成熟すと言はず。風亦我れ能く發起すと言はず。空亦我れ能く障礙を作さゞるなりと言はず。時亦我れ能く種を生ぜしむと言はず。種亦我れ六緣より芽を得

【三】因と果と。
【四】內の因緣と外の因緣と。
【五】外緣因緣とは何ぞや。
【六】一本には子に作る、實と云はんも亦得たり。
【七】外の因生法。
【八】外の緣生法。

佛說稻芋經[一]

失譯　東晉錄に附す

是の如く我れ聞けり。一時佛、王舍城耆闍崛山の中に住したまひ、大比丘衆千二百五十人及び大菩薩摩訶薩衆と倶なりき。

爾時尊者舍利弗、彌勒の經行處に至り、彌勒・舍利弗倶に石上に坐せり。爾時、尊者舍利弗、彌勒に問うて言く、今日世尊、稻芋を覩見して是の說を作したまふ。汝等比丘十二因緣を見れば卽ち是れ法を見、卽ち是れ佛を見るなりと。爾時、世尊是の說を作し已りて默然として住したまふ。彌勒よ、世尊何が故に是の修多羅を說きたまふや。復何の義を以て十二因緣を見れば卽ち是れ法を見、卽ち是れ佛を見ると說きたまふや。皆何の義を以て是の如きの說を作したまふや。云何が是れ十二因緣なる。云何が因緣を見るもの卽ち法を見、云何が法を見るもの卽ち是れ佛を見るや。

爾時、彌勒、舍利弗に語つて言く、佛世尊常に說きたまふ。十二因緣を見るものは卽ち是れ法を見、法を見れば卽ち是れ佛を見るなりと。十二因緣とは無明は行を緣じ、行は識を緣じ、識は名色を緣じ、名色は六入を緣じ、六入は觸を緣じ、觸は受を緣じ、受は愛を緣じ、愛は取を緣じ、取は有を緣じ、有は生を緣じ、生は老死憂悲苦惱を緣ず。衆苦聚集して大苦陰と爲り、[二]因緣を作る。是の故に佛十二因緣を說きたまふ。云何が是れ法なる。八正道分及び涅槃果なり。如來略して是の法を說きたまふ。云何が是れ佛なる。能く一切法を覺る。故に名けて佛と爲す。若し慧眼を以て眞法身を見、能く菩提所學の法を成ず。云何が十二因緣を見れば卽ち是れ法を見、卽ち是れ佛を見るや。佛是の說を作したまふ。十二因緣は常に相續して起り、生無く、實の如く、見顚倒ならず、無生、

【一】この字形に就きては解題に說明あり、看よ。

【二】一本には因を作るとありて緣の字無し。

のであつて眞の字ではないらしい。隨つてやはり「莖」の意を以て解釋すべきものであらう。尙ほこの解題を作るに際し、櫻部文鏡氏の譯本の解題に負ふ所多きを記して此に謝意を表明する。

昭和七年一月

譯者　泉芳璟　識

佛說稻芉經解題

本經は舍利弗と彌勒との對話から成り。一日舍利弗が彌勒を訪うて親しく共に石上に坐し、世尊がその日稻の幹の青々と生育するを見て、「汝等比丘よ、十二因緣を見れば、即ち是れ法を見、即ち是れ佛を見る」と宣ひし一語に就て、舍利弗の問を發せるに對し、彌勒は懇切丁寧に十二因緣の有樣を稻の生長して實を結ぶことに例して說けるものである。

本經は梵本も現存し、西藏譯もあり、支那譯の如きは五譯を數へ得る點に於て頗る注意を惹くものがある。即ち西紀一九一三年白耳義のガン大學哲學文學部論文集第四十として出されたルイ、ドウ、ラ、ヴレ、プサン教授の十二因緣論（Théorie des douze causes）の中に西藏譯と、梵本とが提示されてゐる。而してこの梵本は集菩薩學論の梵本や菩提行經註、中論疏等の梵文中に引用された本經の文を抽出し、整理し、補足したものであつて、苦心と努力を想はしめるものである。

支那譯は次の五部が現存する。

一、了本生死經　呉支謙譯
二、佛說稻芉經　東晋失譯
三、慈氏菩薩所說大乘緣生稻稈喻經　唐不空譯
四、大乘舍黎娑擔摩經　宋施護譯
五、佛說大乘稻芉經　失譯

この五の失譯本は近來敦煌から出土したもので、在來の藏經には見ざるものである。

西藏譯は甘殊爾中に收められ、尙ほ他にスタイン發掘の斷片もある。櫻部文鏡氏の譯は昭和五年四月佛教聖典叢書第三篇として北安田香草社から出版されて、大乘稻芉經と題し、北京版西藏本を基とし其他の諸本を參照して作られたものである。

この經題は梵名 Śālistamba であつて、施護譯の「舍黎娑擔摩」は若干の訛音を雜ふるが如きも、大體これに當り、不空の「稻稈」となすものはこれに相當する譯語である。但し稻芉となせるものは頗る怪しむべきである。何となればこの「芉」なる文字は辭典に見えない。「芋」なる字は存するも、これは「いも」であつて意味も異る。予は曾て敦煌出土の寫本に「芊」に造れる寫本を見たが、これでは意義をなさぬ。「芊」は草の盛なる貌、又碧き貌などの意義あれども、これでもあるまい。想ふにこれ「稈」の略字を「芉」と書いたも

するを得。身壞し命終りて、三惡趣に墮せむ。是故に汝等應に勤めて修習し、無明を除斷せよ。[五]我は是れ大師たり。汝は是れ弟子たり。我が教中に於て要略の事、今汝が爲めに說きぬ。大悲に因るが故に。哀愍に由るが故に。利益の爲めの故に。勝樂の爲めの故に。我が所說の如く汝等應に修すべし。若し山林、蘭若、樹下、或は露地に在らむに、汝善思すべし。應に放逸なるべからず。後時に於て心悔恨を生ずる勿れ。說の如く修行して、當に解脫を得べし。爾時に世尊此の語を說き已りたまふに、諸の苾芻衆歡喜奉行せりき。

佛說略教誡經 終

【五】佛遺教經「當に知るべし此は則ち是れ汝が大師なり」。

佛說略教誡經

大唐三藏義淨制を奉じて譯す

是の如く我れ聞けり。一時佛[一]室羅伐城、[二]逝多林、給孤獨の園に在して、無量の苾芻と俱たりき。爾時佛諸の苾芻に告げたまはく、汝等當に知るべし、我が法中に於て、[三]少欲知足活命の事有り。謂く、我が弟子、髮を剃り、衣を染め、鉢を持ちて家を巡り、乞食して自から濟ふ。(是れ)世間愚人の輕慢する所なり。(然れども)若し淨信の善男子有らば俗を離れて出家し、此の事を修行す。(彼は)王難の爲めに逼迫せられざるが故に、賊怖、負債の爲めに存活せざるかと驚恐せざるが故に、[四](出家を求むるにはあらず)。但だ發心を爲すは、生老病死憂悲苦惱に於て厭離を生ずるが故なり。苦蘊、煩惱の纏縛を斷じて、其の邊際を盡し、解脫を求めんと欲するが故なり。汝等豈此の事の爲めの故に出家を求むるに非ざるか。時に諸の苾芻佛に白して言く、世尊、是の如し、是の如し。解脫の爲めの故に出家を求む。(世尊の言く)汝等苾芻よ、如し一類の罪惡の苾芻有らんに復出家すと雖も、性貪染多く、五欲の境に於て深く戀著を生じ、或は瞋恚を起し、惡尋思を生じ、心恒に放逸にして、策勵を勤めず、常に妄念多し、定門を習はず、諸境に攀緣して、下劣の事を樂しみ、勝行を希はず、終に獲る所無し。此の惡人、猶し何等の如き。汝諸苾芻、譬喩を說くを聽け。野田中の死屍を焚く木の如し。兩頭俱に燒けて、中間穢汚たり。此の木聚落中の人及び野田人の受用する所に堪へず。我れ今此を以て彼の一類の出家、懈怠愚癡の人に喩ふ。俗間諸の快樂の事を棄捨し、沙門の義利復修習せず。恒に三種の不善思惟を生ず。所謂、五欲を思惟し、瞋恚を思惟し、欺誑を思惟す。此の三種の不善思惟は何に因りて起るや。當に知るべし、皆無明を以て因と爲し、而して生起

【一】Śrāvasti 舍衞城と云ふに同じ。
【二】Jetavana。
【三】佛遺教經に言く「當に知るべし、多欲の人は多く利を求むるが故に苦惱亦多し。少欲の人は求無く、欲無ければ此の患無し」。
【四】この前後括弧を施せる部分此の如く語を補はざれば意義通ぜず。知るべし。

佛說略教誡經解題

本經は次の如く極めて短きものではあるが、比丘たるものゝ心得を最も簡明に示したるものであり、寔にかの飜譯者三藏義淨の面目を躍如たらしむる經典である。本經によりて先づ想起せらるゝは羅什の飜譯に成る佛遺教經である。佛遺教經は釋尊化緣盡きて娑羅雙樹の間に臥したまひ、中夜寂然として聲なきところ、諸弟子のために略して法要を說きたまひしもの、題して佛垂般涅槃略說教誡經と云ふ。本經の略教誡經と名くると太だ相似て居る。「比丘は當に修行放逸ならず無明を除斷せよ」と云ふは遺教經の「汝等比丘我が滅後に於て當に波羅提木叉を尊重し珍敬すべし。闇の明に遇ひ貧人の寶を得るが如し」とあると一致するではないか。

譯者　泉　芳　璟　識

昭和七年一月

く讀經する者を請じ、法座に昇りて其の亡者の爲めに無常經を讀ましめよ。孝子哀を止め、復啼哭すること勿れ。及び餘人も皆悉く至心に彼の亡者の爲めに燒香散花して、高座微妙の經典を供養し、及び苾芻に散じ、然る後安坐して合掌恭敬して、一心に經を聽かむ。苾芻徐徐に應に爲めに遍ねく讀むべし。若し經を聞く者は各各自から己身の無常にして久しからずして磨滅すべきを觀じ、念世間を離れ、三摩地に入れ。此の經を讀み已りて、復更に花を散じ、燒香供養せよ。又苾芻を請じて、隨ひて何(なんらか)の呪を誦し、無蟲水を呪すること滿三七遍にして亡者の上に灑ぐ。復更に淨黃土を呪すること滿三七遍にして亡者の身に散じ、然る後、意に隨ひて或は窣堵波の中に安じ、或は火を以て焚く。或は屍陀林乃至土下す。此の功德因緣力を以ての故に、彼の亡人をして百千萬億俱胝那庾多劫、十惡四重五無間業、謗大乘經、一切業報等の障、一時に消滅し、諸佛の前に於て、大功德を獲、智を起し、惑を斷じ、六神通及び三明智を得、初地に進入し、十方に遊歷して、諸佛を供養し、正法を聽受し、漸漸に無邊の福慧を修集して、畢(つひ)に當に無上菩提を證得し、正法輪を轉じて、無央數を度し、大圓寂に趣いて、最正覺を成ぜむ。

臨終方訣

方の國に隨ひて佛身相好を諦觀せしむ。相好を觀じ已りて、復佛及び諸菩薩を請じて是の言を作さしむ。稽首したてまつる。如來應正等覺、幷に諸菩薩、摩訶薩、願はくは我を哀愍して救濟饒益したまへ。我れ今爲めに衆罪を滅せんことを請ひ奉る。復弟子を將ゐて、佛菩薩に隨つて佛國土に生れむ。第二第三亦是の如く說く。既に請はしめ已りて復病人をして彼の佛名を稱して十念成就せしめ、與に三歸を受けしめ、廣大懺悔せしむ。懺悔し已りて、復病人の爲めに菩薩戒を受けしむ。若し病人困みて言ふ能はざれば、餘人をして代受せしむ。懺悔等に及ぶ。不至心なるを除き、然も亦罪滅す。菩薩戒を得、既に受戒し已りて、彼の病人を扶けて首を北にして臥し、面を西方に向け、開目閉目に諦かに佛の三十二相八十隨形好を想はしむ。乃至十方諸佛亦復是の如し。又其れが爲めに、四諦の因果十二因緣、無明老死、苦空等の觀を說く。若し命終に臨まんには、看病の餘人但だ爲めに佛を稱して聲聲絕ゆる莫れ。然も佛名を稱するに、病者の心に隨ひ、其の名號を稱して餘佛を稱する勿れ。恐らくは病者の心疑惑を生ぜむ。然るに彼の病人命漸く終るに臨み、卽ち化佛及び菩薩衆、妙香花を持して來りて行者を迎ふるを見む。行者見る時、便ち歡喜を生じ、身苦痛ならず、心散亂せず、正見心を生じ、禪定に入るが如くにして、尋で卽ち命終す。必ず地獄傍生餓鬼の苦に退墮せず、前の敎法に乘じて、猶し壯士の臂を屈伸するの頃に、卽ち佛前に生ぜむ。若し在家の鄔波索迦、鄔波斯迦等、若し命終の後、當に亡者の新好の衣服及び隨身受用の物を取りて分ちて、三分すべし。其の亡者の爲めに將て佛陀、達磨、僧伽に施せ。斯に由りて亡者の業障轉盡し、勝功德福利の益を獲む。應に其の死屍に好衣等を著せしめて將以て之を送るべからず。何を以ての故に。無利益の故に。若し出家の苾芻、苾芻尼及び寂を求むるもの等の所有の衣物及び非衣物は諸の律敎の如くせよ。餘は白衣に同じ。若し送亡の人、其の殯所に至らば、下風に安じ、置いて側臥せしめ、右脇を地に著け、面を日光に向け、其の上風に於て、當に高坐を敷き、種種莊嚴すべし。一苾芻の能

諸の聽有る徒此に來至す　或は地上に在り或は空に居り
常に人世に於て慈心を起し　晝夜自身に法に依りて住せよ
願はくは諸世界常に安隱に　無邊の福智群生を益せむ
所有罪業並びに消除し　衆苦を遠離して圓寂に歸せむ
恒に戒香を用ひて瑩體に塗り　常に定服を持して以て身を資く
菩提の妙華遍ねく莊嚴し　所住の處に隨つて常に安樂ならむ

佛說無常經

若くは苾芻苾芻尼、若くは鄔波索迦、鄔波斯迦、若し人有りて將に命終せんと欲し身心苦痛するを見んに、應に慈心を起して、拔濟し饒益すべし。香湯をもて澡浴し淸淨ならしめ、新淨衣を著して安詳にして坐せしめ、正念思惟せしむ。若し病の人自から力無くんば、餘人扶けて坐せしむ。又坐する能はざらば、但だ病者をして右脇を地に著け、合掌して至心に面を西方に向けしめよ。病者の前に當りて一淨處を取り、唯だ牛糞、香泥を用て地に塗り、心に隨つて大小に、方角壇を爲す。華を以て地に布き、衆の名香を燒き、四角に燈を燃す。其の壇內に於て一の綵像を懸け、彼の病人をして心心相續して、其の相好を觀じ、了了分明ならしむ。菩提心を發さしめ、復爲めに廣く三界は雜居、三途苦難、所生の處に非ず、唯だ佛菩提のみ是れ眞の歸依なり。歸依を以ての故に、必ず十方諸佛の刹土に生じ、菩薩と與に居し、微妙の樂を受くることを說く。病者に問うて言く、汝今何の佛土に生ぜんを樂ふや。病者答へて言く、我が意某佛の世界に生ぜんことを樂ふと。時に說法の人當に病者の心の欲するところに隨ひて、爲めに佛土の因緣十六觀等を宣說す。猶し西方無量壽國の如し。一一具さに說き、病者をして心佛土に生ずるを樂はしむ。說法を爲し已りて、復敎へて何等

長喘胸に連りて急に　噎氣喉中に乾く
死王司命を催し　親屬徒らに相守る
諸識皆昏昧にして　行いて險城の中に入る
親知咸棄捨し　彼の繩の牽くに任せ去る
將に琰魔王に至り　業に隨つて報を受けんとす
勝因は善道に生じ　惡業は泥犂に墮す
明眼慧に過ぐる無く　黑闇癡に過ぎず
病は怨家を越えず　大怖死に過ぐる無し
生有れば皆必ず死す　罪を造れば苦身に切る
當に勤めて三業に策ち　恒に福智を修せよ
眷屬皆捨てゝ去り　財貨他の將るに任す
但だ自の善根を持ちて　險道に糧食に充つ
譬へば路傍の樹の如し　暫し息へども久しく停らず
車馬及び妻兒　久しからざる皆是の如し
譬へば群宿する鳥の如し　夜聚りて旦に隨つて飛ぶ
死して親知に去別し　乖離すること亦是の如し
唯だ佛菩提有り　是れ眞の歸仗處
經に依りて我れ略說す　智者善く應に思ふべし
天阿蘇羅藥叉等　來りて法を聽かん者應に至心に
佛法を擁護して長く存せしめ　各各世尊の教を勤行すべし

をか三と爲す。謂く老と病と死となり。汝諸苾芻よ、此の老病死、諸世間に於て、實に不可愛、實に不光澤、實に不可念、實に不稱意なり。若し老病死世間に無くんば、如來應正等覺、世に出でゝ、諸の衆生の爲めに所證法及び調伏事を說きたまはじ。是の故に應に知るべし。此の老病死は諸の世間に於て、是れ不可愛、是れ不光澤、是れ不可念、是れ不稱意なり。此の三事に由りて如來應正等覺世に出現して、諸の衆生の爲めに所證法及び調伏事を說きたまへり。爾時世尊重ねて頌を說いて言く、

外事の莊彩は咸な壞に歸す　內身の衰變も亦同じく然なり
唯勝法のみ有りて滅亡せず　諸の有智の人は應に善く察すべし
此の老病死を皆共に嫌ふ　形儀醜惡にして極めて厭ふ可し
少年の容貌暫時住せんも　久しからずして咸な悉く枯羸するを見る
假使壽命は百年に滿つるとも　終歸に無常の逼るを免れず
老病死苦常に隨逐し　恒に衆生のために無利と作る

爾時世尊是の經を說き已りたまふに、諸の苾芻衆・天・龍・夜叉・健闥婆・阿蘇羅等、皆大に歡喜し、信受奉行せりき。

常に諸の欲境を求め　善事を行ぜず
云何が形命を保ち　死の來り侵すを見ざらむ
命根氣盡きなんと欲し　支節悉く分離す
衆苦死と倶なり　此の時徒らに歎き恨みむ
兩目倶に上に飜り　死刀業に隨ひて下る
意、想並びに慞惶し　能く相救濟する無し

假使妙高山も　劫盡くれば皆壞散す
大海深くして底無きも　亦復皆枯竭す
大地及び日月も　時至れば皆盡に歸す
未だ曾て一事として　無常に呑まれざるはあらず
上は非想處に至り　下は轉輪王に至る
七寶鎭へに身に隨ひ　千子常に圍遶せむも
如し其れ壽命盡くれば　須臾も暫くも停らず
還た死海の中に漂ひて　緣に隨ひて衆苦を受けなむ
三界の內を循環すること　猶し汲井輪の如し
亦蠶の繭を作るが如し　絲を吐いて還た自ら纒ふ
無上の諸世尊　獨覺聲聞衆も
尙ほ無常の身を捨てたまふ　何に況んや凡夫に於てをや
父母及び妻子　兄弟並びに眷屬
目に生死の隔つるを觀ては　云何が愁歎せざらむ
是の故に諸人に勸む　眞實の法を諦聽し
共に無常處を捨てゝ　當に不死の門に行くべし
佛法は甘露の如し　熱を除いて清凉を得しむ
一心に應に善聽して　能く諸の煩惱を滅すべし

是の如く我れ聞けり。一時薄伽梵室羅伐城逝多林、給孤獨の園に在しき。爾時佛諸苾芻に告げたまはく、三種の法有り。諸世間に於て是れ不可愛、是れ不光澤、是れ不可念、是れ不稱意なり。何

佛說無常經　亦三啓經と名く

大唐三藏法師義淨制を奉じて譯す

稽首して無上士に歸依したてまつる　常に弘誓大悲の心を起して
有情を生死の流に濟ひ　涅槃の安隱處を得せしめんが爲めに
大捨防非して忍倦むこと無く　一心に方便して正慧力あり
自利利他悉く圓滿したまふ　故に調御天人師と號けたてまつる
稽首して妙法藏に歸依したてまつる　[一]三四二五の理圓明にして
[二]七八能く四諦の門を開く　修するもの咸な無爲の岸に到る
法雲法雨群生を潤ほし　能く熱惱を除き衆病を蠲き
難化の徒をして調順ならしめ　機に隨つて引導す强力に非ずや
稽首して眞の聖衆に歸依したてまつる　[三]八輩の上人能く染を離れ
金剛の智杵は邪山を破り　永く無始の相の纒縛を斷ず
始め鹿苑より雙林に至るまで　佛の一代に隨つて眞教を弘め
各本緣に稱ひて行化已り　灰身滅智して寂として生無し
稽首、總じて三寶尊を敬ひたてまつる　是を正因と謂ふ能く普ねく濟ひ
生死の迷愚沈溺を鎭め　咸な出離せしめて菩提に至らしむ
生るゝ者は皆死に歸し　容顔盡く變衰す
强力なるも病に侵され　能く斯を免るゝ者無し

【一】三四とは十二因緣の理、二五は十數を表するものゝ如し。されど其の何たるやを知らず。
【二】七は七覺支、八は八聖道なり。
【三】四向四果を云ふ。

佛說無常經解題

本經は送葬に際し比丘を請じて讀誦せしむる經典といふ點に於て特に注意を惹く。尤もこれが最初からかゝる目的の下に編まれたものとも思はれない。恐らくは何經かの一部分を成してゐたものであらう。それが抽出されて、何時からとなく葬場讀誦の經典として用ゐられたものである。釋氏要覽下送終の部に「毘奈耶に云く、送葬には苾芻の能ふ者をして無常經並びに伽他を誦せしめ、其が爲めに呪願せよ」とある。毘奈耶とのみあつてその何れの箇處なるやを詳かにせざれど、無常經並びに伽他とは蓋し本經典を指すものなるや明白である。但し前後の偈頌は必要に應じて添加せられたものと思はれる。添附せらるゝ所の臨終方訣は頗る興味ある文書であつて、將に命終せんとするものに對し佛教徒が如何に處置せしかの消息を明かにするものであり、更に葬法の一斑を記述せるに至つては、實に宗教風俗資料としても貴重なる文獻と謂はねばならぬ。

譯者　泉　芳　璟　識

昭和七年一月

し、廣く人の爲めに說かば、何の福祐をか得む。佛の言はく、假令族姓子族姓女、斯の經典を受けて持諷誦讀し、他人の爲めに說かむ。當に三寶に値ひて斷絕せず。所以は何。其れ經を聞くものは聲聞緣覺の心を發さず。唯無上正眞道の意を志す。所以は何。是の經を學ぶもの有らば、其の人則ち微妙の義を好み、諸根明達にして信樂せざるはなし。是の故に天子、當に斯の觀を造すべし。能く其の經典を受奉し、持諷し、誦讀するものは、三寶を護つて斷絕せざらしむと爲す。天子の意に於て察する所云何。其れ三寶を護つて斷えざらしむる者は、設令千佛ありて各壽一劫ならむに、寧ろ能く歎じて其の功德を盡さんや。答へて曰く、能はじ、天中の天よ。佛の言はく、故を以て天子、當に之を了知すべし。若し斯の經典を受持する有らば、德量るべからず。

斯に於て慈氏菩薩佛に白して言く、是の經を名けて何等とか曰はむ。何に因りて名を持せむ。佛彌勒に告げたまはく、是の經を名けて忉利天品佛現感動威神之變と曰ふ。之を奉持せよ。佛の言はく、慈氏、慇懃に受持し諷誦して說き、若し他人の爲めに分別して義を解せば、成就する所多からむ。衆の人民に於て若し斯の像の經を天下に流布することは甚だ値ふことを得難し。佛說きたまふこと是の如し。月氏天子、月上天子、慈氏菩薩、賢者目連、天、龍神、阿須輪、世間人民歡喜せざるは莫く、禮を作して退く。

佛昇忉利天爲母說法經　終

多し、甚だ多し、天中天よ、無量に安住す。佛の言はく、目連、今吾れ汝に告ぐ、彼の一切衆生の類の如き、皆轉輪聖王と爲り、七寶の福悉く之を合集せんも、如來所造成滿一毛の福に及ばず。德善の慶彼よりも超出す。以て喩と爲す無きたり。

爾時、賢者目連佛に白して言はく、唯然り世尊、我れ善利慧及び餘福を得たり。佛は法師聖尊たり。無限の神妙乃し爾り。威豪無極にして明達し、浩浩堂堂として光輝邊無く、底を窮むべからず。又天中天よ、興造する所有りて損耗する所無く、一切法に於て暢達せざるはなし。我は是の如きの像無礙の慧を[46]遺失せじ。其れ衆生有りて斯の若きの佛の所爲威聖の變を聞くことを得て、一心に能く一句義をも聞かば則ち善利無極の慶を得む。何に況んや信持諷誦して讀まん者をや。便ち當に斯の如きの神足を具足して無上正眞の道を發興すべし。是の如き等の人、當に天中の天に歸命を爲すべし。恐畏有ること無し、當に復疑つて惡趣に向ふこと有るべからず。

爾時、諸天龍神釋梵四天王世尊より佛示現する所の感動變化を聞きて、異口同音に諮嗟して曰く、諸佛に南無したてまつる。世尊に歸命したてまつる。假使人有りて能く斯の心清淨意を發さば、吾亦歸命して之が爲に禮を作し、大道を興隆し、亦當に玆の若きの變化を逮獲すること猶し如來の感動する所の若くならむ。吾等疑はず。猶豫結無からむ。時に天龍神揵陀羅釋梵四王五體を地に投じて斯の經を歸命し、則ち恭敬を以て稽首して佛を禮す。百千の伎樂自然に鳴を爲す。天の靑蓮、芙蓉莖華を散じて忉利天に遍ねし。

佛經を說きたまふ時に、七十二垓の天人、昔より以來未だ道心を起さゞるもの、今皆無上正眞道の意を發し、各自ら說いて言く、吾れ來世に於て、天上世間人民の前に於て、當に大師子吼を暢べ、宣顯すること亦今日如來の爲す所の師子大吼の導を興發するが如くなるべし。

斯に於て月氏天（子）佛に白して言く、若し族姓子、族姓女有らむに、斯の經典を受けて持諷誦讀

【四六】原典「我以遣失」とあり三本並に宮本「遣」を「遺」に作る。されど「以」は「不」ならざるべからず。

の無し。是を置け、目連、閻浮提の人のみならむ。正に四方大須彌方域、諸天人民及び餘の所生の群萠伴黨も如來は現に一毛孔に入れて諸人の中に於て變化示現したまふ。及び聖衆諸人各各相見る能はず。所入を知らず。是を置け、目連、假使三千大千世界の衆生の類、復稍漸く悉く人身を得しめむ。一切の群生、比丘、聖衆人民の黨をも、如來は普ねく一毛孔に現じて能く何の所入たるかを相知らしめず。是を置け、目連、[四五]正に東方江河沙等の諸佛の國土に於て、及び十方諸佛世界衆生の類に於て、無量の世界の一切悉く變じて人身を逮得せんに、如來は遍ねく一切の人民及び聖衆をして一毛孔に入らしめ、衆生をして所入たるを知らしめず。是を置け、十方江河沙等の諸佛の國土群萠の類(も亦然り)。佛の言はく、目連、今佛現に在し、無罣礙眼をもて諸佛の國を見、能く具足聖達の佛眼を以て、若干の變を引いて而も譬喩と爲し、百千劫に於て諸佛土を說くも究竟する能はず。諸佛國土は限量すべからず。又斯の一切の群萠の黨を悉く得道せしめ猶緣覺の如くならしめむも、計數稱量して限を知る能はじ。何に況んや聲聞をや。唯如來のみ有りて能く多少の國土の有らゆる廣狹、大小遠近、深淺毫毛、分寸・分了、微塵を知りたまふ。正に無量無限不可計の會をして江河沙等の三千大千世界、其の中に滿つる塵ならしめむも、佛眼無極にして無罣礙聖達を以て皆見たまふ。此の諸佛國復彼に過ぎたり。斯の諸佛土の有ゆる群萠限量すべからず。人界斯くの若し、衆生甚だ多く、地土よりも多し。斯の諸の衆生、稍稍に漸漸に人身と爲るを得、一切悉く轉輪聖王と爲り、一一の聖王彼の衆生眷屬の數の如く亦復斯の如くならむ。一切の聖王及び官屬を如來は悉く能く各各現に一毛孔に入れ、及び聖衆各覺知せず、所入を知らざるなり。各如來の一切の毛孔普ねく佛身及び聖衆を現ずるを見る。如來所現の威神の變終に損耗無し。正に一劫、不可計劫、無量無限劫中に變を現ぜしむるも、如來の威聖道德の光は稱へ盡すべからず。巍巍神妙乃ち是の如し。意に於て云何。諸の轉輪王と及び七寶と、獲る所の功德は寧ろ增多なりや不や。答へて曰く、甚だ

【四五】「正所」の「所」は「於」の衍字か。

敎化すべき所に寧ろ辯ずる所有りや不や。曰く、辯ず、天中の天よ。佛の言はく、是の如く一切諸法亦幻化の如し。別ち知るべからず。等しくして差特無し。亦作有らず、猶し幻師の如し。力に任せて祝術するに化變する所多し。化すべき所の者は等しくして差特無し。佛亦是の如し。[四二]智慧を以て普ねく諸佛の國土を示現し、所造平等にして差特無し。悉く佛事を爲す。其れ斯の諸佛を供養するもの有らば、福祐を建立し、德量一等なり。諸佛世尊は差別有ること無し。是の一切法悉く所生無し。亦實有ること無し。猶し幻化の如し。法異るも亦差別無し。佛の言はく、目連、如來發意の頃、一毛孔を以て江河沙等の如來至眞三十二相を現ず。微妙自然の顏貌を具足し、形に隨て化し、普ねく爲めに法を說く。而して口宣して示すに六十音を以てす。一切の如來は衆生の心の所行を曉了し、衆生群黎の心の好む所、悉く根源を知り、諸の群黎に隨つて而も爲めに法を說く。演する所有れば、衆生悉く受けて則ち苦患を除く。斯の諸の如來、皆三品を以て感動變化し衆に經法を說く。悉く四辯分別の慧を以て、皆佛德を現ず。目連の意の所趣に於て云何。何所の如來をか第一尊と爲ん。形像威容、[四三]初のもの最勝なりや。化佛者なりや。佛の化する所の如來なりや。目連答へて曰く、尊卑有ること無し。天中天よ、所以は何。變動する所有るも等しくして差別無きが故なり。是の故に異無し。顏貌威容、辯才聖達、神足說法、度脫する所有り、分別すべからず。言に差特有るのみなり。佛の言はく、是の故に目連、當に斯の觀を造すべし。其れ自然に法を化現する有れば、差特有ること無し。別知すべからず。佛の言はく、目連、設諸法自然化なるを了せば則ち分別して凡夫異有りと言はず。況んや佛法をや。所以は何。目連、一切諸法悉く本より淸淨にして諸法皆空なり。人迷惑して反つて衆想に住し、應不應と爲す。其の喜む所に從ひ、而も馳騁を爲すも、其れ法界は亦所起無く亦所滅無し。法界平等にして如來は善く解したまふ。其れ斯を解する有れば悉く閻浮提の衆生の類の前に於て、諸佛の形像、相好及び諸比丘を化現す。[四四]而も今人民覺知するも

【四二】　原典「以智慧聚」とあり「聚」の字衍なるに似たり。

【四三】　此の三者の區別明かならず。

【四四】　原典「而令人民」とあり。

他人を止めて受持せざらしむ。復次に目連、菩薩他人を呵折し、斷じて[四〇]共するを得ざらしめ、行てこれを誹謗す。復次に目連、菩薩身口意を護らざる者、是の四法を以て惡趣に生じ而も惱患を受く。佛の言はく、彼の世界に在りて經を講說する者は則ち吾身是なり。如來現變感動の威神は則ち一切の聲聞緣覺の能く知る所に非ざるなり。

目連佛に白さく。如來至眞唯此の三千大千世界に於て佛事を現作したまふのみなるや、復餘國異佛土に於てするや。佛目連に告げたまはく、今爾の見る所の世尊の示現は聲聞と俱なり。吾又復斯の三千大千世界百億の四大域に於て、人の所樂に隨ひ、其の本志を察し、各爲に法を說く。又佛斯の三千世界四方の大域に於て、梵天の色像を以て法を說く。又如來の像にして敎化を現ず。或は白衣を現じて袈裟を著けず。或は帝釋の如く示現して法を說く、或は四王轉輪聖王の如く、是の如く一切權方便を行じて爲めに經典を說く。如來は斯の三千大千世界に各各心の[四一]意樂に隨ひ、應に度すべき所の衆生の類に、而も爲に法を說きてこれを開化す。及び他方の無量の佛土に在りては一切の聲聞緣覺の乘能く知らざる所なり。日月宮の如くにして動移せず。普ねく郡國、縣邑、村落、丘聚、州域、大邦に現ず。如來は斯の若く自から佛土に於て動搖せず。則便ち皆無央數の諸佛の國土に現じ、群黎の本志の應ずる所に隨從して爲に經典を說く。

目連佛に白して言く、今現ずる所の佛、何所れか審實なる。忉利天上閻浮提(に在り)、諸天宮の中、三千大千の域にある者なるか、他方異佛世界に在りて說法するものなるか。唯天中天、當に何に因つて眞佛を知審せん。何所の佛に施さば福祐大巨にして稱限すべからざる。佛目連に告げたまはく、吾今爾に問はん。意に從つて之に報へよ。卿の意云何。猶し幻師の化人を化造して男と爲らしめ女と爲らしむるが如し。何れか審實なる所ぞ。目連答へて曰く、實なる者有ること無し。天中天、所以は何。幻術の力化して所變有り。悉く所有無し。則ち知るべからず。又問ふ、目連、

【四〇】共するは供するに同じ。異譯一見餘菩薩得供養、便妬嫉之、言何以供養」。

【四一】意樂に同じ。

別の大界有り。名けて[三八]志危と曰ふ。其の土の人民婬怒癡盛に、弊惡慳貪にして手に刀杖を執る。無信嫉妬にして、戒を犯し瞋恚し、多く徙倚懈怠慢突爲り。放心恣意にして安詳ならず。吾我有りと計して、人壽命を貪る。復智慧なく、時節を知らず。羞慚を曉らず、志性卒暴にして恭敬無し。彼の土の衆生顏貌變惡にして下劣卑賤なり。長短を相求め、相危害せんと欲す。懟んで相罵詈し、誹謗相言ふ。風雨時ならず、邪辭相教ふ。其の地堅鞕麁惡これ瑕なり。荊棘汚穢土境に周布す。斯の諸の人民、形體顏貌氷麻油草木の藍色に似たり。衣服醜陋にして、飲食麁惡、貧窮困厄にして土石七凶、人民是の天の宮殿を憍念す。人民の黨若し財寶を得れば悉く王藏に沒す。彼の土の人民衆惱の厄に遭へば、之に杖痛を加へ、一類にして差無し。佛の言はく、目連、彼の土の人民勤苦の患、現在是の如し。假使命過終沒の後悉く地獄餓鬼畜生に墮す。其の佛の名を[三九]心念愍哀如來至眞等正覺と曰ふ。經法を講說し、十八變を現じて典籍を演ぶ。七百歲の中一人の法教を受くるもの無し。其の佛世尊以て懈厭せず。大哀を興發して益演經を加ふ。其の佛若し郡國、縣邑、邦域、村落に入らんに、人民これを見れば皆共に罵詈誹謗し、毀辱唾賤し、瓦石もてこれを打つ。彼の如來尊開化せんと欲するが故に亦退止せず。時に佛復七百歲の中に於て經を說きたまふに、八十四姟の人皆羅漢を得たり。阿那含、斯陀含、須陀洹を得ること各各亦復八十四姟なり。悉く一日に於て出でて沙門と作り、成就戒を受く。一切の學者及び不學者、三月の竟に於て餘談を樂まず。一日の中皆般泥洹す。又其の如來續いて存し、世に處したまふ。復五人の菩薩乘を學ぶ者あり。宿に餘釁ありて彼の佛土に生る。勤苦惱に遭ひ、佛爲に經を說きたまふ。

目連佛に白して言く、其の土の菩薩何の罪殃を以てか彼の土弊惡の處に生るゝや。佛目連に告げたまはく、菩薩四事法を以て惡處に生れ、惱患を受く。何等か四なる。假使菩薩供養利を慕ひ、道法を學ばされば即ち惡處に生す。復次に目連、菩薩又正法を誹謗するを喜び、旣に自ら學ばず。又

【三八】「榆末陀那晉言應時」梵音未だ勘へず。

【三九】「振波迦 論眞陀 摩那迦 樓晉言傷悲憐念」恐らくは kṛ-pākaruṇā-cintāmanasikara の方音形か。

普香と曰ふ。一一の樹は香四十里に聞ゆ。自然の蓮華大さ車輪の如し。無數の葉有り。香氣普ねく流れて、極めて柔軟にして好し。絕細の綵衣色計るべからず。光耀煒煒として生高二丈なり。一一の蓮華其の香の氣四天下に遍ねく、香周ねきこと無量なり。香を重閣と爲し、香を經行と爲す。池に蓮華を生ず。郡縣、國邑、丘聚、村落有ること無し。唯高臺有り。無央數千、其の境界に滿つ。猶し第六の[三三]無憍樂天の如し。自然の物にして人民これ安し。飮食遊居等は差特無し。彼の土の如來經法を說く時、[三四]唯清淨諸大人敎をのみ演べて、聲聞緣覺の事を捨つ。神通の菩薩四方に周遍し、不可思議の諸菩薩衆法忍を逮得す。諸菩薩中に菩薩有り。名けて[三五]變衆法王と曰ふ。志願高妙にして三忍を獲成し、威明神通ありて辯才巍巍たり。無央數億百千の諸佛に供養し、稽首し、歸命せり。變衆法王菩薩大士世尊を勸請し、經典を演說す。佛即ちこれを聽いて道義を宣揚す。即ち佛前に於て座より興ること高さ四百里、毛孔より悉く光明を放ち、普ねく世界を照す。自然に微妙の蓮華を化生す。[三六]無央數億百千の葉を生ず。境界に遍布して積むこと四丈九尺。諸天伎樂鼓せざるに鳴る。八部音法印の聲を出す。一一の法印に總て八十四億の經典の訓あり。一一の經典二萬二千の香氣の斂言を攝す。虛空の中より自然に而も建め。九十六百千億の人不退轉に立つ。當に無上正眞の道を成じ、皆逮得して不起法忍に至るべし。諸の菩薩衆の是の如きの比像彼土に周遍せり。其の境の人民盲聾有ること無く、亦跛蹇無し。亦惡色瑕穢の難無し。貧匱者無し。斯の衆の菩薩三十二相其の身を莊嚴し、異樂有ること無く、法を以て樂と爲す。亦食飮せず。志に禪定を服するを以て供養と爲す。彼に八處と惡趣無し。假使壽終るに別趣有ること無く、唯佛道に歸す。佛の言はく、目連、意に於て云何。釋寶光明如來は則ち吾身是なり。如來彼に變化感動す。則ち一切の聲聞緣覺の能く知る所に非ざるなり。

佛目連に告げたまはく、是の三千大千世界に於て、東北方此を去ること[三七]四十二四方大域にして

【三三】異譯に第五尼曼羅天と云ふ蓋しこれ化樂天のことなり原語nirmāṇarati をnis（無）māna（憍）rati（樂）と譯せしなり。

【三四】「薩和曇無惟屈羅遊晉言一切法無極積聚」梵音恐らくはsarvadharmavikurvitarāja か。

【三五】原典「獲威成三忍明神通」とあり更に勘ふべし。

【三六】この處に「其色像貌」の一句あり蓋し後人の註語ならむ。

【三七】異譯「四萬二千」を至當とす。

の一切の王非法を棄去せり。一一の王に八萬四千の夫人婇女あり。一切の婇女國中第一にして眞の玉女爲り。一一の國王五百の子有り。或は千二百子なるものあり。一一の諸王正を以て國を治め、[二八]鞭杖を加へず、刀刃を設けず。各各教化して令せずして從ふ。佛を[二九]釋寶光明如來至眞等正覺と名く現に在して法を說きたまふ。彼の佛遊ぶ所の陬の四方域の精舍には香座高さ四丈九尺なるあり。一一の座床に香氣流布せり。四天下に於て天華を雨ふらし、釋寶光明如來の上に散ず。百千の伎樂自然に和鳴し、天地自然に大震動を爲し、音聲梵の如し。功德を積累すること稱計すべからず。百千の福を轉法輪と爲す。諸の塵勞を斷ち、泥洹無垢にして名けて將護と曰ふ。諸の菩薩如來の說法を容れ、四大八萬四千王の爲めに宮中に住在す。及び諸の婇女、男女、大小、道義を聞き了りて悉く遠塵離垢なるを得、諸法法眼生ず。諸王の妻子、中宮眷屬、悉く無上正眞道の意を發し、皆同一音をもて各自ら宣言し、志出家を願ふ。如來勸讃して悉く一時に同じく沙門とならしむ。若し郡國、縣邑、丘聚、村落に遊ぶに造行亦種ゑ作らず。自然に粳米を生ず。諸天悉く來つて之を供養す。其の佛第一に法を講ずるに、諸の聲聞衆皆須陀洹果に立つを得たり。諸の菩薩乘皆信忍に逮る。第二說法斯陀含果を得、諸の菩薩乘皆悉く柔順法忍を逮得す。第三法會經典を講說して阿那含に住す。諸の菩薩學五通に致ることを獲たり。第四說法羅漢に立ち、諸の菩薩學不起法忍を得たり。諸王中宮の女子官屬皆女身を轉じて男子爲ることを得たり。斯の諸の如來悉く其の決を授く。皆當に無上正眞の道を逮得すべしとなり。意に於て云何。彼の界の如來釋寶光明と名くるは豈異人たるかと、斯の觀を造す莫れ。所以は何。則ち吾身是たり。此の名號を以て彼の世界に示現し說法す。如來の變動一切聲聞緣覺の能く知る所に非ざるなり。

佛目連に告げたまはく、是の三千大千世界に於て、西北方此を去ること[三〇]五十五四大方域にして四方域あり。號して[三一]香土と名く。上妙好栴檀雜香を以て閻浮提の土地と爲す。樹有り。名けて[三二]

【二八】「鞕」は蓋し「鞭」に作るを可とせんか。
【二九】波勿多羅陀那賴比…晉言寶放光明梵音恐らくは prabhūtaratnaraśmi 又はその方言形なるべし。
【三〇】異譯「五萬五千」を至當とす。
【三一】異譯「犍沓提晉言香氣」恐らくは gandhavatī か。
【三二】異譯「三曼陀揵陀晉言香普熏」samantagandha。

其の地平正にして猶し掌の如し。普錦世界に大城郭有り。名けて[二一]上賢と曰ふ。人民熾盛安隱にして患無し。米穀平賤にして快樂倫ものあらず。人民繁滋なり。其の城東西の長さ千二百八十里、南北の廣さ六百四十里、上賢大城人民居る所、衆多にして計り難し。復此の[二二]安迦、摩竭、拘婁沙國よりも多し。衆華如來常に上賢大城に遊在す。若し一たび說法すれば三垓の人を化して羅漢の證を得しめ、三垓の人ありて阿那含に至り、三垓の人有りて斯陀含寂寞の行に至り、三垓の人有りて[二三]道迹證を得。三垓の人有りて緣覺乘を得、又兩倍の人皆無上正眞道の意を發し、無數人あり、皆衆德本を殖ゑたり。彼の四大域其の境界の中に一樹あり。[二四]蜜合成と名く。常に華實有り。其の味甚だ美にして百味餼の如し。男子女人若し華實を取りて當にこれを食はん者は、晝夜七日飽て飢渴せず。顏容姝好にして、[二五]色改變無く、精氣充滿し、勢力强盛に、形體輕便、是を食して已後、亦大行せず、亦小便せず。涕唾有ること無し。土に種を耕さず、賈販して利を求め(ず)。是の華實を服して自然に安隱なり。亦貧富無し。飲食居宅等の差特無し。又彼の如來の諸聲聞等六十四億百千諸姟なり。菩薩の衆復此の數に倍す。而して彼の如來の遊觀する所の園を名けて普華と曰ふ。佛の食したまふ處に、佛と聲聞諸菩薩の衆、飯頃に適坐す。尋で時に諸の樹躬を曲げて禮を作し、此の華實有りて自然に比丘の鉢中に來り入る。飯食已に竟れば、其の諸の樹木復重ねて禮を作して復住すること故の如し。佛の言はく目連、彼の世界の功德巍巍たること乃し是の如し。衆華如來は則ち吾身是なり。今續きて現に在り。此の名號を以て經義を講說す。則ち、一切聲聞緣覺の能く知る所に非ざるなり。

佛目連に告げたまはく、斯の三千大千世界、西南方此を去ること[二六]七大四域にして四方界有り。名けて[二七]選擇と曰ふ。一一の方域に八萬四千の國あり。一一の國に八萬四千の王あり。一一の王に八萬四千の城あり。其の州域、大邦、郡國、縣邑、村落、人民の衆、億百千垓、具足備滿せり。斯

【二一】 異譯颰陀脩沈晋言善尊、恐らくはbhadrottaraか。

【二二】 異譯には鴦迦 anga 摩竭 magadha 拘留 kuru とあり。拘婁沙の沙は恐らく衍字なるべし。

【二三】 道迹證は須陀洹に同じ。「有三垓人化緣覺乘」の「化」は衍字なるべし今「得」と讀めり。

【二四】 異譯「末頭三披晋言此樹」とあり末頭はmadhuならむも三披の梵音未だ勘へず。此樹は衍文なるべし。

【二五】 「色中改變」の「中」を「無」と讀むべし。異譯「色貌不減」とあり。

【二六】 異譯の七萬を至當とす。

【二七】 「比實颰塡晋言容受」梵音未だ勘へず。「實」一本寶に作る。

德慶者たり。若復勸助して道意を發さしむれば(亦可なり)。道意を發すを遮し、又來りて壞亂すればこれ罪釁者なり。卿等未だ曾て乃ち復害を懷くことあらじと。諸魔又問ふ。無上正眞道の意を發し、及び人を勸化して大道を發さしむること其の福云何。菩薩答へて曰く、正に江河沙等の諸佛の世界をして、中に七寶を滿たしめ、以用て布施せんも、道意を發す者の福德は彼に超えたり。又復正に江河沙等の諸佛の國土の所有衆生をして悉く共に供養して一切の安を施し、衆學者を奉じて其の所欲を恣にせしめむに、設し復、人有りて道意を勸發するの德は彼よりも超えたり。又復問ふて曰く、假使人有りて道意を亂壞する其の罪如何。諸菩薩の曰く、設し復人有りて普ねく衆生を取りて、其の瞳子を挑らば、罪寧ろ多きや不や。答へて曰く、甚だ多し。報へて曰く、道意を壞る者の罪は彼よりも過ぎたり。時に無量億の諸魔の衆此の言說を聞き、大變化を視、皆無上正眞道の意を發し、皆天華、天香、雜香、散華、燒香を以て諸の菩薩に奉り、諸の音樂百千の數なるを鼓し、各頌を歎じて曰く、願くは聖衆をして疾かに無上正眞道を得せしめよと。時に彼の菩薩最正覺を成す。尋で異天有り。聲を擧げて曰く、斯の諸魔衆皆惡趣を脫し、乃ち道意を發せり。如來爲めに無恐懼の義を施したまふと。是を以ての故に如來を名けて無所畏と爲す。無所畏如來豈異人なるかと、斯の觀を造す莫れ。所以は何。則ち吾身是なり。佛の言はく。目連、佛は斯の名を彼の世界に變じて說法を示現したまふ。是を如來威神の感と爲す。則ち一切聲聞緣覺の能く及ぶ所に非ざるなり。

佛目連に告ぐ。此の三千大千世界に於て、東南斯を去ること八萬四千諸四大域にして、其の域を名けて[一九]普錦雜邑と曰ふ。佛を[二〇]衆華如來至眞等正覺と號す。現に在して法を說きたまふ。彼の四大域、種々妙好八品の珍寶を以て地となし寶幔を交露せり。其の地柔軟にして上妙衣の如し。珍草を以て自然に四寸、遍ねく地に布けり。足其の上を蹈むに、則便ち陷偃し、足を擧ぐれば還復す。

【一九】異譯「曼陀質晉言遍等」とあり。恐らくは samanta-citra か。
【二〇】異譯質多拘沖…晉言幻華とあり。恐らくは citrakusuma か。

度爲極の行を奉修す。彼の無央數不可思議の衆生の類皆無上正眞道の意を發し、不可計の人不起法忍を得、無量の人に無上正眞道の意を授く。其の界二乘の名、聲聞緣覺の言行有ること無し。純ら大乘有り、諸の情欲無く、一切鮮潔にして穢濁無し。諸の菩薩衆世界に充滿す。其の佛の壽命八萬四千載なり。世人終るの後、地獄餓鬼畜生に趣かず。八難に墮せず。斯の諸の菩薩若し神命を遷さば、卽便ち清淨佛土現在佛の所に往生す。天、龍、鬼神、阿須輪、揵陀羅、迦留羅、眞陀羅、摩睺勒、心皆同一にして、一切智諸通の慧を志し、異義を樂まず、唯佛法を樂む。天龍鬼神の形體、被服、擧動、進止分別すべからず。唯名の異るのみ。天、龍、鬼神及び世の人民皆同一源にして異流有ること無し。目連の心意に於て云何。寶成如來は豈異人にして彼の境界に於て經道を講說し一切の群黎を開發敎化するかと、斯の觀を造す勿れ。所以は何。則ち吾身是なり。斯則ち如來神足の變化にして則ち聲聞緣覺の及知する所に非ざるなり。

　佛目連に告げたまはく、此の三千大千世界に於て、北方是を去ること計[一五]三十六四大諸域にして、其の四大域を[一六]無恐懼と名く。黃金と白銀と其の界を交成せり。彼の土に地獄餓鬼畜生の患難有ること無し。亦八處の恐懼無し。人民の所行禁戒を犯すもの及び邪見無し。志性禮節あり、調順にして卒暴の者無し。亦外道衆邪異學の名聲無し。佛を[一七]無畏如來至眞等正覺と號す。現に在して法を說きたまふ。其の佛始めて樹下に往詣したまふ時、[一八]須摩提等の七十二姟の諸魔往て佛と戰はんと欲せり。又彼の如來菩薩爲りし時、行放逸無く、諸の通慧を成ぜり。魔便ち往くことを遮へらる。時に應じて如來諸魔の數に隨つて諸の佛樹と化し、諸の菩薩と化すること其の數亦然り。各各別に佛樹の下に坐したまふ。時に諸魔怪むこと未曾有なり。何の所か菩薩の身を審かにする者ぞ。吾等當に往きて所興を妨廢し、其の道意を壞すべきと。諸の化菩薩衆魔に告げて曰く、一切諸法皆幻化の如し。今仁者何の亂す所をか欲する。假使卿等能く分別して了し、無上正眞の道を發さば福

【一五】異譯「三萬六千」を至當とす。
【一六】異譯梵音を擧げず。abhayaなるべし。
【一七】世界名と同じくabhayaなるべし。
【一八】sumatiか。

亦懈怠無し。諸の聲聞等日日に滅度す。亦販賣、估作、治產せず。飮食を得んと欲すれば意に從つて應至す。口教を傳へず。衣食屋宅悉く化生たり。忉利天の如く、皆自然に生じて、胞胎に由らず。紫金を地と爲す。離垢意如來、壽五百歲、其の土の人民も亦復是の如し。亦中夭有り。目連よ、彼の界の如來講說法者を知らんと欲するに、豈異人ならんかと、斯の觀を造す勿れ。所以は何。則ち吾が身是なり。佛の神足威變の所爲は則ち一切聲聞緣覺の能く及ぶ所に非ざるなり。

佛目連に告げたまはく、斯の三千大千世界に於て、南方此を去ること[8]十八四大域にして、其の四大域を名けて[9]寶成と曰ふ。而して三寶、金、銀、琉璃を以て地と爲し、樹と爲せり。佛有り。號けて[10]寶體品如來至眞等正覺と曰ふ。現に在して法を說きたまふ。但だ演ぶるに緣覺の法を宣示して、聲聞乘少し。諸の菩薩の學も亦薄尠なり。緣覺乘(も然り)。若し彼の國土にして忽ち終沒するものは、則ち他方否佛の境界に生じて緣覺道を成ず。目連の心に於て憶ふ所云何。寶體品如來講說經者は豈異人なるかと斯の觀を造す莫れ。所以は何。則ち吾が身是なり。如來彼に於て威神變を現じ、經法を講說したまふ。則ち一切聲聞緣覺の及知する所に非ざるなり。

佛目連に告げたまはく、斯の三千大千世界に於て西方此を去ること[11]二十二四大域にして、其の四域界を[12]寶錦と名く。悉く[13]七寶金、銀、琉璃、水精、珊瑚、琥珀、車渠、瑪瑙土地を合成せり。其の境の樹木衆寶もて化成せり。經行、棚閣、欄楯、苑囿は皆七寶を以てす。其の浴池の中に八味水を滿し、清澄且つ美なり。猶し兜術天上の諸天の宮殿飮食被服の如し。彼の界の人民亦復是の如く、等しくして差特無し。又其の土地女人の名無し。亦復女人より生ぜず。人民の類穢濁を興さず。蓮華より化生して、結跏趺坐す。其の土の衆生婬怒癡無く、貪欲の想無く、瞋恚の想無く、危害の想無し。亦胞胎無し。彼の佛を號けて[14]寶成如來至眞等正覺と曰ふ。現に在して法を說きたまふ。其の佛の說く所、異義を講ぜず。但菩薩法典の藏を演ぶ、金剛を總持し、三場を分別し、六

【八】　異譯「萬八千」とあり。十八は少きに過ぐるが如し。
【九】　「羅陀那三披晋言寶等」と異譯にあり。三披の梵音未だ勘へず。
【一〇】　羅陀那揵頭晋言寶品恐らくは ratnagandha か果して然らば方言形は ratana-kandhoなり。
【一一】　異譯二萬二千を至當とす。
【一二】　羅陀那質多晋言名寶意ratnacitta この citta を梵語 citra の意に取らば寶錦なる譯語も亦通じ得べきが如し。但し世界名なれば女性形なるべし。下之に準ぜよ。
【一三】　異譯には「黃金、白銀、琉璃、水精、碼瑙、赤眞珠、車渠」とあり。珊瑚琥珀を缺きて赤眞珠を加へたり。
【一四】　異譯「寶等有」とあり。梵音を擧げず。未だ勘へ得ず。

卷の下

[一]是に於て賢者大目犍連無央數億百千姟の諸天子衆、[二]欲行天人、色行天人を咸請勸發して、各疾かに華、香、[三]擣香、雜香、繒幡を取り、各佛に往詣して世尊を供養し、前んで足下を禮し、却いて一面に住しき。時に目犍連還大聖に詣り、首を地に稽し、遷つて佛前に住す。佛目連に告げたまはく、汝如來所現の神足正覺變化を聽け。經有り名けて如來感動威變と曰ふ。善く之を思念せよ。目連應へて曰く、教を受けて聽きたてまつらむ。

佛目連に告げたまはく、斯の三千大千世界、百億の日月、百億の四大海、百億の須彌山王、百億の四天下、是を則ち名けて三千大千世界一佛國土と曰ふ。意に於て云何。佛は一閻浮提に獨在して正覺を成ると爲んや。斯の觀を作す莫れ。所以は何。吾れ普ねく悉く諸四方面の佛の世界に遍し、順じて所應の如く、衆生類の爲めに經法を講說す。或は已に成佛し、或は復自から現じて胞胎に從在し、或は復示現して兜術天に在り、或は復現じて身已に滅度せり。佛目連に告げたまはく、此の三千大千世界に於て、東方に在りて此を去ること萬二千四大天下[四]四大の域にして、則ち世界有り。名けて[五]無垢と曰ふ。其の佛を號けて[六]離垢意如來至眞等正覺と曰ふ。現に在して法を說きたまふ。斯の四大域、佛の世界は與なる所の衆生、婬怒癡薄くして開化すべきこと易し。菩薩學及び辟支佛乘少く、諸聲聞多し。又目犍連よ、離垢意如來の一一の集會、經法を說きたまふ時、九十九億の諸聲聞等を導きたまふ。其の土の所化は四諦を別たず。此の國土の如きは須陀洹、斯陀含、阿那含を說かず。其れ彼の世界には、一たび坐して經を聽くに、六神通を證し、八脫門に至り、神足を逮獲して虛空に踊在すること四丈九尺。身中に火を出し、還た[七]耶維し已りて般泥洹す。忽ち即ち燿滅して烟炭有ること無し。其の土の如來常に經法を說き、未だ曾て休廢せず。群生を救濟して

【一】この次前異譯には目連に關する一段の文あり、又偈頌あり。本經は脫落せしものゝ如し。
【二】欲界諸天色界諸天のこと。
【三】擣香とは末香のことなり。
【四】四大域とは四洲(caturdvipika)世界のこと。一須彌の意なり。
【五】「無塵」と異譯に見ゆ amala 又は vimalā か。
【六】比羅耶摩提晋言如鏡明無垢との梵音詳かならず恐らくは vimalamati か。
【七】jhāpetvā の音寫なり。梵語 ksā 又 ksi なる語根の使役形なり。火燒焚燒の意に用ふ。實は滅盡せしむるの意なり。

に於て平等を曉了し、二念を爲さず。是の如き行者を平等に逮ると謂ふ。又問て曰く、今仁者何等の法に逮つて如來の爲めに授決せらるゝや。月氏答へて曰く、亦凡夫の法を蠲除せず。亦諸佛の法を逮成せず。如來此を以て吾の決を授く。吾れ是の法に於て斷除する所無し。又諸法に於て亦所得無きが故に授決せらる。又問て曰く、是の如く計せば愚冥の凡夫も悉く當に決を得べし。所以は何亦凡夫の法を蠲除せず。斯を則ち名けて凡夫と爲す。焉に佛法に致る。又重ねて問て曰く、何が故に凡夫の法を解するや。月氏答へて曰く、吾れ空の義を以て諸法界と爲し、佛法を解するのみ。其の本際は實に本有ること無し。謂く、空法界は滅すべきや。答へて曰く。不能なり。本際本無し。豈獲べけんや。答へて曰く不なり。是の故に天子、吾れ此の言を說く。亦凡夫の法を滅除せず。亦諸佛の法に逮成せず。如來此を以て吾に決を授く。又復問て曰く、空と法界は本際本無く、言辭有りや。答へて曰く、無きなり。假使空と法界とは本際本無し。言辭道有ること無し。言說無し。今云何が仁者に決を授くるや。答へて曰く、天子、今吾に決を授くることは猶ほ空の義の如し。諸法の界本際本無し。是を諸法の所歸の義と爲す。法の如く無法も決を受くること亦如し。授別亦如し。授別し竟れば亦復是の如し。等覺亦如し。無上正眞の道を逮成することも亦復是の如し。是に於て月上天子前んで佛に白して言く、唯然り世尊よ、月氏天子は深智慧に入り、巍巍及び難し。佛天子に告げたまはく。菩薩以て法忍を逮成する者は其の法是の如し。分別する所有り。若し道義を發し、經典を演ぶれば一切法界の事を解說す。又其の法界講說すべき所には、亦言辭無くして宣暢して衆に示す。所以は何。理は法界に於て言辭有ること無く、亦所說無し。計るに法界の如く、人界も亦如し。衆生界の如く、佛界も亦如し。佛界法界亦如し。假使菩薩此の義に入れば、則ち能く獨立して他より受けず。

而るに今如來獨り[一九]歡豫を與へ、偏見愍念して決を授くるや。月氏天子月上に答へて曰く、如來至眞は永く所欲無く、亦所難無く、亦疑結無し。假使決を授くるも悕望する所無し。若し菩薩有りて開士の行を學ばんに、故を以て如來は決を授くるのみ。何に因りてか如來獨り當に歡豫し、偏見愍念して決を授くべきや。又問ふ。天子、當に何ぞ歡豫の信を以て當に何に於て求むべき。又曰く、假使心に於て而も心を想はゞ彼の人を計す。歡信無ければ受取する所無し。受取無ければ第一の歡豫なり。彼の信を計するに其れ瑕穢無し。歡豫無きものを乃ち信樂と爲す。若し言辭に於て、言ふ所無ければ乃ち信樂と爲す。彼則ち未だ曾て歡豫の信無きことあらず。亦結恨無し。是の故に天子、假使人有りて歡豫の信を求めば、便ち當に無言辭の法を修行すべし。精進する所の行、所行無きが如く、亦行ぜざる無し。憂無く、喜無し。所以は何。其れ法界は亦行有ること無し。亦不行不進不怠ならず。

　月上天子月氏に謂て曰く、可する所名けて菩薩學と曰ふは何の謂とや爲ん。月氏答へて曰く、所謂菩薩の學とは則ち身有ること無し。亦體を護らず。又舌有ること無し。亦口を護らず。又心有ること無し。亦意を護らず。是を菩薩の第一の學と爲す。所謂學とは其れ所受無く、亦所行無し。若し所起無くんば亦不起も無し。是を菩薩の學と爲す。又復問て曰く、仁者斯の如來の授決を學ぶや。答へて曰く、吾れ此を學ばず。而も授決せらる。所以は何。此の如きを學べば吾我及び我所を得ざるか。其れ吾れに學ぶ所有るを念知せざる、斯を名けて學と曰ふ。天上世間能く短を得ず。亦失有ること無し。若し有る(人)我れ學ぶ所有りと念言せば、則ち正業に趣くと爲さず。平等に逮らず。自から謂ひて我れ所學ありと謂ふに由るが故に。又問て曰く、何等の事を以て平等に逮ると謂ふや。答へて曰く、天子、假使行ぜば上ならず、下ならず、中間に處せず、所行に著せず、所作有らず。所行有らば而も所造無し。是れ菩薩の行なり。其れ斯の念を作す是を法を尊ぶと爲す。[二〇]斯の諸法

【一九】異譯に「歡喜」と云ふ。

【二〇】「斯の」の上「此卑賤法」の一句あれど恐らく後人の註釋句なるべし。

大千世界を動かす。則ち無央數七寶百千の蓮華自然に地に布き、周接せざるは無し。即ち虚空より他の佛土に詣り、異國の如來正覺に奉覲し、稽首歸命して經法を諮問し、所說の義を聽く。其の佛興より來、已に十二劫、晝夜各三たび經法を講說す。是を以ての故に、拘翼、當に斯の觀を作すべし。其の佛の界、諸菩薩の衆は計億すべからず。衆寶の積聚を損耗すること有ること無し。佛の國土に異聚の名無し。山林・谿谷・諸淵有ること無し。語を談ずる者無し。衆患有ること無し。羅漢緣覺の食飮する者無し。所以は何。斯の諸の菩薩皆樂法悅豫を以て食と爲す。今此の天子は積寶世界より沒して此の處忉利天に來詣せり。故らに來りて佛を見たてまつり、稽首歸命して經典を諮問し、無數の人の爲めに斯の經法を演べ、廣く其の義を解す。又復諸の餘の菩薩をして具足して斯の法忍を興發せしめんと欲するなり。佛の言く、天帝よ、月氏天子は[一六]當に正法を護り、受持奉行すべきなり。如來滅度の後、最も末世に於て、法盡きんと欲する時、當に此の閻浮提に住すべし。彼の世時に於て、當に人民に是の如き比像の深妙の法を授くべし。優輿無量にして、精進將養し、不可計億百千人を化して斯の法忍に住せしめ、法沒盡の後、人間より終沒して、兜率天彌勒菩薩の所に生じ、此の諸佛世尊の微妙の道化を啓受し、無量百千の天子に於て無從生を立て、或は無上正眞道の意を發さしむ。彌勒菩薩正覺を成ずる時、閻浮提に住すること[一七]十歲、彌勒如來及び諸弟子を供養し、二萬人と倶ならむ。家の地を捨て、家を離れて道を爲し、行じて沙門と作り、經法を啓受し、其の形壽を盡して、常に正法を持せむ。佛滅度の後、而もこの法を以て、群生を將濟し、悉く當に復斯の賢劫の千佛興るに値ひ、次第に九百九十六佛世尊を供養すべし。悉く大聖に於て梵行を淨修し、七十五[一八]江河沙劫を過ぎて、尋で無上正眞道を得、最正覺を爲らむ。號して日曜如來正眞等正覺と曰ふ。其の佛土を一切具足と名づく。

是に於て月上天子月氏に謂て曰く、斯に於て世尊仁者に決を授け、當に無上正眞道を成ずべし。

【一六】此の間に「佛欲釋命」の一句あり如何に讀むべきかを知らず。異譯にはこれに相當する所に「故來見佛」の一句あり。されどこれと同じとも見えず。恐らく後人の註語が本文となれるならんか。

【一七】安法欽の異譯には萬歲とあり。十歲は少に過ぐるが如し。

【一八】江河は恒河に同じ下準じて知るべし。

に何の義を以て衆生を開化せん。群黎生有り、而して終沒あり。聲聞の地に於ては生ぜず、沒せず。不生不沒は菩薩の地に非ず。云何が菩薩の行、當に生死に在りて無央數億百千劫に遊ぶべき。

佛天帝に告げたまはく、其れ菩薩有りて不起法忍を逮得成就せば、生を念ぜず、亦終沒無し。猶し羅漢の滅度以來百年を積むが如し。所以は何。菩薩を觀察するに亦復是の如し。菩薩は吾我の想無し。他人の想無し。菩薩の所行又復彼に過ぎたり。生を念ぜず、終沒の想無く、吾我他人の想有ること無く、皆悉く滅度す。一切諸法本末有ること無し。假使是の法を了せずんば則ち所覺無し。大悲の菩薩設ひ無數劫・億百千姟・終始に遊ぶも以て懈倦せず。[一一]譬へば男子の四徼道に於て大屋宅を燒くも、復慕ふ所無きが如く、大慈を行ずる者も亦復是の如し。身命を惜まず、五樂に在りて之を棄捐して去る。樂欲する所に於て大火を遠ざくるが如し。火中に在りて悉く能く之を忍び、其の身燒かれず。意に於て云何。其人の所作は難しと爲さんや不や。答へて曰く、甚だ難し、天中の天よ。佛の言く、拘翼、菩薩の所作は復此よりも過ぎたり。一切の諸欲塵垢を度脫して、而も生を現じて群黎を敎化す。是の故に當に觀ずべし、菩薩大士は一切の聲聞緣覺を超越し、無上正眞の道を逮得して最正覺と爲ることを。

爾時、佛天帝に告げたまはく、向に仁問へり。何れの所に於て沒して此に生を得たるやと。佛の所說を聽け。東方斯を去ること九十二億百千の佛土にして世界有り。名けて[一二]積寶と曰ふ。其の國に無央數の衆寶樹木有り。枝葉華實各各別異なり。[一三]經行・遊觀、[一四]棚閣・講堂、悉く七寶を用ふ。彼の國の土地悉く紺琉璃、無央數百千の衆寶を以て合成せり。積寶世界の佛を[一五]寶場威神超王如來至眞等正覺と號す。現に在して法を說きたまふ。其の佛の國土には二乘聲聞緣覺の敎ふる所の業有ること無し。純ら諸の菩薩具足弘普して佛土に周滿せり。其の佛の說法一會の時、三十六億の菩薩不起法忍を逮得せり。衆適に忍を得れば、尋で則ち身を踊らして虛空に在り。四丈九尺にして三千

【一一】 この譬喩意義通ぜざる所有り。異譯には「譬へば拘翼よ、人有りて火坑中に墮せんに、大悲の男子あり。軀體を愛まず、壽命を惜まず、五の所欲及び諸の所樂を捨て、火坑中に入りて、是の人を抱き出で、亦自ら出で、復彼人を出すが如し」とあり。

【一二】 異譯「羅他那薩遮晉言珍寶審諦奧藏」ratnasatya。

【一三】 異譯「經行處」とあり。

【一四】 樓閣に同じ。

【一五】 羅陀那文陀羅帝耶阿丹竭羅油晉言珍寶豪場出過上聚 ratnamaṇḍalatejodgatarāja。

求を違すべし。求むることと意を求むるが如し。名稱を求めず、而して所求無し。則ち所求無ければ則ち所住無し。

時に天帝釋前んで佛に白して言く、未曾有に至れり。天中の天よ、月氏天子は深く智慧に入り、殫極し難し。何に於て終沒して此に來生し、斯に於て沒し已りて當に何に於て生ずべき。月氏天子天帝に答へて曰く、假使幻士變化する所あり。男とならしめ、女とならしむるも、何に於て沒して此に來生し、是に於て沒し已りて當に復所趣ありと爲んや。答へて曰く、化者には至る所の趣無く、又其の化者に沒生あること無し。所以は何。化者は想無し。答へて曰く、拘翼、設使無想ならば云何ぞ是の如くなる。斯の幻化人彼に往至し、斯に沒して來生し、此に沒し已りて當に某處に生ずべしと、設し斯の念有らば則ち明智にあらず。人の嗤笑する所ならむ。答へて曰く、是の如し、天子よ、誠に云ふ所の如し。今拘翼の發す所の問も亦復是の如し。一切諸法悉く幻の如しと爲す。而も如來に問ふ。今此の天子何れの所に於て沒して此に來生し、斯に沒して何に趣くやと。意に於て云何。如幻の所化寧ろ去來有りや。豈沒と所生とを見ることを得べきや。答へて曰く、不なり。化に因る所のものは興す所有らんと欲するも[一〇]所造有りや。答へて曰く、所作有ることとなし。報へて曰く、是の如し。其れ一切諸法皆幻化の如しと曉了すれば則ち能く去來沒生を示現す。彼は此に現ずと雖も亦想念無く、亦所作無し。意に於て云何。其れ夢中に於て色を視、若くは聲を聞き、鼻嗅ぐ所の香、口嗜む所の味、身遭ふところの細滑、心識る所の法、寧ろこれを實有の所有と謂ふべきや。答へて曰く、不なり。天子報へて曰く、是の如し、拘翼、其れ諸法夢の如し、自然の如しと曉了する有らば、見聞する所有るも、心諸法に於て染汚する所無し。亦塵を離れず。亦所求無し。亦憂感せず。所聞の法の如き、悉くこれを分別して他人の說と爲す。諸の音聲に於て亦善する所無し。時に天帝釋前んで佛に白して言く、唯然り世尊、月氏天子所生を得ず、不沒不生ならば、當

【一〇】所造と云ひ所作と云ふも畢竟同一なり。

地、無縁覺地を見ず。佛の所見此の如しと爲す。其れ斯の觀を作さば則ち正觀と爲す。其れ正觀すれば則ち所見無し。其れ所見無ければ則ち平等に觀じ、邪觀を爲さず。拘翼よ、如來の所觀を知らんと欲せば、斯の如くにして異無し。是の如く觀ずるものは普ねく一切を見る。名けて一切審觀と曰ふ。是の故に如來を名けて佛と爲す。如來興る所、法界を壞せず。意に於て云何。如來の所見の是の如きの法とは何等を見るとや爲ん。答へて曰く、世尊、是の如し。如來は名號を見ず。亦色有ること無し。此に於て察する所、則ち法數無く、興造する所無し。又復問て曰く、唯然り世尊、佛の見る所の如く、月氏天子は是の如きを見るや。答へて曰く、拘翼、其れ有る不起法忍を逮得する菩薩行者、諸法界に於て隨順して住する者にありては、法法を見ず、則ち所有無し。自然法爲り。

又問ふ。世尊、月氏天子は法忍を得るや。佛拘翼に告ぐ。汝以て自ら月氏天子に問へ。當に發遣を爲すべし。是に於て天帝月氏に問て曰く、仁者を不起法忍を得たりと爲んや。天子答へて曰く、拘翼の意に於て從生する所無く、發起有りや。答へて曰く、不なり。報へて曰く、設し從生無く、發起有らずんば、云何が不起法忍を逮得せん。一切法界悉く所起無しとは此の謂なり。其れ法界は不起不滅にして亦所得無し。時に天帝釋心に自ら念言すらく、如今天子講說する所有り。以て不起法忍を逮得すと爲し、以て無上正眞の道に親近すと爲さむ。月氏天子卽ち帝釋の心の所念を知り、天帝に報へて曰く、拘翼、法忍を得んと欲せば、無上正眞道に親近を爲さず。其れ不有起法忍にして乃ち能く無上正眞の道に親近せむ。又問ふ。天子、何故に此を說くや。答へて曰く、有所得の者は則ち顚倒に墮し、亦所得無し。其れ道心は成覺有ること無し。不起忍なれば是を無所從生と曰ふ。其れ無所起は乃ち正覺を成ず。又問ふ、天子、道は當に何して求むべき。答へて曰く、拘翼、其れ道心は當に己の身に於て自然に之を求むべし。又問ふ。其の己身自然の者は當に何に於て求むべき。答へて曰く、其れ法の不生にして亦無生なるものは亦所生無し。當に彼に於て求むべし。當に斯の

と無く、往無く、反無し。所以は何。一切法を觀ずるに度者有ること無し。譬へば虛空の究竟して自然なるが如し。生有ること無ければ亦所著無し。作者有ること無く、亦所有無く、亦有らざる無し。一切法を觀ずるに亦當に斯の如くなるべし。

是に於て、世尊是の語を說きたまふ時、彼の諸天衆七萬二千の天子、遠塵離垢にして諸法法眼生ぜり。萬六千の天子、德本を宿殖し、悉く無上正眞道の意を發し、八千の菩薩、德本普ねく具して[四]不起法忍を得たり。佛の威神もてその[五]裓上に自然に華有り。昔より未だ有らず。各此の華を取つて如來を供養す。時に應じて彼の華普ねく悉く忉利天上に遍布せりき。

爾時天帝前んで佛に白して言く、吾れ未だ曾て此の如き華の華の族姓子等の如來に奉るものに會見せず。月氏天子天帝釋に報ふらく、[六]拘翼、且らく聽け、今如來の上に散華する所の者は衆人未だ曾て斯の聖尊を見たてまつらざればなり。所以は何。所因の心もて如來を見るものは彼の心忽然として已に過去し、滅して見るべからず。是の故に拘翼、所見有るものは一切諸法皆本より空たり。本より見えざる所なり。拘翼又問ふ。天子、今如來を見たてまつると爲んや。答へて曰く、見たてまつる。拘翼、これを察せよ。假使如來有色有爲ならば、乃ち當に見るべきのみ。設使如來[七]痛痒・思想・生死の識有らば吾れ當に これを見る べし。如來は色[八]痛想行識無し。亦合會無く、亦所有無し。五陰法想とせば、則ち想有ること無し。色をもて觀るべからず。又復向者拘翼の云ふ所の若し如來を見るかとならば、如今如來我身を見る。吾れ如來を視たてまつること亦復是の如し。又問ふ。天子、云何してか如來爾が身を見るや。天子答へて曰く、如來前に在す。便ち啓問すべし。時に天帝釋前んで佛に白して言く、云何が世尊、天子を見たまふや。世尊告げて曰く、色を以て見ず。痛痒・思想・生死の識を以て見ず。過去當來現在を見ず。亦以て凡夫の法を見ず。亦復凡夫の法を離れず。[九]所學及び不學を見ず。亦究竟の諸法を學成せず。羅漢法を見ず。聲聞を見ず。亦以て緣覺の

【四】無生法忍と云ふに同じ。一切諸法の不生なることを確知する位なり。

【五】裓は彌陀經の衣裓に同じ法華義疏四衣袷也と云ひ、玄贊五に衣襟也と云ふ。衣箱と云ふ說もあれど衣類とする方親しきが如し。

【六】帝釋の本名なり。解題を見よ。

【七】痛痒は受に同じ。感覺を云ふ。

【八】痛は受に同じ。感覺を云ふ。

【九】有學及び無學といふが如し。有學地は羅漢位以前を云ひ、無學は羅漢位を云ふ。

天子復問ふ。唯然り世尊、智度無極の法は母有ること無し。亦所生無し。亦所滅無し。云何が世尊智度無極如來を生ずるや。佛の言はく、天子其の法に因るが故に號して如來と曰ふ。其れ彼の法とは則ち生有ること無し。亦終有ること無し。不生不滅たり。其れ生有ること無く終沒無しとは不起不滅なり。斯の無色法は則ち智度無極の生ずる所たり。このゆゑに名けて智度無極如來を生ずと曰ふ。其の生ずる所の者は都べて所生無し。亦終沒せず。亦所起無し。佛の言はく、天子よ、其の不生・不沒・不起・不滅、是れ則ち名けて智度無極の處所と曰ふなり。智度無極は所生有るが如く、所行有るが如し。而も智度無極は未だ會て生有らず、亦所行無し。天子又問ふ、唯然り世尊、智慧は想有り、分別有り。而も智慧に依りて所生有るが如く、所行有るが如し。佛の言はく、天子よ、智慧は想無く、亦分別無し。假使智慧にして所想有り、分別有らば、則ち智慧の事を行ぜずとなす。所以は何。想念する所有り、所見有らば、則ち應に行ずべからず。設し智慧に於て思想する所無く、分別する所無くば、彼を能く名けて智慧を奉行すと曰ふ。又問ふ。世尊、何をか依行と謂ふ。答へて曰く、天子よ、其れ依行とは言取する所無し。何の依る所ぞや。佛天子に語りたまはく、言取する無ければ則ち以て三界の所生を放捨す、其れ言を取れば、則便ち二界の所生を離れず。是の故に天子、此の教を演ずるのみ。其れ言取無し、何の所依行か而も三界に生じて所依有らしむるや。天子復問ふ。云何が世尊、諸の聲聞の爲めに經法を講說して三界を度するや。佛天子に告げたまはく、吾聲聞の爲めに、欲界を因緣として經法を說く。又如來の身欲界を得ず。色無色界に於て、諸聲聞の爲めに經典を演ぶ。如來色無色界の所處を得ず。亦所度無し。而も聲聞衆欲界を度す。佛亦色無色界を得ず。而も聲聞衆超度して色無色界を過出す。又復天子、三界を得ず。三界に倚らず。空無柔順の法を計して欲界を願はず。三界中に於て所慕無し。三界に生じて亦所生無し。所趣を知らず。天子よ、何をか度者と謂ふかを知らんと欲せば、賢聖の教は但假言のみ。正義を推すに度者有るこ

卷の中

月氏天子便ち佛に白して言く、唯然り世尊、未曾有に至れり。菩薩大士の所行及び難し。是の如きの像類、諸法を觀察するに、志所趣に於て終始沒生し、坐起語言亦想念無し。佛の言く、譬へば、天子よ、幻師の化する所の來往周旋するが如し。是の如く天子よ、其れ諸法幻の如しと曉了する有らば、普ねく五趣に現じて所生有らず。彼則ち想無し。其の菩薩は生を念ぜず。亦所起無し。本願を用ての故に建立する所有り。現に所生有り。天子復問ふ。尊の教へて言ふ所の如くんば、菩薩所生を念ぜず、亦往生せず。云何が大聖如來至眞、所生の親を愍哀垂念して忉利天に上りたまふこと一時三月なるや。如來王后摩耶より由て生ずと爲すにあらずや。佛天子に告げたまはく、菩薩王后摩耶より生ずる所にあらざるは常に應に法の如くなるべし。天子又問ふ。如來至眞云何が生ずるや。佛の言く、天子、如來は則ち智慧[一]度無極より生ず。設し人觀察して其の本を推せば過去當來現在の諸佛誰か母たる者ぞ。則ち當に之を了すべし。智慧度無極是れ其の母なり。所以は何。天子、其の三十二大人相は摩耶より生ずる所に非ず。大智慧眞諦の[二]義を學びて乃ち能く此を致す。自然に如來の身を成就せり。其の十力は王后摩耶よりして生ぜず。本時、智度無極を奉行して十種力を得たり。四無所畏、十八不共諸佛の法亦復王后摩耶よりして生ぜず。大慈・大悲・無見頂・及び不虛見・佛眼・佛慧・佛の辯才・人の心念の所從來生を知ること、神足・善權、是の如きの比類限量すべからず。皆智慧[三]所度無極に因る。所以に如來を名けて佛と爲す。斯の諸の功德悉く王后摩耶よりして生ぜずとなす。天子當に知るべし、悉く大智度無極の行に從ひてこの道品を學ぶ。如來斯に因りて是の如きの像を致す。無量の佛法、如來の弘德、是を緣ずるが故に名けて如來と曰ふ。是の故に天子、當に斯の觀を作すべし。如來は則ち智慧度無極より生ず。王后摩耶によりて生ずる所にあらずと。

【一】度無極は波羅蜜多の譯語なり。

【二】原典「義」を「誼」に作る。誼とはその音義に通ず。今總てこれを義に改む。後出亦同じ。

【三】所度無極と云ふも度無極と云ふも同じきが如し。

さず。凡夫の法は則ち斯れ漏たり、佛の道法は穿漏無きかと。又復念言すらく、凡夫の法と佛法と、二者倶に法は虛無寂寞にして但假號のみ。思想すれば穢に致る。凡夫の法亦成就無し。諸佛の法も亦具足無し。凡夫の法實有ること無く、亦無にして自然なり。諸佛の法悉く實有ること無く、亦無にして自然なり。若し理めんと欲せば凡夫の法は所知無く、有知無く、不生・無生なり。若し觀察せば其の本末を推す。若くは空慧、無相の慧、無願の慧を以て、智慧明省す。是を佛法と爲す。佛法の所處を別ち知るべからず。此の本末を觀ずるに、彼は悉く空なり。空は空を見ず。亦所知無し。亦所觀無し。悉く本淨なり。無明の故に起る。是を以て天子よ、法とは無法なり。諸法自然にして住立す。諸法憺怕なり。其の憺怕の法は則ち二有ること無し。其れ無二なれば則ち凡夫無し。亦聲聞無し。亦緣覺無し。平等の佛道亦教ふる所無し。深妙の行菩薩の行と爲す。菩薩深く修して正教を分別し、一法として佛法に非ざるもの有ること無し。所以は何。其れ法と言ふは習俗を法と爲す。習俗の言無くして言ふ所有れば則ち所得無し。其れ所得無ければ則ち興る所無し。興る所無きを以て則ち形教無し。一切諸法悉く形像無し。假使諸法は限數有ること無きも佛法を離れず。是の故に天子、當に斯の觀を作すべし。一切諸法は悉く佛法たり。想行有ること無し。其の想行を念ずれば尋いで二事の識を興發す。是等の類、識を以て行と爲す。佛法は無漏なり。亦復彼に於て想求せず。聲聞の行を生起す。其の解了する者は法界塵無く、亦無にして寂然たり。假使法に於て法を受けずんば則ち法有ること無し。其の塵勞の法、及び寂然の法、豈獲て塵勞寂然に到るべけんや。斯の求を作さんと欲するも終に得べからず。是の如く天子、假使菩薩曉了すること是の如くならば、則ち名けて深妙の行と曰ふ。其れ諸法及び佛法に於て所見無き者なり。所見無きを以て則ち離見と爲す。其の所見は無所見たり。假使菩薩是の如く觀ぜば、魔及び官屬便を得る能はず。能く勝つもの莫し。

精進を奉行し　常に放逸無く
敢て遵修する所　心性弱ならず
亦一切衆生を　捐捨せず
而も普ねく心を　群萠の類に等しうし
常に愍哀を　普世の群黎に加へ
能く忍んで勤苦し　意轉移せず
志道教をして　斷絕せしむるを欲せず
猶し人有りて　無數の寶を積むが如し
而も善く善權　方便を覺了し
一切に德を勸め　行に厭足無く
最要に遊趣し　愍哀を懷き
中間に於て　諸漏を滅盡せず
其れ此の經典に於て　稟受するあらば
其の菩薩を　名けて勇猛と曰ふ
而も常に深妙の　法を奉修し
彼は則ち未だ曾て　本際に倚著せず

月氏天子復佛に白して言く、何をか菩薩深要を奉行すと謂ふや。佛天子に告ぐ、是に於て菩薩未だ曾て凡夫の法を破壞せず。而も普ねく佛道の義を成就す。亦凡夫の法を謗毀せず。亦佛法の長益を視見せず。亦凡夫の法を遠離せず。亦、佛道を得んと求慕して、斯の行を興さず。凡夫の法異にして佛道と異るかと。亦念言せず。凡夫の法瑕穢卑賤にして佛の道法微妙なるかと。斯の行を作

禁戒を順奉し　疑見に墮せず
便ち恐懼して　惡趣に墮せず
若し禁戒　是の如しと分別せしめば
則ち禁戒を　犯すものを覩見せず
吾我を察せず　三世を見ず
況んや犯戒毀禁を　觀察すべきをや

月氏天子佛に白して言く、未曾なるを得たり、天中天よ、諸佛世尊の道法は微妙にして、無上正眞、甚深にして及び難し。菩薩の所作は第一巍々たり。乃ち能く此の如きの法を奉修し、而も所住無く、亦所修無し。一切諸の妄想する所を除去し、吾我の念を離れ、無數劫を行じて聲聞緣覺に墮落せず。而も中道にして道意を違失せず。佛法を具足して不缺漏に入る。云何が菩薩は深法を奉行して微妙の典を修し、眞本際に於て證を取らざるべき。世尊告げて曰く、天子之を聽け、菩薩に四事ありて深妙法を行じ、眞本際に於て證を取らず。[二] 何をか謂ひて四と爲す。菩薩大士志願を堅固にし、要行を建立し、一切智を具す。精進を奉修して怯弱ならず、[三] 住立する所の者なり。衆生を捨てず、而も大哀に於て教法を斷たず。善權方便して、衆の德本を勸む。是を四と爲す。深妙の法を行じて眞本際に於て而も證を取らず。

是に於て世尊即ち頌を說て曰く、

其の明智なる者は　志願堅强に
未だ曾て往古に　曉る所を違失せず
一切智の爲めに　精進すること慇懃に
終に異乘を　興發するに處せず

【二】この四項分節明かならず。異譯も亦然り。
【三】原典「不住立者」三本並に宮本「所住立者」今これに從ふ。

己身と及び
是の如きを乃ち謂ひて
吾我無くんば
身を計せずんば
身見無ければ
戒を犯さゞれば
亦禁戒中に於て
有身を計せず
深妙の戒とは
假使勇猛ならば
彼則ち未だ曾て
是の如くの戒者は
一切法に於て
愚騃の夫
禁戒を將護して
則ち戒寶を失し
便ち三界の
假使人有りて
則ち彼の禁戒を
其の人の心計

禁戒とを念ぜず
法器と爲すならくのみ
戒に依倚せず
法を想念せず
戒心有ること無し
脫禁有ること無し
建立せず
則ち戒想無し
犯す所無きを謂ふ
奉戒是の如し
毀犯する所有らず
聖賢の歎ずる所
著する所無し
吾我の想に住し
我れ畏れ愼むと言ふ
永へに餘有ること無し
患より度脫せず
諸見の網を除かば
違失するを見ず
吾我有ること無し

耳も聞く所無し
身も別つべからず
設し六根を
則ち諸趣に達し
設し是の如く觀せば
未だ曾て戒に逮らず
彼れ戒有ること無し
禁戒を護る
禁を將養して
深き要戒を修め
以て能く所見の
即ち六十二の
其れ所見無く
禁戒を奉ずと雖も
則ち能く順つて
行ふ所の禮節
善修して安詳
〔二〇〕將順謹愼するものは
吾我に倚らず
已に吾我無し

鼻無く舌無く
心所念に及ぶ
分別せずんば
依倚する所無し
乃ち戒を清淨にするなり
所立の處有り
意無く止無く
吾我の想無し
亦戒の想無し
志自在を得
身を分別せば
疑に墮落せず
處所を視ず
自から憍恣せず
深妙の法藏に入る
爲めに妄想せず
其の禁戒に
異著有ること無し
亦戒に依らず
則ち禁戒無し

【二〇】前註を見よ。

復次に天子、菩薩は戒を犯さず、亦戒を毀らず、又戒を弄せず。其の已に反するものは則ち戒に反し、若し已に反せざれば則ち戒に反せず。戒に反せざるを以て則ち犯す所無し。已に戒を犯さゞればば則ち戒を弄せず。便ち度する所なし。戒を弄せず度せざる所以の者は、一切法を了して悉く度脫するが故に、以て度脫すれば則ち我有ること無く、亦無我ならず。既に人有ること無し、何の度する所の者ぞ。是を四と爲す。

是に於て世尊即ち頌を說て曰く、

其の身清淨にして　言に誤失無し
心念鮮明にして　行に瑕穢無し
而も常に自から護りて　行に謹愼す
彼の菩薩は　乃ち戒を奉ずと謂ふ
斯の十善を　將順[一九]し奉行せんとす
聰明の菩薩　若し能く此を護れば
則ち身口意　犯負する所無し
斯を能く名けて　奉じて戒に明達すと曰ふ
其れ所造無く　不起無生なり
彼形色無く　處所有ること無し
已に像貌無し　則ち所住無し
便はち得べからず　何れの所にか歸趣せむ
戒は造あらず　常に無爲の如し
則ち眼を以て　之を觀察すべからず

【一九】將順はうけしたがふ。孝經に「君に事ふるは其の美に將順し其の惡を匡救す」。

速かに無上　正覺に親近するを得
有身を計せず　道心を念ぜず
一切諸法　吾我及び彼
悉く所著無く　平等覺を得む

佛天子に告げたまはく、菩薩四事法あり。深禁戒を奉じ、行放逸無し。[一八]何をか謂て四と爲す。菩薩大士而も自から念言すらく、何をか禁戒と謂ふ。則ち順つて其の義を觀察思惟し、若くは身に善を行じ、口に至誠を言ひ、心に柔順を念ず。是を禁戒と爲す。又復念言すらく、何をか身善と謂ひ、何をか言誠と謂ひ、何をか心柔と謂ふ。身事を犯さず、殺生盜竊婬妷ならず。是れ身に善を行ずるなり。口に非を說かず。妄語・兩舌・惡口・讒言なり。是れ口言誠なり。心に非を念はず。餘の瞋恚邪見の事を念ずるなり。是れ心柔を念ずるなり。彼諦かに觀察して自から念言すらく、假使身口心を犯さざれば其の處を分別すべからず。所在の靑黃赤白紫紅の色、眼に計するもの識を分別せず。耳鼻口心亦復是の如し。識を分別せず。所以は何。彼亦不生にして亦無生なる者なり。亦無起なる者にして亦起らざる無し。設し生有らずして所生無くんば亦起有らず。所起無ければ則ち識法を分別するに堪任せず。又更に念言すらく、爾の時之を察すれば則ち所有無し。亦戒有ること無し。則ち所行無し。已に所行無ければ則ち知るべからず、已に知るべからず、當に彼に於て倚著する所有るべからず、此の行を造し已りて則ち所見無し。爾の時に當りて戒有るを見ず。已に戒を見ず、彼に戒を勸むる者も亦所見無し。天子よ、是を菩薩大士深禁戒を奉ずとなす。復次に天子、若し菩薩、身を貪らざるを曉らば、見身に處せず、亦覩見せず。持戒を修して亦禁を犯さず。亦所著なし。復次に天子、菩薩大士深法藏に入り、護禁する所在り、威儀禮節・行步進止・安詳にして敎に順ふ。是を曰けて戒と爲す。自から己い興行する所を見ず、他人の過咎を見ず、是故に名けて深妙の戒と曰ふ。

【一八】この四項亦分節明かならず。異譯亦然り。

現在及び
彼則ち興らず
若くは福若くは罪
法を念ぜず
有爲に在らず
常に等一に觀じ
諸法の所受
凡夫及び
凡夫の癡穢
此を則ち名けて
亦所學なく
一義を分別して
諸法を曉了して
亦毀散せず
忍別を謂はず
普ねく諸法は
空に著せず
以て一義に入り
此に所起無く
是の如きの行者は

度世の事を講説し
造盡きて滅盡す
若くは聞不聞
音聲を取らず
亦無爲ならず
二事を喜ばず
有る者を觀ず
阿羅漢を得ず
不淨を說かず
阿羅漢の法と曰ふ
所下も有らず
而も悉く寂然
皆所壞なく
一切法界
空と異らんや
一切悉く空なりと知り
倚無しと了忍す
悉く一切を了す
其の本清淨なり
疾かに佛道を成じ

なり。天子よ、是を菩薩大士の無上正眞道に近づきて最正覺を成ずるを得となす。亦我は近し、若くは遠しと念言せず。所以は何。一義に處して異の群黎を見ず。亦人と道と別異なりと觀覩せず、又之を思惟するの人は爾乃ち是れ道なりと得べからず。

是に於て世尊即ち頌を說て曰く、

而も法界に於て　破壞する所無し
又彼の法界を　能く散ずるものなし
計るに法界の如く　諸人斯くの如し
但假に字有り　若干有ることなし
諸法空なりと了せば　則ち響忍に致る
其れ內若くは外　有爲も無爲も
斯の法を觀察するに　悉く所有無し
一義を分別して　皆空たるを知る
諸の所現の法　像を同じくする所無し
已身と及び　他人とに著せず
若くは吾我人　有りと計念せず
其の行未だ曾て　若干の想有らず
寂然を修し　志憺怕に在り
普ねく一切諸法の　存する所を覩じ
一切法に於て　靖默無念なり
憺怕に遊んで　而も所著無し

諸下を遵修し　恒に勇猛を行ず
禪思を奉ずと雖も　永く所著無く
智慧を興發す　而も布施を以て
緣覺聲聞の　中にあり
菩薩大士　此の黨に遊ぶ
假使中に處するも　所造の業有り
明眼の達士は　彼の行を樂まず
以て能く斷の如き　法を建立する者
是を則ち名けて　菩薩の行と曰ふ
善權を曉了して　不可思議なり
爲す所の惠施は　無限量に至る

佛天子に告げたまはく、菩薩四事法有り。一切諸法を以て一義と爲し、一味に入り、趣く所同等にして一慧平等の說に入る。何をか謂て四と爲すや。菩薩大士法界を曉了して破壞する所無し。諸法空を解して普ねく遊至す。諸法に於て義像を同じくする所無く、吾我及び他人を平等にす。諸法を曉了するに悉く憺怕なりと爲す。[一七]是を四と爲す。是の慧を曉了するに覩る所此の若し。世俗法及び度世法に於て通達せざるはなし。二觀を造らず。若くは罪、若くは福、有礙・無礙、若くは聞・不聞・有爲・無爲、此の諸法に於て造らず、觀ぜず。諸法の所受者有るを見ず。凡夫法無く、羅漢法無く、若干の觀無し。其の凡夫法は清淨と爲さざるなり。羅漢法を察して獨り解明なりとせず。擧げず、下さず、一義趣憺怕門を分別し、演暢講說す。一切法を散じて諸法に於て散壞を見ず。一忍を修行して永く二あることなし。一義に入るを以て普ねく諸法に入る。謂ふ所の入るとは從生する所無き

【一七】この四項分節明かならず。異譯も亦然り。

道心を忘失せざれ
布施して報を望まず
常に忍辱を修行し
恒に精進を奉行し
禪定倚る所無し
開化して衆生を解し
諸佛土を嚴淨にし
常に佛道に志し
一切典を諮受す
衆生の爲に說法し
造行是の如き者は
心は空を想はず
相無く所願なく
群黎の所行を知り
自在にして布施し
衆生に布施して
戒を高しとせず
精進に慢らず
而も智慧に於て
常に布施を喜び

作す所而も勸助せよ
戒を護りて所念無し
有人を立計せず
身口意寂然たり
智慧無極に度る
顚倒に處せず
志性剛强無し
法に於て捨る所無し
故に慧は議るべからず
文字に著せず
速かに成佛難きこと無し
不慢にして所念無し
限量を稱すべからず
之に隨つて因て開化し
說法して乏しき所を給す
我が獲を言はず
忍辱を忽(ゆるがせ)にせず
禪定に著せず
悋惜する所無し
衆戒を講論し

ます。修する所堅固にして緣覺と倶なり。所行を樂まずして其の志を堅固にす。[一六]是を四法と爲す。菩薩大士(の出て)不可思議の善權方便に致るべきものなり。

是に於て世尊即ち頌を說て曰く、

二事を曉了せよ　己身及び他人なり
當に吾が苦患を除き　衆惱熱を療盡すべし
衆生を愍念して　勸めて道心に在らしめ
一切法を思惟し　演べて一義に入らしめよ
一切群生の慶たれ　三世を合集して
普ねく諸佛の德に於て　悉く當に之を勸化すべし
而も悉く斯を曉了して　皆以て衆生に施し
眞心にして惠施せよ　猶し佛慧を以ての故に
一切發す所の心　悉く勸めて佛道を助く
道心を失はず　諸法を見て悉く脫す
心及び道を察するに　二事有るを見ず
其の相存する所あるも　心相同等なるを了せよ
法等しきが故に平等　不二にして所有無し
明かに權方便を知り　淸白の法を長益し
其の無爲の益を植ゑ　法界議るべからず
佛道を志求し　常に以て厭倦せず
心を以て心を念ぜざれ　吾は淸白の義を長ず

【一六】此處に四法の結語あれども前段分節頗る曖昧なり。原文若干の錯亂あるが如し。

ず。道の相の如く、身相も斯の若し。心慧平等にして、心に於ても、道に於ても、亦倚る所無し。權方便に順ひ、德本を長益し、法界に增益する所有るを見ず。彼諸法に於て思議する所無し、功を積み德を累ね、未だ曾て厭倦せず。心業を以て心を曉了するを求めず。彼若し布施すれば則ち望想無し。禁戒を奉修しては亦失ふ所無し。忍辱を遵行しては亦所住無し。行ずる所の精進亦無にして憺怕、一心禪定依倚する所無く、智慧を奉行して亦所習なく、衆生を勸化して亦所著無し。愍哀を以ての故に、嚴淨の佛土あり。聖達を求めて、起慕する所無く、經法を講說して亦所入無し。是の如く天子よ、菩薩の行ずる所、造る所の德本薄少たりと雖も、[一五]善權方便限量あるべからず、乃ち大道に至る。

何をか菩薩の造る所の德本薄少たりと雖も、善權方便無量に至り、乃ち大道に致るを得るや。菩薩大士一切の法に於て念發無量、諸法を觀察して計限、邊際を得るもの有ること無し。所以は何。天子よ、一切諸法を知らんと欲せば、則ち空無相にして、亦願有ることなし。其れ空を以てすれば則ち亦無量なり。假使無量心に暢達すれば、講法少しと雖も善權方便廣大にして無際なり。所以は何。佛道無量にして勸心無限なり。無際法に至れば則ち諸佛世尊の道爲り。

復次に天子、菩薩大士の善權方便は衆生を勸め、勉めしめて正行に入らしむ。群萠の類を憂ひて樂む所の法は而も勸めて之を立つ。若し施して救濟する所あれば爲に經法を說く。

復次に天子、菩薩大士は布施を以て而も審諦と爲さゞれ。是を我所と言ふ。持戒・忍辱・精進・一心智慧亦復是の如し。我所と名けず、又施す所有り。若し戒を持せば亦念ずる所無し。常に禁戒に順ず。忍辱を具足しては、人の所作を見、是非悉く忍ぶ。精進を奉行しては、淸白の行を修し、一心に禪思して方便を曉了し、智慧を觀察す。

復次に天子よ、菩薩大士は善權方便を分別し曉了して聲聞と俱なり。而も之を開化して所行を樂

【一五】 異譯「漚和拘舍羅」Upāya-kauśalya 善巧方便に同じ。

悉く演ぶる所の　美辭を逮聞するを得て
則ち能く普修　平等を受持し
便ち能く衆生の　心念を了知し
具足して億萬の　佛土に飛到し
識は往古無數の　世事を念じ
億百千劫　恒河沙の如くならむ
此の妙なる　五聖通を逮成せば
則ち安住の慧に　親近するを得む
彼は佛なるを以ての故に　顯發する所有り
無放逸道に　利義を興造せむ
假使斯の是の如き　空法を聞かば
欣踊心を生じて　微妙樂を樂しまむ
魔も彼の　瑕短を得る能はず
則ち能く疾かに成じて　上道を覺了せむ

佛天子に告げたまはく、菩薩大士四事の法有りて不可思議善權方便に至る。[一四]何をか謂つて四となす。菩薩は往返度流の法を曉了して猶し己身の如し。若干種の痛、苦毒の患、遊起する所を覩れば、亦他人の苦を蠲除せんと欲して修行精進し、諸の衆生を勸めて聖路に趣かしめ、一切法をして道心を留存せしむ。諸の群黎の爲に德品を積累すること三世亦然り。而も已に一切の諸佛を勸助して三世の行を集め、德品を勸助し、作す所の善本を衆生に加施し、弘施を放捨し、開化する所有るも亦心を生ぜず。其の一切智を勸進せざる者は心離脫せず、亦道を見ず。心は道を離れず、道は心を離れ

【一四】四項分節明かならず。●異譯に云く「一には前世の智慧功德に逮る。二には其の無所依なる者有らんにとは寒凍者、苦者苦痛者、愁憂者、若し是の輩の衆くの苦毒者を見ば、便ち意を發して踊躍して之を救はんと欲す。皆敎へて佛道を求めしむ。三には諸法を以て佛意を持し、一切を繫ぐ。前世久遠の功德福祐を持して勸助す。復一切過去の諸佛の福祐功德を持して勸助す。皆憂苦を解脫し、放救去離せしむ。都て是の功德を持して諸の勤苦厄難者に求上す。四には未だ曾て意を發さず。一切願を滿たず。亦未だ曾て發意漏脫せず。人をして道に至らしめず。亦未だ曾て一切をして道に至らしめず。如し我が心道に至らんと欲すれば道亦我心を迎ふ。（下略）

假に虛空と號く　諦に實有ることなし
有を說くの言辭の　彼の法も虛空なり
其の眼は未だ曾て　耳を觀見せず
其の耳は亦　眼を觀見せず
舌は鼻に屬せず　鼻は舌に屬せず
斯等は展轉　而も相見ず
其の身は未だ曾て　意を察見せず
意も亦身の　形類を察せず
各々是の如く　相知る能はず
是の故を以て　斯に常に憺怕なり
衆惡諛諂　癡騃を計著するも
諸法の界　常に等しくして均平なり
其の內事者は　外を知らず
外事者の若きは　亦內を知らず
是を以ての故に　法の所趣を曉り
智慧を成就して　常に限るべからず
十方億姟の　諸佛及び諸の
聲聞を觀見するに　罪釁有ることなし
又彼の諸佛の　說く所の經典
無量の聖達　淸淨の義

諸法を曉了するに　而も吾我無し
爾も乃ち不起にして　他の異法無し
其の生ぜざる者は　有にあらず來らず
彼を察計するに　則ち倚る所無し
而も反つて諸法の　處所を講說す
佛道を演ぶと雖も　有我を念はず
一切三界は　心の由る所
彼の心則ち亦　常に觀るべからず
色も無く人も無く　猶し幻化の如し
當に斯の法を以て　務めて心を求めよ
彼此の法を以て　心を求め已らば
則ち知る心無く　亦心法無きことを
假使己心に　心の處所を求めば
則便心の　本淨を覩ず
已に諸法に於て　著する所無き者は
黎庶に在りと雖も　衆想に隨はず
一切諸法は　意無く成無し
常に分別して知る　猶し虛空の如し
虛空を觀ずるに　生にあらず有にあらざるが如く
諸法を分別すること　亦復是の如し

常に諸法を觀ずること　猶し虚無の若し
所察有るを以て　悉空を宣揚す
諸法に習近するに　彼を假りに法と號く
諸法を見ずして　解脫者有り
其の見ざる者も　觀ざる所なし
已に聖通を得たる　所見斯の若し
假使過去に　法已に空ならば
當來の諸法も　亦是の如く空なり
現在を分別するに　則ち亦茲の若し
是を乃ち謂つて　眞諦の見となす
一切諸法は　三界に常に空なり
斯を明かに知る者は　無念にして念ぜず
已に應と應に　應ぜざるべき者有ることなし
其の畏るゝ所無きを　眞諦を觀ると爲す
若し慧是の如くんば　方便に著する無し
經法を講說するに　法想有ることなし
意に所念無ければ　則ち所著なし
所著無ければ　則ち動搖せず
一切諸法は　自然にして興る
其の自然とは　本より淨くして我無し

觀ずれば眞諦慧備はり、諸法と法界と有ることなし。解脱を見ず。斯を一切法(に於て)諸典に親近す(となす)。是を四法と爲す。菩薩大士大聖通殊特の行を得て彼岸に度る。[一三]【四】

何をか聖通と謂ふや。云ふ所の通とは一切法に於て他の慧を信ぜず而も諸受有り。慧と言ふ所以は一切法に於て二事を造らず。所謂二無し。彼則ち名無し。法知るべからず。設使天子斯の慧を具足すれば其の菩薩は速かに聖通に逮り、願を成就し、曉る所を具足せむ。菩薩是の如きの慧を曉了せば、則ち道眼を淨め、天世人に超え、便ち十方無量無限億百千姟の諸佛の國土、佛天中天、所有聖衆を視て、悉く諸佛所説の經法を聞かむ。彼の佛國土の群萌の類、その心に念ずる所の善惡好醜悉く之を識らむ。人民伴黨行來是の如しと。斯の若きに逮及ぶ。自から往古より周旋せる處を知り、慧の明を以て證し、本際を解し已り、他人衆生始より由る所無きも、居る所の止處悉くこれを證明し、緣に從つて是を説かむ。

佛天子に告げたまはく、菩薩大士未だ一切通慧に至り得ずと雖も、聖明の智巍巍たること是の如し。諸の衆生の爲めに佛事を興立し、速疾に一切佛法を具足し、無上正眞の道を逮得し、最正覺たり。

是に於て世尊即ち頌を説いて曰く、

善權慧を以て　方便道明かなり
則ち具足して　大聖通を成ず
而も常に深妙の　禁戒を遵修し
遂で一義を用て　一切法を解す
眞諦なる一切の　經典を分別し
其の明目者は　倚著する所無し

【一三】前註を見よ。

ふ。假使菩薩斯の諸法に於て、身所著無く、所著を無し已りて異法に住せずんば、其れ諸法に於て生ぜず、住せず、爾も能く彼に於て倚著する所無し。已に倚る所無し、諸法を供養するに、則ち諸法に於て倚る所なし。【二】

何をか菩薩い一切猶ほ虚空の如しと曉了すと謂ふや。其れ三界は心の所爲なり。斯の心を計せざれば色像有ることなし。亦覩るべからず。處所有ることなし。敎令有ることなし。猶し幻化の如し。其の心本に因つて諸法を求むれば則ち得べからず。若し心を以て心を求めざれば則ち獲る所なく、心逮ぶべからず。心を得ざるを以て、一切諸法亦得べからず。諸法則ち法有ることなし。形類の想無し。亦影有ることなく、而して所有無し。及び實諦亦覩る所無し。覩る所無ければ、一切法に於て心入る所無し。一切法は成就する所無く、亦所生無しと知る。譬へば虚空の如し。天子よ、猶ほ虚空を察せんと欲するに、永く生有ることなく、成就する所無きが如し。一切法を了する亦復是の如し。猶ほ虚空の如きを名けて虚無と曰ふ。彼は則ち憺怕なり。一切諸法亦復是の如し。但だ字を假るのみ。彼は則ち寂寞なり。【三】

何をか菩薩一切法に於て(衆)典に親近すと謂ふや。菩薩大士一切諸法を觀察思惟するに、斯に於て知無く、亦所見無し。眼は耳を知らず、亦所見無し。耳は眼を知らず、亦所見無し。鼻は舌を知らず、亦所見無し。舌は鼻を知らず、亦所見無し。一切諸法癡騃快眇凶暴有りと雖も、法界の慧を見るに常に平等にして所行具足せり。其の六情界、照し來る所有れば則ち所在有り。本を計する者は內法有るを無し、外を敎ふる者は外法を無するが如し。內法を敎ふる者の見る所も是の如し。斯の若きを覩る者は則ち法有るを無し、起あるを無する者なり。亦有法有所作爲無し。若し住有る者は所見無しと覩る。佛天子に語りたまはく、是を法界法所起無く亦所滅無しと爲す。而も亦住せざれば則ち所有無し。假使諸法を念ずる有らば、不住・不生・不起にして處所有ること無し。是の如く

【二】この數字原典には本文中にあり。されど「何をか」以下は第二項にあらず。第三項とすべきが如し。以下三四亦然り

【三】前註を見よ。

佛の言はく、善き哉、善き哉、月氏天子よ、哀念する所多く、安隱ならしむる所多く、諸天及び十方の人を愍傷し、乃ち能く意を發して如來に此の如きの義を啓問せり。諸の菩薩は佛道正眞慧を行じ、大鎧を被り、大乘を建立し、大欲を度し、大船を御し、大法輪を轉じ、無極の法を施し、慧典を恢弘し、大雨を放たんと欲し、普光を演べんと欲し、大鼓を震擊し、大雷震を志し、巨幢を立てんことを樂しみ、大珂を吹かんことを願ひ、大法英を執り、大法典を攬り、無極の明を演べて世間を照さんと欲し、務めて大乘をして永存不斷ならしめ、大祀祠の究竟して滿足ならんことを願ふ。此の比類の無極の德を以て群庶を愍傷し、故らに如來に問へり、諦かに聽け。諦かに聽け。善く之を思念せよ。吾當に汝がために分別して之を說くべし。諸の菩薩大士の行の如き、大聖の通に致りて、深戒を具足し、無上正眞の道に至りて最正覺たらむ。唯然り世尊、願樂して聞かんことを欲ふ。月氏天子諸の大衆と教を受けて聽きぬ。

佛天子に告げたまはく、菩薩に四法行あり。大聖の通殊特の行を得て彼岸に度らむ。〔一〕何をか謂つて四と爲す。菩薩大士諸法を曉了して眞諦に應ず。一切の法に於て倚著する所無く、等しく諸法を念じて盡くることあることなく、聖慧に逮つて明證を造り、一切法に遊んで衆典に親近し、諸法在りと雖も、脫者あることなく、異法を見ず。

何をか諸法(を曉了して)眞諦に應ずと謂ふや。過去の空なるが如く、當來、現在亦自然に空なり。天子よ、以て是の空の平等にして、三世は空にして所想無きを曉了せんと欲す。彼の諸有の慧分別の處所、建立し開化して道品を解暢し、便ち正業に通じて其の義理に達す。是を(諸法を)曉了して眞諦に應ずと謂ふ。【以上第一】

何をか一切法に於て倚著する所無しと謂ふや。一切諸法我所に住せば、現に我非我に所住有り。則ち菩薩諸法を曉了して吾我無く、身に依倚せずと謂ふなり。是を則ち名けて倚著する所無しと曰

【一】此の四項分節明かならず。異譯には「一には一切法の狀貌增減なきを知るを得。二には一切法を求索す。三には一切法盡有ること無し。定んで安隱なるを得、學の證を得。四には一切諸法の法性を離るゝものを見ず。餘の法界に於て悕望する所有りて想觀せず」とあり。

神足を分別する所　隨順行を解了し
億姟の佛土に遊び　國土の想有ることなし
億姟の佛を供養して　諸佛の想有ることなし
是の故に此の義を問ふ　覩るもの普ねく欣を受くるものよ
其れ欲塵の魔を離れては　忽ち陰身の魔を化し
死魔を棄捨して　諸の天魔を降伏す
一切の魔を蠲除して　則ち成佛道に逮る
是の故に斯の義を問ふ　永く衆冥を棄つるものよ
乃ち天地樹木　及び山巖を震動し
成佛道を覺了し　無量最勝の慧あり
假使己が一心にても　寂定明を習ふ
是の故に此の義を問ひ　斯の如きの像に諮啓す
一切の慧を曉了し　威耀甚巍巍たり
假し佛教に住し　善く法行を建立せば
衆聖を導利して　開化せざる所なし
今故らに斯の義を問ふ　齊しく三處に遊ぶものよ

月氏天子又世尊に問ふ。唯然り大聖、何をか菩薩の大聖通殊特の行を得ると謂ふや。何をか菩薩不可思議[九]善權方便に至り、備に助慧を勸むと謂ふや。何をか菩薩の一切諸法を以て一義と爲し一味に入り、趣く所同均にして一慧平等の說に入ると謂ふや。何をか菩薩深き禁戒を奉じ、行に放逸なく、無上正眞の道を逮成し、最正覺たりと謂ふや。

【九】善巧方便と謂ふが如し。

心恒に精勤を行じ
其の身寂然に逮り
身口意常に正しく
今最勝の義を問ふ
其の忍辱調柔は
能く修して苦患に任へ
一切を遊救して
此に因るが故に義を問ひ
各常に力めて精進し
悉く世間を愍傷し
道を行じて厭足無く
是の故に最勝に問ふ
三處に存すと雖も
賢聖の慧を以て
禪定の妙通を承け
今故に此の義を問ふ
智慧もて彼岸に度り
衆の思想を棄捐し
憺怕自在を得
是の故に今啓問す

布施と戒とは邪を離る
戒品永く滅せず
將御して順つて擁護す
垢に處して無塵なるものよ
達し已りて遍修を加へ
憒擾放逸の衆
而も瞋恚を生ぜず
諸の狐疑を決せんと欲す
恭順にして義に違せず
己身の爲めに施さず
海の衆流を受くるが如し
其の德大海の如きものよ
退いて諸想に從はず
諸の垢塵を伏除す
神足自から娛樂す
普ねく往て衆を開化するものよ
聖達際有ることなし
出家して根株を除く
斯の法慧を曉了す
無極の大聖人よ

億劫に於て行を積み　悉く能く勤苦を忍び
一切を布施し　志寂然として念無し
心を群生に等うし　療化すること已に平均なり
我れ此の勝義を問ふ　[五]黎庶を導利するものよ
假使正道を見れば　妙相自から莊嚴し
無垢なる三十二　英特の福田なり
斯の功德に逮るもの　巨海を奉敬したてまつる
今予大聖に問ひて　斯の義歸を了せんと欲す
假使異心無ければ　則ち別念あることなし
常に妙慧を志求して　人中に巍巍尊たり
而も聲聞の意なく　緣覺の事を慕はず
今余此の義を問ふ　堅固無過なるものよ
有利若くは無利　心を毀譽に等しうし
有名若くは無名　苦樂以て移らず
俗法に處すと雖も　則ち以て動轉せず
今我此の義を問ふ　恐懼を遠離するものよ
己身の事を愛するを以て　念を[六]黎庶に等しうし
未だ會て若干も有らず　咸く[七]三處を化す
而も慈心を修むるを以て　諂有るも穢を厭ふことなし
今余此の義を問ふ　賢將[八]十地を持するものよ

【五】衆生に同じ。前註を見よ。

【六】前註を見よ。

【七】異譯「三界將中の雄なり」。

【八】各本みな土地とあり今宮本に從ふ。

佛昇忉利天爲母說法經

西晉月氏三藏　竺法護譯

卷の上

聞くこと是の如し。一時、佛忉利[一]天上、晝度樹[二]の下、無垢白石に遊び、其の母を愍哀してこれを度脱するの故に、正夏三月、大比丘衆と倶なりき。比丘八千、皆阿羅漢なり。諸漏已に盡き、大神足を得、威曜極りなく、生死悉く斷じ、復塵垢なく、重擔を棄捐し、所作已に辦じ、己が利を逮得し、心卽ち計[三]に從ひて平等忍に致り、心已に解を得て、智慧に度り、普ねく正士にして、世に於て福地たり、祐安する所多し。唯一人の賢者阿難を除く。菩薩七萬二千人、一切大聖にして神通已に逮せり。總持を逮得し、辯才無礙にして、各他方異佛の世界より皆來り集會せり。

爾時世尊、無央數百千の衆たる眷屬に圍遶せられて爲めに經を說きたまふ。時に衆會に於て二の天子あり。名けて月氏月上と曰ふ。月氏天子卽ち坐より起ち、更に衣服を整へ、偏へに右の肩を袒ぎ、叉手長跪して佛に白して言く、吾れ如來至眞等正覺に諮問せんと欲す。假使聽さるれば乃ち敢へて自から陳べむ。佛天子に告げたまはく、如來に問はんと欲するは何所の義ぞや。月氏天子偈を以て頌して曰く、

其れ衆生の類に於て　愍哀の心を興發し
佛道を逮求し　無垢甘露を志し
自から己身の行を傷り　及び群黎[四]を慈哀す
余斯等を以ての故に　釋師子に諮問したてまつる

【一】三十三天のこと。言語性質に就ては解題に述ぶる所あり。
【二】忉利天にある樹の名。言語に就ては解題を見よ。
【三】「心卽從計」。從計とは「意樂に從ひ」と謂ふが如し。Yathā āśaya の譯語。
【四】群生、群萌、衆生、有情など〻同じ。

橋易土集三五八頁所引）の波利質多羅此云香遍樹と云ふものは蓋し pāricitra であつてこれより造られた一種の訛音であらう。摩訶摩耶經にも此の如く出づる。然し本來忉利天に在りといふ此の樹は通常圓生樹と云はれ、俱舍論世間品にも「東北圓生樹」とあり。梵文には pārvodieyāṃ pārijātaḥ（ルイ、ド、ラ、ヴレ、プサン出版の「世親と稱友」二八頁）とある。然るに慧苑音義同處に波利耶呾羅と云ひ探玄記第二十に亦波利耶呾羅と云ふものはこの pārijāta が訛音化せしものである。ピッシエルの方言文典第一八六條によるに凡そ方言に於ては通例中間音（Inlaut）なる k,g,c,j,t,d, は省き去られ、又第一八七條によれば、その省き去られたる音の代りに一層輕く發音さるゝ y を用ふとあるに準ずれば、pārijāta が pāriāta を經て pāriyāta となる徑路は明了に認めらるべきであり、更にこの pāriyāta より pāriyātra が誤り作られたことは先の pāricchattra の如き語末の音と混同せしものと思はる。これらの中何れが果して原形なるかは斷定し難い。

拘翼

拘翼は蓋し kosiyo の中間略であらう。梵語にては應に kauśika でなくてはならぬ。憍尸迦はその寫音である。今この kauśika が方言化の法則によりて kosiya となることは前出の規則に照して明了である。卽ち kauśika は kauśia を經て kauśiya となる。kau の ko となり śi の si となることは常の如くなれば說明を要しないであらう。かくて kosiya が主格單數の形態を取りて kosiyo となり、これを寫音して拘翅翼とすべきを中略して拘翼となせしものと思はれる。

かくの如く舊譯の梵語は訛轉多くその原義の知れ難いものも少くない。これを現今のサンスクリットを以て解釋する際には餘程周到なる用意を要する。

昭和六年十二月

譯者　泉　芳　璟　識

れを讃する一段あり。これが佛の八方世界に神變を現する一段を引起すことゝなつてゐる。この一段は本經には全く缺けてゐる。安法欽も竺法護も略ぼ同時代の出であり西晉は西紀二六〇—二七四年に相當する。

・用語例

竺法護は普曜經、正法華經、光讃般若等數多の翻譯を出せる舊譯時代の巨匠の一であるが、本經に於て著しく注意を惹くものはその譯語の康僧鎧譯とせらるゝ無量壽經のそれに太しく似たるもの有ることである。二三の例を擧ぐるならば、「曉了」の字を屢ゝ見ること。これは無量壽經の「曉了幻化之法」、「覺了一切法」を想起せしむる。「志願高妙」の用語も「知其高妙志願深廣」に近きものであり、其の他「自然之物」と云ひ、「易可開化」と云ひ、「徙倚懈怠」と云ひ、「行權方便」と云ひ、「爲男爲女」と云ふが如き用語例は無量壽經そのまゝである。これは何等か無量壽經の譯語研究の上に役立つこともあらんかと思ふまゝに記して置く。

附註補遺——忉利

尚ほ二三の語の附註に於て言ひ盡し得ざるものがあるから此に一言しようと思ふ。

忉利とは梵語にては trayastriṃśat であるが、これならば既に多羅夜登陵舍と寫音せるもの(玄應音義第二)もあり、忉利がこの寫音であるとは到底受け取れない。尤も意味は三十三といふことで、帝釋所居の宮殿その數三十三あるを以て三十三といふのである。この三十三卽ち trayastriṃśat の俗語の形には tāvatiṃsa といふのがパーリ語の通例これに相當する語である。然し今忉利がこの寫音であることも首肯し難い。予を以て見れば、同じく三十三の方言形に tettiṃsa なる語がある。今この語が更に方言化して tet-tisa となり得ることは、梵語siṃha の siha となるに徵しても見易き道理であるから、一應 tet-tisa なる語も承認せられねばならぬ。更に齒音の舌音化を許すとせば更に teṭ-ṭisa も承認せられて可い。この發音は極めてテッリーサに近いことも明白である。このテッリーサが下略せられてテッリーとなることも可能である。而して忉利はこのテッリーといふが如き方言の寫音であつたと推測したい。

晝度樹

晝度は chatto の寫音であり、これは蓋し pāricchatto 又は pāricchattako の上略若くは上下略である。これならば梵語の pāricchattra 又は pāricchattraka に相當し、覆蓋の義である。慧苑音義下(杻

これは增一阿含の說に據つたのであるが、摩訶摩耶經は一名佛昇忉利天爲母說法經と云ひ、亦この說話を骨子として成る。今此に譯出するものと同じ標題なることも注意すべきである。この經では母子の情愛纏綿たるの狀太だ切なるものがある。

佛天を下らんとして摩耶に言はく、「生死の法會へば必ず離有り我今應に閻浮提に下るべし。久しからずして當に涅槃に入るべし」。時に摩訶摩耶、此の語を聞き已りて卽ち涙を垂れて偈を說き、世尊も偈を以て答へ、更に母のために呪を說きたまふのであつた。

後半は涅槃の記述である。此では摩耶夫人が釋尊の涅槃を聞いて娑羅林に下ることが見えてゐる。釋迦譜第二はこの經を引用してゐる。

尙ほ義足經第二にも蓮花色比丘尼經第十四の下にこの說話が見えてゐる。

全經の鳥瞰

今本經はこれら諸經典に現はれたる說話を背景とし、大乘菩薩の行に端を起し、聖通を說き、菩薩の善巧方便を說き、有無一相を說き、戒行を奉持するを述ぶ。次に生卽ち無生の義を明し、佛と佛母との關係に及び、佛は智慧波羅蜜多より生ずと結論す。次に天華に就て見不見の空義を談じ、無生法忍の何たるかに及ぶ。次に帝釋が月氏天子の從來する所を問へるに對し、沒生來生の悉く幻化の相なるを說き、無生法忍の天地には一切これら相對の念なきことを高調する。次に端を改めて更に月氏天子の本生說話を語り、これに關して又月上天子は訊問する所あり。月氏天子これに答へて法界無行、諸法悉空の說を說く。次に佛目連に對して神變を說く。蓋しこれ增一阿含の目連神變を現じて龍を降し、忉利天上に佛の平安を問訊するの事あるに取れるものであらう。但し佛の神變は八方の世界に衆生利益の佛として現はれ、各衆生を化導して息むことなしといふ。最後に目連の問に答へて佛身は畢竟幻化の如し、本來空にして實ならざるも而もその變現無極にして不思議なるを說く。

この一經は大乘の空理の上に如何に菩薩行とその神變が現ずるか、如何にこの二事が大乘の空理と矛盾なく調和するかを力說するものである。

異譯

西晋安息三藏安法欽の譯にかゝる佛說道神足無極變化經四卷はこの經の異譯であつて大體に於て本經と一致する。但し月氏月上二天子の問答の次に、目連が釋尊の同時に忉利天と舍衞城と毘舍離城と波羅奈城に說法したまふを見て、神變不可思議に驚異を感じ、佛前に偈を以てこ

らない。かくて三月の後、佛は漸く天を下らんとして神足を捨てられた。すると始めて阿那律の天眼に如來が三十三天に在すといふことが映つたのである。それまでは阿難すらも如來はもはや涅槃せられたのではなからうかと憂慮してゐたのであつたが、この消息を聞いて祇園精舍は一時に色めき立つた。神足第一の目連が四部の衆を代表して問訊即ち御見舞に出かける。佛は目連に對して七日の後、僧迦尸國の大池の側に降るであらうと仰せられる。

蓮華色比丘尼

この報告を得て下界ではその地へ多くの民衆が御迎へのために集つた。諸王は各四種の兵を率ゐてやつて來たので、その雜沓混雜は言語に絕する有樣であつた。この時に蓮華色比丘尼は轉輪聖王の姿に化現して諸王を凌いで先づ第一に佛を迎へた。諸王は轉輪聖王の威勢に驚いて、路を開いてこれを避けたが、後に蓮華色比丘尼が本の形になつて世尊を迎へるのを見ては各々怨言を云つて比丘尼に先んじられたことを怒つた。

須菩提

これに反して尊者須菩提は王舍城靈鷲山の山側に、衣を縫ひ綴りつゝ、今日世尊人間世界へ歸りたまふ、四部の衆も悉く迎へると云へば、吾れも亦往かねばならぬと思つて、衣を綴ることを止めて坐より起ち、一歩を踏み出して復思ふやう、如來の形とは何であるか、世尊とは眼耳鼻舌身意なるか。一切諸法皆空寂滅なるに、何ものか如來なる。空法を視ずるこれぞ佛を禮する所以ならむ。吾れ今眞法の聚に歸命したてまつると云つて還び衣を綴つてゐた。蓮華色比丘尼の佛を迎へた態度と須菩提のそれとは好對照をなすもので、これがやがて金剛經に須菩提が對告衆の代表とせらるゝに至る所以である。

「須菩提よ、若し三十二相を以て如來を觀ぜば轉輪聖王則ち是れ如來たり。須菩提佛に白して言く、世尊、我が佛の所說の義を解する如くんば、三十二相を以て如來を觀ずべからず。爾時世尊偈を說いて言く、

若し色を以て我を見
音聲を以て我を求めば
是の人邪道を行ずるなり
如來を見る能はず」——金剛經——

佛忉利天より下りたまふ時、自在天子は金銀水精の三道を化作し、金道中央にあり。佛これを踏んで下りたまふ。梵天は如來の右にあり銀道を下り、帝釋は水精道を下りたまふ。

摩訶摩耶經其他

佛昇忉利天爲母說法經解題

報本反始

佛が母摩耶夫人のために忉利天に昇つて說法せられたといふことは釋尊傳を飾る美はしい說話の一である。佛母摩耶は佛を產んで日ならずして世を去つた。これ人世悲慘事の一である。佛徒の同情の念は此にこれに絡まる哀話を綴らずには措かなかつた。摩耶夫人は世尊佛陀の母である。佛陀の母たるの福德は、死後忉利天上の樂處に夫人を送つたのである。さりながら釋尊の方からすれば、所生の恩を報ずることが尙ほ殘された仕事として前に橫はつてゐる。この報本反始の思想が佛を忉利天上に昇せて說法せしめることになる。

資料——增一阿含

この說話は既に增一阿含の第二十八に詳細に見えてゐる。先づ帝釋の勸請に始まり、佛四部の衆に告げずして忽然として祇園精舍より沒して三十三天の天宮に詣りたまふ。蓋しこれ四部の衆の懈怠を知り、彼等をして渴仰の想を懷かしめんがためであるといふ。蓋し法華壽量品に良醫その兒等のために身を隱すの譬喩と巧を同じうするものである。天上には善法講堂の前に縱廣一由旬の金石あり、世尊はその石上に結跏趺坐したまふに身は石上に遍滿したといふ。佛母摩耶は天女と俱に世尊の所に至り、頭面禮足して一面に坐し、「奉に違する甚だ久し、今此に來至して、實に大幸を蒙る、渴仰して佛を見んと思ひしに、今日方に來りたまへり」と挨拶せられる。此に施論、戒論、生天の論等、例の如く阿含の說法がなされる。次に帝釋が食事の配慮をやつてゐる。天上の食を供へようか、人間の食を供へようかと、佛に問ひたてまつると、人間の食を供へよと仰せられる。食事時間も人間の時節を以てせよとのことである。

佛の所在

かうした天上說法の間に人間世界では佛が見えないといふので大騷動である。侍者の阿難にも佛の所在がわからない。優塡王は牛頭栴檀を以て如來の像を造り、波斯匿王亦紫磨黃金を以て如來の像を造つた。こゝに人間世界 始めて此の二軀の如來の像が出來たといふのである。一方阿難を始め四部の弟子は如來を渴仰して所在の搜索にかゝりきつてゐるが、天眼第一の阿那律も三千大千世界かけて天眼を以て見ても如來の所在がわか

◇　◇

目次

42

經集部 十二

泉芳璟
田島德音 譯

國譯一切經

大東出版社藏版